

超次元ゲームネプ
テューヌ：リバーズ・
リ・バーズ

ひきがねコート@pixiv名アスラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、数奇な運命に偶然巻き込まれたゲームギョウ界に生きる一人の不幸な男のお話

pixivにて2014年2月から同年11月にかけて投稿していた作品の移植作です。

ストーリーはリバーがベースです。

全話投稿完了しました。

次回作も未だに書いているのでこの物語の続きが読みたい方は洩へどうぞ。

目次

第1話	生まれ変わった者	1	第1話	暗闇に沈む心	316
第2話	変化と変身	9	番外編	愛する者のため	355
第3話	反転再誕	29	第12話	嘘・偽物・とぼっちり	396
第4話	変わっていく国と変わらない人	66	第13話	二度目の初めまして	427
第5話	やるべきこと	98	第14話	信頼と裏切りと	457
第6話	女神の選択	130	第15話	固い約束、折れぬ信念	477
第7話	卑劣な罠	166	第16話	あなたの神は何処に居る？	517
第8話	殺戮機械	189	第17話	波乱の博覧会	552
番外編	あの背は未だ遠く	210	第18話	因縁の決着	573
第9話	ネプテューヌ死す!?	249	第19話	魔王誕生	599
第10話	侵食する影	285			

第20話	名無しの化け物	638
第21話	存在の証明	661
第22話	紫の風	701
第23話	真実を知る人形	734
第24話	狭間にて揺蕩う	764
最終話	生まれ変わる物語	792

第1話 生まれ変わった者

ある日の自然公園。

時刻は昼過ぎ。

草原の真ん中に人が仰向けになっていた。

何も日向ぼっこをしていてうっかり寝てしまった訳ではない。

「う……………ん……………」

人影が起き上がる。

少しばかり大きめのロングコートから覗く手は白く小さい。

首の動きに逆らう様に肩まで伸びた灰色の髪が揺れる。

胸は小さくもなければ大きくもない。

悪く言えば中途半端なサイズだ。

「あ……………あ……………」

ふらつきながらも立ち上がった『少女』が自分の喉を摩る。

「……………は……………え……………マジ……………」

急に焦り始めた『少女』が全身を摩る。

背負った刃渡りが1メートルはあろうかという長剣が、その動きに合わせて揺れていた。

「……………」

『少女』の顔がみるみる青くなり、全身がわななく。

そして……………」

「なんじゃこりやあああああ!?!」

叫んだ。

……………」

「はあ……………」どうすんだよこれ……………」

ひとしきり叫んだ後、項垂れながら出口を目指して歩き始めた。

その足取りは重い。

「頭は痛いし、体はダルい。オマケに武器まで重いと来た」

愚痴る『少女』の耳に草むらが揺れる音が聴こえた。

辺りには人の姿どころか鳥一匹すら見当たらない。

「……『泣きっ面に蜂』ってか？」

いつの間にか辺りにはゼラチン質の体に犬の顔を貼り付けた様なモンスター……スライヌが無数に存在していた。

呑気そうな目が一様に『少女』を見つめている。

「悪いが……」

背負った長剣を逆手に構える。

「今すっごく機嫌悪いんだよねえー」

正面に居る手近なスライヌに向かって剣を振り下ろす。

切られたスライヌが真つ二つになった直後、光に包まれて消える。

それを皮切りに辺りのスライヌが一斉に襲い掛かって来た。

「よっ……とおー」

前転して体当たりをかわし、振り向きざまに剣を薙ぐ。

3体程が吹き飛ばされ、そのまま空中で光になって消える。

「そらそらそらあー！」

集団に突っ込み、剣を振り回す。

足が止まった頃には集団に大きな穴が空いていた。

飛び掛かって来た一体を蹴りで打ち上げ、腿のナイフホルダーから取り出した投げナ

イフを投擲。

ナイフは目標に命中し、目標となったスライヌが消えた。

「……さて、まだ続けるか？」

落下したナイフを回収し、剣を肩に担ぐ。

残り僅かとなったスライヌ達はすごすごと居なくなっていた。

「……はあ……やっぱ動きにくい」

剣を背負い直し、『少女』は再び出口を目指し始めた。

……

暫く歩いていると、出口付近で戦闘の音が聴こえてきた。

「……なんだ？」

見ると二人の少女がモンスターと戦っている様だった。

苦戦とまでは行かないようだが、何処かもたついている。

「ねぶねぶ！後ろに！」

「えっ!?やば……」

「邪魔するよ」

よそ見をしていた少女に襲い掛かろうとしていたスライヌを背後から両断し、二人とモンスター達の間割って入る。

「だ、誰ですか!?!」

「話は後だ、片付けるぞ」

「なんだか良く分からないけど助かったよ!」

『少女』と一緒にねぶねぶと呼ばれていた紫の髪の少女が飛び出す。

「ほいな!」

紫の髪の少女が手にした木刀でスライヌを叩く。

横薙ぎの一振りで弾かれたスライヌが『少女』の方へと飛んでいく。

「ごめーん! そっち行った!」

「何してんだ……つよ!」

『少女』が足を振るう。

ブーツに仕込まれた刃が展開し、スライヌを切り裂いた。

「おお! 何それかっこいい!」

「ただの仕込みブーツだ。というか目の前の敵に集中しろ!」

「分かっているってば!」

幸い数はそれ程多くなく、三人で掛ければ全滅させるのにそれ程時間は掛からなかつ

た。

「これで……おしまい！」

紫の髪の少女が最後のモンスターにトドメを刺す。

「……終わったな」

「わたし達ならこれくらいいちよろいちよろい！」

「助かりましたです。ありがとうございますです」

「ああ。じゃあな」

それだけ言って『少女』はその場を後にしようとする。

「えー！もう行っちゃうの!?!」

「まだ何か用があるのか？」

それを紫の髪の少女が引き止めた。

「ここで会ったのも何かの縁だし、わたし達と一緒に来てくれないかなーと」

「……そんな義理は無い」

「そんなあ……」

「あんまり引き止めるのも迷惑ですよ、ねぶねぶ」

「そいつの言うとおりだ、じゃあな」

そう言って再び踵を返した『少女』の目の前に紫の髪の少女が回り込む。

「……なんだよ」

「お願いだよー。ね、一生のお願い！」

「……………ハア……………」

大きな溜息をついた後、出口とは反対の方向を向く。

「……………出会った以上、この先で野垂れ死にされるのも寝覚めが悪い。ここを出るまで付き合ってやる」

「本当!？」

「嘘だと思えば勝手にしろ」

「ありがとう！わたし、ネプテューヌ！」

「わたしはコンパって言うです。よろしくお願いしますです」

紫の髪の少女はネプテューヌ、もう一人の少女はコンパと名乗った。

「……………アシュレイ。呼ぶときはアツシユだ、分かったか？」

「オツケー！よろしくね、アツシユ！」

「……………でもなんで名前で呼んじやいけないのですか？」

アシュレイの顔にありありと不快感が浮き出る。

「嫌いなんだよ、自分の女みたいな名前」

「いやいや、みたいなも何も……………」

「立派な女の子です」

アシュレイの動きが不意に止まった。

「ど、どうしたんですか……?」

「なんか、そこはかとなく地雷を踏んじやった気がするんだけど……」

ゆつくりと、噛み締める用に言葉を紡ぐ。

「……信じないとは思いますが、一応言つといてやる」

「……ゴクリ」

自分に言い聞かせてるみたいだな。

アシュレイはそう思わざるを得なかった。

「俺は……男だ」

「え……」

「ええええええええええええ!」

モンスターだらけの自然公園に、今度は二人分の絶叫が木霊した。

第2話 変化と変身

変化と変身

「記憶喪失とナーズの卵ねえ……えらく個性的な奴らが揃ったな……」

「いやいや、アツシユも十分個性的でしょ」

「みんな個性的で楽しいです」

自然公園を進みながら三人は自己紹介を兼ねた身の上話をしていった。

「それにしてもアツシユさんは何で女の子になっちゃったですか？」

「……心当たりはある」

「そうなの？」

アシュレイは気を失う前……女になる直前の記憶を掘り起こし始めた。

「……ギルドの依頼で、俺は新種のモンスターの調査をしたんだ」

「新種……ですか？」

「スライヌ系の亜種だと思っただが……粘土みたいに変形して他のモンスターに擬態するっていう厄介な奴だ」

大きさから質感に至るまで完璧に再現できるため、近くのコンスターに擬態されて探

すのに手間取ったとアシユレイは付け足した。

「幸い、そいつ本体はそれほど強くなかったし、実際難なく倒せたんだ」

「……あれ、それだと話が終わっちゃうよ?」

「最後まで聞け。倒したとこまでは良かったんだよ」

「なんか急展開の予感……」

「背後から現れたもう一体に不意を突かれて……喰われた」

「た、食べられちゃったですか!?!」

「体内で変なガスを吸わされて、気を失って……気が付いたらこれだ」

思わずアシユレイが諦めたように肩を竦める。

「ガスを吸わされて性別が変わるなんて、見た目は子供の名探偵もビックリだよ」

「俺は空から落下してきた上に地面に突き刺さって擦り傷だけで済んでるお前の方が

ビックリだよ」

「いやあ、それほどでも」

「……人生楽しそうだな」

そうこう言いながら歩いていると、コンパが不意に声を上げた。

「ねぶねぶ、見えてきたですよ」

「おお、これが……!」

「落下地点つてやつだな」

自然公園の奥地にぼっこりと小さな穴が空いていた。

小さいと言つてもそれは穴の直径の話であり、深さはちょうどネプテューヌの上半身が埋まるくらいのも大きさだ。

「……で、ネプ公。なんか思い出したか？」

「うーん……」

ネプテューヌが頭を捻る。

「むむむ……」

更に捻る。

「んー……ダメだ！全然思い出せないや」

「……無駄足……か」

三人が溜め息を吐く。

「そういえばアツシユさん、ネプ公つてねぶねぶのことですか？」

「いちいちネプテューヌつて呼ぶの面倒だしな」

「そう？わたしは文字数も稼げて良いと思うんだけどなあ」

「知るか」

そう言つてその場を後にしようとした。

その直後だった。

足下からパキリという音が鳴る。

「……何の音ですか？」

「なんか嫌いな予感が……」

「……同感だ」

足下の亀裂が音を立てて一気に広がり、瞬く間に大穴が口を開けた。

「く、崩れたあああああ!!」

「落ちるですうううう!!」

「ざけんな、クソツッ!」

咄嗟の出来事に反応すら出来ず、三人の体は大穴に飲み込まれていった。

「つとお……!」

アシユレイは着地と同時に前転して落下の衝撃を逃がすことに成功する。

「いたた……まさか地面が崩れるとは思わなかったよ……」

ネプテューヌが落下時に打ち付けたであろう腰を摩りながらアシユレイに近づいてきた。

「コンパはどこ行った？」

「どこ行ったんだろ？おーい！こんぱー!」

「だ、大丈夫ですう〜」

瓦礫の影からフラフラとコンパが現れ、二人と合流する。

「それにしても……ここどこ?」

「さっきの自然公園の真下の洞窟だと思うです。こんなところに洞窟があるなんて初耳です」

三人が上を向くと、穴から差し込んだ陽光が薄暗い洞窟を照らしていた。

「登るのは無理だな。別の出口を探るか……」

「……ねえみんな、なんだろ、これ?」

そう言つてネプテユーンが瓦礫の中に混ざっていた奇妙な石を見せる。

「綺麗な石ですねえ。なんなんでしょう?」

「宝石か何かか?」

「おお!という事はお店に売れば大金が手に入るんじゃない!?プリン何個分くらいになるのかなー!」

「全部プリンに費やすつもりか?」

その直後、洞窟内にモンスターの咆哮が響き渡った。

「な、何……?今のあからさまに強そうなモンスターの鳴き声……?」

「……もしかしなくても、あいつだな……」

「真っ直ぐこっちに来るですよ!」

まるで三人を目の敵にしているかの如く、凄まじい速度でこちらに巨大なモンスターが向かって来ていた。

伸びる左腕の矛先は間近にいたコンパに。

「きゃあ!?! た、助けて欲しいですよ!?!」

「コンパ!」

「こんぱがモンスターに捕まって全年齢向けの作品じゃ書いちゃいけないようなことされてる!?!」

「そんなことされてないですよ!?! いいから助けて下さいですよ!?!」

「よーし! 待っててこんぱ! 今助けるよ!」

ネプテューヌが手にした木刀でモンスターの足を殴りつける。

だがしかし、コンという軽い音が響いただけで助けるどころか傷一つ付けられていない。

「なんか全然効いてないよー!?!」

「ああ、クソ!」

アシユレイが腿から取り出したナイフをモンスターの顔に向かって投げる。

ナイフは目に命中し、モンスターが呻き声を上げる。

「こつちだデカブツ！」

モンスターが攻撃された怒りからアシュレイを標的にした。手にした大剣をアシュレイに向かって真つ直ぐ振り下ろす。

アシュレイはそれを横つ飛びに回避し、素早くモンスターの腕に飛び乗る。

「あああああああ!!」

逆手に構えた剣を振り回し、腕を切りつけながら胴に向かって駆け上がる。

振りほどかれる前に腕から跳び上がり、更に頭を踏み付けてコンパを掴んでいる左腕へと跳ぶ。

「だっしやあああああああー！」

順手に剣を持ち直し、左腕に振り下ろす。

「きやあ!!」

アシュレイは左腕を切断するつもりだったが、思ったより甲殻が堅く、剣が腕の半分ほどで止まってしまった。

だがその衝撃で掴んでいたコンパを取り落とす。

「くっ……コンパ！無事か!？」

「助かったです……大丈夫です!」

落下したコンパがモンスターの足下から急いで離れる。

「クソツ……抜けねえか!？」

だがアシュレイの剣が甲殻に挟まって、腕から抜けなくなってしまうた。

「ツ！」

殺気を感じ、アシュレイが剣を諦めて腕から跳ぶ。

アシュレイが直前まで居た場所をモンスターの大剣が通り過ぎる。

安心したのも束の間、続けて飛んできた左腕がアシュレイの身体を掴んだ。

「ぐっ……!!?こんの……離しやがれ！」

腕の中でもがくが、凄まじい力で締め付けられ、ミシミシと骨が軋む音が響く。

「あ……ぐ……!!?ね、ネプ公……!コンパ……!お前らだけでも……逃げろ……!」

「うわー!?こんぱが助かったと思ったら今度はアツシユが大ピンチー!？」

「ね。ぶ。ね。ぶ!?!どうするですか!？」

「……ネプテューヌさん、ネプテューヌさん」

「えっ!?!誰!?!」

突如、何処からともなく声が聞こえてきた。

「わたしです。イストワールです。夢の中でお話をしましたが……」

「そうそう思い出したよ!あの時の天の声さんだ!……って呑気に雑談してる場合じゃないよ!アツシユが大ピンチなんだよ!ねえ天の声さん、あいつの弱点とか知らない

!？」

「落ち着いて下さいネプテューヌさん。弱点はわかりませんが、いつものネプテューヌさんなら、女神化して戦えばすぐに倒せるはずですよ?」

女神化というワードを聞いて、ネプテューヌの頭に?マークが浮かぶ。

「メガ……身化?」

「ねぶねぶは記憶喪失なんです。一から教えて上げてくださいです」

「……先ほどから妙に話が噛み合わないと思っただけでしたが、まさかネプテューヌさんが記憶喪失とは……」

「お願いだよ、天の皆さん!友達を……アツシユを助けたいんだよ!」

モンスターの太剣の切っ先がアシュレイの首を捉える。

「……わかりました。わたしの力で、ネプテューヌさんを強制的に女神化させます。それで女神化の感覚を掴んで下さい」

ネプテューヌが一步コンパから離れる。

「準備オツケー!いつでもいけるよ!」

「では、いきます……ネプテューヌさん……あなたに力を……」

一瞬のブランクの後、ネプテューヌの体を凄まじい光が包んだ。

「な、なんだ!?!」

「眩しいです!?!」

光が収まると、そこには元のネプテューヌとは似ても似つかない人物が立っていた。

「……………これが……………わたし!?!」

「それが、ネプテューヌさんの真の姿です」

「ネプ公の……………姿が変わった?」

「凄いです! 変身です!」

変身したネプテューヌが目の前に現れた大太刀を手にする。

「体の中から力が溢れてくる……………これなら、負ける気がしないわ!」

ネプテューヌが大太刀を構える。

「待ってて、アツシユ。今助けるわ!」

変身したネプテューヌに危険を感じてか、モンスターがアシュレイに向けていた大剣

をネプテューヌに向かって振るう。

「遅い!」

それに対してネプテューヌは受け流すどころか、正面から弾き返した。

「ハアアアアア!」

ネプテューヌの一撃がモンスターの左腕を切り落とす。

「アツシユ!」

「っ！……ネプ公！」

落下していくアシュレイの腕をネプテューヌが掴んだ。

「待たせたわね」

「おせーよ、タコ」

「ふふっ……無事で何よりだわ」

アシュレイは自分でネプテューヌの腕を振りほどき、地面に降りる。

「んじゃ、ネプ公！やっちまえー！」

「ええ、決めさせてもらうわー！」

怒り狂ったモンスターが大剣を力任せに振り回す。

ネプテューヌは冷静に攻撃をかわし、時に弾きながら相手との距離を縮める。

「ハア！」

鋭い一撃がモンスターを捉える。

だがまだ止まらない。

「ヤアアアアア！」

モンスターが咄嗟に防御姿勢をとるが、続く二発で体制を崩され、追加の一発で完全に防御を開けられる。

「クロス……」

胴に重い一撃。

巨体が浮き上がる。

「コンビネーション！」

追撃に渾身の上段切りが炸裂。

撃ち落とされた巨体が小規模のクレーターを作り、やがてモンスターは動かなくなつた。

「まあ、こんなものかしらね……」

構えを解いたネプテューヌがゆっくりと二人の側に降り立つ。

「凄いですねぶねぶ！ あんな大きなモンスターさんをあつという間に倒したです！」

直後、再びネプテューヌの体を光が包む。

「ぶはあ……疲れたあ……」

「お疲れさまでした、ネプテューヌさん。アシュレイさん、それにコンパさんも怪我はありませんか？」

「はいです。アツシュユさんとねぶねぶのおかげで怪我はないです」

「俺はまだ全身が痛むがな……つと」

アシュレイが残骸と化したモンスターの左腕から自分の剣を引き抜く。

「……で、あんた誰だ？ 正体も明かさないような奴と話すことなんかないぜ？」

「申し遅れました。わたしは史書イストワールです」

「そうそう、いーすんいーすん」

「いーすんさんですね。これはこれはご丁寧にありがとうございますです」

「……まあ、いーすんでも良いでしょう……」

「んで、そのイスト何某が俺たちに何の用が……」

その直後、数分前に聴いたはずの咆哮が辺りに響いた。

「い……生きてたああああああ!?」

「い……生きてたですううううう!?!」

「おいおい、冗談だろ!?!」

クレーターからもがくように例のモンスターが起き上がる。

「クソツ……俺が時間を稼ぐ!」

そう言うのアシュレイの足元に赤い魔法陣が広がる。

「フレイム……」

左手から発射された炎の玉が真っ直ぐ洞窟の天井に当たり、吸い込まれる様に消える。

「イグニツション!」

開けた左手で虚空を握り潰す。

その瞬間、炎の玉が吸い込まれた場所が爆発。

熱で赤くなった瓦礫がモンスターに降り注いだ。

「行くぞ！走れ！」

「は、はいです！」

「逃げるんだよオオオ！」

「喧しい！」

.....

「はあ.....はあ.....やっと着いたあ.....」

「九死に一生ですう.....」

あれから数分後、背後からのモンスターの咆哮に煽られながら洞窟を抜け出し、アシュレイ達はプラネテニューヌにあるコンパの家まで逃げ帰ってきていた。

「闇雲に逃げ回っても、なんとかなるもんだ」

「まさかあれだけダメージを与えたのに.....まだ生きていたなんて.....」

「ていうかアツシュ!?何さっきの!?!」

「あ?さっきの?」

「魔法陣がぶわーってなって火の玉飛ばしたと思ったらどかーんって!」

「どうやらネプテューヌはアッシュレイが使った魔法に対して文句がある様だ。」

「あんなの使えるんなら先に言ってくれても良かったじゃん!」

「……魔法」

「そう言つてアッシュレイが手の平を広げると、その中に火球が生まれる。」

「……おかしいな」

「アツシユさん……どうかしたですか?」

「俺は魔法なんか使えない……筈だったんだが……」

「そうなの?」

ネプテューヌへの返事の代わりに、手の平の火球を握り潰す。

「恐らくですが、アッシュレイさんの性別が入れ替わってしまったのと、魔法が使える様になつたことは無関係ではないと思います」

「なるほど、意見は有難いが、本名で呼ぶのはいい加減やめろ」

「では、わたしもアツシユさんとお呼びします」

「それでいい。後あんた……イスト何某だかなんだか知らないが、随分博識だな。趣味はストーキングか?」

ネプテューヌの隠された能力を見破り、自分が元々男であることまで知られているこ

とにアシユレイはイストワールに対して敵意を拭いきれないでいた。

「わたしはネプテューヌさんを媒体として、様々な情報を得ています。なので、ネプテューヌさんが見聞きした情報はわたしも把握しています」

「ふーん……」

「……そうだ、ねえいーすん。これなんだろう？ 洞窟で拾った綺麗な石なんだけど……」
ネプテューヌがポケットから石を取り出し、手の平の上に乗せる。

「それは鍵の欠片。4つ集めると、わたしの封印を解くことができます」

「鍵の欠片？」

「いーすんさん、封印されちゃってるですか!？」

「お願いです、ネプテューヌさん。4つの大陸に一つずつある鍵の欠片を集めてくださ
いー」

「ちよつと待て」

アシユレイが話に横槍を入れる。

「さっきのモンスターと鍵の欠片、無関係には思えないな。もしかして、毎回鍵の欠片の
近くにはあんなデカブツがあるんじゃないのか？」

「そのとおりです。危険な旅になるとは思いますが、もし封印を解いてくだされば、ネプ
テューヌさんの記憶喪失を治してあげることができます」

「ほんと!？」

「どの道、ネプテューヌさんには記憶を取り戻してただかねばなりませんし」

「よし!それならわたし頑張っちゃおうよー!」

「わたしもお手伝いするです!」

意気込むネプテューヌにコンパが混ざる。

「いいの?こんぱ、学校は?」

「モンスターさんが原因で休校中です。それに困っている友達を見捨てるなんて出来な
いです」

「こんぱ……ありがとう!」

盛り上がる二人を尻目に、アシユレイはしかめっ面のままだった。

「アツシユさんにも、協力をお願いしたいのですが……」

「……悪いが、俺は何の見返りも無しに危険を冒せる程お人好しじゃない」

そしてアシユレイはあっさりとした協力を断った。

「そんなー!つれないなあアツシユう、わたしとアツシユ、一緒に共同作業をした仲間や
んか?」

「んな仲間になった覚えは無い」

「ぶー……アツシユのケチ!」

「贅沢で死ぬくらいならいくらでもケチになつてやるよ」

ネプテューヌが説得を試みるが、アシユレイはこのままだとテコでも動きそうになり。

「……わかりました。アツシユさんが協力してくれれば、あなたの体に起こっていることを調べてあげます」

「……それで？」

「もし治療可能ならば、あなたを元の性別に戻してあげましょう」

「……………」

イストワールの提案で、アシユレイが言っていた見返りは出来た。

「アツシユ……………」

「……わかったよ。そこまで言われて断るのも失礼だしな」

「ほんと!？」

「宛のない旅に行き先が出来たとポジティブに考えるさ」

「わーい!アツシユ大好きー!」

ネプテューヌがアツシユの腕に抱きつく。

「はなれろ、暑苦しい」

「えー、こんな可愛い女の子に抱きつかれて嬉しくせにー」

「本当に可愛い奴は自分のことを可愛いなんて言わない。あとそんな貧相な体で抱きつかれても全然嬉しくない」

「ふふっ、仲がよろしいようで何よりです」

不意に三人に届いたイストワールの声はさつきより随分小さくなってしまった。

「あれあれ？ いーすんの声が聴き取り辛いよ？ 電波状況悪いの？」

「鍵の欠片が持つエネルギーを媒体に話をしていましたが……どうやら時間のようです」

イストワールの声がみるみる小さくなっていく。

「では、皆さん。鍵の欠片のことをよろしくお願いします……」

そう言った直後、イストワールの声が完全に聴こえなくなってしまった。

「聴こえなくなっちゃったね……」

「いーすんさん、大丈夫でしょうか……」

「さあな。間に合うようにするしかないさ」

ふと外を見ると、既に太陽は傾き、プラネテューヌの街を赤く照らしていた。

「今日はもう遅いですし、二人ともわたしの家に泊まるです」

「いいの？」

「ベッドはわたし一人じゃ少し大きいですし、使っていないお布団も沢山あるです」

「俺は男だぞ？ 体は女だが」

「それがどうかしたですか？」

「襲われるかもしれないとかは考えないのか？」

「襲うの？」

「襲うか馬鹿」

「女の人が寝込みを襲われるって言ったら、帯を引っ張られて『あーれー』ってやつが定番だと思わない!？」

「知るか、一人でやってろ」

その日は日が落ちるまで、コンパの家から騒ぎ声が絶えることはなかったそうなの。

第3話 反転再誕

「……で、今日は具体的に何をやるんだ？」

時刻は午前10時。

寝るときに使った2人がけのソファの真ん中を堂々と選挙しているアシュレイが口を開く。

この質問自体はもっと早くするつもりだったが、寝坊したネプテューヌが朝食をとるのを待っていたらいつの間にかこんな時間になってしまった。

「具体的について？」

「旅には準備つてもんが必要だ。俺は兎も角、お前らは何かしら準備する物があるんじゃないのか？」

アシュレイは普段、ギルドの依頼を受けながら各地を旅する旅人だ。

なので野宿などにも慣れてるが、初めての旅になる二人はそうはいかない。

「はい。だから今日は準備の為に買い物に行こうと思ってるです」

「お買い物!? わーい!」

ネプテューヌがわざとらしく手を上げて喜ぶ。

「じゃ、行くならさっさと行こうぜ？」

「今日のお昼は外食にしようと思うです」

「おお！美味しいものが食べれるなら、コバンザメの如く何処まででもついてっちゃおうよー！」

「お前な……」

コンパの家を出て、三人でプラネテューヌの街を歩く。

「……改めて見ると、凄く都会って感じの街だね」

ネプテューヌがプラネテューヌの街に対して感想を述べる。

「プラネテューヌは4国家の中で一番技術力が発展しているからな」

「へえ……だからプリンって言う美味しい食べ物があるんだね」

「プリンぐらいどこの国に行ってもある」

「おい、例の洞窟の噂、聞いたか？」

不意に背後から声が聞こえてきた。

後ろに並んだ2人組の男が話し合っているようだ。

「最近発見された洞窟のことだろ？まさか森の地下にあんな洞窟があつたなんてな

……」

「あの洞窟の中には凄まじい数のモンスターがいるらしい。ネットではあれこそモンス

ターの巢なんじゃないかってもっぱらの噂だ」

「マジかよ、それが本当なら大発見じゃん！」

「まあ、中に居るモンスターも凶暴で人手が足りないみたいだな。ギルドに仕事を回して、冒険者に依頼しないと調査もままならない状態らしい」

「他の国は女神様が先頭に立ってモンスター退治をしてるってのに……この国は大丈夫なのかねえ……」

「さあな……」

男達の声が聞こえなくなっていく。

行き先は同じではなかったらしい。

「……………」

「こんぱ？どしたの？」

「……………気になるか？」

「はいです」

森の地下の洞窟とは、間違いなく先日アシユレイ達が落下した洞窟のことだ。

「こんなわたしでもプラネテューヌの為に……女神さんの為に何かしたいんです」

「じゃあ、今日は買い物はやめて……えーと……」

「ギルド、な。行くぞ」

「二人とも、良いんですか？」

「今まではこんぱがわたしに付き合ってくれてたんだもん。今度はわたしがこんぱに付き合う番だよ」

「どうせ反対しても2対1で負けが確定してるしな」

「……ありがとうございますです！」

三人は急遽予定を変更し、依頼を受けるためにギルドへと急いだ。

幸いギルドは現在地からそれほど遠くなく、数分でたどり着けた。

「ここがギルドってどこ？」

「はいです。ここではいろんなお仕事を受けることが出来るんですよ」

「ふーん……例えばどんなの？」

「特定のモンスターへの排除、物資の回収、未開拓エリアの調査から迷子の搜索まで、とにかくいろいろだ」

「わたしが今までやったのは、病院のボランティアとかお使いみたいな簡単なものだけで、ダンジョンを探索するのは初めてです」

アシユレイが手早く目的のクエストを見つけ、端末に必要な情報を入力する。

「受注完了つと」

「おお！なんかベテランって感じ！」

「馬鹿なこと言っていないで行くぞ」

「よし！三人で頑張ろうね！」

.....

地図を頼りに歩き回り、ようやくと洞窟の入り口にたどり着いた。

「やっと着いた……疲れたあ……」

「まだ始まってすらないのにもうグロッキーか？」

「あの時は夢中でしたけど、こうやって歩いてみたら結構遠かったんですね」

満を持して、再び洞窟に入る。

「そういえばアツシユ、洞窟の調査って具体的にどんなことするの？」

「お前……ちゃんと依頼書の内容読んだのか？」

「細かい事は気にしないのがわたしのジャスティスだからね！」

「そこは自慢するところじゃないです……」

ネプテューヌのいい加減さに二人がため息を吐く。

「……依頼内容だが、生息するモンスターの調査、及び可能ならその排除。後は、異常箇所がないかの調査だ」

「モンスターで思い出したんだけど……まだあのおつきなモンスター、まだ生きてるんだよね？」

「わたしたちよりも前に何人も調査の人たちが入ってるですから、もう倒されていると思うですよ」

「それなら安心したよ。もうあんなのとは二度と戦いたくないからね」

「お前……旅の目的忘れてないか？」

イストワールの話が本当なら、鍵の欠片の近くには凶悪なモンスターが生息しているそうさ。

「あんなのと何回も戦うからあのイスト何某は危険な旅だって言ったんだぞ。わかってんのか？」

「まあまあ、後のことはその時考えれば良いって！」

「やれやれ……先が思いやられる」

そんな会話の後、ネプテューヌ達は本格的に調査を開始した。

時々現れるモンスターを退治しつつ、薄暗い洞窟の中を進む。

「アツシユ！そつちのお願い！」

「わかつてるよー！」

アシュレイが炎を纏った剣を上段から地面に叩き付ける。

「フレイムクロウラー！」

ひび割れた地面から噴き出した炎が蛇のように走り、軌道上の敵を一掃した。

「これで全部か……」

「アツシユさん、どんどん強くなってるです」

「魔法の使い方が分かってきただけだ」

「いやあ、こうも味方が強いとなんだか雑魚敵との戦いが流れ作業になってくるよね！」

「油断していると足元掬われるぞ。」何事も三回目だ」

「……アツシユさん。」何事も三回目」ってどういうことですか？」

コンパがアツシユが強調した言葉に疑問を抱いた。

「何かをする時は、初めてのガチガチした感じでもなく、慣れてきたダラダラした感じでもなく、適度な緊張感を持って挑めって意味。親父の口癖だ」

「アツシユさんのお父さんですか？」

「ちよつと前にぼっくり逝っちまったがな」

「……………」

「気にすんな、不健康な生活態度のツケが回ってきただけだ」

「三回目かあ……ちよつと難しいけど、覚えたよ！」

「それで良い」

そんな会話を終えて、調査を再開する。

「……やっぱり、奥に行くに連れて暗くなってくね」

洞窟のその暗さはいよいよ目を凝らさないと足元すら良く見えないほどになっていた。

「ね、ねぶねぶ。アツシユさくん。暗くて二人が良く見えないですう」

「つたく……おい、コンパ、こつちだ」

「暗くて危ないから気を付けるんだよ。どこに何があるか分からな……」

「いたっ!？」

「ねぶっ!？」

二人分の短い悲鳴が洞窟に響いた。

「おいネプ公、どうした?」

「そこらじゆう岩だらけですから、ねぶねぶも気を付けるですよ」

「いたた……違う違う。岩にぶつかつたんじゃなくて、誰かがぶつかつてきたのー。もう、暗いんだから気を付けてよね!」

ネプテューヌがぶつかつた相手に抗議の声を上げる。

「いったあー……ぶつかつて来たのはそつちでしよう!？」

ぶつかつた相手も負けじと抗議する。

アシュレイが魔法の炎で辺りを照らすと、ぶかぶかのコートに双葉を模したりボンを付けた少女が浮かび上がった。

「そもそも、なんでこんなところをあんたたちみたいなお子供がうろついてんのよ……」

「人のこと言えた口かよ。ほれ」

「まったく……」

アシュレイが差し出した手を洩々といった感じで少女が掴み、起き上がる。

「……で、あんた誰だ？」

「わたしはアイエフ。ゲームギョウ界に吹く一陣の風、とても名乗っておくわ」

「「……………」」

アイエフと名乗った少女の言葉に三人が一様に固まった。

「……あ、あれ？」

アイエフはやつと自分が滑ったことに気がついたらしい。

「えーと……ゲームギョウ界に吹く……なんだっけ？」

「一陣の風よ。まあ、簡単に言うるとギルドの仕事で生計を立てながら世界中を旅する旅人みたいなものよ」

「……それって……」

コンパがアシュレイの方を向く。

「何かと思ったら同業者かよ……」

「あら、あんたもそうなの？」

「一陣の風なんて名乗ったことはないがな」

アシユレイがやれやれと肩を竦める。

「で、あんたたちこそ、どうしてこんな危険なところに居るのよ？」

「わたしたちもギルドのお仕事で来てるんだ。あ、わたし、ネプテューヌ！」

「コンパです。よろしくです」

「アシユレイ……呼ぶときはアツシユだ。間違えんなよ？」

「ギルドの仕事って……そのアツシユは兎も角、あんたたちが？」

「むー……失礼だなー。洞窟の調査くらいわたしたちだつてできるもん！」

アイエフの顔にありありと浮かんだ呆れにネプテューヌが腹を立てた。

「あのねえ……調査に入った人たちが何人も謎のモンスターに襲われて大怪我を負ってるのよー！」

「……ええ」

「呆れた……そんなことも調べないで仕事を受けたのね」

アイエフは謎のモンスターがいることにネプテューヌが驚いていると思っただけで、三人が考えたことはその一歩先だった。

「ねぶねぶ……それって……」

「……まあ、そう簡単には倒されてくれないよな……」

直後、洞窟の壁をぶち破りながら例のモンスターが現れた。

切られた左腕は再生しているが、昨日より怒り心頭な様子だ。

「出たあああああああ!?!」

ネプテューヌたちが見つけると、大剣を振り回し、敵意を剥き出しにする。

「どうしよう、こんぱ! あいつ絶対わたしたちのこと探してたんだよ!」

「なに!?! あんたたち、あいつ知ってるの!?!」

「ああ、俺は一回殺されかけた」

「ちよつとアツシユー! わたしがちゃんと助けたでしょ!?!」

「事実だ」

「でもその後、ねぶねぶがぼっこぼこにやつつけたです」

「……にわかには信じられない話ね。けど、戦えるなら協力してもらおうわ」

全員がそれぞれ武器を構える。

「……ネプ公、行けるな?」

「もつちろん! 最初からクライマックスでいっちゃうよー!」

そう言ったネプテューヌの体が光に包まれる。

そして収まったころには元の姿とは似ても似つかないネプテューヌの姿があった。

「…………ふう。こちらの準備はできたわ」

「はいっ!? ちよ、何が起きたの!?!」

「ねぷねぷはなんと、変身することができちゃいます。変身すると、とーつても強くなるんですよ」

「どう? これならあいつにわたしが一度勝っていること、信じてくれる?」

「信じるもなにも、そんなの見た後じゃ信じるしかないわ……」

モンスターが何度目かの咆哮を上げる。

「…………殺る気満々ね。けど、それはこちらも同じよ」

ネプテューヌが大太刀を構える。

「これ以上被害を出さないためにも、今ここであなたを討たせてもらうわ!」

戦闘が始まった。

まずはネプテューヌが仕掛けた。

「ハア!」

大太刀による一撃は大剣で受け止められ、剣が翻る。

カウンターの横薙ぎの一閃がネプテューヌに迫る。

「遅い!」

上昇してかわすが、続けて左腕が飛んでくる。

「ネプ公！」

アシュレイが魔法の炎弾を飛ばし、爆風で左腕の軌道を逸らす。

「ごめんなさい、助かったわ！」

「そういうのは後だ！」

モンスターの目の前に魔法陣が出現する。

「ちい！」

アシュレイがその場から急いで離れる。

直後、魔法の雷が先ほどまで居た位置を貫いた。

「ヤア！」

ネプテユーンの攻撃がモンスターの胸を捉える。

深い傷が入るが、それだけでは怯まない。

「足を崩す！アイエフ、手伝え！」

「オツケー！」

アシュレイとアイエフがモンスターのサイドに回る。

「……そこっ！」

アイエフがモンスターの関節部をカッターで正確に切り裂いた。

痛みにもかくモンスターがアイエフを蹴り飛ばそうと足をうごめかす。

「大人しくしとけ!」

魔法で高熱を纏ったアシュレイの剣が、モンスターの一際大きな足を切り落とした。体制が大きく傾ぐが、がむしやらに剣を振り回し、それ以上の接近を拒む。

「クソツ……ネプ公、近付けるか!」

「くつ……流石に厳しいわ!」

「えいです!」

不意にモンスターの動きが鈍る。

見ると、いつの間にか背後に回っていたコンパがモンスターに巨大な注射器の針を突き刺し、麻痺毒を注入していた。

「ね。ふね。ふ。今です!」

「ありがとう、こんぱ!」

炎を纏った剣を抱えたネプテューヌが一気に懐まで飛び込む。

「ブレイズブレイク!」

渾身の一撃が命中し、轟音と共にモンスターが光になって消えた。

「ふう……手強かったけど、所詮は手負いのモンスターね。わたし達の敵じゃないわ」
ネプテューヌの周りに全員が集まる。

「やるじゃない……正直わたし一人じゃ危なかったわ。ありがとう」

「元はわたしが仕留め損なつたのが原因だもの。気にしないで」

「にしても、変身つて凄いのね。もう別人じゃない」

「わたしも初めて見た時はびっくりしましたです」

ネプテューヌが光りに包まれ、変身を解いた。

「ぶはあ……疲れたあ……」

「ねぶねぶ、お疲れ様です。今日もかつこ良かったですよ！」

「いやあ、そう言われるのも照れますなあ……」

「前々から思つてたが、本当に同一人物かよ……」

「そうだ、とネプテューヌが手を叩く。

「ねえあいちちゃん、良かったらわたし達のパーティに入らない？」

「……あいちちゃん？」

「それつて、もしかしてわたしのこと？」

「うん！アイエフだからあいちちゃん！そっちの方が可愛いでしょ？」

「……あいちちゃん、か……」

アイエフが顔を赤らめる。

「もしかして嫌だった？昔そのあだ名でイジメられてたとか？」

「別にそんな過去ないわよ。名前くらい好きに呼んでくれて構わないわ」

「じゃあ、わたしもあいちゃんって呼ぶです!」

「で、話は戻るんだけど、あいちゃんも一緒に調査しない?」

「まあ、あいつみたいなの凶暴なモンスターがいつ現れるかも分からないしな」

「いいわよ。数は多いに越したことはないしね」

アイエフは二つ返事でネプテューヌと行動を共にすることを承諾した。

「じゃあ、改めてよろしく!あいちゃん!」

「ええ、よろしく」

パーティーにアイエフを加えた一行は再び調査を再開した。

「……こうやって調査してみても気付いたけど、この洞窟ってかなり広かったんだね……」

暫く調査をしていると、ネプテューヌが不意に口を開いた。

「逃げてる途中で迷子にならなくて本当に良かったですう」

「……そういえばあんたたちって、前にもここに来たことがあるのよね?」

「半分は事故みたいなものだがな」

「ただ歩いてるのも暇だし、あのモンスターとの因縁も含めて話してくれない?」

そういう訳で、アイエフに三人のこれまでの経緯を話し始めた。

「と、いうわけなんだ!」

「なにがというわけだ。俺が補足しなかったらまるで意味わかんなかっただろうが」

「空から降ってきた記憶喪失のネプ子に、女になったアツシユ、天の声ことイストワール。そして鍵の欠片ねえ……あんたたちトラブルに巻き込まれすぎじゃない？」

「大半はこいつのせいだがな」

「いやあー、それほどでもー」

「いや、褒めてないから」

アイエフとアシュレイの声が重なった。

……………

「……かなり奥まった所まで来たな」

「そうね。辺りを見渡して、特に何もなければこの辺りで切り上げましょう」

ネプテューヌ達はその後も探索を続け、ようやく洞窟の最深部と思われる場所にたどり着いた。

「……ねえあいちゃん、こんなの拾ったんだけど」

隅っこの方を調査していたネプテューヌが近くのアイエフに声をかける。

その声にあシュレイとコンパも二人の近くに集まった。

「……何かのデイスクかしら？ネプ子、こんなどこで拾ったのよ？」

「さつきは言いそびれちゃったけど、ネプ子ってもしかしなくてわたしのこと？」

「ネプテューヌだと呼び辛いし、あんたみたいな小さいのはネプ子の方が似合ってるわ」

「また呼び辛いつて言われた！これでもう三人目だよ!？」

「やかましい、呼び辛い名前のお前が悪い」

アシユレイが若干のジャイアニズムをかましたところで本題に戻る。

「で、そのデイスクはどこで見つけてきたの？」

「なんかあつちの壁に飾られてたよ」

「飾られてた？このデイスクが？……それ本当？」

「ねぶっ!?!酷いよあいちゃん！このわたしを疑うの!?!今まで長年連れ添ってきた仲間の

わたしを……」

「いや今日が初対面だろ……」

「ねぶねぶを疑うなんてあいちゃん酷いです!」

アイエフが何故か二人から罵られる。

「……はあ……分かったわよ、信じてあげるわ」

「さつすがあいちゃん！あいちゃんの“あい”はきつと“愛”の“あい”だね!」

「じゃあ、これからは英語で“ラブちゃん”って呼ぶです!」

「いいねいいねー！あ、けど『ラヴちゃん』の方が文字的には可愛いかも」
「……だ、そうだぜ。『ラヴちゃん』？」

盛り上がる二人にアシュレイが乗っかった。

「ちよ、ちよつと二人共やめなさいって！アツシユも一緒になって人をからかわないの！」

「やーい、あいちゃんのかせに照れてやんのー」

「……どうでもいいけどラブちゃんって聞くと、犬の名前のような気がしてならないんだが、アイエフはそこんとこどう思うよ？」

「あんまり続けると、そろそろマジで怒るわよ！」

アシュレイ達がアイエフを弄って遊んでいると、不意にネプテューヌが手にしているディスクが光り始めた。

「ねぷっ!?!な、何これ!?!」

「あいちゃん、何が起こってるんですか!?!」

「分からない……わたしだっってこんなこと初めてよ!?!」

ディスクから飛び出した光が空中で分裂し、地面に落下する。

落下した光が変形し、モンスターへと変貌した。

「嘘でしょ!?!まさか、このディスクから出てきたっていうの!?!」

「ごちやごちや言ってる場合か！迎撃するぞ！」

出てきたばかりで体制が整っていないうちに、アシュレイが手近な一体を剣で切りつける。

「てやあ！」

ネプテユーンが手にした木刀でモンスターを叩く。

弱まりつつあるが、今だにディスクからは新しいモンスターが次々に出現していた。

「フレイルムリツパー！」

アシュレイが剣から炎の斬撃を飛ばし、直線上の敵を一掃する。

ディスクから新たなモンスターが出てくるのは止まったが、その頃には凄まじいモンスターの大群が出来上がっていた。

「凄い数ですう!?!」

「ちっ……切りが無いな……」

「三人とも、離れなさい！」

アイエフのかけ声に三人がモンスターから離れる。

「魔界粧……轟炎！」

直後、大量の爆発と火柱がモンスター達を襲う。

ひと塊になっていたモンスター達は逃げることも出来ず、一網打尽となった。

「おお！あいちゃんすごい！」

「今の……魔法か？」

「疲れるから、あんまりやりたくなかったんだけどね」

「でも、あれだけいたモンスターさん達をほとんど倒しちゃったです！」

残ったモンスターを処理し、再びディスクの周りに集まる。

「それにしてもびつくりしたあ……この世界のモンスターってディスクから生まれるんだね。それならそうと早く言っつてよ！」

「ディスクなんかからモンスターが出てくるかよ……」

「そうよ。モンスターの出処なんて未だに判明してな……」

「どうした？アイエ……フ」

アシユレイとアイエフがいきなり固まった。

「アツシュ？あいちゃん？どうしたの二人共急に固まって……」

「……そうよ！モンスターの出処が分からなかったのはそのせいだったのよ！」

「これは大発見です！」

「ハーハツハツハツハツハ！」

洞窟内に不快な高笑いが響く。

「ガーディアン反応が消滅したから、何事かと思って来てみたが……まさかここで貴

様と会うとはな、ネプテューヌ！」

「誰?!この時代遅れな笑い声は?!」

「時代遅れは余計だ!」

そう言つて声の主と思われる女が姿を表す。

不気味なほど白い肌、三角帽子。

所々に茨をあしらつた衣装が特徴的な魔女風の女だ。

「フン……人をおちよくる意地の悪さは相変わらずのようだな」

「おいネプ公、こいつ知り合いか?」

「まささかー。さすがのわたしでもこんな悪趣味なメイクのおばさんと知り合いなわけないってー」

きつぱりとネプテューヌが言い放つ。

「それは良かったです。ちよつとだけ、ねぶねぶの人付き合いを疑つちやつたです」

「それもそうね。ネプ子とはいえ、あんな人と知り合ひだつたらわたしでもドン引きだわ」

「だとよ、おばさん」

女が怒りに打ち震える。

「き、貴様ら……私を好き勝手言いおつて!全員纏めて葬つてやる!」

女は槍と杖を掛け合わせたような武器を取り出し、敵意を剥き出しにする。「よーし！そつちがその気なら！」

ネプテューヌも武器を取り出し、単身で女に突撃する。

「おい！待てネプ公！」

「大丈夫！こんな奴、わたし一人で十分！」

ネプテューヌが木刀を振り上げる。

「やああー！」

「フン……遅い！」

ネプテューヌの一撃はあっさりと弾かれ、腹部に掌底を貫き、吹き飛ぶ。

「ネプ公!？」

「次は私の番だ……さて、誰にしようか……」

女の手が持ち上げられる。

標的は……

「つーコンパ！避け……」

言うより早い。

女の掌から打ち出された魔法弾がアシユレイとアイエフの間を縫うようにすり抜け、その後方に居たコンパに命中する。

「……………うう……………痛いですう……………」

「……………テメエー！」

「アツシユ……………ああもう！」

頭に血が上ったアシユレイが剣を構えて走る。

遅れてアイエフも続いた。

「オラアー！」

剣を振り下ろす。

「ぬるい」

「なっ……………」

だがアシユレイの攻撃は杖で起動を逸らされ、虚しく空を切る。

「死にゆけ」

女の手がアシユレイの腹部に当たり、そのままゼロ距離で魔法弾を食らった。

「うぐっ……………！」

そのまま吹き飛ばされ、洞窟の壁に激突する。

「ハアー！」

「見えていないとでも思ったか？」

背後に回り込んだアイエフの攻撃はあっさりかわされ、アシユレイと同じようにゼロ

距離からの魔法弾で吹き飛ばされた。

「クソツ……なんだよこの強さ……」

「くっ……どうやら人は見かけによらないみたいね……」

「フン、雑魚共が……ん？」

女がネプテューヌに視線を向ける。

正確にはネプテューヌのポケットからこぼれ落ちた石に。

「ほう、やはりガーディアンを倒し、鍵の欠片を奪ったのは貴様だったか。だが鍵の欠片は返してもらおう」

「どろぼー！それはわたし達が頑張って手に入れたんだぞー！返せー！」

鍵の欠片を拾い上げた女に向かってネプテューヌが掴みかかった。

「黙れ！」

「ぐへえっ!？」

溝を蹴り上げられたネプテューヌが崩れ落ちる。

「ネプ公……こんの……!？」

「貴様も大人しくしていろ！」

「ぐああっ!？」

立ち上がろうとしたアシユレイの背中に数発の魔法弾が打ち込まれた。

「さて、ようやく待ちに待ったこの時がきた。ネプテユーン、貴様の力をもらおうぞ！」
女の杖に禍々しいオーラが集まっていく。

「ハーハツハツハ！ やつとだ！ やつと私の悲願の第一歩が、今ここから始まるのだ！」
「ねぷねぷ！ 危ないです！」

「く……………つそお……………ネプ公……………！」

自らの意思に反し、アシユレイの視界はかすみ、意識が離れていく。

(俺は……………助けられないのか?)

アシユレイが目を瞑る。

(いや……………違うな。俺に助ける資格なんて……………無い)

アシユレイの意識は、ゆっくりと暗闇へと沈んで行つた……………。

……………

(!?)????

チカラ

暗闇に落ちかけた意識が一気に浮上する。

目を開けると、閉じる前と全く同じ風景が見えた。

いや、少しづつだが動いている。

自分以外がスローになったように見えた。

チカッ
チカッ

(まだだ……)

意識を引き上げた言葉が再び認識できた。

聞こえるとか、頭に響くとかそんなレベルじゃない。

視覚や触覚、嗅覚から味覚に至るまでがその言葉を『認識』していた。

チカッ
チカッ

(使えって……なんだよ)

チカッ
チカッ

(力なんて……俺にあるのか?)

未だにあの女に攻撃された箇所が痛み、一瞬でも気を抜けばまた意識を失いかねない。

チカッ
チカッ

(……分かったよ)

全身に焦げるほどの熱が回り始める。

(俺に……あいつを助ける力があるってんなら……)

「????? イコウ」

「そいつを……引き出してみやがれええええ!!」

「?????? せる」

「?????? とらんす」

「視界が、黒い焰に包まれた。」

「……………」

「っ!?なんだ!?!」

アッシュレイが先ほどまで居た位置から真つ黒な火柱が立ち昇る。

「アッシュユ!?!」

「アッシュユさん!?!」

アイエフとコンパが声を上げるが、返事は無い。

「一体……何がどうなっている!?!」

女も杖を構えたまま動けない。

黒い火柱がゆっくりと小さくなっていく。

「……………」

火柱が完全に消える。

そして……

「……………」

何も起きない。

火柱が立っていた位置にアシユレイの姿はなく、硬い地面のみがあるだけだ。

「くっ…………ふふふ…………ハーハッハッハッハッハッハッ！」

女が笑い声を上げる。

「ふふふ…………何をするのかと思えば…………只の時間稼ぎか…………いや、それとも一人で逃げたか？」

「そんな…………アツシユ！居るんでしょ！出てきなさい！」

「アツシユさん！わたし達を見捨てないでほしいです！」

「心配するな…………貴様らを墓場に送った後、あいつもすぐに後を追わせて…………っ!?」
殺気を感じた女が咄嗟に防御姿勢をとる。

直後に凄まじい衝撃が女を襲った。

「ぬ…………おお!？」

弾き飛ばされ、空中で体制を整える。

「ぐっ…………誰だ貴様は!？」

自分を吹き飛ばした主を睨みつける。

「……………誰が……………逃げるかよ」

「貴様……………一体何処から……………いや、一体いつからここにいた！」

「俺は……………もう逃げない……………」

青い目が真つ直ぐに女を見据える。

「大事な仲間を……………友達を……………守り通してみせる！」

刃渡りが1メートルを越える長剣を逆手に持ち、つぎはぎまみれのコートを羽織った

黒髪の男がそこに居た。

「……………アツシユ？」

ネプテユーンの言葉に黒髪の男が振り向く。

「悪い……………待たせたな」

「……………やっぱりアツシユだ！」

男の言葉にネプテユーンが笑顔になる。

「嘘……………本当にアツシユ!？」

「どうなってるです!？」

「話は後だ」

再びアシュレイが女の方を向く。

「俺の仲間を怖がらせたツケ……しっかり払ってもらおう」

アシュレイが剣を持ち上げる。

「……SSS起動。フォーム・ドライ」

その言葉で剣の鏢にあたる部分に装着された機械部品が作動する。

刃が機械部分ごとスライドし、隠れていた柄が飛び出す。

そのまま刃が峰の方向に90度回転。

瞬く間に長剣が大鎌へと変形した。

「ぐっ……貴様……まさか新手の女神か!？」

「……神になった覚えは無い、が……ひとつだけ言えることがある」

大鎌を構える。

「今の俺は……すこぶる調子が良いってことだ!」

走る。

「ぐおお!？」

女はすんでのところで鎌の一撃を受け止めた。

「こっちだ!」

弾かれる前に体を反転させ機械部分による殴打を繰り出す。

受け止められず、女が吹き飛ぶ。

走る。

「オラオラオラオラ！」

ダメージから復帰できていない女を炎を纏った剣で連続で切り裂く。

「デモン……」

拳を打ち込み、そのままゼロ距離で炎弾を発射し、空中に打ち上げる。

炎弾は空中で巨大化し、炎の結界となる。

フォーム・ドライ。

大鎌を抱えたアシュレイが結界に向かって跳ぶ。

「ブレイズー！」

大鎌で結界を切り裂く。

臨界を突破した結界が強烈な破壊エネルギーを伴って炸裂した。

黒焦げになった女が地面に叩きつけられた。

「……う……が……ふっ……」

「……やれやれ、しづといな」

これだけの攻撃を受けて女はまだ生きていた。

「……鍵の欠片、確かに返してもらったぞ」

女の懐からこぼれ落ちたそれをアシュレイが拾う。

「さて、じゃあ……」

「待って、アツシユ！」

鎌を振り上げたアツシユをネプテユーンが止める。

「ねえ、もしかしておばさん、わたしのこと知ってるの？」

「……ああ、知っているさ。貴様は知らなくとも、私は貴様をよく知っているよ」

「じゃあお願い！わたしのことを教えて！」

「何をわけの分らないことを……頭でもぶつけたか？」

「違います。ねぶねぶは記憶喪失なんです。だからお願いです！ねぶねぶのことを知っていたら教えて欲しいです！」

「……くっ……ふふ……ハーハツハツハ！まさか貴様が記憶喪失になっていたとはな！貴様を見失ったときはどうしたものかと思っただが……どうやら、まだ運命は私の味方のようだ！」

「何を馬鹿な……っ!？」

女の全身から衝撃波が発生する。

アシュレイは咄嗟に下がったが、次に顔を向けた時、女の姿はもうそこには無かった。

『鍵の欠片はしばらく貴様らに預けておいてやろう！さらばだ！』

女の声のみが洞窟に響き、やがてその声も消えた。

「……逃げたか」

「……あのおばさん、何者なのかしら？ネプ子を狙ってたみたいだし……」
「わかんない……いーすんと話せたらなあ……」

「ねふねぶ……」

「まだ、終わってないぞ」

「……そうね。今はこつちをどうにかしましょ」

アイエフのこつちとは、モンスターが出てきたディスクのことだ。

「とりあえず……えいっ」

アイエフはディスクを手にとると、躊躇なく真つ二つにへし折った。

「さて、ディスクも破壊したし、帰るか」

「ちよつ、ちよつと待ちなさいよ!」

「なんだよ?」

「なんだじゃないわよ。一番大きな問題が残ってるでしょうが」

「一番大きな問題?」

アイエフの言葉にネプテューヌが首を傾げる。

「アツシユ、なんであんな男になってるのよ!」

アシユレイは未だ黒髪の男のままである。

ネプテューヌ達がよく知るアシュレイの髪は灰色のセミロングだ。

「……知らん」

「知らないって……何の心当たりがないわけじゃないでしょ？」

「少なくとも、なんで男に戻ったかは分からん。戻った方がありがたいがな」

「それに何!? あんたの腕どうなってんのよ!?!」

「だから知らん。無意識にやってたんだよ」

「まあまあいいちゃん! 良いんじゃない? 元に戻っただけなんだし!」

「あんたねえ……」

「……ん、あー……」

「アツシユさん、どうしたですか?」

「……なんか……気分悪い……」

直後、アシュレイの体が再び黒い炎に包まれる。

「「……あ」」

「……え?」

炎が治まった時、そこにはぶかぶかのコートに灰色の髪の少女がいた。

「アツシユさん……」

「戻った……わね」

「アツシユ、どんまい！」

「……………」

叫ばずにはいられなかった。

「なんでだあああああああ!?!」

第4話 変わっていく国と変わらない人

「……それにしても、まさかモンスターがディスクから生まれるなんて思いもしなかったわ」

「ですね。けど、これでモンスターさんが出てくることはなくなりました」

洞窟の調査を終えたネプテューヌ達は、ギルドにクエストの報告をし、現在はコンパの家に戻ってきている。

「後はみんなまで退治していけば、きっと平和になるです」

「まあ、あのディスク……じゃ少し呼びにくいから、これからはエネミーディスクって呼ぶことにしましょう」

アイエフはあの洞窟で見つけた、モンスターを生み出すディスクをエネミーディスクと名付けた。

「で、そのエネミーディスクが他になれば、の話だけだね」

「そんなあ……」

現在ゲームギョウ界はモンスターで溢れかえっている。

あのディスク一枚から世界規模の数のモンスターが出てくるとは、考えたくても考えられなかった。

「……そんなに落ち込まないで、コンパ。発生源もわかったし、以前より格段に対策も立てやすくなったはずよ」

「いやあ、働いたあとのプリンは格別だね！こんば、おかわりある？」

少し重めな雰囲気部屋の部屋にネプテューヌの呑気な声が響く。

「……ハア……」

「あはは……」

「……ん？二人とも難しい顔してどうしたの？」

「あんたねえ……」

どうやらネプテューヌは二人の会話をまるで聞いていなかったようだ。

「まあまあ、あいちゃん。変身すると凄く疲れるみたいですから、大目に見てあげて欲しいです」

「あとアツシユ、いつまで死んでるつもりよ」

アシユレイは男に戻れたのも束の間、再び女に戻ってしまったショックをまだ引きずっていた。

現在はソファにうつ伏せになったままぶつぶつと独り言を呟いていた。

「なんでこうなるかなあ……」

「諦めなさい。一瞬でも元に戻れたんだから、進展なしよりよっぽどマシでしょ?」

「ハア……」

「アツシユさん、元氣出してください。いつかきつと元に戻れるですよ……多分……」

さて、とアイエフが仕切り直す。

「エネミーディスクより、アツシユが倒したあのおばさんの方が気になるわ。いったい何者なのかしら……」

「鍵の欠片を知ってたです。そして集めていたみたいです」

「なら、先を越されなかったためにも、早く出発した方がいいかもしれないね」

おかわりのプリンを食べ終わったネプテューヌが話に混ざる。

「そうですね。今日はもう遅いですから、明日の朝すぐに出発するです」

「ところであいちゃん、わたしとこんぼとアツシユは鍵の欠片集めの旅に出るんだけど、あいちゃんも一緒に来てくれないかな?」

「わたしが?」

「わたしとこんぼは始めての旅だからさ、あいちゃんがついてきてくれると心強いんだ」

「別にいいわよ」

「わーい! やたー!」

洞窟の時と同じ様に二つ返事でアイエフはネプテューヌ達について行くことに決めた。

「あいちゃん、本当に良いんですか？」

「特にプラネテューヌに留まる理由もないしね。それに、ここまで巻き込まれて今更抜けるのもなんだし」

こうして、アイエフが正式にネプテューヌ達の仲間入りを果たした。

.....

次の日、午前9時過ぎ。

「ねぶねぶ、こつちです！」

「ごめーん！道に迷っちゃった！」

「あなたはまだ良いわよ。アツシユはいったいどこにいったのかしら？」

ネプテューヌ達はそれぞれが必要なものを買うために、一旦別れてプラネテューヌの象徴でもあるプラネタワーで待ち合わせをしていた。

「あれ、アツシユ、まだ来てないの？」

「試したいことがあるって言って、どこかに行っちゃったです」

「試したいことって?」

「さあ……?」

そんなことを話していると、人混みの中からアシュレイが姿を現した。

「悪い、遅くなった」

「あんた今までどこほつつき歩いてたのよ」

「モンスター討伐だ」

「モンスター討伐?なんでまた?」

「これを試したかったんだよ」

アシュレイがそう言うのと、突如アシュレイの足元から、ごく少量だがあの時と同じ黒い炎が吹き出す。

「ちゃんともう一回出来るか確認したかったんだよ」

「まったく……そういうことなら事前にそう言いなさいよ」

「……で、パスは取ったのか?」

「……あ」

アシュレイの言葉にアイエフが素っ頓狂な声を上げた。

ネプテユーンとコンパの頭には?マークが浮かんでいる。

「アッシュ、パスってなに?」

「お前、まさかなんの許可書も無しに他国に入れると思ってるのか？」

「入れないんですか？」

二人の言葉にアシユレイがため息を吐いた。

「アイエフ……」

「しょ、しょうがないじゃない！ずっと一人旅だったから他人のパスのことまで頭が回らなかったのよ！」

「分かったから、教会に行くぞ」

「教会……ですか？」

「他国に入る時には、入国許可書になるパスが必要なんだよ。そのパスは教会で発行されてるから、今からそれを取りに行こうっつー話だ」

「よくわかんないけど分かった！そうと決まれば早速行こー！」

幸い国の象徴であるプラネタワーから教会までは歩いて数分の位置にあるため、移動に時間はかからなかった。

「こんにちはー！」

「ようこそ、プラネテューヌ教会へ！今日は当協会になんの用だい？」

教会に入ると、教会の職員がすぐに対応してくれた。

「ラストイションへの入国パスを取りに来た。二人分だ」

「なら、この書類の必要事項を記載した後、ここにサインをお願いします」

二人が書類を書き終え、職員に手渡す。

「コンパさんとネプチューヌさんだね」

「お兄さん、わたしの名前間違ってるよ。ネプチューヌじゃなくてネプテューヌだよ！」

「ああ、すまない。僕としたことが君の様な可愛らしいロリっ子の名前を間違えるなんて……」

「うう……やっぱりわたしの名前って言いづらいのかなあ……」

「やっぱりも何も間違いないと言いつらい」

そしてツツコむところはそこじゃないだろとアシユレイは思った。

「ともあれ、これで二人の手続きは終わり。これでラストイションとプラネテューヌが自由に行き来できるよ」

二人が発行されたばかりのパスを受け取った。

「ねえお兄さん、女神様って今いるの？」

「すまない。パープルハート様は天界にいるみたいで、まだプラネテューヌには降りてきていないんだ」

「そっかあ……もしかしたらいると思っただけだなあ」

「風の噂では、他の国の女神様たちはそれぞれが守護する大陸に降りてきているらしい」

職員の人がつくりとうなだれる。

「パープルハート様の身に何もなければいいんだけど……」

「守護女神（ハード）戦争で何かあったのかしら？」

「まさか、パープルハート様が他の女神様に敗れるなんてそんなことありえないよ」

ネプテューヌがアシュレイの肩を叩く。

「ねえねえ、守護女神戦争ってなに？」

「……守護女神戦争つつーのは、遠い昔から行われているこの世界の覇権をかけた戦いのことだ」

「その戦いに勝ったらどうなるの？」

「ゲームギョウ界を統べる神サマになれるんだとさ」

「へえ……よくわかんないけど、みんなで仲良くすればいいのに」

「誰が勝とうがどうだっていい。興味ない。パス貰ったんだろ？行くぞ」

「あ、待つてよアツシュ……それじゃお兄さん、バイバーイ！」

「ああ、気を付けて」

職員の人に見送られながら、ネプテューヌ達は教会を後にした。

「……あのネプテューヌって子、どこかで見たことがある気がするんだよなあ……うーん……」

彼が言ったその眩きを聞く人は誰一人としていなかった。

.....

「ついに来ました！ラスティション！」

プラネテューヌからバスに乗り、長いトンネルを抜けてついにラスティションへとたどり着いた。

「なんだか鋼鉄島ーって感じ！あいちゃんあいちゃん！ここってどんなんところなの!？」

「守護女神ブラックハート様が治める国よ。重工業が盛んで、工場なんかが多いの」

「ねえねえ、アツシユってラスティションの出身なんでしょ？」

「それがどうかしたか？」

「こういうさ……ディティールっていうの？大陸ごとに建物が違ったり雰囲気が違うのってさ、やっぱり女神様の趣味なのかな？」

「んなわけないだろ、女神サマはただ国を治めてるだけ。そこに文明を築くのは俺たち人間のやることだ」

だがその国の特色を気に入って移住する人もいて、中々固定された特色から抜け出せ

ないのも事実ではある。

「むうー……アツシユは夢がないね。こんぱはこの国のことどう思う？」

「工場とか煙突とかが目立っていて、産業革命って感じがするです。でも、わたしにはちよつとマニアックな感じかもですう……」

「まあ女の子が食いつきそうな感じではないかもね。わたしは割と好きだけど……つて、それよりも一度教会にいきましょう」

「なんで？」

「鍵の欠片を集めるんだろ？女神サマなら何か知ってるかももしれないしな」

そう言つて工場の間隙を縫いながらラストレイションの街を進む。

「……ねえあいちちゃん、教会にはまだ着かないの？」

「おかしいわね……こつちの方向だと思つただけど……」

……が、途中で思いつきり道に迷つてしまった。

「とうかアツシユ、あんた教会の場所とか知らないの？」

「教会なんかほとんで行つたこと無いし、新しい工場が立ちまくつててまるで検討がつかん」

「行つたこと無いって……あんたもしかして他国の女神を信仰してるの？」

アイエフの言葉をアシュレイが鼻で笑う。

「女神サマなんかそもそも信仰してねーよ」

「嘘でしょ!？」

「今嘘言ってなんの得があんだよ」

「なんで女神さんを誰も信仰して無いのですか？」

「……女神に祈ったって腹は膨れない……そんだけだ」

「……ねえあいちちゃん」

唐突にネプテューヌが話に入ってきた。

「女神様を信仰してないって、悪いことなの？」

「いや、悪いとは言わないけど……非常識でしょ」

「非常識ねえ……『集は個ではない』ってな」

「それもアツシユのお父さんの言葉?どんな意味？」

「集団の常識が必ずしも個人の常識になるわけじゃない。俺にとっては女神を信仰してないのが常識ってことだ」

勿論女神を信仰してるやつのおかしいなんて思ったことはないがな、とアツシユレイは付け足した。

「んなことはいいいから、さっさと誰かに道でも聞くぞ」

「じゃあ、あのいかにも冒険者って人はどうかかな？」

そう言つてネプテューヌが赤い髪 of 少女に近付いていく。

「ん？あたしに何か用かな？」

「ブラックハート様つて女神様に会いたいんだけど、どこに行けばいいか教えて欲しいんだ」

「それなら、この道を真つ直ぐ行つて、突き当たりを右に曲がつたところに教会があるよ」

「どうやら方向は合つてたみたいね。助かつたわ」

「困つたときはお互い様だからね」

赤髪の少女がにっこりと笑う。

「ここで会つたのも何かの縁だし、名前教えてよ。わたしはネプテューヌ！で、こつちがこんぱとあいちゃんとアツシユ」

「あたしはファルコム。駆け出しの冒険家なんだ。こつちで会つたのも何かの縁だし、もし困つたことがあつたら力になるよ」

「ほんと!?!」

「うん!」

ネプテューヌとファルコムはすっかり仲良くなつてしまつていた。

「……で、冒険家なんだろ？ラストイシヨンの次はどこに行く予定なんだ？」

「うーん、北上してルウイーに行くのもいいけど、まずはリンボックスかな」

「つーことは海を越えることになるから……船旅か」

「そう、だね……」

「なんだかファルコムという言葉の歯切れが悪い。」

「それじゃ、わたしたちは急いでいるから、これで失礼するわ。また会いましょ」

「うん、またね」

「船が難破しないように気をつけろよ？」

「そう言つてネプテューヌたちは教会へと急いだ。」

「すみませーん！ブラックハート様に会いに来たんですけど、ブラックハート様いますかー？」

「ネプテューヌが教会に入つて早々にそう叫んだ。」

「なんだ貴様らは。ここは子供が遊びに来るような場所ではない。帰れ帰れ」

「えー。せつかくブラックハート様に会いにわざわざ来たのに。ケチー！」

「ラストイション教会の職員と思われる人物の粗暴な態度にネプテューヌが怒る。」

「ねぶねぶの記憶を取り戻すのに、どうしても女神さんに聞きたいことがあるです。お願いしますです」

「……あ！もしかして『誰だ貴様らは』つて聞かれたつてことは、名前さえ言えば会わ

せてくれたりするのかな？だったら、わたしネプテューヌ！で、こっちはこんぼと、アツシユと、あいちゃん！」

「例え名乗ろうが、どんな事情があろうが関係ない。仕事の邪魔だ、さっさと出て行け」
「……教会つて、ずいぶん不親切なのね」

後ろの方で黙っていたアイエフが痺れを切らしてネプテューヌ達の前に歩み出る。

「女神様に仕えるアナタたちがそんなんじゃ、ブラックハート様も大したコトないんじゃない？」

「なんとも言え。たかが女神をどう言われようが痛くも痒くもないわ」

「……………」

「……おい、テメエ」

アシュレイが腿からナイフを抜き取り、素早く職員の喉に突きつける。

「ぐ……貴様……なにを……」

「黙って聞いてりや仕事の邪魔だの、たかが女神だの……とても教会職員のセリフとは思えないな」

「ちよつとアツシユ！なにしてるの!？」

「……本当に職員かどうか……ここで『確かめて』やろうか？」

「アツシユ!!」

「……………」

アイエフの怒声にアシユレイがナイフをゆつくりとホルダーに戻した。

「これ以上は時間の無駄よ。一旦戻りましょ」

「でも……………」

「いいから、さっさと帰るわよ」

アイエフに引きずられるようにネプテューヌ達は教会を後にした。

「あーもーあつたまくるなー！あの教会の人もそうだけど、あいちゃんもあいちゃんだよ！アツシユのはやりすぎだと思っけど、どうして引き下がっちゃうわけ!？」

不満を募らせたネプテューヌが歩く道すがら喚く。

「気づかなかったの？あの人、女神様に仕える身でありながら女神様を呼び捨てにしていたわ」

「確かに、言われてみればあの人、女神さんと呼ば捨てにしてたです。そんなの絶対おかしいです」

「どうして？実は超仲良くてお互いに呼び捨てする超フレンドリーな関係って可能性はないの?」

アシユレイがため息を吐いた。

「そのポジティブさ、なんかに活かせないもんかね」

「ネプ子は知らないと思うけど、普通なら自国の女神様を呼び捨てにするなんてありえないわ」

「女神の下で働く教会職員ならなおさら……な」

「なのにこの国には『たかが女神』扱い……絶対おかしいわ」

「アッシュさんは何か心当たりはないですか？」

アシュレイが腕を組んで考え込む。

「……アヴニール……」

「アヴニール？ 何よそれ」

「ラストイションでは最近、アヴニールっていう企業が急成長してるんだよ。それこそ、女神なんてもう必要ないなんて言うやつが出てくるほどな」

「女神様が……必要ない……」

「アヴニールが急成長を始めて少したった後、教会でお祈りが出来なくなっただなんだと怒ってたやつがいたな」

「……無関係、とは言い難いわね」

「……調べてみるか？」

「……いえ、旅の目的はあくまで鍵の欠片だし、せめて調査はこの鍵の欠片を集めてからにしましょ。というわけで、これからクエストに行こうと思うんだけど」

「えーなんでクエスト? 鍵の欠片を集めるんじゃないの?」

アイエフの提案にネプテューヌが文句を言う。

「思い出してみて。プラネテューヌではエネミーディスクがあった場所に鍵の欠片もあつたのよ」

「なら、ラストイションもその可能性がある……そういうことか?」

「おおっ!? さすがあいちゃん! じゃあ早速クエストを受けにギルドに行こう!」

……

「あ、きつとあの人です! モンスターさんを倒してほしいっていう社長さんは!」

あの後、ネプテューヌ達はギルドに行き、なるべく強めのモンスターを討伐するクエストを受けた。

依頼主との待ち合わせ場所に行くと、すぐにコンパが依頼主と思われる人物を発見した。

「えー? なんか一回り小さいよ? 社長さんなんて言うくらいだから、もつとがちりした人じゃないの?」

「でも……あ、気がついたです……顔をしかめたです……手を振ってくれました! やつ

ぱり間違いないですう！」

「向こうの人も、もしかしたらこつちと同じ気分かもね……どしたの、アツシユ？」

「……見間違い……じゃ、なさそうだな」

依頼主と思われる人物がこちらに近付いてくる。

「もしかして、仕事を受けてくれた女の子四人組っていうのはお前らなのか？……本当に大丈夫なのかよ……」

「見かけによらないのはお互い様よ。わたしはアイエフ。で、後ろのがコンパとネプテューヌとアツシユ……じゃなくてアシュレイよ」

「アシュレイ……アツシユ？」

アイエフの言葉に依頼主が首を傾げる。

「あら、何かおかしなことでも言ったかしら？」

「ああ、いや。知り合いと同じ名前だったから、つい」

「知り合い……ですか？」

「ああ、半年前に飛び出して行つたつきり連絡もよこさないようなやつでな。どこで何やってんだか」

依頼主がアシュレイをまじまじと見つめる。

その目が一点で止まった。

「……その剣……あいつの……え、ちよつと待て、お前一体……？」

「……あれから、もう半年か。久しぶりだな、シアン」

アシユレイがニヤリと笑った。

……

「ここは依頼主であるシアンの工場。

……の隣にあるシアンの実家の食堂。

立ち話もなんだしとシアンがネプテューヌ達を連れてきたのだ。

「やれやれ、知らないやつが世界に一本しかない剣を持つてると思ったら……まさか女になつてるなんてな」

「笑うな。こつちはこんな体になつていろいろ大変なんだよ」

依頼の話も忘れ、世間話に花を咲かせていた。

「それにしても実家が食堂なんていいよね。パフェでもプリンでもなんでも頼み放題なんだよね！」

「いや、自分の家で頼み放題しても仕方ないだろ」

シアンとアシユレイの声が重なった。

「すごいです。息ぴったりです」

「……それに、工場の稼働だけじゃ苦しいから母さんがここを片手間でやってくれてるんだ。ただで贅沢はできないよ」

「……そんなにヤバイのか？」

「正直、かなりヤバイ」

「じゃあ、そろそろ仕事の詳しい話を聞かせてくれないかしら？」

「ああ、そうだな」

ようやくシアンが仕事の話をし始める。

「単刀直入に言うと、あんたたちには交易路のモンスターをどうにかしてほしいんだ」

「交易路？」

「ああ。少し前までは安全な交易路だったんだが、最近モンスターが出るようになったらまってさ。そのせいで、せっかく作った商品の流通が滞っているんだ」

「ビンゴね。いいわ、その依頼、確かに受けたわ」

「助かる。ただでさえアヴニールのせいでこっちは景気が悪いっていうのに、それにモンスターまで加わってたまったもんじゃなかったんだ」

「アヴニール……」

その言葉にアシュレイとアイエフが反応する。

「アツシユたちは知ってるか？」

「……一応教えたが間違ってるかもしれない。念の為説明してくれ」

「わかった。アヴニールは家電から兵器に至るまでなんでも作って、そのラインナップの多さと低価格で、ほぼ市場を独占していると言っても過言じゃないんだ」

「家電から兵器まで……いくらなんでも手が広すぎでしょ……」

「おかげでこつちの商品は種類も価格もアヴニールに負けて物は売れないし、下請けをさせてくれるわけでもないしで、今月に入ってから知り合いの工場も何件潰れたことか……」

「女神様に相談はしたの？こんな状況、余程のことが無い限り女神様が放っておくなんて考えられないわ」

「……まあ、この様子だと結果はお察しみただがな」

「……教会は表向きはブラックハート様を信仰しているようにみえるが、中身はアヴニールに乗っ取られていると言っても過言じゃないね。アヴニールはわたしたちにはブラックハート様に会わせてくれないどころか、顔すら見せてくれないんだ！」

「アヴニールは悪い会社なんだね。シアンも街の人も、それで困っているんでしょ？」

「悪いなんてもんじゃない！バケモノみたいな会社さ！」

「どうどう、落ち着けシアン。叫んだってどうにもならん」

「……なるほど。それならさっきの教会でのことも領けるわ」

「教会がそんな状況じゃ、女神さんに会うことなんてできそうにないですね……」

「まあ兎にも角にもまずはモンスター退治だ。交易路がどうにかならないと真っ先に工場が潰れちまうしな」

「それもそうね。それじゃ、早速その交易路に言ってみましょ」

アシユレイ達は一旦シアンと別れ、問題の交易路へと向かった。

その後を黒い光がはるか上空から着いてきていることも知らずに。

………

「とうちやーつくー！ここが噂の交易路だね！どんなモンスターが出てくるのかな！」

ただっ広い渓谷を走り回りながらネプテューヌがはしゃぐ。

アシユレイ達はネプテューヌのだいぶ後ろの方を歩いていた。

「おーい！あいちやーん！こんぱー！アッシュー！早く早くー！」

「はあ……はあ……ねぶねぶ、少し待って欲しいですう……わたし、もうヘトヘトですう

……」

「まったく、元気なのはいいけど、後でバテても知らないわよ」

「まあ、間違はなくバテるだろうな」

「大丈夫大丈夫！悪いモンスターなんてさっさと倒して、シアンに報告してあげようよ！」

「やれやれ……」

アシユレイ達は足取りの重いコンパに歩調を合わせながらネプテューヌの後を追った。

道中のモンスターを退治しながら先にすすむ。

「アイエフ！そっちの頼んだ！」

「了解！」

シアンの言う通り、交易路には大量のモンスターが我が物顔で歩いていた。

「ソウルズコンピネーション！」

アイエフが蹴り上げたモンスターにカタールで追撃。

トドメに蹴り落としを浴びせる。

「おら……つよー！」

アシユレイはモンスターに足払いを仕掛け、浮いた敵を踵落としの要領でブーツから飛び出した刃で切り裂いた。

「さて、今のが最後か」

「あんた、ブーツにまで武器を仕込んでんの？」

「この剣じや小回りが効かないしな」

アシユレイが戦闘中に投げたナイフを回収し、ホルダーにしまう。

先に進もうとしたところで不意に立ち止まる。

「アイエフ、あいつらは？」

「ほら、あれ」

アイエフが指差した方向には、とうの昔にスタミナが底をつき、フラフラと後からついてきているネプテューヌとコンパの姿があった。

「はあ……はあ……あいちやあー……ん……待つてえ……疲れたよお……」

「やれやれ、言わんこつちやない」

「だからあれほどバテても知らないって言ったじゃないの」

「だって思ってた以上に坂道が多いんだもん。卑怯だよお」

「あたしも、足の裏が痛くてもう一歩も動けないですう。あいちちゃん、ここでちよつと休憩するです」

「もう、二人共揃ってだらしないわね。いいわ、休憩しましょ」

「やつと休めるですう……」

近くの日陰に入り、腰を降ろす。

「そうだ！せっかくだし、休憩ついでにみんなでおやつ食べようよ！街を出る前にプリンを買っておいたんだよねー」

そう言つてネプテューヌが手荷物の中から四人分のプリンを取り出した。

「大自然の中で食べるプリンは格別だよ、きつと！」

「お前、どこでもそれだな……」

だが直後、休憩していた日陰が突然大きくなった。

頭上から鳥の鳴き声の様な声が聞こえる。

「……と、行きたいけど、実は例のモンスターが出没するのつてこの辺りなのよね」

「……え」

羽ばたきの音がだんだん大きくなっていく。

「……あ、あのおー……あいちちゃん？この明らかに今まで戦ったことのないようなモンスターつてもしかして……」

「ええ。シアンからの情報通りよ。そいつで間違いないわ」

「うう……せつかく美味しくプリンを食べれると思つたのにー！」

ネプテューヌが光に包まれる。

「私のネプテューヌと言われたこのわたしも、今日ばかりは鬼になるわ！」

変身を終えたネプテューヌがそう言い放つ。

「どうやらご立腹の様子だ。

「相変わらず、ねぶねぶは変身すると見た目だけじゃなく、性格もまるつきし変わるですね」

「ま、疲れてヘタっているよりは、プリンのごとで怒ってくれていた方がまだマシね」
「わたしはねぶねぶと違って、ヘトヘトなままなんですが……」

「ごんぱ、あいちゃん！雑談なんてしてないで、さっさと倒すわよ！」

「お前に言われるまでもねーよ！」

各々が武器を構えた。

.....

「あつぶね！」

突進してきたモンスターをアシユレイが横つ飛びに回避する。

先程から高空から突進、その勢いそのまま再び離脱、と繰り返されまるで攻め込む暇がなかった。

「くっ……ほら、こつちに来なさい！」

アイエフがモンスターを挑発し、標的を自分に向けさせる。

「よし、そのままよ……」

真つ直ぐにアイエフへモンスターが突撃する。

ギリギリまで引きつけたアイエフが回避行動をとった。

本来ならばまた離脱をされていただろうが、今回は違う。

アイエフの背後には巨大な岩の壁があつたからだ。

モンスターが勢いのまま、岩壁に爪を食い込ませる。

「もらったー！」

アイエフが反動で動けないモンスターをカッターで切りつける。

だが厚い皮に防がれ、殆どダメージは与えられていなかった。

モンスターが岩壁を砕きながら爪を引き抜き、再び上空へと飛びたつた。

「くっ……あいつ、思ったより硬いわね……」

「じゃあこいつならどうかなー！」

アシユレイが足下に魔法陣を展開し、左手から炎弾を打ち出す。

だが高速で空を飛ぶモンスターに当てることはできなかつた。

「速いな……だつたらー！」

再びモンスターが突進してくる。

だがアシユレイは避けるどころか剣をしまい、モンスターに向かつて真つ直ぐに走つ

ていく。

「アツシユ!？」

「あんだ、何を!？」

アシュレイはモンスターと接触する直前にスライディングの要領でモンスターの真下に滑り込む。

アシュレイの鼻先をモンスターの鋭い爪が駆け抜けていく。

その直後、アシュレイの姿が消えた。

「……アツシユがない!？」

「ね。ぶ。ね。ぶ。あいちゃん! あそこです!」

コンパが指差した先には先ほどより荒れた飛び方をするモンスター。

そしてそのモンスターの尻尾にしがついているアシュレイの姿があった。

「この距離なら……外れるわけないよな!」

放った炎弾がモンスターの体に吸い込まれていく。

「こいつで……落ちろ!」

モンスターの体内で爆発が発生し、重力に従って落下し始めた。

アシュレイは尻尾から手を離し、無事着地する。

「まったく……無茶するわね」

「でも、これで動きは止まったわ」

「一気に決めるぞ、ネプ公！」

二人がモンスターに向かって駆ける。

「ハアアアアアアア！」

「オラオラオラ！」

ネプテューヌは太太刀で、アシュレイは炎を纏った剣でモンスターを連続攻撃。

「これで終わりよ！」

ネプテューヌがモンスターを打ち上げる。

同時に魔法で脚力を強化したアシュレイが飛び上がる。

「もう一発！」

切り上げながら更に上空へ。

「クロスコンビネーション！」

遅れて飛んだネプテューヌがモンスターを打ち下ろす。

だがまだ倒すには至っていないようだ。

「逃がすかよ！」

落下してきたアシュレイの剣がモンスターに突き立てられる。

「おおおおおおお！」

大量の魔力を剣伝いに送り込まれ、モンスターがうめき声を上げた。

「爆ぜろ！」

アッシュレイが剣を引き抜くと同時にモンスターから離れる。

一瞬の空白の後、モンスターの体から炎が溢れ出し、跡形も無く爆発した。

「……ふう、少し手こずったわね」

「ほんと、アッシュのアレがなかったらかなり厳しかったんじゃない？」

「アッシュさん、お手柄です！」

「成功するかどうかは賭けだったかな」

戦闘が終わり、一息つく。

「……ふと思ったんだけど、変身したネプ子にわたしたちを飛んで運べば早く着くん

じゃないかしら？」

「嫌よ。ただでさえ疲れるのに、三人もなんて運べないわ」

「タクシー代として、片道1プリンでどうですか？1個100円の高くて美味しいプリ

ンを奮発するですよ」

「うっ……とても魅力的な提案だけど、断らせてもらおうわ」

「そうですか……ねぶねぶが飛んでくれたら、とっても楽でしたんですけどねえ」

「つーか三人も運ぶのはタクシー代云々じゃなくて物理的に無理があるだろ……」

「それじゃ、いい加減元の姿に戻るわね」

ネプテューヌが変身を解こうとした時、不穏な気配をアシユレイとアイエフが感じ取った。

「ちよつと待つてネプ子。まだ変身を解いちや駄目よ」

「なにかしらあいちゃん。プリンには釣られないわよ」

「アイエフも気付いたか……」

「ええ。その岩陰に誰か居るわ」

「っ!？」

「……よく気付いたわね。褒めてあげるわ」

岩陰から気配の主が姿を現す。

「久しぶりね……ネプテューヌ」

黒いレオタード風の服装に白く長い髪の女だ。

その女がニヤリと笑う。

「……もつとも、あなたは覚えていないかもしれないけどね!」

「くっ!？」

女がどこからともなく大剣を取り出し、ネプテューヌに切りかかった。

ギリギリで受け止め、つばぜり合いになる。

「ふふ……あはは！」

「つ……ヤア！」

ネプテューヌが女を弾き飛ばし、距離を取った。

第5話 やるべきこと

「フフフ……」

「……………」

現在ネプテューヌ達は謎の白い髪の女と相對している。
お互い武器を構えたまま微動だにしない。

「……ねえあいちゃん、この人……」

「……ええ。なんとなく変身したネプ子に似ているわね」

レオタード風の服装に電源ボタンのマークのような眼。

背中に浮かんだ羽や武器の形状など、変身したネプテューヌとの類似点が多い。

「わたしの勘が外れてなければ、きっとネプ子のことを何か知っているはずよ」

「ええ、ネプテューヌのことなら、よく知っているわよ」

「!?」

アイエフの話を聞いていた女が構えを解き、そう言い放った。

「本当なの!?なら教えて！私は一体何者なの!?」

「あはははっ！ネプテューヌにお願いされるっていうのも悪くないわね！」

「……御託はいい、はつきりしろ。言うか、言わないか」

アシュレイがいつもよりワントーン低い声で女を威嚇する。

「……いいわ、教えてあげる……」

「……本当だな？」

「その代わり、一つ条件があるわ」

「条件？それは一体なに？」

女が再び剣を構えなおす。

「もちろん、私に勝負で勝てたらよ！」

走った。

「くっ!？」

すんでのところで振り下ろされた剣を受け止める。

「甘い！」

腕を蹴り上げられ、胴ががら空きになってしまった。

「もらった！」

「させるかよ！」

女は攻撃をやめ、代わりに突如切りかかったアシュレイに向かって剣を振る。

火花を散らしたのは一瞬。

女が素早く距離を取り、アシュレイを睨み付けた。

「……何の真似かしら？」

「1対1とは聞いていない。卑怯とは……言わないよな？」

「……いいわ。雑魚がいくら集まったところで無意味だつてことを分からせてあげる
！」

その言葉にアシュレイがニヤリと笑う。

アシュレイの足下から黒い炎が一気に噴き上がった。

「じゃあ、遠慮なく行かせてもらう」

炎が止み、中から黒髪の男が現れる。

「……へえ。どんなトリックを使ったか知らないけど、見かけ倒しでやられる私じゃないわよ？」

「言つてろ。行くぞ、ネプ公」

「ええ……！」

女が二人より先に動いた。

掲げた剣を振り下ろす。

二人が左右に分かれるように攻撃を回避する。

追撃の矛先はアシュレイに向いた。

「たあ！」

「フン！」

刃が噛み合う。

「セイ！」

「見え見えよ！」

背後から切りかかったネプテューヌに対し、女は回転切りでアシュレイごとネプテューヌを弾き飛ばす。

「おらよ！」

アシュレイが炎の弾を女に向けて打ち出す。

弾は女に命中し、爆発した。

「フン、こんな炎じゃ私には傷一つ付けられないわよ！」

爆発の煙の中からほぼ無傷の女が姿を現した。

どうやら火には強いようだ。

「それぞれそれぞれ！」

アシュレイと女が高速で剣を打ち合う。

始めはほぼ互角だったが、だんだんとアシュレイが押し負けていく。

「もらった！トリコロルオーダー！」

「ぐ……おおお!？」

防御の隙間を縫って放たれた強烈な攻撃がアシユレイを捉えた。

吹き飛ばされたアシユレイが地面を転がる。

「アツシユ!？」

「他人の心配してる場合?」

突如ネプテューヌの背後に現れた女が剣を横薙ぎに振るう。

ネプテューヌはなんとか防いだが、衝撃に耐え切れず、アシユレイと同じ方向に飛ばされてしまった。

「どうしたの?大口を叩いていた割には呆気ないわね」

「言うだけのことはあるわね……」

「だからって、降参するつもりはないがな!」

アシユレイが立ち上がり、女に向かって走る。

剣を首に巻き付けるように構える。

「何度やっても同じ……」

「……フォーム・ツヴァイ!」

「!？」

SSSが稼働。

瞬時に薙刀へと形を変える。

予想外のリーチから放たれた一撃が油断していた女に命中し、その衝撃で岩壁へと叩きつけられた。

「くっ……やってくれたわね!」

怒りの形相を浮かべた女がアシュレイへと迫る。

「ネプ公!お前も手伝え!」

「分かったわ!」

アシュレイはSSSを剣に戻し、再び女と剣を打ち合う。

だが今回は女の背後にネプテューヌが回り、挟み撃ちの形になっている。

「くっ……鬱陶しい……!」

前後からのラツシュに対応が追いつかなくなっていく。

「フォーム・ドライ!」

「っ!?!」

アシュレイの剣が瞬時に大鎌へと変形し、女はなんとかその不意打ち気味の攻撃をふせいだ。

「ヤア!」

「しまっ……!?!」

だがその一瞬の隙をついてネプテューヌが女の剣を弾き、そのまま切り上げでカチ上げ、抜き打ちの構えをとる。

「クリティカルブレード!」

強烈な斬撃が抜き胴のかたちで女を切り裂く。

「……っ!……まだよ!」

だがまだ倒れない。

「アツシユ!」

「こいつでトドメだ!」

アシユレイが鎌をバットののように構え、フルスイングで振り抜いた。

「ストームザッパ!」

鎌から溢れ出るように大量の風の刃が産まれ、その刃全てが女へと殺到。

防ぎきれず刃の餌食となり、ダメージが限界に達した女が膝を折った。

「……っ!……ハア……ハア……っく!助けがあるとはいえ、この私が負けるなんて……

どういう事なの……!?!」

「さあ、約束よ。わたしのことを話してくれるわね」

「たった一度私に膝をつかせた程度で、勝った気にならないでよね!」

「お前がどう言おうと勝ちも勝ち、だろ?」

女が歯を強く噛み締める。

「こんなの……こんなの認めないわっ!」

女が突然飛び上がり、その場から逃げようとする。

「待って!」

「っ!逃がすか!」

アシユレイの腕が植物に変化し、空中にいる女の左手を蔦で絡め取った。

「っ!?!触らないで!」

だが蔦はいとも容易く女の剣で切られてしまい、そのまま飛び去ってしまう。

「ネプ子!追って!」

アイエフがそう叫ぶと同時にネプテューヌが光に包まれ、変身を解いてしまう。

「あ、あれれ!」

「ちよつとネプ子、何で変身といてるのよ!」

「ごめんあいちゃん。さっきの戦いでエネルギー切れしたみたい。もう疲れてヘトヘト

で無理……」

「まったく肝心な時に……」

「だったら走って追いかけるわよ!」

そう言つてネプテューヌ達は女が飛んでいった方角を指して走り出した。

.....

「……はあ……ネプテューヌには負けるし、女神化も解けるわけで今日は踏んだり蹴ったりだわ……」

誰もいない溪谷を黒髪ツインテールの少女が歩く。

「まさか、私がネプテューヌに負けるなんて……けど、あれは1対2だったし、きつと1対1なら私の方が……」

「捕まえたー!」

「のわあああああああ!」

直後、少女の背後から何者かがしがみついた。

「とつたどー!」

「な、なに!ちよ、ちよつと!いきなりなんなの!」

「洗いざらいぜーんぶ話してくれるまで、ぜーったい離さないよー」

「おい、ネプ公。よく見ろ」

アシユレイにそう言われ、ネプテューヌがツインテールの少女を離す。

「……つて、あれ？違う人だ」

「お前、デパートで迷子になった時に間違えて見知らぬ他人に抱きつくタイプの間人だろ」

「ど、どうしてあなたたちがここにいるの!？」

「えーつと、人を探してるんだけど、こっちの方に飛んで来なかった？」

「……空を飛んでるツヤツヤした黒いやつだ。見なかったか？」

「うう……なんか嫌な例えね……」

「で？見たのか？」

少女はネプテューヌ達が来たのとは反対の方向を指差した。

「凄いスピードであっちの方向に飛んでいったわよ。もう追いつくのは無理なんじゃないかしら」

「そっかあ。せつかくの手がかりだったんだけどなー」

ネプテューヌががっくりと肩を落とす。

「ところで、あなたはこうしてこんな所に一人で……つてよく見たら傷だらけでボロボロだよ!？」

「……へっ?？」

少女が素っ頓狂な声を上げた。

「確かに、ボロボロだな。切り傷が目立つが……モンスターにでも襲われたか？」

「うわあ……ひどい傷……でも安心して！このあたりの悪いモンスターは、わたしたちが退治したから！」

「……あなたたちにやられたんだけどね」

俯いた少女の呟きは二人には聞こえていない。

「まあ、このまま放っておくのもなんだしな。コンパに見てもらおうか」

「うん、その方がいいよね」

「え？ちよ……いや、その……このくらい大したことないから……」

「だいじょーぶ！ホワイトなことに定評のあるパーティーだから、お金なんてとらないよー！」

「いや、そういうことじゃなくて！」

「はあ……ごちやごちや言わずにお前はコンパの治療を受ければ良いんだよ」

そうこう言っているとネプテューヌ達にアイエフとコンパが追いついた。

「あー！こんぱー！ちよつとこつち来てー！」

「わたしに何の用ですか、ねぶねぶ？」

「うん。この子……ええーつと、そうだ。まだ名前聞いてなかったね」

ネプテューヌが自己紹介をしていなかった事を思い出した。

「わたしネプテューヌ。で、こっちがこんぱで、こっちがあいちちゃん。それでこの無愛想なのがアツシユ！」

「やかましい」

「アイエフよ、よろしく」

「で、あなたのお名前は？」

少女が口をモゴモゴと動かす。

「……え？」

「……ノワールよ」

「へえ、ノワールって言うんだ。なんか友達がいなさそうな名前だね」

「ぶっ!？」

無言でアシユレイがネプテューヌにゲンコツを叩き込んだ。

「いたた……冗談だつて冗談」

「初対面の人がネプ子のノリについていけるわけないでしょ。コンパ、この子のこと診てあげて」

「はい、任せるです」

大きな傷は少なかったため、治療はものの数分で終わった。

「ありがとう……えーと……コンパ、だったかしら？あなたは……ネプテューヌのお友

「達なの?」

「はいです。倒れていたねぶねぶを介抱して以来、ねぶねぶとはふかい仲ですう!」

「……で、話は変わるが、なんであんたはこんなところに一人でいたんだ?」

「それに傷だらけだったわね」

「えっと……その……それは私もよく分からないというか……」

「そ、ソレって……もしかして記憶喪失仲間!?!」

分からないという単語にネプテューヌが食いつく。

「え?あ、そ、そうそう!記憶喪失!」

ノワールが急に頭を抱え、あちこちをウロウロと歩き始めた。

「あー、思い出せない!きつとモンスターに襲われたせいだわ、どうしよう!?!」

「なあ、アイエフ、どう思う?」

「どうもこうも……」

アシユレイとアイエフの二人の顔にはすっかり呆れが浮かんでいる。

「記憶喪失じゃ、お家の場所が分からないです。それだと帰れないですね……困ったです」

「うんうん、わかるよ。記憶喪失って本人はなんともないのに、やたらと周りが気を使ったり、同情されたりしているいろいろ大変だよね」

それに対してネプテューヌとコンパはノワールの記憶喪失を信じているようだ。

「ところで、これからノワールさんはどうするんです？ お家がわからないと、どこに送り届けていいかわからないです」

「……そうだな」

「……試しに教会にでも届けてみる？」

「ええ!？」

ノワールが驚いたポーズのまま固まる。

「あんなろくでなしの集まりの中に放り込むのか？ 逆に危険な気がするぞ」

「そうだ！ 記憶に戻るまで、わたしたちと一緒にいようよ！」

「……ええっ!?! 一緒お!？」

「もしかして嫌だった？ けど、せつかくの記憶喪失仲間同士なんだし、仲良くしようよ！」

「そうです。その方が教会に任せるより、ずっとと安心です。それに、人数が増えたほうが楽しそうです」

「えーつと……嫌とかそんなじゃないなくて……その……」

「じゃあ決まりー！ 改めてよろしくね。ノワール！」

「じゃあ、お近付きの印に……」

そう言つてアシユレイがノワールの左手を取り……
チュ……

「……………へ？」

手の甲にキスをした。

ちなみにまだアシユレイは男のままである。

「……………アツシユ？……………なに今の……………？」

「なにつて……………」

アシユレイがあつさりと言い放つた。

「ただの挨拶だ」

「……………きゆう……………」

突然の出来事にノワールが顔から火を吹いて倒れてしまった。

「ラストイションよ、わたしは帰ってきたどー！」

「恥ずかしいから突然街中で叫ばないでくれる？」

あの後も一悶着あつたが、ひとまずネプテューヌたちはラストイションへと戻つてきていた。

「……………」

「おい、ノワール」

「ひゃい!？」

「あのなあ……」

すでにアシュレイは女になっているが、さつきからノワールはアシュレイが呼ぶところな感じになる。

「なんか勘違いしてるみたいだが、挨拶の一環だ。変に意識するな、こつちが迷惑だ」

「う……わかったわよ」

「それでいい、ところでノワール」

「……なによ」

「お前、腹減ってないか？」

「はい?..」

時刻は7時。

夕飯には良い時間だ。

「……まあ、空いてないこともないわ」

「じゃあ、せっかくだしあそこで飯にするか……」

「?..」

ラステイションを数十分ほど歩き、目的地にたどり着く。

「たっだいまー! しっかりモンスターを退治してきたよー!..」

「ほんとか!? 助かるよ、これで部品不足に悩まされる心配がなくなるってもんだ」

「報告ついでに飯も食っていくが、構わないよな?」

「ああ! もちろんだ!」

ネプテューヌたちはシアンの母親が切り盛りしている食堂に、クエストの報告ついでに食事を取りに来ていた。

「……そういえば、一人増えてる気がするんだが、その子は誰なんだ?」

「交易路で拾ったノワールだ。どうも記憶喪失らしい」

「そうなのか……って、あれ?」

シアンが首を傾げる。

「……その子、どこかで見たことあるような……あ、ああ、も、もしかして……ブラックハート様!?!」

「ギクツ!?!」

「ノワールさんが、ブラックハート様です!?!」

「な、なんだってー(棒)」

シアンの言葉にコンパが驚く。

ネプテューヌは驚いたフリをしている。

「……ネプ公、信じてないなら最初からリアクションするな」

「わ、私がブラックハート……様だなんて、そんなわけないでしょ！私のこれは……
こ、コスプレが好きで……ブラックハート様のコスプレを……」

ノワールが慌てて言い訳を並べたてる。

と言つてもかなり苦しい言い訳だが。

「ああ、なんだ。それでブラックハート様そつくりの格好をしてたんだな。あまりにも
そつくりだから、てつきり本人かと思つたよ」

「残念ですう……ノワールさんが女神さんなら、シアンさんのお願いを聞いてもらえた
かもしれないのに……」

「まったく、ノワールったら人騒がせなんだからあ。けど、普段から女神様のコスプレを
しているなんて、ノワールって意外と痛い趣味なんだね！」

「ぶーっ!!」

アシユレイがネプテユーンの頭にゲンコツを叩き込んだ。

「ねぷっ!!」

「まったく、思つたことをそのまま言うんじゃねーよ」

「それじゃ、シアン。さつきアツシユが言つてたけど、夕飯はここで食べていくわね」

「ああ、お礼にご馳走してやるよ」

.....

「はむはむはむ……おいしー！シアン、このハンバーグ、すっごく美味しいよ」

「スープも体の芯から暖まって美味しいです」

「うちの母親の自信作なんだ。気に入ってくれて嬉しいよ」

「ほれ、オムライス」

「あれ？」

アイエフの目の前に置かれたオムライスを運んできたのはアシュレイだ。

「いないと思ったら、あんたなにしてんのよ」

「手伝いだ。味わって食えよ」

「なによ、まるで自分が作ったみたいなの言い方ね」

「まるでもなにも、俺が作ったからな」

「え!？」

アシュレイの言葉にアイエフが驚く。

「……あんた、料理できたの？」

「野宿も多かったからな。これぐらいは出来る」

「これぐらい……ねえ」

アイエフの眩きを聞きながらアシユレイが新しい料理をカウンターに出す。

「うげええー……誰!?この料理にナス入れたの!絶対アツシユでしょ!」

「ねぶねぶ、もしかしてナスが嫌いなんですか?」

「嫌いつてレベルじゃないよー!こんぱこそよくこんなグニヨグニヨしたのたべれるね」

「ナスぐらい文句言わずに食えよ……」

そう言いながらアシユレイがキツチンから戻ってくる。

ネプテューヌがそこで何かを思いついた。

「何か思い出すかもしれないし、このナス、ノワールにあげるー!先輩から後輩へのプレゼントだよー!」

「……えっ」

「ネプ子、子供じゃないんだし、好き嫌い言わず全部食べなさい」

そう言つてアイエフが箸でナスを掴み、ネプテューヌの口に押し込もうとする。

「むぐつ!あ、あいちちゃん……や、やめ……」

「もしかしたら、ナスがきつかけで何か思い出すかもしれないわよ?」

「むぐむぐ……お願……やめっ……」

「楽しそうなこつて……」

アシユレイがやれやれと肩を竦めながらノワールの隣に座った。

「……………」

「ノワール？」

「……………もしかして、騒がしいのは苦手ですか？」

「いえ、そんなことはないわ……………なんかこういう賑やかな食事って初めてだから、つい」

「そうだったんですか。けど、これからはノワールさんもずーっと一緒ですよー」

「……………その件んですけど、私にあなたたちを手伝わせてくれないかしら？」

「手伝い？」

「おおー！なになに、ノワールも一緒に戦ってくれんの!？」

アイエフからなんとか逃げだしたネプテューヌが話に割って入る。

「ええ。ただであなたたちと一緒にいるのも気が引けるし。それに意外と強いのも、私」

「確かに、あなたが仲間になってくれると頼もしいわ」

「……………え？」

「あの二人のボケにアツシュが乗ったらわたし一人じゃツツコミきれないしね」

「ああ……………なんとなくわかるわ、それ」

「こうして、ノワールがパーティに加入することが決定した。」

「いやあ、まさかこんな序盤で5人目の仲間とは、幸先調子がいいね！」

「なら、幸先ついでにまた仕事を受けてくれないか?」

シアンがカウンターから身を乗り出して話を持ち出す。

「今年開催される総合技術博覧会に出展する武器のモニターを頼みたいんだ」

「……ああ、もうそんな時期か」

「それってなんですか? お祭りでもあるんですか?」

「ラストイシオンでは四年に一度、総合技術博覧会つてのがあって、いろんな会社が決められたジャンルで展示を行う催しがあるんだよ」

「目的は技術交流らしいが、それだけじゃない。出展したモノの中でもっとも優れた展示品には、女神様から直々にトロフィーが贈られるんだ」

「トロフィーが贈られるですか!?! スゴイですう!」

「でも、目的はそつちじゃないんだろ?」

アシユレイの言葉にシアンが力強く頷く。

「博覧会で女神様に会って、直談判するつもりだ!」

「なるほどです! それで、シアンさんが博覧会に出展するわけですね」

「ああ。その為の武器のモニターをお前たちに頼みたいんだ」

「そんなのお安い御用だよ! それで、武器のモニターって何をすればいいの?」

「とにかくこの武器を使って、その感想をフィードバックしてくれればいい」

「なーんだ、今度は意外と簡単そうだね」

「これなら、他のお仕事と一緒にできそうです」

「……なら、アヴニールの仕事を受けてみるのはどうかしら？」

不意にノワールが口を開いた。

「何言ってるのさ、ノワール！アヴニールは悪いやつなんだよ！そんなのに協力するなんてぜーったい嫌！」

ノワールの提案にネプテューヌが激しく反対する。

「……いえ、案外いい提案かもしれないわ」

「どういうことですか？あいちちゃん」

「中小企業がモンスターのせいで部品や原材料の流通に困っているのなら、きっとそれはアヴニールも一緒のはず」

「もしかしたら受ける仕事の内容によっては、アヴニールが博覧会に何を出展しようとしているかもわかるかもしれないわ」

「……と、いうわけだ。分かったかねプ公」

「うー……ん。でも、なんか釈然としないんだよね……」

「贅沢言ってるの。わたしだって、アヴニールの為に何かしてあげるの嫌よ。けど、時には相手を知ることだって大切なのよ」

「ねぶねぶ、今は我慢するです」

「うー……ん、こんぱがそう言うなら仕方ないかあ……」

コンパの言葉にネプテューヌが折れた。

「おい、わたしは無視かよ」

「……あなたも苦労してるのね」

端で一人愚痴るアイエフだった。

……

「じゃじゃーん、メガネ買ったー。これで私の正体を怪しまれる心配はなくなるわね」

ここはシアンの工場の一角にある部屋。

ネプテューヌ達は工場の空き部屋を宿として利用させてもらうことになったのだ。

現在ノワールは買ってきた赤縁のメガネをかけて鏡を覗きこんでいた。

「……うん。我ながら良く似合ってるじゃない。これなら完璧に正体を隠せそうね」

鏡の前でノワールが様々な角度から自分を見る。

「今までメガネってかけたことなかったけど、意外と似合うのね……なんかいかにも出

来る女って感じでかつこいいかも。目にも良いつて聞くし、デスクワークの時はかけてみようかしら」

そこでノワールがふと思いついた。

「そうだ。ネプテューヌにも見せてあげ……って、何普通に馴染みはじめてるのよ私は！」

ベッドに座り込み、溜め息を吐く。

「今のままじゃダメね。敵であるネプテューヌと馴染合うなんて……」

「ノワール！一緒にプリン食べよー！」

「ひゃう!？」

扉が勢いよく開き、ネプテューヌが顔を出す。

「あれ？もしかして驚かせちゃった？ごめんごめん」

「……もしかして、今の聞いてない？」

「今の？今のって何？」

「それなら、気にしないで。ちよつと恥ずかしい独り言だから」

「きーにーなーるー！」

そう言いながらネプテューヌがノワールに近付いていく。

「うわー！なんだろう、ノワールのちよつと恥ずかしい独り言って！もしかして、作詞作

曲自分のオリジナルソングを歌ってたりしてたとか!」

「馬鹿なこと言わないで!誰がそんな痛いことするもんですか!……それよりも、私に用があつたんじゃないの?」

「あ、そうだった。はい、これ」

ネプテューヌがノワールにビニール袋を手渡した。

中にはプリンが入っている。

「……何よ、これ」

「プリンだよ。とっても美味しいんだよ!」

「いや、それは見ればわかるわ」

「えっとね、シアンからプリンもらったから一緒に食べよ!」

「いやよ。あなた一人で食べればいいじゃない?」

「わたしはノワールと一緒に食・べ・た・い・な?なんちやってー!」

ノワールが思わず溜め息を吐いた。

「あのね、私はこんな時間まであなたに付き合っただけあげるほどお人好しじゃないの」

そう言っただけでノワールがネプテューヌの脇を通り抜ける。

「……あれ、ノワールどっかいくの?」

「散歩よ。一人になりたいの」

ノワールが工場の外へと出て行く。

足音は二人分。

「……で、どうしてあなたがついてきて

るのよ。言ったでしょ、一人になりたいって」

ノワールの横には平然とネプテューヌが付いて来ていた。

「いやあ、記憶喪失のノワールが一人夜道を歩くとなるといろいろ心配でさー。親心つてやつ？」

「誰が私の親よ！」

「何やってんだお前ら……」

「アツシユ！シアン！」

二人が振り返ると、そこにはしかめっ面のアシユレイと苦笑いを浮かべたシアンが立っていた。

「相変わらず仲がいいな。けど、夜はあんまり騒ぎすぎるなよ？」

「ちよつとネプテューヌ！あなたのせいで怒られたじゃないの！」

「あははは、ごめんね、シアン。うちのノワールが迷惑かけちゃって」

「誰がうちのノワールよ、誰が！」

「迷惑かけてんのはどう見てもネプ公だろうが。後ノワールうつせえ」

「ところで、二人はこんな時間にどうしたの？」

ネプテューヌがアシュレイとシアンが一緒にいることに疑問を持ったようだ。

「知り合いの町工場連中との会合だよ。博覧会に向けて技術交換をしてきたんだ。小さな町工場でもアヴニールより優れた技術を持っている奴らはたくさんいるからな」

「みんなで協力して良い物作って女神サマに会おう、って作戦だそうさ」

「しかも、潰れてしまった工場の奴らも力を貸してくれるだよ」

「まさに総力戦ってやつだね！」

「今回の博覧会にラステイションの未来がかかっているといっても過言じゃないからな。だから、お前らにも期待しているんだ。しっかり頼むぜ」

「大船に乗ったつもりで任せてよ！ねえ、ノワール！」

「その船がドロ細工じゃないことを祈るばかりだな」

.....

「はあ……疲れた」

あの後、ノワールはプリンを食べようとしつこく誘ってくるネプテューヌをなんとか振り切り、自室に戻ってきていた。

不意にノックの音が響く。

「お客さん？空いてるわよ？」

ノックの音がしつかり三回鳴ったことから訪問者がネプテューヌではないことを悟ったノワールは客人を招き入れた。

「よう、ノワール」

「アツシユ、どうしたの？」

「世間話でも思ってたな」

部屋に入ったアシュレイが近くの壁にもたれかかる。

「どうだ？怪我の具合は？」

「そうね、かなり良くなったわ」

「戦闘をするのはいいが、あんまり暴れるなよ。傷が開いて困るのは俺たちだ」

「言われなくてもそれくらいわかってるわよ」

「ならいい。記憶の方はどうだ？」

「そっちは全然ね」

「そうか……」

一瞬の空白の後、アシュレイが切り出した。

「ところで『ブラックハート』サマ？」

「なにかし……あ……」

ノワールがしまったと呟き、それに対してアシュレイはしてやったりといった顔だ。

「……いつから気付いていたの？」

「最初からだ。凶暴なモンスターが出る渓谷に一般人が近付くかよ」

「そんなのわからないじゃない」

「ああ。だから確認させてもらった」

「……確認？」

アシュレイが自分の左手を指差す。

つられてノワールも自分の左手を見る。

「目を凝らしてよく見てみな」

そう言われてノワールが自分の左手に顔を近付けて注意深く観察する。

「……！……なにこれ……」

「気がついたようだな」

「……いつやったの？」

「蔦だ」

ノワールの左手には怪しいところはなかった。

だが怪しい『匂い』はあった。

ノワールの左手には、アシユレイがマーキング用に使っている香水が付着していた。

あの襲ってきた女が逃げる時に巻きつけた蔦に塗っていたのだ。

そしてそれをキスの時に確認した。

「……私は変身してる時に名乗ってないわよ」

「俺はラストেশヨンの出身だ。自分の国の女神くらい覚えてる」

「……私をどうするつもり？」

「別にどうもしねえよ」

「ネプテューヌの仲間じゃないの？」

「シアンの話、ちゃんと聞いてたのか？あいつはまだお前を信用している。知り合いの

心の支えをへし折るほど俺は悪人じゃない」

「……そう」

「アヴニールのせいでシエアが落ちてるからって短気を起こすな。お前を頼らなくちゃならない奴らはまだちゃんという」

「……」

アシユレイが頭を掻きながらドアノブに手を掛ける。

「……なっちまったものは、もうどうにもならない……どんなに泣き喚いたって……時間には戻らないんだ」

顔だけで振り返る。

「大事なものは、これから何をするか……だろ？」

ノワールは俯いたままだ。

「あいつらにはお前の事を話さないで置いてやるよ。自分がやるべきことを、しっかりと考えるんだな」

そう言つてアシユレイはノワールの部屋を出ていった。

「私が……やるべきこと……」

誰もいない部屋でノワールは一人呟いた。

「……………」

その頃、アシユレイも自分が割り当てられた部屋に帰つてきていた。

「けっ……………」

投げ出すようにベッドに倒れこむ。

「何が『これから何をするか』だ……」

震えるほど拳を握り込む。

「過去に振り回されてるのは……俺の方だつてのによ」

鏡に映る灰色の髪の少女を見ながら、アシユレイは眠りについた。

第6話 女神の選択

「とうさん」

まだあどけなさが残る少年が父親を呼ぶ。

その父親はけたたましい音を響かせる工場の中からのしと出てきた。

「おう、どうした我が息子よ……ん？」

無精髭が似合う父親が、自分の息子と手を繋いでいる少女に気付く。

「ほほう、ガールフレンドか？可愛い子じやないか。親はどこにいるんだ？」

「……いない」

「……なんだって？」

息子から発せられた不意の一言に、父親は心の準備など出来ておらず動揺を隠せない。
い。

「土手の近くの公園に住んでたんだって」

「捨て子か孤児か……どっちにしろ親はいないわけか……」

よく見ると少女の服装はボロボロで、なんとか服の形を保っているような状態だ。

目に光はなく、どこを見ているのかもわからない虚ろな目をしていた。

「……とうさん、この子をうちの家族にして上げられないかな？」

「……………」

息子の言葉に父親が黙る。

「……駄目だ」

「……なんで？」

「お前もわかっているだろう？ うちには貧乏なんだよ。お前一人を育てるだけで精一杯なんだ」

「じゃあ、この子はどうなるの!？」

「さあな、死ぬ時は死ぬし、上手くやりくりすれば死なないんじゃないか？」

「そんなの……ひどいよ……」

父親の残酷な言葉に息子が俯く。

相変わらず少女は濁りきった目でどこかを観ていた。

「……わかった」

「……そうか、残念だが……」

「僕、もうおもちやもゲームもいらぬ」

「……ハア？」

「僕が甘えるから貧乏なんですよ？じゃあもう僕はなんにもいらぬ。ご飯だつて食べない。だからこの子を……」

「……お前なあ、んなこと出来るわけ……」

「あら、いいじゃありませんか」

そう言つて工場の中から、作業服がとてもじゃないが似合わない女性が出てきた。

「母さんまで何を言い出すんだ。こいつに我慢なんて出来るわけないだろ」

「あら、出来ないの？」

「……できる！ぜつたいできる！」

「……らしいですよ？」

「~~~~~っ！」

父親が頭を掻き巻る。

「でもこいつがいくらおもちゃやらを我慢したところでもう一人養うほどうちに貯金なんてないぞ?!」

「それは私たちが頑張れば良いだけじゃないですか」

「……お前……簡単に言うがなあ……」

「そ・れ・に」

少年の母親はつかつかと歩みを進め、少女の目の前に座り込む。

少女の首だけが傾き、母親の顔を覗た。

「こんな可愛い子なんですもの。うちの子にするには勿体無いくらい」

「……………」

母親が少女を抱き締めるが、少女は眉一つ動かさない。

「でも、ちよつと笑顔が足りないかな？ほら、笑つてー」

「……………」

少女の目の前で母親がにっこりと笑う。

暫くすると、少女の口の端がほんの少しだけ釣り上がった。

「あ……………笑った」

「そうそう、女の子には笑顔が一番よ」

少女の目に少しだけ光が戻ったように見えた。

「……………ね、いいでしょう。あなた」

「……………」

母親が微笑んだまま、父親の顔を見つめる。

父親は思わず踵を返して視線を外した。

「……………わかったよ」

「ほんと!?!」

「そもそも2対1じゃ勝ち目ないだろうが……」

「言い訳なんかしちやつて。でもそういうところも好きよ」

そう言つて母親が父親に背中から抱きつく。

「だあー、やめろはずかしい」

「うふふふ……」

じゃれ合う両親を尻目に、少年が少女の前に立つ。

「よかつたね。これからは僕がお兄ちゃんになって守つてあげるよ」

「……………」

そう言つて少年は少女の灰色の髪を撫でた。

「……………」

むくりと体を起こす。

「……………夢……………か」

夢の世界からアシユレイの意識がゆっくりと浮上する。

「……………」

手櫛で乱れた髪を整える。

女の体になつてから、寝起きに髪を整えるのはすっかり癖になつてしまつていた。

「……………あー」

手櫛をしていると、髪にはほんの少しだけぬめりがあることに気が付いた。

「そういや昨日、バタバタして風呂に入れてないな……」

気だるい体を無理矢理起こし、軽く体を捻る。

パキパキと小気味良い音が鳴った。

「仕方ない。朝風呂でもするか」

アシユレイは部屋を後にし、廊下を歩く。

工場はそこそこ広いが、2分ほど歩けば風呂場に着くことが出来た。

躊躇なく脱衣所へと続くドアノブを捻り、中に入る。

「……あ」

「……え？」

そこには風呂上がりがらしきノワールが居た。

一糸纏わぬ姿で。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……邪魔したな」

ドアを閉めた。

「ちよつとお!!待ちなさいよおおおお!!」

.....

「……と、いうわけだ」

「あんだ、ほんといろんなことやらかすわね」

「今回は不可抗力だろうが」

「ノワールさん、元氣出してくださいです」

「……もうお嫁に行けないかも」

「朝からラツキースケベに出くわすなんて、アツシユも隅に置けないね!」

「お前は一番黙ってる」

現在ネプテユーン達は朝食を取る為にシアンの実家の食堂に集まっていた。

キッチンにはシアンとアシユレイが立っている。

「そーいやお前、昔から占い受けるといつも女難の相が見えるって言われてたよな」

「誰のせいだかな」

そう言いながら出来上がった朝食をそれぞれの前に出す。

ちなみにメニューは、コンパは米を主食に魚と汁物などを合わせた和食。

アイエフは簡単なサンドイッチ。

ノワールはトーストとサラダ。

そしてネプテューヌはパンケーキとプリンと言った具合だ。

キッチンに立っている二人はすでに食べ終わっている。

「そういえばお前たち、今日はアヴニールの依頼を受けるんだろ？のんびりしてて大丈夫なのか？」

アヴニールは今やラスティシヨンの一大企業だ。

そんな会社の依頼とあらば報酬は凄まじく、冒険者が殺到しては受ける仕事も受けられなくなる。

「えー、ほんとにアヴニールの依頼するのー？」

「……ネプ公、昨日散々話しただろうが」

「うーん……頭ではわかってるんだけどさー……」

アヴニールの依頼を受けることにネプテューヌは今だ反対気味だ。

「そーいや、アツシユの親父さんが言ってたな。『頭と体は切り離せ』って」

「どういう意味よ、それ」

シアンの言葉にノワールが思わず問いかける。

「苦しかったり嫌なことがあっても先に進まなくちゃならないって意味だったと思う」

「そういうことだ」

「うー……わかったよ」

朝食を食べ終えたネプテューヌが椅子から立ち上がった。

「そうと決まれば、早速ギルドに行こう！シアンに貸してもらった武器も早く試したいしー」

「やれやれ……」

「さつきまで嫌がってた人のセリフじゃないですう……」

「そういうわけだから、ちよつと行ってくるわね」

「ああ、気をつけろよ」

食堂を出てネプテューヌ達五人はまっすぐギルドへと向かった。

幸い依頼はまだ残っており、適当な依頼を受けたネプテューヌ達は現在依頼人が待っている待ち合わせ場所へと向かっている。

「あいつらか？」

「多分間違いないわね」

待ち合わせ場所には二人の男が立っていた。

一人はスーツを着た長身の男。

もう一人はシワの深い中年の男だ。

「はじめまして、お待ちしております。あなたたちが弊社の仕事を請け負ってくれる人たちですね」

「ええ、そうよ。あなたが依頼人のガナツシユ？」

「はい。この度依頼を出させてもらった、アヴニール社のガナツシユと申します」

長身の男はガナツシユ。

「そして、こちらが弊社代表のサンジユ」

「……………」

中年の男はサンジユと言うそうだ。

「この二人が、アヴニールの……………」

「代表自ら外受けの仕事に出てくるなんて、珍しいな」

「もしかして、よほど期待されてるとか？」

「はっはっは。これはこれはご冗談がお上手で」

アイエフの言葉をガナツシユが笑い飛ばす。

「雑談はそのくらいにしておけ。時間がもったいない」

「おや、これはすみませんでした。それでは、今回のあなたたちに依頼する仕事になります」

「待ってました!」

「この辺りは近々我が社の新プラントの設立予定地となっております。しかし、工事着工前にして少々厄介なモンスターが棲みついてしまつて困つて居るのですよ」

「なるほど。そのモンスターの討伐が今回の仕事なのね」

ノワールがガナツシユの話に先回りして答える。

「その通りです。この後、私と社長はこの辺りの視察があるので、それが終わるまでにモンスターの討伐をしていただきたいのです」

「討伐さえ出来れば手段は貴様らに任せる」

「なーんだ。思ったより簡単な内容だね。てつきり手作業で部品とか作るような面倒臭いのかと思つてたよ」

「わたしも細かい作業は苦手なので助かりました」

「こんぱつてそういうの苦手そうだもんね」

「おい看護学校生、それでいいのか」

「説明はこれで以上です。くれぐれもミスをして例のモンスターを我々が視察している方に逃がさないよう気をつけてください」

「言われなくてもわかつてる。行くぞお前ら」

アシユレイの言葉に全員がその例のモンスターとやらがいる方角に向かって歩き出

した。

「……社長、あの黒髪の少女ですが」

「お前も気付いていたか」

ネプテューヌ達が見えなくなった後、ガナツシユとサンジユが口を開く。

「はい。コスプレにしては、あの方に似すぎているかと」

「確か、昨日から失踪していたんだったな」

「なので、その可能性も十分かと……どうしますか？」

「どうするも何も、本人かどうかわからんことにはどうしようもない」

サンジユが目だけを動かし、ガナツシユを睨む。

「ただ、目だけは離すな」

「かしこまりました」

二人の会話を聞く人は誰もいなかった。

.....

「うーん、やっぱそう簡単にアヴニールの出展物がわかるはずないかあ……」

「ま、そんなに物事が順調に進むわけないわよね。幸い、依頼がモンスターの討伐なわけ

だし、シアンの武器のテストぐらいはして帰りましょ」

思い出したようにネプテューヌがノワールの方を向く。

「そういえばさ、今日からノワールも一緒に戦ってくれるんだよね」

「ええ、そうよ」

「だったらさ、あいちゃん。ちょうど手頃なモンスターがいることだし、ノワールの實力を見るためにもこの辺りでテキストに一回戦おうよ」

ネプテューヌの言葉が聞こえたのか、あたりのモンスター達が次々と近寄ってきた。

「随分私も甘く見られたものね……いいわ。私の實力、その目に刻むといいわ」

「じゃあ、勝った方が負けた方のプリンをもらうってのはどう？」

「またプリンか……」

「望むところよ。ま、当然勝つのは私だけどね」

ノワールがショートソードを取り出し、構える。

「それはどうかなー。わたしだつて負けないもんねー！変身！」

ネプテューヌが光に包まれ、その中から似ても似つかない人物が現れた。

「わたしも本気を出させてもらおうわ」

「おいこら。それ本気とかそういうレベルじゃないだろ」

「ちよつと!?!あなただけ変身するなんて卑怯よ!」

「なら、あなたも変身すればいいじゃない」

「っ!？」

ネプテューヌの言葉にノワールが短い悲鳴を上げる。

「ねぶねぶ、普通の人はねぶねぶみたいに変身できないですよ?」

「相変わらず酷い無茶振りをするわね……」

「(び、びつくりしたあ……てつきりバレてるのかと思つたじゃないの)」

ノワールがホツと詰まっていた息を吐いた。

「けど、勝負は勝負よ。手加減はしないわ」

「プリンが関わっている時のねぶねぶは、相変わらず妙に本気ですねえ……」

「じゃあ、俺たち三人は見てるだけで良いんだな?」

「ええ、暫く休んでいていいわよ。あいちゃん、審判をお願い」

「はいはいわかったわ。それじゃあ……スタート!」

アイエフが手を叩くと同時にネプテューヌとノワールがモンスターに向かって駆け出した。

「やあ!」

ノワールの鋭い一撃がモンスターに打ち込まれる。

追撃の一閃でモンスターの姿が光になって消えた。

「セイー！」

ネプテューヌは大太刀で目の前のモンスターを攻撃。

背後から近付いてきた数体のモンスターを振り返りざまに纏めて切り裂く。

「いただきー！」

ネプテューヌの攻撃で吹き飛ばされたモンスターにノワールが突きを打ち込み、トドメを刺した。

「ノワール！それはわたしの獲物のはずよ!？」

「ふふん、仕留め損なつたあなたが悪いのよ！」

ネプテューヌが群れの中心で暴れ回り、ノワールが群れから離れた敵やネプテューヌが仕留め損なつた敵にトドメを刺していく。

モンスター達は見る見るうちにその数を減らしていった。

「凄いです！モンスターさんがどんどん倒されていくです！」

「あの数を相手にできるネプ子はもちろんだけど、ノワールのフォローも凄い精度ね」

「流石に言うだけのことはあるな……っと！」

飛んできた二体のモンスターをアシユレイが二人の方向へ蹴り返す。

「これで……」

「終わりよ！」

飛んできたモンスターをネプテューヌとノワールが同時に切り裂いた。

「わたしの勝ちね」

「何言ってるのよ、私の方が早かったわ」

「いえ、わたしの方がコンマ二桁早かったわ」

「はいはい、ストロップ！二人とも同時だったわ。だからこの勝負は引き分け。いい？」

このままでは永遠に言い合いが続きそうだということを察知したアイエフが間に割って入る。

「そんなはずないわ！」

「そうよ！私がネプテューヌと互角なわけないわ！」

「あーもう！二人共しつこい！！」

「ひい!?!」

アイエフの凄まじい剣幕に二人が縮こまった。

「審判さんが引き分けて言ったら引き分けです。でないと、二人プリン、わたしとあいちゃんで没収するですよ？」

「それだけはやめて！」

二人の声が重なる。

「なら、仲良くするです」

「やれやれ、仲が良いんだか悪いんだか……」

.....

「ねえあいちゃん。今日のお仕事って結局どんなモンスターを倒せばいいんだっけ？」

森も中ほどまで来たところでネプテューヌが口を開いた。

「大型のモンスターみたいよ」

「他に特徴は？」

「ないわ。さっき貰った資料にはそれしか書いてなかったわ」

「使えない資料だな……」

「あなたを責めるつもりはないのだけど、この情報だけじゃわからないわね……」

「そんな時は誰かに聞いてみるです」

コンパの提案はもつともだが、正直こんな森の中で人に会う確率は限りなく低い。

「さすがにそんなに都合よく誰かいるわけ……」

「ほう、まさかこんなところで見知った顔に出会うとはな」

ノワールが言い切り終わらないうちに木陰から三角帽子を被った青い長髪の女が出てきた。

「……あなた、誰？」

「私の名か？……そうだな、ここでもMAGES.とでも名乗っておくとするか」

「MAGES.？」

「MAGES.だ。それでは最後の・が抜けている」

三角帽子を被った女はMAGES.と名乗った。

「うー……ん、あまり発音上関係ない気がするんだけど……MAGES.だね、おっけいー」

「ふっ、お前はあの時もそう言っていたな」

「ねぶ？あれ？もしかしてわたしを知ってる人？」

「よかったですね。ねぶねぶ。やっと知り合いに会えたですよ」

どうやらこのMAGES.はネプテューヌと知り合いのようだ。

もつとも、ネプテューヌの方は記憶喪失で知り合いと認識できていないようだが。

「……その言い方だと、まるでネプテューヌが記憶喪失のようだな」

「そのとーり！けど、よくわかったね」

「私くらいになれば、言葉の断片から真実を導き出すなど容易いことだ。しかし残念だが、私はお前たちの力になれそうにはない」

「……どういふことですか？」

「話せば長くなるが、私はここではない世界から次元を超えてきたのだ。故に、私の知っているネプテューヌはそのネプテューヌではない」

「どういうことですか？何を言ってるかわからないですう」

別次元や並行世界の話はコンパには少し難しすぎたようだ。

今にも煙を吹きそうになっている。

「……つまり、MAGES. はここではない別の世界から来たってことよ。そうでしょう？」

「ほう……さすがはアイエフだ。理解が早くて助かる」

「女神だけじゃなく、アイエフのことも知ってるんだな」

「ああ、ここに居るほとんどの者は知っている……だが、お前だけは知らない」

そう言つてMAGES. がアシユレイを指差す。

「私の知らない存在……お前は何者だ？」

「……俺はただのお節介焼きだ。こいつらが心配でプラネテューヌからくつついてきたんだ」

「確かに、黒い気配がするが、悪というわけでもない。興味深い存在だ」

「俺の話はどうでもいいだろ？こっちは聞きたいことがあるんだ」

MAGES. の半分独り言に近い話をアシユレイが断ち切り、こちらの要件を済ませ

ようと話を進めた。

「いいだろう。だが、ある情報が欲しいのでな。情報交換だ」

「いいわよ。で、そっちが欲しい情報って何？言っておくけど、世界の秘密だとか元の世界への帰り方とかそんなだいたいそれたことは知らないわよ？」

「なに、簡単なことだ。ドユクプエの売っている場所を知りたい、ただそれだけだ」

「ど、ドユクプエ？……コンパ、知ってる？」

ドユクプエなる謎の売り物にアイエフが困惑をありありと浮かべながらコンパにタライを回す。

「初めて聞く名前です。ねぶねぶは知ってますか？」

「全然知らないよ。ノワールは？」

記憶喪失のネプテューヌはもちろん。

コンパも知らないようだ。

「私も初耳ね……その、ドユクプエってのは一体何なの？」

「ドユクプエを知らないだど!? 選ばれし者の知的飲料ことデユクテユアープエツパーを知らないというのか!？」

「どうやらドユクプエなる売り物はデユクテユアープエツパーという飲料らしい。

「アツシユ、あなたは知ってるかしら？」

「……知ってる」

「そりゃあそうよね……そんな無駄に呼びにくい飲料なんて知ってるわけ……知ってるの!？」

アシユレイの言葉に思わずノワールがノリツツコミを披露した。

「おお!それは本当か!？」

「俺が知ってるドクプエと同じならな。やたら薬臭い炭酸飲料なんだが……」

「何を言う。あの香りと独特の風味が良いのではないか!」

「……どうやら同じ物みたいだな」

「では、そのドクプエがどこに売っているのかを私に教えてくれ!」

MAGES. がアシユレイの肩を掴む。

「さあ!さあ!」

「わかった、わかったからせめて落ち着け」

「む……」

現在MAGES. の顔は読んで字のごとくアシユレイの目と鼻の先にあつた。

「す、すまない。私としたことが少し興奮していたようだ」

「追い打ちをかけるみたいになるが、もう一ついいか?」

「……どうした?」

「実は、ドククプエはもう非売品になってるんだよ」

「……なん……だと……？」

「ねえアツシユ、非売品ってどういうこと？」

固まったMAGES.の代わりにネプテユースが話を聞く。

「ドククプエっていうのは俺の……と言うか俺の親父の知り合いが作っていたんだが……いかんせんコアすぎる味のせいで売り上げは芳しくなくてな。発売から三ヶ月で撤回。もう工場もアヴニールに取り壊されてる」

「だってさ、MAGES.」

固まっていたと思われたMAGES.が懐から携帯電話を取り出し、誰かと連絡と取り始めた。

「もしもし、私だ。ドククプエが存在していたという証言を手に入れた。現物を手に入れるとなるともう少し調査が必要だ……ああ、そちらも引き続き調査を行ってくれ……それでは幸運を祈る。ルクス・トユネーヴェ・イメイグ・ノイタミナ・シスウム」

そう言つてMAGES.は携帯を切った。

「アヴニール……ドククプエの工場を取り壊すとは……」

「……誰の電話か知らないけど、次はこっちの質問に答えてくれるかしら？」

「……ああ、そうだったな。それで、お前たちが知りたいことは何だ？」

「この辺りに棲んでる大型のモンスターはいないかしら？」

「なんだ、そんなことか……そいつなら……」

MAGES. が振り返る。

直後、獣の唸り声が響き、それと同時にMAGES. が杖を振り魔法陣を展開。

「()いつのことか？」

「……多分な」

MAGES. の魔法によつて拘束された巨大な狼型のモンスターが拘束を解こうと暴れていた。

「どうせお前たちのことだ。このモンスターを倒すのだろうか？手伝つてあげたいが、私も急ぐ身でな。これしきのことしか出来ない」

「いいえ、十分よ」

それを聞いたMAGES. が森の出口へと歩き始める。

「その拘束は後20秒で解ける仕組みだ。では、私はここで失礼する」

そう言つてMAGES. は武器を構えたネプテューヌ達の脇をすり抜けていった。

MAGES. の言葉通り、きつかり20秒後に拘束陣が光の粒子となつて消える。

「さあ、来るぞー！」

拘束が解かれ、自由になったモンスターが吠えた。

モンスターが大きく息を吸い込む。

「全員逃げろ！」

アシュレイがそう言った直後、モンスターの口から強烈な空気砲が発射された。なんとか横に飛んでそれを回避する。

「せいやー！」

素早く接近したアイエフが前足を切りつけ、モンスターにダメージを与えた。

反撃の爪をバックステップでギリギリかわす。

「っ!？」

だがそれをよんでいたのか、モンスターがまだ空中にいるアイエフに向かって突進してきた。

「アイエフ！」

変身したアシュレイが蔦でアイエフを掴み、キルゾーンから引つ張り出す。

「ごめんなさい、助かったわ」

「気にするな」

言葉は短く、素早くモンスターを正面に捉える。

モンスターが再び突進を仕掛けてきた。

アイエフとアシュレイが左右に分かれる。

標的はアシユレイのようだ。

間合いを測ってモンスターが飛び掛かってくる。

「おらよー！」

飛び掛かってきたモンスターの頭を踏みつけ、アシユレイが飛び上がる。

するとモンスターは空中で素早く身を翻し、なんと木を蹴り付けて飛び上がったアシユレイ追撃を行った。

「ぎげんな！」

「てええええい！」

「やあああああ！」

アシユレイが爪を剣で受け流すと同時にネプテューヌとノワールがモンスターを切りつけて吹き飛ばす。

「あの巨体でとんでもない身軽さだな……長期戦はこつちが不利だ」

「だったら速攻で決めるだけよ！」

「おっけー！ 一気にやっちゃうよー！」

三人が走り出す。

モンスターが息を貯め始めた。

「俺が隙を作る！ トドメは任せたぞ！」

ネプテューヌとノワールが左右に分かれる。

アシュレイは気にせず走り続ける。

モンスターの口から先ほどより強力な空気砲が発射された。

「当たるかよー！」

アシュレイが走る勢いのまま地面を蹴る。

足下を暴風が通り抜けた。

「これなら……！」

突如アシュレイの右腕が肥大化し、赤黒い鱗が敷き詰められた巨大な龍の腕に変化する。

「どうだあー！」

地面を挟りながら繰り出されたアッパーがモンスターの顎を捉え、その衝撃で巨体が勝ち上がった。

「ネプ公！ノワール！」

打ち上げられたモンスターに追従するように二人が跳ぶ。

「メガ・ド・ダーイブ！」

「ドロップクラッシュ！」

二人の打ち下ろしの形で放たれた技がモンスターにクリーンヒットし、地面に激突し

たモンスターは暫くもがいた後、光となって消えた。

「終わったな」

「いやあ、今回も楽勝だったね。ノワールも意外と強いし」

「ま、当然よ。あなたもなかなかやるじゃない」

「えへへー、ノワちゃんに褒められたー」

「なあっ!?誰がノワちゃんよ!?変な呼び方しないで!それに褒めてない!」

戦闘が終わって早々にネプテューヌとノワールが漫才を始める。

「さっきまでと比べて、随分仲良くなったじゃないあの二人」

「昨日の敵は今日の友です。仲良しが一番です」

「あいつらの場合は喧嘩するほど仲がいいとも言いがな」

「シアンの武器のテストも終わったことだし、今日は一先ず帰りましょ」

この後ネプテューヌ達はガナツシユにモンスターを討伐したことを報告し、シアンのいる食堂へと帰った。

「たっだいまー。シアンー、武器のテスト終わったよー」

「お、意外と早かったな」

ネプテューヌがシアンから預かっていた武器を返す。

「それで、アヴニールの方はどうだった?」

「その話なんだけど、今回はハズレだったわ」

「ま、そう簡単に情報を漏らすほど馬鹿じゃないだろうしな」

「わかったのは、アヴニールが新しい工場を建てようとしていることくらいね」

「あいつら、また工場を作るのか!？」

ノワールの言葉にシアンが声を荒げた。

「工場がどうかしたの？別に企業が工場を作るくらい驚くほどじゃない気がするんだけど」

「作るだけならな。あいつらは工場を作る土地を得るために森を伐採してるんだよ」

「おかげでラステイションの自然環境はもうめっちゃくちゃだ」

ただでさえ発展途上国であるラステイションの空気は悪い。

これ以上は取り返しがつかないことになりかねないのだ。

「このままじゃ、ラステイションが住みにくくなってしまうです」

「じゃあ、それを防ぐためにも、もう一度アヴニールの仕事を受けてみましょう」

「そうね。今回がダメでも、次で情報が手に入れられるかもしれないわ」

「でもってー、隙あらば秘密工作しちゃうもんねー」

「おいおい、あんまり過激なのはよしてくれよ?」

「話はそれくらいいいだろ?一仕事して腹が減った」

「まったく……わかったよ。少し待ってな」

騒ぎ声が大きくなっていく食堂を影から見つめる男がいた。

「……ほう、あの方を付けて来てみれば、これはまたおもしろい話をしているようですね」

スーツを着た長身の男だ。

「そうですね。ここいらで一度、我が社に逆らうとどうなるか、身を持って味わってもらうとしましょうか」

そう言ってガナツシユは街の闇の中に消えていった。

……………

「……だいぶラステイションの状況がわかってきたわ……これがネプテユータちのおかげ、っていうのがちよつと癪だけどね」

現在ノワールは部屋に戻り、自分の考えを自分なりにまとめるところだった。

「……でも解せないわ。国の発展のために企業が力をつけるのは分かる。むしろ、早くプラネテユータに追いつくために私が推奨したいくらい。なのに、行き過ぎた自然破壊

「はやり過ぎよ」

腕を組んだまま立ったり座ったり歩き出したり立ち止まったりとかなりせわしなく動き回る。

「いくら科学が発展しても、それで人が住みづらくなってしまったら元も子もないわ……アヴニール、か。このまま国を乗っ取って何をしようとしているのかしら……国がこんな状況じゃ、守護女神戦争なんてやっている場合じゃないわ」

ひとしきり歩き回った後、ベッドに勢いよく座り込んだ。

「それに、むかつくけど、ネプテューヌもそんなに悪いやつじゃなさそうだし……今さら倒すなんて、そんなことできるわけが……」

「ノワール！こんどこそ一緒にプリン食べよー！」

「ひやいつ!？」

部屋の扉を勢いよく開けながらネプテューヌが顔を出す。

「あれあれ？またまた驚かせちゃった？ごつめーん」

「もう、あなたって人は……で、今日は何の用よ？」

「うん。美味しそうなプリン買ったからノワールと一緒に食べようと思って」

「……ごめんなさい、今はちよつとそういう気分じゃないのよ」

「えええー！ノワールも!？」

ネプテューヌがオーバーリアクション気味に驚く。

「あいちゃんとかんぱに断られ、アツシユはどっか行っちゃってるし、そしてノワールにも断られたらわたしは一体誰とプリンを食べればいいのか!?」

「一人で食べればいいじゃない」

「わかってないな、ノワールは!」

ちつつちとネプテューヌが人差し指を振る。

「プリンっていうのはね、一人で食べるより、誰かと一緒に食べたほうがずーっと美味しいんだよ!」

「だとしても、寝る前に甘いモノなんて嫌よ、太るもの。それにもう眠いし」

「そっかあ……」

「そういうことだから、今日はもう寝るわ」

「それなら、仕方ないよね……」

しよぼくれたネプテューヌが踵を返し、ゆっくりと扉へ向かう。

「……ごめんなさい」

「ううん、気にしないで。こんな時間に誘ったわたしも悪いんだしさ」

「……………」

「……はあ、ノワールと一緒にプリン食べたかったなあ」

「……けど」

「……ん？」

「あなたがどうしても、プリンを私と一緒に食べたい、って言うなら、一緒に食べてあげてもいいけど？」

「ほんと!？」

ノワールの言葉でネプテューヌの顔に花が咲いた。

「ええ。あなたがどうしても、って言うならね」

「うわーい！ノワール大好きー！ノワールならきつと、一緒に食べてくれるって信じてたよー!」

そう言いながらネプテューヌがノワールに抱きつく。

「ちよつとネプテューヌ!?!いきなり抱きつかないで!」

「ごめんごめん、つい嬉しくてき。じゃあ、そうと決まれば早速行こう!」

「ええ!?!ちよつと……ちよつと!?!どこに行くのよ!?!」

ネプテューヌは狼狽えるノワールの手を引いて部屋の外へと連れ出した。

「……で、なんでプリンを食べるのに外に出なきやいけないのよ」

現在二人はシアンの工場から歩いて五分ほどにある公園近くの土手に並んで座っている。

「ふっふーん。ノワールは知らないと思うけど、プリンって外で食べるともーっと美味しくなるんだよ！」

ネプテューヌが空を見上げると、ノワールもつられて同じように顔を上げた。

「ほら、夜空も綺麗！」

「……ほんと。綺麗な夜空」

「でしょー！この間、一人で食べた時に偶然外に出て気づいたんだ」

「あ……その、この間はせっかく誘ってくれたのに断って、その……ごめんなさい」

「気にしないでよ。わたしが強引に誘ったのも悪いんだしさ。それに、今日こうやってノワールと一緒にプリン食べられたから」

「まったく、あなたって人は……ん？」

「どったのノワール？」

「あれ、アツシユじゃない？」

ノワールが指差した先には帰路へついているアシュレイの姿があった。

「本当だ！おーい！アツシユー！」

自分を呼ぶ声に気がついたアシュレイがネプテューヌ達の方へと近づく。

「……何してんだ、お前ら？」

「ノワールとプリン食べてるんだよー」

「そんなことは見れば……まあ、いい」

アシユレイがネプテューヌの隣に座った。

「こんなところで何をしていたの？」

「……子供の頃、よくここら辺で遊んだのを思い出して、なんとなく」

「……そう」

アシユレイの姿を見て、ノワールの中でアシユレイに言われたことが反響する。

「……ねえ、ネプテューヌ。ひとつ、聞いていいかしら」

「なに？ 預金残高意外だったらなんでもいいよ」

「……もし、もしよ」

決心して、その質問を投げかけた。

「あなたが、女神だったとして、今のラステイションを見てどう思う？」

「……」

「国と守護女神戦争。あなたなら、どっちを取る？」

「んー、わたし難しいことはよくわかんないよ。おまけに女神様じゃないし」

「……もし〃よ、もし〃」

そう言われてネプテューヌが暫く考え込む。

「んー……わたしなら、困ってる人が目の前にいれば、まずは助けてあげたいかな。それ

で、えっと、ハード戦争だっけ？それが駄目だったとしても、わたしが女神様なら助けた人の笑顔があれば、それはそれで満足だもん。あ、あとおやつプリンね」

「ネプテューヌ……あなた……」

「ブレないな……悪い意味で」

「なにおー!?!……あれ、ノワール?」

「……いいえ、なんでもないわ」

ノワールの顔がすつきりとしていることをアシユレイは見逃さなかった。

アシユレイが立ち上がり、歩き出す。

「あれ、もう行っちゃうの?」

「そろそろ眠くなってきたし、それに……」

「それに?」

「見たいものもみれたしな」

そう言つてアシユレイは手をひらひらと振りながら工場へ帰っていった。

「……行っちゃったね」

「そうね……あなたの卵プリン、ちよつと美味しそうね。一口くれないかしら?」

「ん? いいよ。じゃあノワールのチョコレートプリンも一口頂戴!」

「ええ、いいわよ。はい、あーん」

ノワールがプリンを掬ったスプーンをネプテューヌの前に差し出す。

「あむ！んーっ！ほんのりビターなチョコがなんとも絶品な味わい！まさに、まいうー！」

「もう、あなたばかり美味しい思いをしてズルいじゃない。ほら、私にも。あーん」

「はい、あーん」

お返しに今度はネプテューヌがノワールにプリンを食べさせた。

「はむ。んーっ、こっちのプリンも甘くて美味しいわ」

「でしょでしょ！一人で二つ食べるより、こうして食べたほうがずっと美味しいんだよー！」

「ふふっ、そうね」

「ねえ、ネプテューヌ」

「ん？」

「……ありがとう」

「？」

それが、ノワールの中で揺らいでいたものが固まった瞬間だった。

第7話 卑劣な罠

「さて、今日もアヴニールの仕事を受けるわよ。準備はいい？」

朝、アイエフたちはネプテューヌの部屋に集まっていた。

「ええ、ぼつちりよ。ネプテューヌはどう？」

「もちろんわたしもオールオツケーだよ！」

「ノワールさんとねぶねぶ、なんだかどうとも仲良しです」

あの夜からネプテューヌとノワールの仲は見違えるほど良くなっていた。

「べ、別にネプテューヌとなんてなんともないわよ」

「またまた、ノワールったら照れちゃってー」

ネプテューヌとノワールがそんな漫才をやっていると、部屋にシアンが入ってきた。

「おっ！お前ら、ここにいたか！」

「シアン？何の用だ？」

「いきなりで悪いが、またお前らに武器のテストを頼まれてほしいんだ」

「ってことは、パワーアップがおわったってこと!？」

「昨日の今日なのに随分と早いのね」

「ああ。お前らからのフィードバックを受けたら興奮しちまって、気づいたら朝だったんだ」

「お前なあ……」

なんでもないといいた風に言い放つシアンにアシュレイが思わずため息を吐く。

「頼むから博覧会の前にぶつ倒れるなよ？」

「わかってるよ。じゃあこれ、アヴニールの仕事のついででいいから頼むよ」

「ええ、いいわよ」

「じゃあ、頼んだぜ」

ネプテューヌがシアンから改良されたらしい武器を預かった。

「さて、それじゃあそろそろ行くか」

「気をつけてな」

シアンに見送られ、工場を後にする。

しばらく歩き、待ち合わせの場所に到着した。

「そんなわけで、またまたアヴニールの仕事を受けることになったね。ぶ子さん御一行は、街外れにある廃工場にやってきたのでした！」

「そんなこと見ればわかるだろ」

「はあ……相変わらずあなたは気楽でいいわね」

「記憶喪失だつて、人生何事も楽しんだもの勝ちだよ！」

「たまにあなたの脳天気さが羨ましくなるわ……それにしても、こんな廃工場の前に呼び出して、何を考えているのかしら」

そんなことを話していると、背後から現れたガナツシユがネプテューヌたちと合流する。

「お久しぶりですみなさん。今日もお仕事の内容の説明で来ました」

「おつひさー！お仕事いつも大変だね、休みとかないんでしょー？」

「そんなに忙しそうに見えますか？ここのところ、週半分は休日なんですけどねえ」

「一週間の半分が休みなんて羨ましいです」

「……あらかた、ほとんどの施設がフルオートメーションでやることがないのが本音だろっ！」

「ええ。おかげで楽をさせてもらっています。さて、本題の説明に参りましょうか」

ガナツシユがネプテューヌたちの前に出て、廃工場を背に立った。

「この施設なんです、見た目以上に年数が経つてまして、実はもう廃棄された施設なんです……」

「それで、そのいらなくなった施設で何をすればいいわけ？」

「実は施設を引き上げる際に、必要な資材の一部が取り残されたままになっていてるんです。今回はその資材の回収をお願いしたいのです」

「それだけ？なんだ、今回は簡単そうだね」

ネプテューヌはそう言ったが、もちろんそんな簡単な仕事ではなく、ガナツシユの話は続く。

「しかし、困ったことにいつの間にかモンスターが棲みついてしまい、回収が困難になってしまったんです」

「なるほど。だからそこでわたしたちが必要になったってわけね。それで、その回収しなきゃいけない資材ってのはなんなの？話を聞く限り、かなり重要なものみたいだけども？」

「とある鉱石……そうですね、我が社では『ラステライト』と呼んでいる鉱石です。」

どうやらそのラステライトなる鉱石が今回回収する資材のようだ。

「たつたーグラムでゲーム機を1万年も動かせる常軌を逸したエネルギーを秘めた鉱石なのですが、最近ではモンスターの増加も影響して採掘量が下がってきています、我が社では少しでも数を揃えたいと考えているんです」

「……ねえ、ラステイションにそんな凄い鉱石あったかしら？」

「俺は初めて聞いた」

「私も初耳ね……」

「わたしも。そんな凄い鉱石があるなら、わたしが知らないはずがないんだけど……」

「それは当然です」

3人の会話にガナツシユが割り込む。

「その鉱石とはここ数年で発見され、我が社が採掘を独占しているんです。その存在も、社のため公にはしていません」

「ねえねえ、そんなにすごい鉱石ならさ、お仕事が終わった後にちよつとだけくれないかな?」

「こら、ネプ子。何馬鹿言ってるのよ」

「だってあいちゃん。1グラムで1万年もゲーム機を動かせるんだよ。携帯ゲーム機に使えば、いつでもどこでも電池の残量を気にせず遊べるんだよ! ACアダプターの呪縛からの解放だよ!」

どうやらネプテューヌはそのラストライトが欲しいようだ。

そんな凄い鉱石を分けてもらえるわけではない。

「欲しいのでしたら分けて差し上げますよ」

だがガナツシユの口から発せられた言葉はアシユレイたちの予想を裏切った。

「ほんと?」

「はい。前回のあなた方の働きにより、当初のスケジュール通り工事に着工できましたし、この鉱石のことを秘密にするという約束さえしていただけたのでしたら差し上げましょう」

「わーい！アヴニールってあんまりいい印象なかったけど、ガナツシユのおかげで株が上昇中だよー！」

「それは嬉しいですね……さて、時間ももったいたいですし、さっそくお願いします」

「うん、大船に乗ったつもりでこのねぶ子さんに任せなさいー！」

「今にも沈みそうな大船ね……さ、行きましょ」

アイエフの声にネプテューヌたちは廃工場の入り口へと足を向ける。

途中、アシュレイがノワールに話しかけた。

「……ノワール、これは……」

「……そうね、かなり怪しいわ」

「どうする？」

「……とりあえず様子見ね。下手に動いてシアンたちのことがバレるとまずいわ」

「……わかった」

ネプテューヌたちはとうとう廃工場へと足を踏み入れる。

廃工場を見渡していると、不意に背後の扉が轟音をたてて閉まった。

「なにつ!?!」

「っ……やられた!」

「なんでいきなり入り口が閉じちゃうの!ちよつとガナツシユ!変な冗談やめてくれる!?!」

「いやあ、すいません。手違いで閉まっちゃいました……と言うのではなく、単純にこちらの都合です」

扉の向こうのガナツシユが本性を表した。

「あなたたちには、この中でモンスターたちの餌食になっていただきます」

「そ、それは一体どういうことです!?!」

「ちよつと!なんで!どうしてさ!そんなことするんじや、取ってきてあげないよ!」

「……この状況でどうしてそう間の抜けた発想に繋がるんでしょうねえ」

「……ラストライトなんてものはこの世には存在しない作り話……だろ?」

「そのとおりです」

次にガナツシユが言わんとした言葉をアシユレイが先に言う。

「あなたの目的は何!?!」

「あなたたちがパッセとかいう町工場の協力者であることはわかっています。大方、我が社の仕事を受けることで博覧会の出展物に探りを入れ、あわよくば妨害するのが目的

だったのでしょうか？」

「あいちゃん、全部バレバレだよ!？」

「まさか……バレているなんて……」

「我が社の勝利は間違いありませんが、何かあるかわかりませんからね。障害となりうる芽は早いうちに摘みとっておきたいわけですよ。それでは、時間が惜しいので私はここで」

そう言うときガナツシユの足音が扉から遠ざかっていった。

「待ちなさい!ガナツシユ!」

「チツ……」

アシユレイが乱暴に扉を蹴りつける。

もちろんそれしきでは扉はビクともしない。

「これはもうダメね。ご丁寧にしつかりとロックされてるわ」

「そうだ!ねえアツシユ。この扉、アツシユの魔法で溶かせないかな?」

「……この扉は耐熱合金で作られてるみたいだけど……いけそう?」

「……ものは試しだ」

アシユレイの手の平に魔法陣が出現。

バーナーのように火炎が噴射される。

「……敵しいみたいね」

だが扉を赤く染めるだけで溶かすまでは至らない。

「……これ以上は時間の無駄だな」

「えー、もうちよつと続けようよ！……そうだ！変身したらいけるんじゃない？」

「……それで無理なら諦めろ」

そういつてアシユレイの足下から黒い炎がゆつくりと吹き上がる……が。

「つ!?ゲホッ!ゲホッ!……う……ぐ……」

「アツシユ!」

炎が包む前に突然アシユレイが大きく咳き込み、その場に膝をつく。

炎も同時に消え失せた。

「アツシユさん、大丈夫ですか!」

「いったい何が起きたの!」

「わからん……くそ……頭が痛い……全身が、焼けてるみたいだ……!」

「うわわわわ!アツシユも大変だけどこつちも大変なことにな!」

ネプテューヌの言葉に全員が顔を上げる。

すると大量のモンスターがこちらに押し寄せてきているのが確認できた。

「くそつ……!こんな時に限って……」

「アツシユさん！動いちやダメです！」

「コンパ！アツシユをお願い！ネプ子！ノワール！ここはわたしたちでなんとかするわよー！」

「了解！」

「言われなくてもそのつもりよー！」

アイエフの指示にネプテューヌとノワールが動いた。

.....

「やあー！」

ネプテューヌがモンスターにトドメを刺す。

数は確実に減っているが、如何せん物量が半端じゃない。

ネプテューヌたちはいつ終わるとも知れない戦いを続けていた。

「もうっ！数が多すぎるの……っよー！」

突進してきた敵をすれ違いざまにカッターで切り裂き、飛びかかってきたもう一体をハイキックで迎撃する。

「アヴニールが……モンスターを集めた線は!?」

「たった数日でこの数を集めるのは……っ無理があるわ!」

ノワールとアイエフが背中合わせになり、群がるモンスターを確実に減らしていく。

「もう!倒しても倒しても切りが無いよ!無限リポップはんたーい!」

疲れで動きが鈍ったネプテューヌにモンスターが攻撃を仕掛けた。

ネプテューヌはそれに反応できない。

「やば……」

攻撃が当たる直前に魔法陣が展開し、攻撃を受け止める。

直後、ネプテューヌの後方から飛んできたナイフが攻撃を仕掛けてきたモンスターに突き刺さった。

「まったく……ハア……世話が焼ける……!」

「アツシユ!?もう大丈夫なの!」

「俺だけ休んでるわけには……っ……いかないだろ……」

そうは言ったが、アシュレイは今だ息も絶え絶え。

足元はふらつき、剣すらまともに構えられない。

「アツシユ……」

「ネプ公……みんなに伝えて欲しいことがある」

「伝えて欲しいこと?」

一方、アイエフとノワールは群がるモンスターを粗方倒し終え、再び別れてモンスターを処理していた。

「あいちゃん！ノワールー！」

「……ネプテユーン？」

そこにネプテユーンの声が響く。

「もしかしてなんだけど、こんなにモンスターの数が多いのって、近くにエネミーディスクがあるからじゃないかなー!？」

「っ！そうか！エネミーディスクよ！」

「なによ、そのエネミーディスクって！」

敵を切りつけながらノワールが質問を投げかけた。

「モンスターの発生原因よ！見つけたら破壊して！」

「ディスク……もしかしてあれのこと!？」

ノワールの視線の先には、廃工場に似つかわしくないディスクが壁に設置されていた。

「それよ！……これ使って！」

そういつてアイエフが地面に落ちていたアシュレイのナイフをノワールに向けて蹴り飛ばす。

ノワールはそれを受け取り、すぐさまディスクに向かって全力で投げた。

ナイフはまっすぐに目標に向かって飛んでいき、ディスクに命中。

ディスクの破壊に成功した。

「やった!」

「これでもうモンスターが増えることはない筈よ!」

「そうと決まれば頑張っちゃおうよ!」

「これだけ広い工場……どこかに出口がある筈だ……邪魔な敵だけ蹴散らして進め!」

エネミーディスクを破壊し、モンスターの供給がなくなったため、ネプテューヌ達は破竹の勢いで廃工場内を突き進む。

「……おかしい」

「アツシユ?どうしたの?」

モンスターを倒しながら進む中、違和感を口にしたアシュレイにネプテューヌが振り向かずに応える。

「ディスクの先に進んでいるのに敵の数がそれほど減っていない……」

「そうなの?」

「……お前に言っても無駄だった」

あの数のモンスターが押し寄せてきたのにも関わらず、波はあるが相変わらずモンス

ターは立ち塞がる。

そのことをアシユレイが疑問に思っていると、先行していたノワールが声を上げた。

「ねえ！ちよつと来てくれない？」

「ノワールから呼ぶなんて珍しいね。どうかしたの？」

四人がノワールの方へ近づく。

敵の姿はない。

どうやら敵は打ち止めとなったようだ。

「これ、さっきのディスクと同じ物じゃないかしら？」

そういつてノワールが指をさした先には、たしかにエネミーディスクが備え付けられていた。

「……嘘でしょ。同じ場所に二枚もあるなんて……」

「はうう……どうりでモンスターさんが減らないわけですね……」

「放置は出来ないな……今すぐ破壊……」

そこまで言ったところで突然ディスクが光りだしてしまった。

光は拡散し、モンスターとなる。

「くっ……一歩遅かったわね……」

「出てきたんだったら倒すだけだよ！」

「……俺も……戦う」

アシュレイが四人の前に出て剣を構えた。

「アツシユ!? いいから無理しないで下がりなさい!」

「体は動く。武器も持てる。なら戦うしかないだろ……」

そうは言うがアシュレイの顔は青く、まだまだ本調子とはいかない。

「……わかったわよ。ただし、わたしたちが下がれて言ったら大人しく下がるのよ。わかった?」

「どうだかな……行くぞ」

アシュレイがモンスターに向かって走る。

攻撃を飛んで回避し、着地ざまに振り下ろした剣がモンスターを切り裂いた。

「っ……………ぐ……………!?!」

右手に回り込んだ敵の一撃を咄嗟に防ぐが、踏ん張りが効かず、よろめいてしまう。

そこに別の敵からの追撃。

「せやあ!」

「はあ!」

だがそれはネプテューヌとノワールの連携攻撃によって妨げられた。

「アツシユさん、無理しちや駄目です!」

「コンパの言うとおりよ」

「……ネプ公、ノワール。頼みたいことがある」

「……なによ」

「今すぐエネミーディスクを破壊してほしい」

「今すぐ?」

ノワールの言葉にアシユレイが無言で頷く。

「エネミーディスクを破壊した時、体から気だるさが抜けていく感覚があった。アレを破壊すれば……」

「オツケー!行くよノワール!」

「わかってるわよ!」

二人がエネミーディスクへと走り、そうはさせまいと襲いかかるモンスターにアイエフたち三人が立ち塞がった。

「通すわけないでしょ!カオスエッジ!」

アイエフが勢いのまま飛び込んできた敵を蹴り上げ、カタールの刃を頭上から叩き落とす。

「やー!」

コンパも抱えた巨大注射器をモンスターに振り下ろす。

針が突き刺さる勢いでピストンが作動し、中の薬品が打ち込まれた。

「どけどけー！ネプ子様のお通りだー！」

ネプテューヌが手にした剣を振り回しながらディスクに向かって一直線に駆け抜ける。

「くっ……敵の数が多すぎて近づけない……！」

だがディスクからは今だモンスターを吹き出し続けており、ディスクまで10メートルのところまで二の足を踏んでしまう。

「ノワール！」

ネプテューヌが手元で剣の峰と刃をひっくり返し、頭の上で構える。

次に取るべき行動を素早く察知したノワールが跳んだ。

「いつけー！」

ノワールの足がネプテューヌの剣の峰に触れた瞬間に剣が真っ直ぐ振り下ろされ、投石機の要領でノワールが打ち出される。

「はあああああー！」

そしてその勢いそのまま繰り出されたノワールの一撃がディスクを粉々に打ち砕いた。

「やったー！……けど喜んでる場合じゃないー!？」

ディスクの破壊には成功したが、モンスターそのものが消えることはない。

現在ネプテューヌとノワールはそれぞれ大量の敵に囲まれている状態だ。

「ノワール！伏せろ！」

反射的にノワールがその場にしゃがみ込む。

直後、轟音が響く。

「……………これで借りは返したぞ」

そこには黒い炎の残滓を引き連れたアシュレイが、ネプテューヌを小脇に抱えて立っていた。

「いやー助かったよ。ありがとアツシユー！」

「はいはい……………」

呆れた顔をしながらネプテューヌを下ろし、再び敵を見据える。

「さて、こつちの借りもしっかり返させてもらおう」

アシュレイが走った。

「おらおら！」

手にした剣で最寄りの敵を切り捨てて行く。

「フォーム・ツヴァイ！」

突きの動きと同時に剣を薙刀に変形させ、モンスターの胴体を貫く。

「ぬあああああ！」

そのまま薙刀をハンマー投げのように振り回し、多数の敵を巻き込み一塊にする。

「……しゃあー！」

その塊を空中にかち上げる。

「ボルケイノ・インパクト！」

頭上に開いた魔法陣から火炎弾を打ち出し、塊を爆散させた。

「……さて、次はどいつだ？」

薙刀を剣に戻したそれを担ぎながらアシュレイが呟く。

本調子となったアシュレイにネプテューヌたち四人が加われば、いかに数が多かろうと障害とはなりえなかった。

「こいつで最後ー！」

アイエフが残った最後の一体にトドメを刺す。

その敵も他のモンスターと同じように光を散らしながら消えた。

「……終わったか……」

「主人公が雑魚敵に負ける道理なんてないっしょ！」

「ま、それもそうね。じゃあ、さっさと脱出しましょ」

「そういえばアッシュ、この壁って溶かせそう？」

「ああ、多分な」

そう言つてアシユレイが人差し指の先から細いレーザーのような光を作り、その光を廃工場の壁に押し当てる。

火花を散らす壁に大きな円をえがき、その円を蹴り飛ばす。

円のそのままの形で壁をくり抜くことに成功した。

「ようやくこれで外に出られるわね」

「というわけで早速このとおりぬけなんちゃらを通つちやうよー！」

まずネプテューヌが穴を通り抜け、残りの四人も後に続く。

「久しぶりの外だー！」

「やっぱり、おひさまの下は暖かくて気持ちいいですねー」

実際の時間はそれほど経っていないが、廃工場の中で密度の高い時間を過ごした五人をラストেশションの空が出迎えた。

「んー……」

「……………」

「二人とも、さつきから黙ってるけど、どうしたの？」

日の光にはしゃぐネプテューヌとコンパを尻目にアイエフとアシユレイの二人は浮かない顔をしている。

「……………うん、今更だけどちよつとガナツシユの狙いが気になつて」

「私たちを閉じ込めたこと？」

「ええ。本当に目的はわたしたちを始末することだけだったのかしら？」

「始末するだけなら、あの廃工場ごと爆破するなりもつと確実な方法があった筈だ」

エネミーディスクが一枚もあの廃工場に設置されていたことも不自然だと付け足す。

「単なる偶然？それとも……」

「あいちゃんたら心配性だなー。いくらなんでも深読みしすぎじゃないかな」

「お前は浅はかすぎるんだよ」

「無事出られたんだからそれでいいじゃん！今日はもうお仕事なんてやめにして、シアンのところに戻ろーよー」

そのネプテューヌの言葉を聞いた途端、アイエフとアシユレイの顔色が急変した。

「マズイわ、シアンも危ない！」

「……あいちゃん、どういうことですか？」

「あいつが言っていたことを思い出して。あいつはわたしたちのことだけじゃなくて、シアンやシアンの工場のことも知っていたわ！わたしたちだけじゃなく、シアンも狙われる可能性があるってことよ！」

「なんですと！急いで戻らないと！」

「……舐めやがって！」

アシユレイが踵を返し、走り出す。

「待って！」

それを引き止めたのはノワール。

「くっつ！なんだよ!?!」

「お願い、私も……連れて行って！」

「はあ!?!」

「無理は承知よ。でも私は……!?!」

アシユレイが自分の頭を力任せにガリガリと引つ掻く。

そして背負った剣をノワールに投げて渡した。

「それもって掴まれ！早く！」

「……ありがとう！」

ノワールが剣を背負い、背後からアシユレイの首に腕を回す。

「乗り心地は保証しない！舌噛んでも知らねえからな！」

「わかっているわよ！」

それを聞くと、アシユレイの脚が動き出す。

人を背負っているとは思えない速度で二人はラストイシヨンの街へ消えていった。

「いつちやっただす……」

「ネプ子も変身して先にいって！わたしたちは後から追いつくから！」

「了解！」

ネプテューヌが光に包まれ、変身したネプテューヌが宙に浮き上がる。

「いってくるわ。あいちゃんたちも気をつけて！」

それだけいってネプテューヌもアシュレイたちの後を追った。

「わたしたちも急ぐです！」

「ええ！」

アイエフがシアンの工場の方角から煙が上がっているのを発見したのはネプテューヌが見えなくなった直後のことだった。

第8話 殺戮機械

「遅かったか……!?!」

ノワールをおぶったアシユレイがすっかり荒廃してしまった街を走る。

「ガナツシユ……絶対に許さないんだから!」

その時、二人の前方から見覚えのある人物が走ってきているのが見えた。

「シアン!」

「アツシユ!それにノワールも!?!」

「シアン、無事だったの!?!」

「ああ、なんとかな」

多少擦り傷や打撲の痕のようなものも見られるが、大きな怪我は負っていないようだ。

「それより、ここは危険だ、早く逃げろ!」

「逃げろって……あなたはどうするのよ!?!」

「教会に行つて女神様に助けを求めてくる。きっと、女神様ならなんとかしてくれるは

ずだ。だから、お前らも安全な場所に……」

「断る」

シアンの提案をアシュレイが言い切る前に切り捨てる。

「お前……まさかアレと戦うつもりか!？」

シアンの言うアレとは街をこんな有様にしたやつのことだろうとアシュレイは見切りをつけた。

「無理だ! あんなの人間が勝てる相手じゃ……」

「勝てるかどうかなんざ関係ない。一発ぶち込まなきゃ……気が済まない!」

「気が済まないって……そんなことのために命を投げ出すって言うのか!？」

「ああそうだ!」

「馬鹿げてる!」

アシュレイの言葉にシアンが激しく反発する。

「お前は! 自分が育った家を! 街を! 故郷をこんな風にされて! 微塵も悔しいとは思わなかったのか!」

「思ってたさ! 悔くないわけないだろ!」

「だったら! 俺に賭けろ!」

「!？」

シアンが止まった。

「お前が女神を信じるなら……ついでに俺も信じてみせろ」

「……………」

「……行くぞ、ノワール」

「……ええ」

「……………ここで待つ」

シアンの呟きに走り出そうとしたアシユレイが首だけで振り返る。

「お前を信じて………ここで待つ。だから絶対に勝ってくれ！勝って、戻ってこい！」

「……………あたりまえだ」

それだけ言ってアシユレイは再び走り出した。

シアンと別れてから2分ほど走ると、どうやら目的の場所らしいところに着いた。

「あーっはっはっは！いいぞ、キラーマシン！もつと壊せ！」

破壊音の中心には巨大兵器と高笑いを上げるガナツシュが立っていた。

「ふふふ………この性能ならクライアントにも高く売れそうですね。さあ、さらに出力を上げるぞ。お前の性能を見せてやれ！」

唸りをあげながらキラーマシンが手にした斧を振り上げる。

「これ以上、あなたの好きにはさせないわ！」

ノワールの声にキラーマシンの斧が止まった。

「……おや？これはこれはノワール様。他のお仲間はどうかなされましたか？」

「おあいにく様、全員ピンピンしてるわよ」

「まあ、あの程度であなたたちを始末できるなんて思っていないですよ。けど、目的の足止めはできたようですねによりです」

ガナツシユが自慢げにキラーマシンを見上げる。

「おかげでこの通り、我が社の新兵器の素晴らしいデモンストレーションを行えたのですから」

「あなた……絶対に許さないわ」

「許さない？今のあなたに何ができるといいますか？かつての権威も我々に奪われ、力も殆どない」

「そんなわけっ……!」

「ない、と言い切れますか？あなたは不在が長すぎたのですよ。責めるなら私ではなく御自身を責めてください」

ノワールの顔が歪む。

憎悪によるものか、自責の念によるものかはわからない。

「この国にあなたを信仰している人などいません。そのおかげで国を乗っ取ることがで

きたので、感謝はしていますがね」

「……………」

「これにはさすがのあなたも反論できませんか」

「おい、ガナツシユとか言ったか？」

不意に横に立つて黙っていたアシュレイが口を開いた。

「……見ない顔ですが、どなたですか？」

「てめえに教える名前なんざ無い……………」が

アシュレイが一気に踏み込み、ガナツシユの顔を全力で殴りつけた。

「……………浴びせる拳はいくらでもある」

「ぐっ……………貴様……………」

瓦礫に倒れ込んだガナツシユがよろよろと起き上がる。

「何故その落ちぶれた女神に肩入れするのです？ 正義の味方でも気取っているつもりですか!？」

「正義になった覚えもなければ、悪を懲らしめるつもりも無い」

アシュレイが背負った剣をガナツシユの鼻先に突きつける。

「俺は、ムカつくやつを……………叩つ斬るだけだ」

「……………キラーマシン！こいつらを叩きのめせ！」

キラーマシンが再び斧を振り上げる。

「はあー!」

だが振り下ろす直前に降った紫の閃光がキラーマシンを貫いた。

「ネプテューヌ!」

「……勢いで攻撃しちやっただけど、これでよかったかしら?」

「上出来だ」

ネプテューヌが軽く跳んでアシユレイたちの横に並ぶ。

「今回ばかりはおいたが過ぎたわね、ガナツシユ。シアンたちの痛み、そのまま返してあげるわ」

「なっ!? その姿は!?! なぜこんなところに!?!」

変身したネプテューヌの姿を見たガナツシユが激しく狼狽え始めた。

「あなたという人は、何故敵であるはずのあの人と共にいるのです!?!」

「……私が、私の為だけにここにいると思っただら大間違いよ!」

ノワールが叫ぶ。

「こんな私を信じてくれる人の為に私はここにいます! そのためなら、手段は選ばないわ!」

ノワールの周囲に光が集まっていく。

「はあああああつ！アクセス！」

凄まじい光がノワールを包み込み、姿を変える。

大剣を携えた銀色の髪の女……女神、ブラックハートがそこにいた。

「ノワール!?あなた、その姿！」

「細かい話は後！今はあのでつかいのを止めるのが先よ！」

ノワールがそう言うと、瓦礫を蹴散らしながらキラーマシンが再び起き上がる。

「さあ……こいよデカブツ！」

三人が剣を構えた。

まずはアシュレイが仕掛ける。

真っ直ぐに走り、キラーマシンの眼前に躍り出た。

左手の巨大な斧が右側から薙ぎ払われる。

「ふん！」

軽く跳び、足下を駆け抜ける斧の腹を蹴りつけてさらに上昇。

狙いは頭。

「オオオオオ！」

唸り声のような駆動音を響かせながらキラーマシンが右手のスパイク付き棍棒……

ウォーメイスを振り上げる。

「させるわけないでしょー！」

振り下ろされ始めたそれをアシユレイに当たる直前にノワールが横から大剣で殴りつけ、軌道をずらす。

ギリギリで回避に成功した。

「もらったー！」

頭に向かって炎を纏わせた剣を振り下ろす。

鈍い金属音が響く。

「なっ!?!」

アシユレイの攻撃は徒労と終わった。

キラーマシンの背中側から伸びたテールユニットが防いだからだ。

そのままテールユニットで腕ごと剣を絡め取られ、空中に放り投げられる。

「オオオー！」

追撃の斧が無防備なアシユレイに迫る。

「アツシュー！」

ネプテューヌが半ばタツクル気味にアツシュを抱え、キルゾーンから離脱する。

「助かった」

「どういたしまして」

ネプテューヌからアシユレイが離れ、再び三人が並んで立った。

「速い、硬い、攻撃は言わずもがな。どうする?」

「弱点とかわからないかしら」

「ただ強くても機械は機械だ。弱点はある」

「機械……なるほど」

「オオオオオオ!」

今度はキラーマシンが唸りを上げて三人に迫ってくる。

「上等! かかってこい!」

アシユレイは動かず、ネプテューヌとノワールは素早く散開した。

「オオ! オオ! オオオオオオ!」

全てが掠っただけで致命傷になりかねないような攻撃がアシユレイに次々繰り返される。

それをしゃがみ、転がり、離れ、時に距離を詰めて攻撃を避けていく。

正直逃げるだけで精一杯といった感じだ。

「ほらほら、こつちよ!」

そう言つてノワールが背後からキラーマシンに斬りかかる。

テールユニットが稼働し、その一撃を難なく防がれた。

ノワールの思い通りだ。

「サンダーフェンサー!」

ノワールの剣から雷が迸る。

「ガガガガガガ!」

キラーマシンから怪しい音が響き、その動きが激しく鈍る。

「ヤアア!」

その隙にネプテューヌが大太刀をキラーマシンの右腕の肘関節に深く突き立てた。

「オ……オオオオオ!」

「く……ああ!」

シヨートから復帰したキラーマシンがネプテューヌを左腕で掴み、投げ落とす。

「ネプ公!」

アシユレイとネプテューヌの視線が交差する。

それだけでネプテューヌはアシユレイの狙いを理解した。

まずはお互いが両腕を掴み、勢いのままアシユレイが半回転しながらネプテューヌの足を地面につける。

するとその勢いのまま今度はネプテューヌを軸に回転。

ネプテューヌがハンマー投げのようにアシユレイを振り回す。

「行つて！」

お互いの手が離れる。

弾丸のようにアシユレイが打ち出された。

「オラー！」

アシユレイの飛び蹴りがキラーマシンに刺さつたままの大太刀を蹴る。

梃子のように作用したそれがキラーマシンの肘を砕く。

「よつとー！」

右足を柄尻近くに置いたまま、左足の踵で柄の中ほどを蹴る。

キラーマシンから引き抜かれた剣が回転しながら宙に投げだされた。

「まだまだー！」

アシユレイの前方に魔法陣が展開。

それを蹴りつけ、三角跳びをしながら再びキラーマシンに接近。

回転するネプテューヌの剣を左手で掴む。

「ぜいやあああああー！」

渾身の一撃が半壊した腕をとうとう切り落とした。

「オオオオオオ！オオオオオオ！」

キラーマシンが怒りの雄叫びのようなものを上げながら残つた斧を着地した直後の

アシユレイに振り下ろす。

「遅いー！」

その腕をノワールがサマーソルトでかち上げ、そのままキラーマシンに肉薄。

テールユニットが防御姿勢を取る。

「レイシーズ……」

それを読んでいたノワールはテールユニットをスピッキックで蹴り飛ばす。

「ダンスー！」

完全に防御を崩されたキラーマシンの頭部を一刀の下に両断した。

「終わりだー！デカブツー！」

アシユレイがドラゴンの腕に変化させた右腕でキラーマシンをアッパーでうち上げ、左手の大太刀を空中に投げる。

「トドメは任せたー！」

投げられた大太刀がキラーマシンの脇をすり抜ける。

「ネプ公ー！」

「はあああああつー！」

ネプテューヌが大太刀を掴み、キラーマシンを一閃。

着地し、残心をとるネプテューヌの背後で完全に機能停止したキラーマシンが爆散し

た。

「ま、私たちにかかれば当然ね。ところでガナツシユは？」

ノワールの言葉に当たりを見渡すが、ガナツシユの姿は無い。

「逃げた……か」

「あいつ……逃げ足だけは早いんだから！今度あつたらとつ捕まえてメツタメタにしてやるんだから！」

「ねぶねぶ！アツシユさん！大丈夫ですかー!？」

そこにアイエフとコンパが合流した。

「……つてこの人、前に襲いかかってきた人です!？」

「……ノワールがいない……と言うことはもしかして？」

「ええ、私がノワールよ」

「戦闘であやふやのままだけど、ノワール。あなたその姿はいつたい……」

「変身したねぶねぶにそっくりです」

「ああ、これのこと？」

ノワールが両手を広げて自分を見せつけるようなポーズをとる。

「実は私、ラストイシヨンの女神なの」

「なんですって!？」

あつさりと言い放った言葉にネプテューヌが声を上げて驚いた。

「……まあ、ちよつとわけあつて正体を隠していたのは謝るわ。けど、それよりも今はお礼を言わせてちょうだい。あなたたちのおかげで勝つことができたわ。ありがとう」

「まさかノワールがラストイシヨンの女神だったなんて……」

「……ま、わたしは気づいていたけどね」

「うそお!」

アイエフの言葉に今度はノワールが声を上げて驚いた。

「まあ、あれで隠せてると思つてたほうが不思議だな」

「アツシユにばれていたのは知つていたけど……まさかあなたにまで……」

ノワールが何故か凹む。

女神状態なので余計シニールな光景だ。

そこでネプテューヌが思い出したように前に出る。

「ねえ、あなたわたしのことを知つているんでしょう?お願い、教えて」

「……んー、どうしようかしら?」

「焦らさないで、こつちは必死なのよ!」

「……勝つたら教えるとか言つておいて、負け惜しみ言いながら全速力で逃げていった女神はどこの誰だったかな?」

「ぐ……」

横から割り込んだアシユレイの声に得意げだったノワールの顔が固まった。

「どうせ、もうほとんど答えが出ているようなものなんだから教えてあげたら？」

「あいちゃんねぶねぶの正体がわかったですか？」

「ええ。ノワールが女神だってわかった時にね」

「……え？つて、うええええええええええ！ね、ねぶねぶが、もしかして……もしかするです
!？」

「残念ながら……な」

「えっ、こんぽも分かったの!?わたし一人だけ分からないなんてズルいわ。お願い、教えてちょうだい！」

とうとう答えの分からないネプテューヌがオロオロしだしてしまった。

言わずもがな、変身した状態である。

「ノワール、教えてやれ」

「やれやれ、仕方ないわね」

そう言つてノワールが神妙な顔でネプテューヌを見据える。

「ネプテューヌ。あなたはプラネテューヌの女神、パープルハートよ」

「……………」

空気が固まった。

「……………マジ？」

「マジらしい」

不安そうにこちらを向いたネプテューヌことパールハートに項垂れたアシュレイが答えた。

「アツシユ、どうしよう。わたし、女神だったわ。しかも、プラネテューヌの」

「とりあえず変身を解け。そのままだと違和感がヤバイ」

「そ、そうね。この姿だとリアクションも取りづらいし」

そう言つてネプテューヌが女神化状態から二元に戻る。

「……………なんていうか……………本当にわたしでいいんですか？って感じ？」

「それを言いたいのはこっちの方だ……………プラネテューヌの行き先が不安になってきた……………」

「まさかネプ子がプラネテューヌの女神様だったとはね」

「会った時から変身したり地面に突き刺さってもほぼ無傷だったりとただ者じゃないとは思つてたがな……………」

「いや、女神でも空から地面に突き刺さったら普通死ぬわよ」

そう冷静にツツコミをいれたノワールの方をネプテューヌが向く。

「……念の為にもう一度聞くけど、本当に、プラネテューヌの女神がわたしでいいの?」「いいのじゃなくて、あなたが女神なの。けど、守護女神戦争の続きは工場や街の復興の後よ」

「面倒くさい話は後だ。とりあえず避難した奴ら呼び戻してやろうぜ?」

アシュレイの言葉で一旦五人は散り散りになり、避難した市民を街に呼び戻すために動いた。

それからすつかり日も落ち、現在は無事だった工場の一室に集まっている。

「ふう……とりあえず一段落したけど、シアンたちに正体を明かさなくてもいいあの?」

「まだ明かすタイミングじゃないわ。正直言って、アヴニールに権威を奪われた今の状態で正体を明かしても、みんなを不安にさせるだけだわ」

「賢明だな」

「ええ。だから、もう少し自分なりに頑張ってみてから正体を明かすことにするわ」

「なにか作戦でもあるですか?」

「そんなものないわ。けど、少しずつでもこの国に住む人たちの為に尽くそうと思ってるわ」

アヴニールに国をほぼ乗っ取られている今、大きな動きをすることは出来ないだろう。

「どうやら暫くノワールは水面下の活動になるようだ。」

「さすが、ラストイシヨンの女神ブラックハート様は立派ね」

「様付なんていいわ。今まで通りノワールとして接してちょうだい。その方が私も嬉しいわ」

「ちよつと緊張しますが、わかったです」

女神といえど、所詮は一人の少女。

やはり人の温もりは欲しいものなのだろう。

「それに引き換えネプ子と言えば……」

「ねぶう……ねぶう……」

呆れた顔でアイエフがベッドでいびきをかくネプテューヌを見る。

「よく寝てるです。よつぼど疲れたんですねえ」

「……っーかそれ本当にいびきか？」

そんなことを言っていると部屋のドアがノックされた。

扉を開けて入ってきたのはシアンだ。

「ちよつと邪魔するよ」

「工場はもう良いのか？」

「ああ、お前らのおかげでだいぶ片付いたから、あとは明日だ」

「正直なところ、工場はどうなの？」

「もう完全お手上げ状態。ほとんどぐちゃぐちゃだ」

「……悪いな。工場、守れなくて」

「別に良いよ。壊されたなら、直せばいいだけだ」

そんな話をしているとネプテューヌがむくりと起き上がった。

「……あれ？シアン、いつの間に来てたの？」

「ちようど今来たばかりだ……って、起こしてすまない」

「で、具体的にはこれからどうするの？」

「まずは工場の復興だな。武器の改良はひとまず後回しだ」

「てなると、わたしたちの仕事も当分はなくなるわね」

博覧会用の武器は完全にネプテューヌに合わせて改良されている。

武器の改良が来ず、鍵の欠片の情報も無い今、ネプテューヌたちがラストアクションに留まる必要はない。

「わたしたちは一旦プラネテューヌに帰るわ」

「そうですね。お仕事がないんじや仕方がないです」

「そういうわけだから、預かっていた武器は返すね」

「博覧会が近くなったら寄ってくれよ。その時にまた、武器のモニターを頼みたい」

「それなら大歓迎だよ！その時は立派になったシアンの工場も見せてね！」
「元通りの工場に戻してやるから楽しみにしとけよ！」

そう言つてシアンは部屋から出ていった。

「それじゃあ明日、五人分のチケットを買つてプラネテューヌに帰ろー！」

「あ、そのことだけど、私はあなたたちとは一緒に行けないわ」

「えっ!?!ノワちゃん、一緒に来てくれないの!?!」

「ノワちゃん言うな！」

ネプテューヌは寝ていた為、ノワールの話など知るよしも無い。

「あなたたちが鍵の欠片を集めているように、私にもこの国でやらなければいけないことがあるのよ」

「せっかくノワールと友達になれたと思つただけだなあ……」

「駄々をこねるな。鍵の欠片のこともあるし、また会う機会はある」

「そうね。他の国に行つた後にまた来ましょ」

「その時は歓迎させてもらうわよ……あ、それとネプテューヌ。自分が女神だつてこと、あまり公表しないほうがいいわよ」

「だな。他国の女神が入つて来たと分かれば、最悪国同士の戦争になりかねない」

「そうね。自らトラブルの原因にはなりたくないし、当分は女神であることは隠してお

きましょ」

「もう、そんなのわかってるよー。悪代官や越後屋を追い詰めた時に、世の顔を見忘れたかーって台詞と一緒にバラせばいいんでしょ？」

「だからバラすなつての……」

やれやれとアシユレイは肩を竦めるのだった。

番外編 あの背は未だ遠く

「あーくそ。だいぶ彷徨ったぞ」

目的地へ歩き出して早20分。

やっと目的地が見えてきた。

前に教会を探す時にもあいつらに言ったが、アヴニールの工場が増えすぎて道が大幅に変わっている。

川だった場所が道路になっていた時にはどうしようかと途方に暮れた。

「なんでプラネテューヌ行き切符を買っただけでこんなに疲れるんだよ……」

俺は今、ラストেশションの切符売り場へと向かっている。

それと言うのも、他の三人はラストেশションで買いたい物があるとかで自由行動中。

そこで暇だった俺は全員分の切符の購入を頼まれた訳だ。

「はあ……何が悲しくて女共の使いっ走りなんざやらなきやならねえんだよ……」

愚痴りながら切符売り場の中に入る。

すると、子供の泣き声が耳に刺さった。

「うっせ……」

つい口をつけて声が漏れる。

「うあああああん！おとおさああん！」

「……………」

辺りを見渡すが、子供を探している素振りをしていない人物はいない。

いるのは俺と同じようにキョロキョロとする奴ら、恨めしそうに子供を睨む奴らと、我関せずと見向きもしない奴らだけだ。

「……………あーったく……………」

子供に近づき、しゃがんで視線を合わせる。

「おう、チビ助。何泣いてるんだ？」

「ふえ……………」

こすつたせいとか、赤くなった目でこちらを見上げる。

急に泣き声が聞こえなくなった為か、無視していた奴らすらもこちらを好奇の目で見てきた。

「あー……………とりあえず外に出るぞ」

「……………」

子供の手を引き、外に備え付けられたベンチに並んで座る。

長いこと歩いたせいとか、居心地の悪い場所から解放されたかはわからないが、座った

拍子に溜め息が出た。

「……おねえちゃん、だれ？」

「……ただの通りすがりだ」

仕方ないとはいえ、おねえちゃん呼ばわりは少しこたえた。

「で、なんで泣いてるんだ？」

「……おとうさんが……いなくなっちゃった……」

「……………」

それからぼつりぼつりと少年が話を始めた。

「どうやらこの少年は、久々の休みが取れた父親とプラネテューヌに旅行する計画を立てていたそうだ。」

「そして父親に貰った金で切符を買ったまでは良かったが、入り口で待っていた筈の父親が急にいなくなっちゃってしまい、その不安から泣き出してしまったらしい。」

「つたく……俺がお前くらいの時はもつとしっかりしてたぜ？そんなくらいで泣くなよ」
「だっ……………」

俺に話をして自分がひとりぼっちなのを再認識したせいか、少年がうつむいて再び泣き出しそうになる。

「あーくそ。言ってるそばから泣くなよ……」

少年の背中をさすってやると、それも幾分か落ち着いた。

「心配しなくてもお前の親父は戻ってくるさ」

「……なんでわかるの？」

「……俺がお前の親父なら、お前をほおって置いたりしねえよ」

「……おねえちゃん、女の人だよね？」

「例え話だ」

子供は変なところで鋭いもんだ。

「親っていうのは、嫌でも自分の子供の事が心配になるんだよ」

「……そうなの？」

「ああ」

ネブ公のおもりをしていればよく分かる。

「ここで適当に待ってれば……」

「カイ！」

「……おとうさん！」

「……ほらな」

遠くから三十代くらいの男が息を切らしながらこちらに走ってきた。

カイというのはこの少年の名前だろう。

「おとうさん！どこいったの！」

「すまない。急に呼び出されて、ついさっきまで仕事場にいたんだ」

父親と少年が抱き合う。

これで一件落着だ。

「……えーと、あなたは？」

売り場に戻るために立ち上がると、父親が俺に声をかけてきた。

「……通りすがりのお節介焼きだ」

「おねえちゃんがいっしょにいてくれたんだ！」

「そうか、良かったな。カイのこと、ありがとうございます」

「別にいい」

それだけ言って売り場に入り、プラネテューヌ行き切符を販売している場所に並ぶ。

「親父……か」

その言葉を皮切りに、俺の意識は今から3年前へと飛んでいった……。

……

「おーい！アツシユー！」

「……………」

遠くから俺の名前を呼ばれる。

が、無視して手にした木刀を振るう。

「ねえ！アツシユってばー！」

また名前を呼ばれるが、それでも無視して木刀を振るう。

あいつが俺をしつこく呼ぶ時は大抵どうでもいいことだ。

「……………えい」

「……………何してんだよ」

背後から抱きつかれる。

このままでは集中なんてできるわけがないので、仕方なく構えていた木刀を降ろした。

「いやー、アツシユがあまりにも暇そうだったからさ。話相手になってあげようと思つて」

「確かに暇な時は剣を振ってるが、別に剣を振ってたら暇な訳じゃない。つーかい加減離れろ」

「はーい」

腰に巻かれていた腕がほどけ、体が自由になる。

振り向くと、いつもの顔がそこにはあつた。

「……で、ダステイ。今日は何の用だ？」

「いっしょに甘い物食べに行こ！」

「お断りだ」

やはりどうでもいいことだったようだ。

俺の妹……ダステイはそんなやつだ。

「えー、なんでさー」

「こつちのセリフだ。ていうかなんで今なんだよ」

「んー、わたしが今食べたいから！」

「そうか。俺は今食いたくない。一人で勝手に食つてこい」

「ぶー……アツシユのケチ！」

「ケチで結構」

「ふーん、いいもん。後で後悔しても知らないんだからね！」

そう言つてダステイは灰色の髪を揺らしながら俺から離れていった。

なんで昔の俺はあんなの拾つたんだか。

そう思いながら再び剣を構えて素振りを再開する。

「おう、やってるな？」

「……親父、とシアンか」

背後から聞こえた声に振り向くと、そこには無精髭を生やした俺の父親と、幼馴染であるシアンが立っていた。

「二人してなにやってるんだ？」

「材料の調達だ。お前の剣のな」

この二人が寝る間も惜しんで作業をしているのは俺の剣を作っているからだ。完成間近とあって、最近はこうして顔を突き合わせて話すのも久しぶりだ。

「……悪いな」

「いいからお前は剣を振ってろ。こっちはなんとかなる」

「言われなくてもわかってるさ」

「今回の俺の最高傑作だ。楽しみにしてろよ？」

「……それ、もう三回目だ」

「そうだったか？ まあいい。じゃ、頑張れよ」

親父はケラケラ笑いながら工場の中へ。

シアンもそれについて行った。

「……………ふう」

息を吐き出し、素振りを続ける。

「……………」

「そおい！」

「だあああああ！」

木刀を放り捨て、両手で逃げられないようにしつかりと固定。

そのまま全力で頭突きをかました。

「いったあー！」

「お・ま・え・なあああ！」

そのまま万力のようにダステイの頭を締める。

「痛い！痛い痛い！痛い痛い痛い！」

ダステイは先ほど俺の首に当てた缶ジュースを両手に持っているため、バタバタと手を振るだけでまるで抵抗できない。

本気で泣かれると俺が悪いみたくなるので頃合いを見て手を離してやる。

「はあ……………はあ……………お前、どっかいったんじや、なかったのかよ……………」

「うう……………特訓で疲れてるアツシユのためにジュース買ってあげたのに……………」

「嫌がらせをしなきゃいいものを……………」

うづくまつて締められた部分を缶ジュースで冷やすダステイの手から一本を拝借す

る。

「……まあ、労をねぎらおうっていう考えは評価してやるよ」

そう言つて缶を開け、中のジュースを飲む。

「……あ」

「ん？なんだよ」

俺が飲んでるジュースの缶を見ながらダステイが声を上げた。

「いやあ、せつかく二本買ったからさ、アツシユの運を試してあげようと思つてたんだよ」

……嫌な予感がしてきた。

「で、それは当たりの方だね」

「あ？ハズレじゃないのかよ」

「うん。ハズレはこつち」

そう言つてダステイが自分の手にある炭酸飲料を持ち上げる。

「それは残念だったな」

「ちなみに当たりは事前にわたしが飲み口の部分に口をつけたやつだよ！」

「ぶー！」

アニメかマンガみたいに見事に口の中のジュースを吹き出してしまった。

飲み口の部分に口をつけた？

つまりあれか？

そういうことか？

ダスティに掴みかかる。

「少しの間じつとしてろよ……頭から残った分全部被せてやる……！」

「わー！ストップストップ！冗談！冗談だつてば！」

「嘘つけ」

「本当だよ！」

「つたく……」

本当かどうかは怪しいが、とりあえず離してやった。

「もー！頑張ってるアツシユのためにつて言つたじゃん！そんなことしないよ！」

「じゃあなんで言つたんだよ……」

「とにかく当たりもハズレもないよ。運試しはまた今度ね」

そう言つてダスティが手にしたジュースのプルタブを持ち上げる。

直後、とても缶ジュースを開けたとは思えない破裂音が鳴つた。

「……………」

「……………そういうやそれ、さつき振つてたな……」

頭を締めた時に振っていた炭酸飲料がダステイの顔目掛けて発射された。

おかげで現在ダステイはしぶ濡れになっている。

「やれやれ……当たりは無かったが、ハズレはあつたみたいだな」

「うわーん！こんなやつてないよー！」

「はいはい。家に戻って頭洗ってこい」

俺がそう言うと、ダステイは大人しく家に帰っていった。

「相変わらず仲がいいですねえ」

「……いつからいたんですか？」

「おや、これはご挨拶」

つい呆れたような口調になってしまった。

「私はいつだって貴方達のことを心配していますよ。なんたって私の教え子ですから

ね」

白い髪に黒いスーツ姿。

貼り付けたような笑みを浮かべる男が立っていた。

「剣の腕は上達しましたか？」

「おかげさまで」

「この人は 그레이さん。」

学校に行けない俺とダステイに勉強を教えてください、俺に限っては剣の……というより戦闘の稽古をつけてくれる先生役だ。

「では……」

グレイさんが地面に投げ出されていた木刀を拾い、片手でこちらに投げて渡す。

「おっ……と……」

投げ出された木刀を両腕で受け止める。

10キロ以上の重圧がのしかかった。

みてくれは1メートル程度の木刀だが、その内部には鉛が埋め込まれており、最早鈍器と言っても差し支えない物となっている。

「こちらの準備はできていますよ」

そう言うグレイさんはポケットに手を入れたまま微動だにしない。

両腕を使わない。

脚以外に攻撃が当たれば負け。

それがグレイさんが俺と模擬戦をする時に自分に課すハンデだ。

「では、何処からでも」

「言われなくても！」

素早く距離を詰め、剣を振り下ろす。

だが攻撃は軽く身を引くだけであっさりかわされてしまった。

「せい！はあ！」

続けて剣を振り回すが、それらも全てひらりひらりと避けられてしまう。

「ほいー！」

「っ!？」

顔面目掛けて高速で放たれた蹴りを咄嗟に下がって回避する。

鼻の頭には砂が付いていた。

「おや、どうしました？もう休憩ですか？」

「……そんなわけ！」

再び剣を振り上げて走った。

.....

「ほらほら、息が上がっていますよっ！」

模擬戦開始から20分程度たっただろうか。

不意にそう言ったグレイさんは汗一つかいていない。

手を抜かれている。

両腕を使わないとかそういう次元じゃない。

ハンデがハンデとして成立していないほどグレイさんと俺には実力の差があった。
一瞬、グレイさんの脚がふらついたので見えた。

「……はあ！」

その隙に喉目掛けて突きを放つ。

「よしいしょー！」

「しまっ……!?!」

隙だと思ったのはどうやらフェイクだったようだ。

突き出した剣の腹を蹴り上げられ、胸がガラ空きになる。

「それ捕まえたー！」

「ぐほっー！」

腹に蹴りが突き刺さり、肺の中の空気が全て抜けていくような感覚。

息が出来ない。

足元がふらついた。

「はいはいはいっつとー！」

グレイさんの脚が腿、脇腹、そしてこめかみを正確に蹴り抜く。

剣が手から滑り落ちた。

「そおれ！」

トドメに強烈な回し蹴りが打ち込まれ、俺は地面を滑った。

「……やれやれ、これでは卒業までまだまだかかりそうですね」

「……かはっ！……はあー！……げふっ……」

そこでやつと息が通るようになった。

腹の底からこみ上げる酸い物を必死に押し殺す。

すっかり遠くなった耳に呆れたような声が響いた。

「……また明日来ます。それまでにもっと強くなってくださいね？」

それだけ言ってグレイさんの足音が遠ざかっていく。

代わりに新しい足音がこちらに近付いてきた。

目を開けると、そこには仰向けに倒れたままの俺を見下ろすダステイの姿があった。

「……大丈夫？」

「大丈夫……に……見えるかよ……」

「治すから、じつとしていてね」

そう言つて俺のそばにしゃがみ込んだダステイの手に光が集まる。

その光を浴びると、たちまち疲労感が抜けていき、傷も消えて無くなった。

ダステイの回復魔法だ。

「……卒業試験、厳しいね」

「……当たり前だ」

「もしかしてわたしが旅について行きたいって言ったから無理してるの？」

「……んなわけないだろ……」

卒業試験とは、グレイさんが俺の剣の修行の総まとめとして俺に貸した条件のことだ。

条件は単純明解。

先ほどの模擬戦に勝つこと。

卒業試験に合格しなければ、俺は木刀以外の剣を持つことを禁じられる。

俺は旅に出たかった。

だが最近増加傾向にあるモンスターを倒すには木刀なんかじゃ力不足だ。

俺はなんとかしてでも試験に合格しなければならぬ。

しかし、卒業試験を言い渡されてから既に早一年も経っていた。

すっかり軽くなった体を起こす。

「今日はまだ遅いし、お家でゆっくり休もう？」

「……わかったよ」

「……じゃあそうと決まれば一緒にゲームしようよ！」

「はあ……わかったよ」

夕陽が照らすラスティシヨンの道をダステイに手を引かれるまま歩いた。

「アシユレイ、ちよつといいか？」

「どうした親父？」

夕食を終え、自室に戻ろうとする俺を親父が呼び止めた。

「渡す物がある。ついてこい」

それだけ言つて踵を返し、歩き出した親父の後をついていく。

家を出て、2分とたたないうちに工場へと辿り着いた。

親父が工場へ入り、暫くした後、手に木刀を持って出てくる。

俺の武器に進展があつたようだ。

コスト削減のため、武器のテストは木を同じ形に削り、そこに重りをつけて重さを同

じにしたものを使つていた。

「ほれ」

「ああ……」

差し出されたそれを受け取る。

腕に掛かる重さに凄まじい違和感を覚えた。

「軽……なんだこれ……」

今日、素振りや模擬戦で使っていた木刀とは重さが段違いだ。

5キロぐらい軽いんじゃないか？

「刀身に軽量高強度の合金を使うことになった。プラネテューヌ製の新素材だ」

どうやら珍しく親父が外に出ていたのはそれを調達するのが目的だったようだ。

「……そんなもの使って、資金面は大丈夫なのか？」

俺の為にそんな高級そうなものを使ってくれるのは素直に嬉しい。

だが聞かざるを得ない。

「金なんてものは、工夫次第でどうとでもなるもんさ」

「……………」

「お前は黙って俺が作った剣を振ればいい……あいつの……ダスティの親を探しに行くんだろ？」

「……なんで知ってんだよ」

「『親を探すなら木を探せ』ってな。」

「……どういう意味だよ」

「親は木の上に立って子供を見守るものだってことだ」

そう。

親父の言う通り、俺が旅に出たがっているのも、毎日素振りを欠かさないのも、グレ

イさんに毎回やられてボロボロになっているのも。

全部あいつの為だ。

あいつは覚えていないらしいが、俺は確信していた。

あいつの親はきつとこの世界のどこかにいる。

それを探す為に俺はここまで血反吐を吐くほど努力して、強くなった。

あいつの為に。

「……親父」

「なんだ？」

「剣、後で返せつつつても知らねえからな」

「……当然だ」

言いたいことは言えず、代わりに憎まれ口が口から吐き出された。

それでも親父は満足そうに笑った。

.....

「ふっ……ふっ……」

昨日もらった木刀を振るう。

最初こそその軽さに戸惑ったが、振った数が200を超えてからはそれも無くなった。

「アツシユ……そろそろ休憩した方が良いよ？」

「はあ？まだ始まったばかりだろ」

「始まったばかりって……もう素振り始めて5時間だよ！」

「……マジか」

「大マジだよ！」

確かに始めた時は真上にあつた筈の太陽は随分と傾いていた。

開始からずっと3秒につき一回のペースで素振りをしている。

ダステイの話が本当ならずで6000回ほど剣を振ったことになる。

いつもは自分の疲労度で時間を測っていたため、剣が軽くなつた分だけ時間の感覚がズレているようだ。

「今日は一段と頑張ってますねえ」

「頑張るのはいいけど、頑張りすぎも良くないよ……って!？」

「ハロー。っきげんよう」

塀にもたれながら俺の素振りを見ていたダステイの横にいつの間にかグレイさんが座っていた。

「……相変わらず、いつの間にかいますね」

「びつくりさせないで下さいよー」

「いやあ、昨日伝え忘れていたことがあったのでね」

「伝え忘れたこと？」

「私、実は明日からリンボックスに行くんですよ。それも長期間です」

グレイさんの本業は旅人だ。

他の国へ行って数日間俺たちの相手が出来ない時期はそこそこあったが、長期間となると移動先の国を拠点に活動することになる。

それは今回を逃せば『卒業』が一気に遠ざかることを意味していた。

「……では、始めますか？」

「……ええ」

「アツシュ!?!倒れても知らないよ!?!」

誰の為に頑張つてると思つてるのやら。

叫ぶダステイを無視して剣をグレイさんに向けて構える。

グレイさんいつも通り、両手をポケットに入れたまま。

「どこからでも」

「……………」

無言で走り、剣を振り上げる。

「おっと」

グレイさんはそれを横に引いてかわした。

振り払うように横に風ぐ。

それを瞬時に伏せて回避され、同時に足払いを掛けられ仰向けに転倒する。

グレイさんの足の裏が見えた。

「おお!!」

すぐさま地面を転がり、剣を振って牽制しながら立ち上がる。

「ふむ、剣が軽くなった分振りが早くなったようですが、それだけじゃあ私に勝つことは

出来ませんよ?」

「でしようね……」

グレイさんの言う通り、いくら剣の振りが早くなろうと、相手はその速度を悠々と上回る。

だが俺とて武器を変えるなんて子供騙しな手で勝てるとは微塵も思っていない。

この人に勝つには、技術で勝つ他無いのだ。

「……………っ!」

意を決して飛び込む。

「あああああ!!」

袈裟斬り、逆袈裟、切り上げ、横薙ぎ、背面突き、振り下ろし……に見せかけた浴びせ蹴り。

思いつく限りの攻撃をぶつける。

しかし、それらが命中することは無い。

「どうしました？ 最初より勢いが落ちてますよ?」

それどころか余裕を持って避けられるようになってしまっていた。

「はあ……ぐ……」

さらにここに来て体力が切れてきた。

5時間休憩無しで素振りをしていた影響だろう。

忠告は聞いておくべきだったか?

後戻りなど出来ない。

後悔を押しとどめ、剣を振るった。

「遅いですね!」

俺の頭上を飛び越え、グレイさんが俺の背後を取る。

振り返りざまの膝蹴りが背骨を砕く勢いで打ち込まれた。

衝撃で吹き飛ばされ、地面を転がる。

「う…………ぐう…………」

「…………今回はここまでですかね」

不意にそんなグレイさんの声が聞こえた。

ゆっくりと歩き、その場を後にしようとする。

手放しかけた剣を持つ手に力が入る。

「では、また…………」

「まだ…………」

剣を支えに立ち上がる。

「まだ…………終わってない…………！」

汗で滑る手を必死に堪える。

「あんたを倒すんだ…………今日、ここで！」

剣を構え、叫んだ。

自分を奮い立たせる為に。

「…………良いでしょう」

俺とグレイさんが相対する。

「これがラストチャンスです」

剣を強く握り、ゆっくりと呼吸しながら時を待つ。

「……………」

「……………」

今。

地面を踏み抜き、剣を喉に突き出した。

「無駄ですよ！」

剣の腹を蹴られ、切っ先が跳ね上がる。

「どうだかな！」

打ち上がった剣の勢いをコントロールし、頭を越え、一回転。

斜め下から切り上げる。

「おおっと!？」

グレイさんが慌てたように地面を蹴り、後ろに下がった。

だがこれだけでは終わらない。

終わらせられる訳が無い。

更に一步踏み込み、下がるグレイさんに追従するように動いた。

「これで……………」

剣を振り上げる。

「どうだあああああ！」

お互いの脚が地面に付く瞬間、持てる限りの全力で剣を振り下ろした。

「……………」

「……………」

沈黙が辺りに流れる。

「…………お見事」

グレイさんの左手は今だポケットの中。

もう片方の腕は……俺の剣を掴んでいた。

「私の負けです」

1年前、卒業試験と言われて始めた模擬戦。

「俺……………」

1年間、ずっと聞きたかった言葉が聞こえた。

「勝った……………」

「アツシユー！」

放心状態になっていた俺にダステイが抱きつき、そのまま地面に倒れる。

「…………ダステイ、俺……………」

「うん！おめでどう！アツシユー！」

倒れたまま、傍らに立つグレイさんの顔を見る。

「卒業試験は合格です。よく頑張りましたね」

「……そう……ですか」

「おや、嬉しくないんですか？」

「……さあ、どうでしょう？」

本当にわからなかった。

一気に入ろんな感情が湧いて出てきたのが原因だろう。

ただ……

「……眠い……」

地面に横になっていると途轍もない睡魔が襲ってきた。

「……今は、ゆっくり休みなさい」

「……そう……し……ま……」

言い終わる前に、俺の意識はまどろみに沈んでいった……。

「……う……ん……」

「アツシュ、起きた？」

「……あー……ああ」

目が覚めると、俺はベッドに寝ていて、横にはダステイが座っていた。

「…… 그레이さんは？」

「もう行っちゃったよ」

「……そう、か」

今まで世話になったお礼のひとつでも言いたかったが、一足遅かったらしい。

「……はいこれ」

「……なんだよこれ」

不意にダステイから紙袋を手渡された。

「わたしからの卒業記念だよ！」

「……」

そう言われ、紙袋の中に手を突っ込み、中の卒業記念品とやらを引っ張り出す。

「これは……」

中に入っていたのは新品のコートだった。

「……いつの間に買ってきたんだ？」

「実は結構前から買ってただけど、アツシユがなかなか試験に合格しないから渡し損ねてたんだよね……」

「……悪かったな」

「今こうして渡せたんだからそれで良いよ！」

そう言つてダステイはにっこりと笑う。

「……あ、晩御飯もう出来てるから、食べたくなったら出てきてね？」

「ああ、わかった」

「じゃあねー！」

やたら上機嫌なダステイが部屋から勢い良く出て行った。

「……………よつと」

試しに卒業記念品のコートを着てみる。

ほんの少し大きいのが、概ねサイズはあっていた。

「……………飯食いに行くか」

くだらないことでコートを汚したくなかったから、脱いだそれをベッドに放って部屋を出た。

……………

「アシュレイ」

「あ？」

その日も飯が終わると親父が俺を呼んだ。

また剣に進展があったのだろうか？

「……………俺の部屋に來い」

「ああ……………って親父の部屋？」

無言で頷いた親父の後をついて行き、親父の私室へと脚を踏み入れた。

「……………どうだ？最近の調子は」

自分の椅子に座った親父が唐突にそんなことを聞いてきた。

「……………良い……………と、思う」

「そうか……………」

それを聞いた親父が何処かを見ている。

それが厳密に何処かはわからない。

近くを見ている様にも見えるし、とても遠くを見ている様にも見える。

「昔はこんなだったお前が、いつの間にかデツカくなったなあ……………」

「……………」

「昔はちよつと擦りむいただけで泣きわめくほど泣き虫だったのにな」

おかしい。

何時もの親父ならこんな昔話なんてする筈が無い。

「お前が泣かなくなつたのは……………あいつが正式にうちの家族になつてからだつたかな？」

……………あーでも、五年前に母さんが死んじまつた時は落ち込んだお前ら2人を慰めるのに

必死で、俺は泣く暇なんてなかったな、ハハハ……」

「……親父」

「それから先生に会って、いきなり剣の修行なんて始めて、今じゃ俺たちがお前の剣を作ってるんだ。人生、何があるかわからないもん……」

「親父！」

俺の声に親父が我に返ったようにこちらを見る。

「なんなんだよ。急に思い出話なんてしやがって……らしくもない……」

「そうだな……俺らしくない……か」

親父が勝手に吹っ切れたような顔になった。

「……アシュレイ」

「……なんだよ」

「……俺、後一週間持たないんだ」

「……あ？」

親父の言っていることが理解出来ない……したくなかったの方が正しいかもしれない。
い。

「医者に言われてな……末期の肺癌だ。おかげでタバコも取り上げられちまってな」

そう言われてこの最近、親父がタバコを吸っていないことに気がついた。

ふと見れば新しいタバコの箱を開けている程のヘビースモーカーだったのにだ。

「ほ……他の奴らは？」

「……みんな知ってる……お前以外な」

俺以外は知っている。

なんで俺だけ知らない？

「……お前が頑張つてるところに水を刺したくなかったんだ。そして今日、お前は自分が成すべきことを成し遂げた。だから、今言うのが一番だと思つてな……」

「……ふざ……」

親父の胸倉を掴む。

「っけんなあ！」

振り上げた拳を親父に躊躇なく叩きつけた。

よろめいた親父は再び椅子に座るような形で尻餅をつく。

「何が後一週間だ！どうにもならないことをどうにもならない時に言うじゃねえよ！」

「……心配するな。お前の剣が完成するまで死ぬ気はないさ」

「っ！……俺は！そんなことを言いたいんじゃないやねえ！」

再び振り上がろうとする腕を抑えるのに必死だった。

「そんなにヤバイんならなんであんたは病院で寝てないんだよ！」

「……アシユレイ、俺が今から言うことを覚えておけ。今までいろいろお前に言ってきたが、全部忘れてもいい。だがこれだけは忘れるな」

親父が真剣な眼差しで俺を見据える。

一呼吸置いた後、親父が口を開いた。

『目標の無い人生に価値はない』。目標があるから人間は前に進める。そこに到達するっていう確固たる意思があれば、たとえ脚がなくなつて前へ歩いていけるんだ」

「……………」

「……俺の目標はお前に俺の最高の剣を渡して、お前の旅立ちを見送ることだ。その目標は、夢は、もうすぐ終わる。ならここで俺自身も終わるのが丁度いいんだよ」

「……………」

諦めたようにそう言い放つ親父の顔を見ると、無性に腹が立った。

「……勝手にしろ！クソ親父！」

そう口にして、俺は親父の部屋を飛び出した。

それから旅の準備が終わるまでの三日間、親父とは口も聞かないまま。

そんな中、とうとう旅立ちの日がやってきた。

「………本当に行くんだな？」

「ああ」

見送りに来てくれたシアンがそう切り出してきた。

今は工場の前で俺の剣の最終調整を待っているところだ。

「シアン、今までいろいろありがとう！」

「いや、お前は皆の妹みたいなもんだ。こっちこそ楽しかったぜ」

「絶対返ってくるからね！」

「ああ、いつでも帰ってこい。待ってるぜ？」

ダステイとシアンが硬く握手する。

「で、俺の剣は？」

「ああ、そろそろ……」

そう言ってシアンが振り向くと、工場から剣を持った人影が出てきた。

親父だ。

「……………」

「……………ほれ」

親父の顔を見た瞬間、苦虫を噛み潰したような顔をするが、親父は構わず俺に剣を差し出した。

親父の手から剣を奪い取り、それを背負う。

「……………元気でな」

「…………うるせえ」

最後に声だけでも聞かせてやろうと、それだけ言つて歩き出す。

「…………お父さん」

「おつと…………」

ダステイが親父に抱きつく。

親父は少しよろめいたが、ダステイの髪を優しく撫でてやっていた。

「…………バイバイ」

「…………お前も元気でな」

その挨拶が親父との最期の別れを意味していることは親父が一番わかっているだろう。

小走りで駆けてきたダステイが俺の隣に並んだ。

「……………」

最後まで迷った。

「…………親父！」

迷ったが、決めた。

振り返り、親父を呼ぶ。

親父は驚いたような顔をしていた。

「楽しかったぜ。ありがとな」

親父が死ぬとわかってから、ずっと言いたかったこと。意地を張って言えなかったこと。

最後の最後に言えた。

再び歩き出す。

「……行って来い！馬鹿息子お！」

あらん限りの力で叫んだ親父の声が、俺の背を押してくれた。

……親父があつちにいっただのは、その二日後だったらしい。

……

「おねえちゃん！」

切符売り場の外に出ると、さっきの少年がこちらに走ってきているのが見えた。

「どうした？忘れ物でもしたか？」

「えつとね……はいこれ！」

俺の手前で止まった少年が手にしたビニール袋を漁り、その中にある物を手渡してきた。

「……………これは……………」

蚊取り線香のように渦巻き状になったカラフルな飴に棒を刺したお菓子。

所謂ペロペロキャンディというやつだ。

どうやらさつきのお礼のつもりらしい。

「……………嫌いだった?」

少年が不安そうに俺の顔を覗き込む。

どうやら物珍しげに眺めていたのが原因のようだ。

「……………後で返せつつつても知らねえからな」

そう言う少年は花が咲いたように笑い、大きく頷いた後、踵を返して走り出した。

「おい、あんまり急ぐと転ぶぞー?」

案の定少年は走り出して十秒と立たないうちに躓いて転んでしまった。

言わんこつちやない。

だが少年は自分一人で立ち上がり、涙を堪えながらだが、確かにこちらを向いて笑った。

「……………やれやれ」

そう言った時には既に少年はラステーションの街の中に消えていた。

時間も時間だ。

俺も踵を返し、あいつらとの待ち合わせ場所へと歩き出す。

「……親父」

いい加減で、ぶつきらぼうで、頑固で、よく笑って、背中ばかりでかくて。

「……ほんと、でかいよな……」

俺はその大きな背中に、少しでも並べるようになったらどうか。

あの時俺の背中を押してくれた声は、今もまだ俺の心に響いている。

手のキャンディをくるくると回しながらそんなことを考える。

「いたいた、アツシユ！」

「アツシユきーん！」

「こつちだつてばー！」

後ろからあいつらの声が聞こえてきた。

「おう」

振り返り、返事をした。

俺の『目標』は、まだまだ遠くにある。

旅は、まだ続いているんだ。

この旅が終わるまで、俺の心に響くこの声が鳴り止むことはきつとないだろう。

第9話 ネプテューヌ死す!?

「これでラスト!」

切り裂かれたモンスターが光となって消える。

洞窟に立っているのはアシュレイただ一人となった。

「やれやれ、変に苦戦したな……」

剣を背負い、ため息を吐く。

黒い炎が全身を包み、女の姿にもどる。

「まあ、苦戦の原因は汚染化モンスターの大量発生だな」

洞窟の中にアシュレイの独り言が響く。

汚染化。

稀にモンスターが黒く変異し、攻撃性が著しく向上する現象のことだ。

黒い体に血管のように赤い線が走る姿は非常に禍々しく、そしてその姿に見合った戦闘能力を有する。

さらに厄介なのが、モンスターの近くに汚染化モンスターがいると、そのモンスター

まで汚染化してしまう点にあるだろう。

「……にしても変だな」

汚染化自体は決してあり得ない現象ではない。

問題はその数だ。

「この一週間、汚染化モンスターに合わなかった日なんかあったか?」

汚染化はそれこそ、毎日モンスターを狩っているような冒険者でも半年に2、3体確認するぐらいが関の山だ。

それをアシユレイは一週間の間に2桁に到達するかというほど倒して回ったのだ。

「もしかしなくても、強力なモンスターほど汚染化しやすいのか?」

アシユレイは報酬目当てに男の状態で倒せるレベルの敵を狩るクエストを受けている。

だがやはり汚染化モンスターの発生と関係していると考えるのは苦しいものがあった。

「……まあ、考えても仕方ない。戻るか」

最後にそう呟き、アシユレイは出口へまっすぐ歩いて行った。

.....

「……で、帰ったら帰ったでコレかよ……」

コンパの家ではネプテューヌとアイエフが絶賛睨み合い中だった。

視線の間で火花を散らしている。

「コンパ、何があつたかわかるか？」

「それが……わたしもキッチンから戻ってきたらこの状態でしたので……」

「そうか……」

頭をバリバリと掻きながらアシユレイが二人の近くへ。

「で、今日は何がどうしたんだ？」

「聞いてよアツシユ！わたしは絶対グリーンハート様はガチゲーマーだつて思ってるんだけどあいちゃんが一！」

「だからあれは庶民アピールよ！そんなに違くないわ！」

「……頼むから第三者が聞いて理解できるように話してくれ……」

その言葉で頭が冷えたのか、ネプテューヌとアイエフが事の終始をアシユレイに説明した。

「……つまり、この隠しリンクの内容が本人の物かそうでないかで言い争っている」と

「……」

どうやらアイエフが見ていたリーンボックスの女神、グリーンハートのブログの中に隠しリンクが存在し、そこに書いている内容がゲーム用語でびっしりだったのが事の始まりらしい。

「はまじなんてわたしでも知らないような単語を平然と使ってるのが庶民アピールなわけないよー!」

「わたし達が知らないだけでリーンボックスでは一般的な言葉かもしれないじゃない!」

「……コンパ、いつもの頼む……!」

「あんまりケンカしてると、二人のプリンをぼっしゅーとするですよ!」

「すいません、調子こいてました!」

これで喧嘩が止むのもどうかと思う。

アシュレイの顔からはそんな思いがありありと感じられた。

「むー……こうなったら直接リーンボックスに行くつきやないね!」

「望むところよ!」

「す、すごい理由でリーンボックスに行くことになったです……!」

「もう好きにしてくれ……!」

睨み合いを続ける二人の横でアシュレイとコンパがため息を吐いた。

.....

「ここ、ここがリーンボックスの教会です?」

「だな」

リーンボックスに行くことが決まった次の日。

プラネテューヌから船に揺られて半日。

ネプテューヌ達はリーンボックスへとたどり着いた。

子供や老人でも分かりやすいような案内板が各所に設けられており、今回は教会まで迷うようなことはない。

「ラストイシヨンの時みたいに追い返されないとはおもうから、そう緊張しなくても大丈夫だよ」

「だといいですけど……」

「で、アイエフはさつきから何やってるんだ?」

アシユレイに呼ばれ、アイエフが携帯から顔を上げる。

「グリーンハート様のブログを見てるのよ。丁度さつき更新があったから、教会にはいるはずよ」

「いやいやーあいちちゃん。それは夢見すぎだよ。この手のブログは、女神様じゃない別の人々が代わりに記事書いて更新しているって相場は決まってるんだって」

もちろんあの隠しリンクは別だけど、と後に付け足した。

「無責任に人の夢を壊すようなこと言わないで」

アイエフがネプテューヌを睨むと、ネプテューヌは少しバツの悪そうな顔をした。

「ごめんごめん。でもあいちちゃんって普段はクールでかつこよさげな感じだけど、意外と乙女な一面あるよねー」

「……乙女で悪かったわね」

『人に人を否定する権利は無い』ってな。そうやさぐれるな」

そんなことを言いながら四人揃って教会へと脚を踏み入れる。

「こんにちはー！女神様に会いに来ましたー」

「おやおや、これはまた元気なお嬢さんが来たものだ」

余計なほど大きな声で挨拶したネプテューヌを白い髭を蓄えた老人が出迎えた。

「ワシはイヴオワール。当教会に何用かな？」

「女神様に会いに来ただけど、女神様いる？」

「素晴らしく運が無いな、君は。既に今日の面会時間は終わってしまったのだ」

現在午後6時。

確かに面会時間としては遅すぎるくらいだ。

「えー。けどいるんでしょ？ちよつとでいいから合わせてよー」

「ネプ子、過ぎてしまったものは仕方ないわ。また明日来ましょ」

駄々をこねるネプテューヌをアイエフがなだめる。

「あいちゃんこそ諦めていいの!?!女神様がいるかどうかブログの投稿時間で調べるほど会いたかったんじゃないの!?!」

「ちよ、ちよつとネプ子！何もこんなトコロでそんなこと言わなくてもいいでしょ！」

「ねぶねぶは容赦無いですねえ……」

そんなやりとりを聞いていたイヴォワールが笑った。

「それほどグリーンハート様を慕ってくれるとは、仕える身としては嬉しい限りですな。しかし、規則は規則。それに既にグリーンハート様は次の仕事が入っていてな、申し訳

ない」

「こつちの馬鹿が馬鹿言ってるだけだ。あんたが謝る必要なんて無い」

「ちよつとアッシュー！馬鹿馬鹿言わないでよ！馬鹿って言う方が馬鹿なんだよー！」

「馬鹿が馬鹿馬鹿言うな。馬鹿がゲシユタルト崩壊する」

「はいそこまで。そういうことだし、今日は適当に観光でもして過ごしましょ」

アイエフがネプテューヌとアッシュレイを教会の外へ引きずっていく。

「あ、そうだ。イボ痔さん」

「い、イボ痔!？」

「鍵の欠片ってアイテム知らない?わたしたち、探してるんだ」

「ワシは切痔ではあっても、イボ痔ではないわ!」

聞き方がアレだったが、危うく忘れかけていた教会に来た本来の目的をイヴォワールに話した。

「なにか知っていれば、イボ爺さんも教えて欲しいです」

「イボ爺さん!？」

「ちなみに、形はこんな形をしてるんだけど、見たことないかな?」

「……いや、生まれてこの方70年。そのような物は知らぬな」

「いちいちリアクションを取るのが面倒になったのか、イヴォワールが素直に返事を返した。」

「そっかー……」

「しかし、グリーンハート様ならなにか知っておるかもしれん。なにせ、何百年も生きていらっしやるからな」

「何百年も!?!……ってことはグリーンハート様ってBB……」

「やめとけ。俺たちの立場まで危うくなる」

ネプテューヌが言わんとしたことを未然に察知したアシュレイがネプテューヌの口を両手で塞ぐ。

「あいちゃん、ねぶねぶが変なことを言う前にさっさと帰ったほうがいいかもしれないです」

「そうね。では、また明日来ます」

「ああ、待つておるよ」

イヴオワールに見送られながらネプテューヌ達は教会を後にした。

「……おや、来客の方ですか。今日は如何様なご用件で？」

そこにネプテューヌ達と入れ替わるようにフードを被った女が現れる。

「私はルウィーの宣教師、コンベルサシオンと申します……」

アシュレイ達はその女を追いかけることになるのは、これよりもう少し後の話である。

.....

「そういえばリンボックス観光って、具体的には何するの？」

「なら、隣のカフェはどうかしら。紅茶とスコーンが美味しいって評判で、一度行って

みたかったのよ」

「あいちゃんがそこまでいうのなら、わたしも食べてみたいです」

「わたしもわたしも!」

「俺は休めるならどこでもいい」

教会を出た四人は現在リーンボックスの街を散策している。

リーンボックスの街は、文明が発達したプラネテューヌや工場が乱立するラストイシオンとはまた一味違う緑の生い茂る中世の街並みをしていた。

「決まりね。確か、馬車が出ていたはずだから、馬車で行ってみましょう」

「……あ」

アイエフの言葉にアシュレイが声を上げる。

「どうしたの?」

「……この時間、もう馬車は走っていないぞ」

「ええ!? 馬車が走ってないってどういうこと!?!」

「馬車が走る為の街道にモンスターが増えたらしくてな。モンスターの活動が鈍ってる朝方しか馬車は出せないらしい」

「じゃあ、隣町にはどうやって行けばいいですか?」

「歩き、だな」

「そんなあ……」

アシユレイの言葉にコンパががっくりと肩を落とす。

「あいちゃん、どうするです?」

「しようがないわ。それほど時間のかかる距離じゃないし、歩いて行きましよ」

「そうですね。ところであいちゃん。隣町への道はわかるですか?」

「あー……そうだった。馬車が出ていることぐらいしか知らなかったんだ。とりあえず、誰か人に訊いてみましよ」

「お前、肝心な時に抜けてるよな……」

「それなら、愛嬌いっぱいみんなの人気者たるこのわたしに任せてよ!」

三人の前にネプテューヌが無い胸を張りながらそう言い放つ。

「……ねえ、コンパ。このネプ子の自身はどこから来るのかしら?」

「さ、さあですう……」

暫く辺りを見渡した後、アシユレイが口を開いた。

「どうでもいいが、ネプ公。お前って笑うと可愛いよな」

「!?!」

「おお!?!とうとうアツシユもわたしの魅力に気づいちやった!?!」

「ああ、お前は可愛い。というわけでこの辺りにいる奴、誰でもいいから捕まえて来い。」

お前なら出来るさ」

「ふふーん。そこまで言われちゃしようがないなー!ちよつと待つててね!四十秒で捕まえて来るよ!」

そう言うのと、ネプテューヌが弾丸の如くその場を走り去っていった。

「ふう……」

「あ、アツシユ?熱でもあるの?」

「……豚もおだてりや木に登る。後はわかるな?」

「……ああ、そういう……」

辺りに人影が無いことを確認したアシユレイは、上手いことネプテューヌを使いつ走りとした訳だ。

それから2分ほど後、ネプテューヌが一人の女の子を連れて戻ってきた。

「連れてきたよー!」

「はいはい、ご苦労さん。こいつから話は聞いたか?」

「うん。隣町へ行きたいんだよね?」

「ああ、分かるか?」

「隣町へは、この街の南口から出てまっすぐだよ。そんなに道が入り組んでるわけじゃないから、わかりやすいと思うよ。この地図、もうわたしには必要ないからあげる」

「悪いな、助かる」

「……………」

アシュレイが女の子から地図を受け取る。

「……………ん？」

「じー……………」

そして、女の子は何故かネプテューヌを凝視していた。

「どうしたの？ そんなにまじまじと人の顔を見て」

「……………もしかして、ネプテューヌさん？」

「そうだけど……………」

「やっぱり！ うわあ、会えて嬉しいよ！」

「あれ？ もしかして、わたしを知ってる人!？」

「うん。 って言っても、わたしが知ってるのは別の世界のネプテューヌさんなんだけどね」

「別世界？」

そのワードにアシュレイが反応する。

同じようなことを言っていた人物を知っていたからだ。

「お前、もしかしてMAGES. って奴知ってるか？」

「うん、知ってるよ。そういえばまだ名前言ってなかったね。わたし、鉄拳。よろしくね」

「つーことは、俺のことはもちろん知らないよな。俺はアシユレイ。呼ぶ時はアツシユだ」

「よろしく、アツシユさん」

「……じゃ、俺たちはそろそろ行く。気が合えばまたどこかでな」

「地図ありがとね、鉄拳ちゃん!」

「うん。またね、ネプテューヌさん、アツシユさん」

鉄拳と別れたネプテューヌ一行は南口から街を出て、地図を頼りに山岳地帯へと脚を踏み入れた。

「だいぶ歩いたけど、まだ着かないの?」

「わたし、疲れたですう……ちよつと休憩しないですか?」

山岳地帯を歩くこと1時間。

とうとうネプテューヌとコンパが音を上げ始めた。

「地図によれば、もう少しのはずなんだけど……まあいいわ。少し休憩してから行きましょ」

「……アイエフ。無駄に甘やかすのは毒だぞ」

そう言いながらそれぞれが日陰に手荷物を置いた時だった。

「あ、その君たち。ちよつといいかな」

大量の荷物を抱えた男が、まるで示し合わせたように現れた。

「誰だ、あんた？」

「ねぶ？お兄さん、もしかしてナンパ？」

「いえ、ナンパとかじゃなく、ただちよつと話を聞いてもらいたいだけなんです」

「お話、です？」

「ええ。あなたたちは魔王ユニミテスをご存知ですか？」

男は魔王といういかにも仰々しいワードを口にする。

「ユニミテス？」

「いえ、ユニミテスです」

「……魔王ユニミテス、ね。魔王なんてわたしは始めて聞いたけど、コンパは知ってる？」

「だからユニミテスですからね、ユ・ニ・ミ・テ・ス！」

「わたしもバルサミコスさんなんていう魔王さんは知らないです」

「あんたら絶対わざとやってるでしょ!?!もはやミとスしかあつてないよ!?!」

男は三人のノリに振り回されて話がまるで前に進めることが出来ない。

「で、そのソクラテスだかミコミコナスだかなんだか知らないが、それが俺たちに何の関係があるって言うんだ？」

「……もういいです……実は僕、ユニミテスの使いと言いまして、魔王様の布教をしているんです。だいぶ遠回りしてしまいましたが、今日はお嬢さんたちに魔王ユニミテス様の良さを知ってもらおうと声をかけたんです」

ユニミテスの使いと名乗った男は、通りすがりのネプテューヌたちに魔王ユニミテスを信仰させようとしているようだ。

その所業は新手のキャッチセールスと言われても大差ないだろう。

「胡散臭いわね。残念だけど、諦めてちょうだい。わたしたちは魔王ユ何とかなんて興味無いし、ちゃんと信仰している女神様がいるわ」

「はいです。わたしは、パープルハート様を信仰しています」

「……俺は女神だろうが魔王だろうがそんな一文の得にもならないものに興味なんか無いがな」

「……あれ？　そういうえば、ねぶねぶはどうなんですか？」

「わたし？」

コンパに不意に呼びかけられ、ネプテューヌが首を傾げた。

「わたしが信仰するって言ったたら、もちろん、わ・た・し。なんちやってー！」

「……………」

さすがのユニミテスの使いの男もこれには絶句である。

「あ、あれ？もしかして……滑っちゃった？」

「ま、まあまあ、そんな魔王様を邪険にしないで。楽しいよ、魔王崇拜」

「いや、邪険にしているのはあなたなんだけど」

「そうだ！ここで会ったのもきつと魔王様のお導きのおかげ。君たちには特別にこの魔王ユニミテスグッズセット」をあげよう！」

そう言って男は抱えた手荷物の一部をネプテューヌ達に渡しに行く。

「いや、わたしたちそんなのいらなから」

「そう言わずに受け取ってよ。便利な日用品だつて入っているんだよ。ほら君も」

アイエフ、ネプテューヌ、コンパと順番に渡し終わった男が同じようにアシュレイにも荷物を差し出した。

「いらん。失せろ」

「良いから良いから。何だったら、この缶バッチも……」

近づいてくる男に対して、アシュレイの脚が降り上がる。

「失せろ。三度目は無いぞ」

わずか一秒と掛からず、男の喉元にはアシュレイのブーツから伸びた刃が突きつけら

れていた。

「……し、失礼しました〜!」

すつかり白くなった男は脱兎の如くその場から逃げ出していった。

「ああいう奴にはこれが一番だ」

「……アツシユってたまに突拍子も無くともないことやるわね……」

「で、お前らはそれ、どうするんだ?」

アツシユが指すそれとは、アイエフたちが持っている魔王ユニミテスグッズセットなる物のことだ。

「あー、そうだった……どうすんのよ、これ」

「さすがに、捨てていくわけにもいけませんから、お持ち帰りですねえ……」

「はあ……なんでこうも変なのに絡まれないかやいけないのかしら……ってネプ子は何してるの?」

日陰で座り込んでいるネプテューヌにアイエフが声を掛ける。

ネプテューヌの手には先程のグッズセットがあった。

「せつかくももらったんだし、休憩ついでにどんなのがあるか見てみようかと思って」

「どう考えてもいらぬ物しか入ってないと思うがな」

「えーと……マグカップに、脂取り紙……スタンプカード?と……」

ネプテューヌが魔王グッズを順番に取り出していく中、そのうちの一つで手が止まる。

「何これ。えーと……魔王様シチュエーションディスク？……ってあれあれ？」

「どうしたんです、ねぶねぶ？」

「うん。このディスクなんですけど、なんかモンスターが出てくるあのディスクに似てない？」

「なんですって!? ネプ子、ちよつと貸して！」

そう言ってアイエフがネプテューヌのディスクを近くで見ようと近付く。

だが一歩遅かった。

「あわわわわわ！ なんか光だしちゃったんですけどー!？」

「わたしとあいちゃんの紙袋の中も光り出したです！」

「あの男、騙したわね！」

そうこう言っている間にモンスターが姿を表す。

幸い数は少ないようだ。

「ねぶねぶ、変身です！」

「あいあいさー！」

ネプテューヌが光に包まれ、女神パープルハートへと姿を変える。

「早くこいつらを片付けて、教会に報告に戻りましょ。こんなのを街中でばら撒かれたら大惨事よ」

「そういうのは後だ。速攻で仕留めるぞ!」

剣を構え、襲いかかる敵を迎えた。

.....

「デュアルアーツ!」

ネプテューヌが高速の連打を叩き込む。

「痛いのです!」

そこにコンパが圧縮した注射液を射出して援護。

「トドメよ!ラ・デルフェス!」

「スパイラルブレイズ!」

トドメにアシュレイとアイエフの魔法が炸裂。

光の柱を包むように紅蓮の炎が渦を巻いた。

「……だいぶ手こずったわね」

「あの野郎……舐めやがって」

アシユレイがエネミーディスクを片手でへし折る。

「あの男は放っておきましょう。今はこのことを教会に報告にしに行くのが先よ」

「分かってる。急いで戻るぞ」

ネプテューヌ達は踵を返し、元来た道を全速力で戻って行った。

「……これでよかったでしょうか」

「ええ、成功です。きつとユニミテス様も喜んでおられるでしょう」

ネプテューヌ達がいなくなった後、岩陰から先程のユニミテスの使いの男と、リーンボックスの教会にてコンベルサシオンと名乗った女が現れる。

「で、では約束どおりこのスタンプカードにスタンプを！」

「はい、これでよろしいですね？」

「やったー！これでスタンプコンプリートだ！」

「では、早速魔王様抱き枕カバーと引き換えてはどうです？」

「はい！それでは僕はこれで失礼します！」

全ての欄をスタンプで埋めたスタンプカードを嬉しそうに眺めながら男はその場を去って行った。

「フフフ……ネプテューヌ……これで貴様も終わりだ……」

目深に被ったフードの下でコンベルサシオンの口元がつり上がった。

.....

「……これは思っているより深刻かもしれないわ」

次の日、リーンボックス教会のある街まで戻ってきたネプテューヌ達。

その道中、電話を切ったアイエフがそう呟いた。

「どうしたんです、あいちゃん」

「独自の情報網で調べただけで、最近ユニミテスの使いを名乗る魔王信者が増えてい
るらしいのよ」

「やれやれ、アヴニールの次は魔王崇拜か……女神サマって本当に信仰されてるのか？」
立て続けに女神以外の物を信仰している団体の話を知ったアシュレイが皮肉を込め
てそんなことを言う。

「心配しなくても女神信仰が廃れることなんて無いわよ。さ、教会に急ぎましょ」

リーンボックスの街を急ぐこと数分、ようやく教会へとたどり着くことができた。

「やつほー！イボ何とかさーん。またきたよー」

「またお邪魔しますです」

「おやおや、あなた方は確か先程の……」

「……………?」

「アツシユ、どうしたの?」

「いや…………」

不意に解せないような顔をしたアシユレイにアイエフが声を掛けたが、曖昧な返事が返ってくる。

「何か当協会に急用でも?」

「…………急用もなにも、ユニミテスの使いという奴に出会ったわ」

「なんと!」

「それで、信者にならないかって勧誘されて、モンスターを生み出すディスクをもらったです」

「むむっ!? モンスターを生み出すディスクとな!?!…………その話、詳しく聞かせてくれんか?」

「ええ、もちろん」

アイエフがモンスターを生み出すディスクを知った経緯からさつきあつた出来事までを細かく説明した。

「なんと…………そのような危険なディスクがあつたとは…………」

話を聞き終わったイヴオワールが顎に手を添え、唸る。

「あんなもの街の中でばら撒かれたらただじゃすまないわ。だから、すぐにグリーンハート様に伝えて欲しいの」

「……確かに、それだけは避けねばならぬな。早速、グリーンハート様に伝えさせてもらおう」

「そうしてくれ」

「そして、お主らはよくこのことを伝えてくれた。褒美として、ちようど今夜開催されるパーティに特別に招待しよう」

「おおっ！イボっち太っ腹！やっぱり美味しいものたくさん出るの？」

「イボっち!?!」

パーティという単語に騒ぎたがりのネプテューヌが過敏に反応した。

「あ、もしかしてそのパーティって、女神様もきたりするのかな？」

「グリーンハート様は常にご多忙な身。保証はできませんが、もしかしたらご出席なさるかもしれません」

「本当!?!」

「会えるといいですね、あいちゃん」

「では、日が落ちた頃にまた教会に來なさい。ワシが会場まで案内しよう」

「じゃあ、それまで適当にこの街で時間を潰しましょ」

「それなら、ちよつと早いですが、宿を取りに行くです」

「ああ、アイエフさんとアシユレイさんはちよつと別件の用があるので少し残ってもらえますかな」

教会を後にしようとしていたアイエフとアシユレイをイヴォワールが呼び止める。

「わたしとアツシユが？」

「ええ。少し三人だけで話したいことがあります……」

「……ネプ公、お前ら二人だけで宿取ってこられるか？」

「もつちろん！任せといて！」

「頼んだぞ」

ネプテューヌとコンパが並んで教会を出て行った。

その後、教会の奥へと入り、人目のつかないような場所までやってきた。

「……で、話っているのはなんだ？」

「その前にそれぞれに一つづつ確認しておきたいことがあります」

そう言つてイヴォワールがまずはアシユレイの方を向く。

「あなたはグリーンハート様はおろか、女神そのものを信仰していないとか」

「……女神なんか居なくたって俺は生きて行ける。実際俺は今まで生きてきたしな」

「……今はひとまず置いておきましょう。次はアイエフさん」

続けてアイエフ。

「あなたはグリーンハート様を信仰しているものの、この国の者ではありませんね」

「それがどうしたっていうの？」

「それどころか、どの国にも所属していない根無し草でもある。違いますか？」

「……調べたのね」

「失礼ながら」

「そういえば、昔聞いたことがあるのを思い出したわ。リンボックス教会の長は他国の信者どころか、例えばグリーンハート様を信仰しても自国民以外は認めない、って」
「贅沢なことって」

「……で、わたしたちをどうするの？ 異端の者として始末するつもり？」

「やるってんなら、最低限の抵抗はさせてもらうぜ？」

「本来ならそうしていただろう。だが、今はこの奇妙な巡り合わせに感謝しましょう」

アシユレイが背中 of 剣に手を掛けるが、イヴオワールは平然とそう言った。

「……どういう意味？」

「あなた方の連れにいる少女……ネプテューヌを始末してもらいたいのです」

「なっ!?!意味分かんないわよ!?!どうしてグリーンハート様を慕ってる教会がネプ子を始末してほしいなんていうのよ!?!」

激しく反発するアイエフに対して、あくまで冷静にイヴオワールが話を続ける。

「あの者はグリーンハート様だけでなくゲームギョウ界にとつても災いをもたらす者。遅かれ早かれ、グリーンハート様ご自身が制裁をお加えになるだろうが、私は女神様に御手を汚すような真似はしてほしくない」

「だから代わりに始末しろってか？」

「見事ネプテューヌを亡き者に出来たなら、あなた方をリーンボックスの正式な一員として受け入れてくれるだろう」

「……わたしが、リーンボックスに？」

「ええ。今まで根無し草だったあなたはさぞかし自分の国が欲しいことでしょう。それを報酬として与えると言っているのです」

「……やれやれ、ここに来た時にテメエから感じた違和感はこのせいかな」

イヴオワールの話を聞き終わったアシユレイがそう言った。

冷静を装っているが、その顔からは怒りがありありと感じられる。

「ネプ公が災いをもたらす？ だったら証拠を見せろ。御手を汚してほしくない？ んなのはテメエのわがままだろうが。リーンボックスの正式な一員？ それこそお笑いものだ。一緒に旅を続けてきた仲間を……友達を殺してまでテメエの国の一員になんざなりたくないね」

「ちよ……ちよつとアツシユ……」

「俺は降りる。俺やネプ公を殺そうってんなら……腕の一本は覚悟しておくんだな」

勢いのまま言いたいことをぶちまけたアシュレイは早足に教会の外へと出ていった。

「……あなたは、どうしますか?」

「……確かにわたしは自分の国が欲しいわ。けど、だからってネプ子を殺すなんて……」

アイエフは気付いていた。

さつきアシュレイが言ったことは自分に対しても向けられていることを。

もちろん、アイエフを押し留めるものがそれだけという訳ではないが。

「なら、なおのことこの毒薬を受け取るのです」

そう言っつてイヴオワールが懐から小瓶を取り出した。

中にはいかにもな毒液が詰まっている。

「この毒薬は邪なるもののみ効果を發揮し、清き者には水のように無害とされているのです」

「な、なによその妙に都合のいい毒薬は……」

「あなたがあの者を清き者だと信じるのであれば、堂々と飲ませればいいだけの話です」

「……わたしも断つたら?」

「例え国民に不安を与えてしまおうが、邪の者の疑いがある者は軍隊を使ってでも排除するだけじゃ」

イヴォワールは堂々とそう言い放った。

「……あのイボなんとかめ。あんな風に脅されちゃ、嫌でも毒薬を受け取らなきゃいけないじゃない」

イヴォワールと別れたアイエフが教会を大股でズンズンと進んでいく。

その手には渡された毒薬が握られていた。

「……それにしてもこれ……どう見ても毒、よね。こんなの誰が飲んでも死ぬに決まってるじゃない」

毒薬を目の前で軽く振ると、気味の悪い泡が次々と発生する。

見ているだけで寒気が走り、アイエフはその毒薬をコートのポケットに乱暴に突っ込んだ。

「はあ……まいったなあ。どうすればいいのよ……つて、考え事してたら迷ったみたいね」

先ほどまでイヴォワールと話していた部屋は教会のかなり奥まったところだった。

だだっ広い教会の通路に立ち尽くす。

「えー……と、たしかこんな扉のある部屋を通って来たような……おじやましまーす

……」

曖昧な記憶を頼りに、アイエフが余り期待をせずに扉を開けてみる。

「ふ……ああー……ん。ま、眩しいですわ……もう、誰ですの？せつかく気持ちよく眠っていたのに、邪魔をするのは……」

扉を開ける音で目が覚めたのだろう。

長い金髪に緑のドレスを着た女性が目を擦りながらベッドから起き上がった。

「あ、すみません。今閉めます……」

そう言つてアイエフが大人しく立ち去ろうと扉を閉める。

「……つて、ええっ!?も、も、もしかしてグリーンハート様!?!」

閉め切る前にもう一度扉を開いて叫んだ。

「……あら?女の子の、声?」

その金髪の女性はこのリーンボックスの女神、グリーンハートその人だった。

……

「えっと……じゃあ、そろそろ帰ります」

「あら残念。もう少しお話をしたかったですけど……仕方ありませんわね」

あれから30分ほどたっただろうか。

アイエフとグリーンハート改め、ペールはお互いのメールアドレスを交換するほど仲良くなっていた。

と言つても、積極的に距離を詰めるペールに押されるまま友達関係になったのが事実だが。

「また、遊びに来ます」

「ええ。またいらしてくださいな。あいちゃんなら、24時間、いつでも歓迎いたしますわ。その時は、もっと美味しいお茶を用意しておきますわね」

そう言いながら顔の横で手を振るペールに、アイエフは軽く会釈をしながら部屋を出ていった。

.....

「そんな訳でパーティ会場にやって来ましたの巻ー!」

「元氣だな……」

そしてその夜。

ネプテューヌ達四人はリンボックス教会にある大広間へと脚を踏み入れた。

「美味しそうな料理がいっぱいです!」

「こんなにあると流石に何を食べるか迷っちゃうよね!」

ネプテューヌとコンパがところ狭しと並べられた料理を前にはしゃぐ。

そんな中、アシュレイがアイエフへ近寄り、二人にしか聞こえないような音量で話し始めた。

「……やるのか?」

「……!」

言葉は短い、そこにはアシュレイの不信感を感じることができた。

「……しないわよ。ネプ子もあんたも、わたしの友達よ。二人を裏切ったりしないわ」

「……だといいな」

そう話していると、四人にイヴオワールが近づいてきた。

手には料理皿を持っている。

「おやおやみなさん、楽しんでいますかな?」

「……今来たばかりだ」

「ちようどこれから楽しむところだよ」

ネプテューヌの後ろにアシュレイが立つ。

ネプテューヌはその意図に気付いていないが、それは紛れもなくネプテューヌを守る

ためであった。

「そうだ。せっかくだからオススメの料理教えてくれないかな？ やっぱ旅先の料理は地元の人にオススメを訊くのがセオリーだと思うんだ、わたしは」

「おお、でしたらちようどオススメの料理を持つてきたところじゃった」

そう言つてイヴオワールが空いているテーブルに自分が手にしていた料理を置く。

「この『山越シエフ特製・トリユフとフォアグラのキャビア添え』はどうじゃ？ 世界三大珍味を惜しげもなく使つた、リンボックスでしか食べられない超高級料理じゃ」

「さすがリンボックス！ まさに高級食材の三味一体だね！」

「三位一体、な」

気を張っているアシュレイに対し、相変わらずネプテューヌはマイペースだ。

「じゃあ、さつそくこの大きいのをいただきまーす！」

そこでアイエフは気がついてしまった。

イヴオワールは確かに毒薬を渡してきた。

その毒薬は今もポケットに入つたままだ。

だがもし、毒薬が自分が持つている物だけでは無かつたとしたら？

ネプテューヌが食べようとしている料理はイヴオワールが運んできた。

トリユフとキャビアの黒は毒薬を隠すには良いカムフラージュになるだろう。

「……っ！ネプ子！食べちゃ駄目！」

アイエフが叫ぶ。

「もぐもぐもぐ……ごくん」

だがそう言った時には既に料理はネプテューヌの喉を通っていた。

「ん？どうしたの、あいちゃん？もしかして、わたしが食べた塊狙ってた？けど、残念！
もうお腹の中なんだなーこれが！」

ネプテューヌがいつものように戯けてみせる。

「……あ、あれ？もしかして、わたしの勘違いだったの……？」

だがそこでネプテューヌの体が傾いた。

近くにいたアシユレイが反射的に体を支えた。

「ネプ子!？」

「ねぶねぶ、急に倒れてどうしたんですか!？」

「おい、ネプ公！しっかりしろ！」

三人が呼びかけるが、ネプテューヌは青い顔で荒い息を吐くばかりである。

「……イボなんとか！あなたね、ネプ子に毒を盛ったのは！」

「毒……だと!？」

ネプテューヌをコンパに預け、アシユレイがゆつくりと立ち上がる。

視線の先にはイヴォワールが当然のように立っていた。

「そのとおりです……しかし、これで彼女が邪の者だと証明されました」

「邪の者って……あんなの誰が飲んでも猛毒に決まってるじゃない！」

「者共、今すぐにこの邪の者四名を捕まえるのだ！こやつらはグリーンハート様に仇なすユニミテスの使いじゃ！」

「はっ！イヴォワール様！」

イヴォワールの声に何処からともなく槍を携えた僧兵が四人を取り囲む。

「なっ!? 違うわーなに勝手な事言ってるのよ!？」

「……言っても……無駄だ」

アシュレイが背中の中の剣を掴み、その場に振り下ろした。

剣が突き刺さり、床のタイルを砕く。

「……イボジジイ……残りの人生、五体満足で生きられると思うなよ……！」

剣を引き抜き、周りを取り囲む僧兵に切っ先を突き付け、あらん限りの殺気を放ち、威嚇する。

「死にたい奴から前に出ろ！その首、順番に跳ね飛ばしてやるよ！」

そう言いながらアシュレイが一步踏み出すと、僧兵達が二歩下がった。

「アッシュ……」

「アイエフ、コンパ。二人でネプ公を抱えて逃げろ。俺の事はいないものと思え」

「……………アツシユ、ごめん!」

アシュレイの目の前に回り込んだアイエフが肩を掴み、アシュレイの腹にニーバットを打ち込んだ。

アシュレイが剣を取り落とし、その場に崩れ落ちる。

「……………かはつ……………ア……………イエフ……………テメエ……………」

「……………ホントにごめん……………」

肺に残った空気を絞り出すように喋るアシュレイがアイエフを睨んだ。

アイエフがアシュレイの側に座り込む。

「こうするしか、あんたを止める方法が思いつかないの……………」

直後、首筋に鈍い衝撃が走り、そこでアシュレイの意識は途切れた。

第10話 侵食する影

「……………う……………ぐ……………」

「アツシユさん、目が覚めたですか？」

アシュレイが目を覚ますと、目の前には薄暗い牢屋の風景が写し出された。

「ここは何処だ……………時間は？」

「リーンボックスの牢屋よ」

「わたしたち、捕まっちゃったです……………」

「時間は……………パーティが始まったのが9時だから、多分12時ぐらいよ」

あれからアシュレイ達はリーンボックス教会に取り押さえられ、地下牢に投獄されている。

気絶していたアシュレイは知るよしも無かったが。

「……………ネプ公……………」

今まで朦朧としていた意識が一瞬で覚醒する。

跳ねるように起き上がり、あたりを見渡すと、探している人物はすぐに見つかった。

近くに駆け寄り、冷たい肩を揺らす。

「ネプ公！おい！起きろ！」

「あ、アツシユさん！揺らしちゃダメです！今は安静にしてあげてくださいですう！」

「……アイエフ！なんでだ！」

「……今は、言いがかりよ。でもあそこであんたが暴れたら、それこそもうどうしようもなくなるじゃない！」

「……ああ！クソ！」

牢屋の扉に向かって魔法の火炎を放つが、扉に触れる前に炎がかき消えた。

もちろん扉には焦げ跡一つ付いていない。

「無駄よ。この牢屋全体に強力な魔力結界が張られているわ」

「ぐ……出せ！出しやがれ！」

ならばと扉を全力で蹴りつけるが、天井からパラパラと砂煙が落ちてくるだけだ。

「アツシユ。やめなさい」

「うるせえ！早くしないとそいつが……！」

「アツシユ!!」

狭い牢屋にアイエフの怒声が響く。

「……ああ！クソ！」

目が覚めてから何度目になるかわからない悪態をつきながら冷えた壁を背にアシユレイが座り込んだ。

「アツシユさん……」

「あんた、ネプ子が倒れてから変よ！腹が立つてるのはわたしだって同じよ！でもだからってあんたのは明らかに異常だわ！」

「……なんでもねえよ」

「……何か理由があるんじゃないの？」

「……」

アイエフの言葉にアシユレイの頭が項垂れる。

その行動はアイエフの質問に対する回答としては十分過ぎた。

「……わたし達、アツシユの事を何も知らないわ……だから、教えてくれる？」

「……」

「……」

「……今から三年前だ……」

暫く黙っていたアシユレイだが、やがてゆつくりと口を開いた。

「俺はその年に旅を始めた……」

「……」

「……その頃俺には連れが居た。そいつは大事な仲間で、かけがえのない親友で、愛すべき……家族 だった」

「……だった……？」

アイエフの言葉にアシュレイの口角が釣り上がる。

その笑みはアイエフ達には酷く悲しげなものに見えた。

「回りの迷惑なんざちつとも考えねえ、他人を振り回しといてケラケラ笑ってるような奴だ」

「……アツシユ……もしかして……」

「……死んだよ……一年前……俺の目の前でな……」

「っ……」

アシュレイが目を掌で覆い隠す。

「……間違ってるのはわかってるさ……だがどうしても、どうやっても……あいつの影が、ネプ公と重なっちゃまうんだよ……」

「……アツシユさん……かわいそうです……」

「……俺は、二度と俺の目の前で仲間を……友達を殺させない事を誓った……ネプ公を助けるためにも、こんなところでのんびりしている訳にはいかないんだよ！」

言いたい事を言い終わったアシュレイが再び立ち上がり、扉の前に立った。

「……荒れていますね」

「っ!？」

アシユレイが扉から素早く距離を取る。

「おや、私の声を忘れましたか？まあ無理ありません。何せ三年ぶりですし、ね？」

「その声……その喋り方……!」

パチリ、と音が鳴った。

ゆっくりと扉が開く。

「…… 그레이……さん？」

「久しぶりですね。アツシユくん」

白い髪にスーツを着、顔には笑みを貼り付けた男がそこに立っていた。

「 그레이さん、どうしてここが……いや、どうしてここに？」

……

現在アシユレイ達はリンボックス教会の中を 그레이の先導の下、歩いていた。

ネプテューヌを背負ったアシユレイが疑問を投げかけるが……。

「付いてくれればわかりますよ」

その一点張りで話が前に進むことはない。

「……ねえ、アツシユ……あのグレイって奴、本当に信用できるの?」

「……正直、わからん。昔からあんまり何を考えているのかわからないタイプの人間だったしな」

「アツシユさんとグレイさんはお知り合いなんですか?」

「昔、俺に色々教えてくれた先生役だ。一般常識から剣の修行まで全部のな」

そんな事を話していると、グレイが一つの扉の前で立ち止まった。

扉を丁寧に三度ノックする。

「お客人を連れてきました。入って大丈夫ですか?」

「ええ、構いませんわ」

部屋の主のものと思われる声を聴き、グレイが扉を開き、部屋の中へ入っていった。

「嘘……さっきの声……この部屋ってまさか……!?!」

続いてアイエフが慌てたように部屋の中へ駆け込む。

「またお会いしましたね、あいちゃん」

「ベール……様!?!」

その部屋は昨日、アイエフが偶然訪れたベールの私室だった。

「……誰だ、あんた?」

「あいちゃん。お知り合いですか？」

「え、ええ……この人はベール様……リーンボックスの女神、グリーンハート様その人よ」

「め、女神さんですう?!」

アイエフの言葉にアシュレイとコンパの二人が焦りを隠せなくなる。

目の前にいるのが女神グリーンハートなら、自分達を投獄した教会の大將が目の前にいるということと同じだからだ。

「聞いてください、ベール様！誤解なんです！ネプ子もわたし達もただ……!」

アイエフが自分達にかけられた濡れ衣をなんとかしようとしてベールに掛け合うが、それをベールは口に立てた人差し指を置いて言葉を遮った。

「皆まで言わずとも、あいちゃんが牢屋に入れられるような人じゃないのはわかっていますわ」

「ベール様……!」

「詳しい話をお聞かせくださいな。お茶とスコーンぐらいならご用意できますわ」

.....

「とりあえず、彼女はベッドに寝かせましたけど……まさか、わたくしの知らないところでこんなことになっていたなんて……」

事情を聞いたベールが申し訳なきように項垂れる。

「どうやらこの一件はイヴォワールの独断によるものようだ。」

「……で、どうして 그레이さんが リーンボックスの女神サマと?」

「私ですか?」

窓際で紅茶を啜っていた 그레이がアシュレイに呼ばれて顔をあげる。

「普段何をしているかわからない人物である 그레이が地下牢に現れたのはどうとでも説明が付く。」

「だがアシュレイにはどうしても 그레이とベールの接点だけがわからなかったのだ。」

「実は私、アツシユくんとの連れの少女……ネプテューヌさんの暗殺を頼まれました」

「……イヴォワールですか?」

「ええ、もちろん。毒殺では服用までの過程に確実性がありませんからね」

「驚くことに 그레이は秘密裏にネプテューヌの暗殺依頼を受けていたようだ。」

「リーンボックスでクエストをしていたら、急に呼び止められたんですよ。ゲームギョウ界に災いをもたらす存在と言われれば、興味も湧くじゃないですか」

「つまりは興味本意って訳ですか……で、なんで女神サマと?」

「実は待ち伏せしていた場所で偶然ベールさんと鉢合わせしましてね。どうも話が食い違うので独自に調査したところ、面白いように不自然な箇所が出てきまして、はい」

「それで、その女神サマと協力体制になった、と……」

いけしやあしやあととんでもないことを口にし続けるグレイにアシユレイはため息を吐くばかりだ。

「なんでベール様はそんなところに？」

「退屈なパーティなんていつものように欠席して部屋で積みゲーを崩そうと思っていたのですが、あいちゃんが来るとわかってこっそり裏口から参加しようと思っていたらばったり……といった具合ですわ」

「そ、そうですか……」

「……グレイさん」

「はて、なんででしょう？」

「ネプ公……こいつが毒にやられてるんです。どうにか出来ませんか？」

ネプテューヌは以前青い顔をしており、体温も順調に下がってきている。

「……流石に症状を見ただけではどんな毒かはわかりませんね」

「あ、それなら……！」

そう言ってアイエフがコートのポケットから例の小瓶を取り出した。

「アイエフ……お前それ……」

「勘違いしないでよ？あのイボなんとかに無理矢理渡されて、こつちも処理に困つてたんだから」

グレイがアイエフから毒薬を受け取り、暫く見つめる。

「……………」

「何かわかりました？」

「……………ええ。この毒はかなり古い時代の物のようですね」

毒の種類が判明したらしく、グレイがその解説を始めた。

「この毒は服用後、速やかに全身に拡散。その後、体細胞を緩やかに侵食破壊していく非常に凶悪な毒です。心拍、体温の低下、頭痛や嘔吐、最終的には体の麻痺、皮下出血を伴い、死に至る、といった症状ですね。毒名は……………」

「そんなことはどうでもいいんです！どうすれば助かるかだけ教えてください！」

「……………この世の毒には全て解毒剤があります。可能性はゼロでは無いですが、解毒剤の生成方法までは知りませんねえ……………」

「嘘だろ……………」

グレイの言葉にアシュレイの顔が青くなる。

「……………諦めるのはまだ早いですわ」

「……なんだって？」

先ほどまでパソコンを弄っていたベールが不意に口を開いた。

「その毒の解毒剤を作る方法がありますわ。と言っても、作るにはリーンプボックスの秘境に棲むモンスターの素材が必要ですけど」

「知ってるのか!？」

「ええ。と言っても、先ほど教えてもらったばかりですけどね」

「……は？」

ベールの言葉の中にあつた不自然な箇所のアシユレイが突っ込む。

「ついさっき、グレイさんがおっしゃっていた情報を元に、匿名掲示板で質問してみましたの。偶然専門家の方が居て、親切に解毒剤の材料と作り方を教えて下さったのですわ」

「……………」

「あいちゃん……もしかしてベール様って……」

「ええ、ガチのゲーマーよ」

ともあれ、これで情報は揃った。

「この毒は服用から死に至るまで一日を要します。調査の手間を考えてもまだ時間はありますし、暫く仮眠をとっては如何です？」

「ミイラ取りがミイラになったらそれこそおしまいよ。グレイの言う通り、少し休みましょ」

「賛成です！」

「でしたら、是非ともわたくしの部屋で休んで下さいまし」

「……ネプ公、もう暫く耐えろよ……」

タイムリミットまで、後20時間。

「さて、全員起きましたわね」

仮眠を取り、全員が起床したのは朝五時。

現在には出発の最終確認をしているところだ。

「早速出発したいところだが……」

「どうしました？アツシユさん」

「……コンパ。お前はグレイさんとここに残って欲しいんだ」

「ええ!? わたしもねぶねぶを助きたいです！」

アシュレイの突然の言葉にコンパが戸惑うが、アシュレイは首を横に振る。

「何も足手まといだから来るな、なんて言わない。今のネプ公はお前にしか任せられないんだ」

「でも……」

「私からもお願いします。ほら、服を着替えさせたり汗を拭いたりは私じゃ出来ませんしね？」

「頼む……」

「……ひとつ約束して欲しいです」

コンパが真剣な眼差しでアシユレイ達を見る。

「絶対に、素材を持って三人無事で帰ってくるです！」

「……言われなくてもわかってる」

「ええ」

「当然ですわ」

それを聞いたコンパがにっこりと笑った。

「……さあ、行くぞ！」

「行つてらっしゃいますうー！」

「お気を付けてー」

コンパとグレイに見送られ、三人はボールの部屋を出て行った。

「……行っちゃいましたね」

「ああは言いましたけど……やっぱり心配です……」

扉が閉まった直後、コンパの表情が一気に暗くなってしまう。

「きっと大丈夫ですよ」

「どうしてわかるのですか？」

「……さあ？ どうしてでしょう？」

タイムリミットまで、残り15時間。

……

「おらよー！」

アシユレイが目の前のモンスターを切り裂く。

これで周囲のモンスターは一掃できたようだ。

「くそ……敵の数が多すぎる」

「ここはリーンボックスでも秘境中の秘境。観光客はおろか、腕の立つ冒険者でさえほとんど近付かない場所ですわ」

「人の手が入っていないのは当然か……」

息を整えつつ武器をしまい、再び奥へと歩き出す。

足を踏み入れてから立て続けにモンスターに襲われ、ペース配分を意識するだけで精一杯な状態が続いていた。

「ここはモンスターにとつても居心地のいい場所みたいね。幾つか巣みたいなのも確認できたわ」

「ですが、着実に前へ進んでいますわ。もうすぐ目的のモンスターが……」
そう言っている三人に大きな影が覆いかぶさる。

「噂をすれば……ですわね」

「こいつか……」

三人の頭上を巨大な船のようなものが飛んでいた。

よく見ればそれにはヒレや尻尾が付いており、暫くしてようやくそれが巨大なクジラだということに気がついた。

モンスターはこちらに気がついていないのか、そのまま飛び去ろうとする。

「逃げんじや……」

黒い炎に包まれ、男へ変身したアシユレイが右手をクジラに向ける。

「ねえよー！」

魔法陣を展開し、そこから火球を放つ。

火球が腹に命中し、こちらに気付いたクジラがゆつくりとこちらを振り向いた。

「ブオオオオオオ！」

「ようやくその気になったか……来るぞー！」

クジラが吠えながらアシュレイに突進を仕掛けてくる。

「よつとー!」

アシュレイがスライディングでクジラの腹の下に潜り込み、突進を回避した。

「アイエフ! ベール!」

「承知しておりますわ! シレットスピーアー!」

「魔粧・煉獄!」

突進の隙を突いて放たれた二人の魔法がクジラに命中する。

だが倒すには至らない。

「流石にタフだな……だったら!」

アシュレイの左腕から鳶が伸び、クジラの尾ビレを絡め取った。

「ブオオオ!」

それを嫌がるクジラが尾を振り、引き剥がそうとする。

「じつとしてろつての! ボルトストリーム!」

鳶を線とし、魔法の高圧電流がクジラを貫いた。

動きが止まる。

「それで良い!」

植物の腕を操り、宙に浮くクジラへ飛んでいく。

「おおおおお！」

そのまま剣を背に突き立て、頭部に向かって駆ける。

「ぜえい！」

クジラの頭部を踏み抜き、飛び上がると同時に体を捻り魔法陣を展開。

「ウインドブラスト！」

クジラの頭上から暴風の塊をぶつけ、地面に叩き落とすことに成功した。

「ダーズリンローテ！」

「真魔烈皇斬！」

そこにアイエフとベールの二人が連続攻撃を浴びせる。

「こいつで……！」

アシユレイの剣を炎が包む。

「消えろおおお！」

炎で作られた特大の剣を振り下ろし、クジラを一文字に切り裂いた。

光を放ち、クジラが消える。

その光が収まると、そこには小さな結晶が落ちていた。

「……これが？」

「ええ。これが解毒剤を作るのに必要な森のエキスの結晶体ですわ」

「アイエフ、時間は？」

「大丈夫。十分間に合うわよ」

「そう……か……」

そう言つて女に戻つたアシュレイがふらつき、そのまま尻餅を付いた。

「ちよつとアツシユ、大丈夫!？」

「……足がふらついただけだ」

剣を地面に突き立て、ゆっくりと立ち上がる。

「顔も青いですわよ？無理をなさらないで下さい」

「そんなことより、目的の物は手に入れたんだ。急いで戻るぞ」

「……もう」

アイエフがアシュレイの手を取り、それを肩に回すように掛ける。

「お前……」

「あの時のお詫びよ。普段頼りっぱなしなんだし、こんな時ぐらい甘えてちょうだい」

「……わかつたよ」

「べール様、道中頼めますか？」

「ええ。他ならぬあいちゃんの頼みとあれば、当然承りますわ」

三人が森の出口へと歩き出す。

「……とんだお人好しだよ、お前らは」

「あんたも人のこと言えないでしょ？」

タイムリミットまで、あと12時間。

.....

「戻ったわよ」

「おかえりなさいです！」

ベールの部屋に戻ると、早速コンパが出迎えに出てきた。

「ネプ子はどう？」

「症状は進行していませんが、まだ生きていますよ」

アイエフの質問にネプテューヌの様子を見ていたグレイが答える。

「で、目的の素材は手に入りましたか？」

「ええ、もちろんですわ」

「時間が無い。急いで解毒薬を作るぞ」

「コンパさん、お願い出来ますか？」

ベールに呼びかけられたコンパが不意に曇った表情になった。

「コンパさん？どうかしましたか？」

「……わたし、薬剤師さんじゃないので……薬の調合はできないんです……」

「それは困りましたわね……医療の分野ではコンパさん以外に頼れる方がいませんのに……」

「グレイさんはどうなんですか？」

「私も毒の種類はわかりませんが、調合をしたことはありませんね」

手をひらひらと振りながらグレイも否定の意を示す。

「そういうことだから、お願いコンパ。頼れるのはあなたしかいないのよ」

「けど……」

「……えらく歯切れが悪いな。何かあるのか？」

「……」

アシユレイの言葉にコンパが俯いてしまった。

暫く悩むような間を置いた後、コンパがゆっくりと口を開く。

「……じつはわたし、クラスじゃ落ちこぼれなんですう……」

「落ちこぼれ……ですか？」

「勉強も実習も苦手で……クラスのみんなと比べるとダメダメなんですう……だから……こんな大切なこと、わたしがやつちやダメなんです」

そう言ったコンパはいつの間にか目に涙を浮かべており、その姿はとても苦しそうに見えた。

「……なあんだ、そんなことか」

だからこそ、アイエフはそう言ったのだろう。

「何事かと思いましたが、そんなことでしたのね」

「……え？」

「はあ……」

ため息を吐いたアシュレイがコンパの前に立つ。

「誰もお前一人に責任全部被せる気なんざねえよ」

「そうですわ。わたくし達も可能な限り協力しますわ」

「だからコンパはわたし達に指示でもアドバイスでも、知っていることを教えて？」

「私も好きにこき使って構いませんよ」

アシュレイがコンパの頭を優しく撫でた。

「背負うものは……みんな同じだ。全員でネプ公を助けるんだ」

「……はいです！」

コンパの目から涙が溢れるが、それは少し前とは真逆のものようだ。

「さ、コンパ！何でも言って！」

「……じゃあ、誰か試験管……無ければコップを沢山持つてきて欲しいです！」

「わたくしが探してきますわ！他に必要なものは？」

「えーつと……結晶を粉末にするので、すり鉢とすりこぎ……後、いらぬ紙と計量器が必要ですよ！」

「べール様一人じゃ持ちきれないし、わたしも行きますよ！」

「では、私も着いて行きましようかね……」

「……もう少しだ。耐えろよ！」

タイムリミットまで、残り一時間。

……

「これで……」

管に吸い上げた液体をコップの中の毒薬に数滴垂らす。

コップを軽く振り続けると、紫色の毒薬が瞬く間に無色透明の液になった。

「……で、できたです！これでねぶねぶを助けられるです！」

「苦戦するかと思つてたけど、案外簡単に作れるのね」

「何時の時代も、知恵を絞るのは先を行く人です。この解毒薬を発明した人に感謝する

ばかりですね」

「なんだっていい。これ以上苦しい思いをさせる前に早く飲ませるぞ」

コンパが完成した解毒薬が入ったコップをネプテューヌに差し出す。

「さあ、ねぶねぶ。一気に飲むですよー」

「んんー……」

ネプテューヌの体を半分起こし、口元にコップを持っていくが、ネプテューヌはそれから逃げるように顔を逸らした。

「……飲むのを嫌がってますわね」

「作っている時も相当な匂いがしましたし、きつと味も苦いんですよ」

「部屋中薬品の匂いにまみれるほどですしねえ。窓でも開けましょうか」

「好き嫌いは駄目です、ねぶねぶ！口を開けるです！」

コンパがそう言うが、やはりネプテューヌは嫌がって解毒薬を飲もうとしない。

それを見ていたベールが閃いたように手を叩いた。

「そうですわ！こういう時は、口移しで飲ませるに限りますわ！」

「く、口移し!?!」

「ええ。まるで王子様のキスで眠りから覚めるお姫様のようにロマンチックではなくて？」

「……で、ベールさん。その王子役、誰がやるんですか？」

あ、もちろん私はパスで、と付け加えたグレイの言葉に全員が異様な空気に包まれた。

「さ、流石に口移しはちよつと……」

「わたしもそれはちよつと早いかなーと……」

「わたくし的には、コンパさんとネプテューヌの口づ……もとい、口移しが良いかと思いませんわ」

「な、なんでわたしなんですか!？」

「あら、嫌ですか？ 仕方ありませんわね……ではあいちゃんの口移しで我慢いたしますわ」

「こ、今度はわたしですか!？」

「さあさああいちゃん。ぐいっつとー」

ベールがコンパの手から受け取った解毒薬入りのコップをアイエフに差し出す。

困っているアイエフとは対照的にベールは非常に楽しそうな顔をしている。

「あー……えー……?」

「さあ。さあさあー!」

「……しやくさいー! よいせー!」

ベールの腕からコップがひったくられ、それをアシユレイが一気に口に含む。

そしてその勢いを殺さぬままアッシュレイがネプテューヌの顔を掴み、そのまま二人の口が重なった。

無理矢理舌で口を開き、そこに口の中の解毒薬を流し込む。

「ん…………んく、んく…………」

ネプテューヌは一瞬抵抗したが、既に喉を伝っているそれから逃げることなど出来ず、喉を鳴らしながら解毒薬を飲み込んだ。

「…………ふあつ…………けほつ…………につが…………酷い味だな…………」

「あ…………アッシュユさん…………？」

「あ、あんた…………」

「…………んだよ…………」

アッシュレイが何時ものしかめっ面を浮かべながら振り返ると、口を開けたまま固まるアイエフとコンパ。

その後ろにニコニコ、あるいはニヤニヤと言う擬音語がピツタリの顔をしたボールとグレイが立っていた。

「いやはや、アッシュユくんも日々成長しているのですねえ…………」

「ええ、美味しく頂かせてもらいましたわ」

「時間がねえつてのにモタクサしてるからこうなったんだろう…………」

そう言うアシュレイの顔は少し赤い。

「……おい、ネプ公。いつまでも寝てねえでさっさと起きろ」

「うー……ん」

アシュレイが肩を揺らすと、ネプテューヌが不機嫌そうに唸った。

その顔は明らかに先ほどより回復しているように見える。

と、アシュレイがネプテューヌの顔を見つめていると、不意にネプテューヌの目が一気に入いた。

「ネプテューヌ、ふつかー……!」

岩同士がぶつかったような音が部屋に響く。

「いってえー!」

ネプテューヌが勢い良く起き上がるとした所、前かがみで顔を見つめていたアシュレイに予想外の頭突きをしてしまったのだ。

「ちよつとアツシュ! せつかくわたしが盛大に復活をアピールしようと思ったのに! 邪魔しないでよー!」

「周りも確認せずに急に起き上がる馬鹿があるか! ……つたく……心配して損した気分だぜ……」

ネプテューヌが打ち付けた頭を摩りながら改めてベッドから起き上がる。

「はあ……あんたらは起きたら起きたですぐそれなのね」

「でも、いつものねぶねぶだつてことは良くわかつたです！」

「あ、コンパにあいちゃん！よく覚えてないけどごめんね、わたしが迷惑かけちゃつたみたいで」

「あら？わたくし達にはお礼はありませんの？」

「……ええ……つと……この人たち誰？」

アシユレイ達の下に、欠けていた喧騒が戻つてきた。

「……というわけで、ねぶねぶを助けるのをベールさんたちが手伝つてくれたんです」

「いやあー、まさかわたしとしたことが毒殺されかけるとは面目ない。これじゃあ主人公失格だねー」

「これに懲りたら今度からはもつと身の周りに気を張ることだな」

毒で苦しんでいる間、記憶が曖昧だったネプテューヌにベールやグレイの事を話した。

そんな時、アイエフの顔が不意に沈んだ。

「……ごめんね、ネプ子。防げてたかもしれないのに、苦しい思いさせて……」

「あいちゃんは気にしすぎだつてー。ほら、いつものきつつーいツツコミするあいちゃんに戻つて戻つて！でないとわたしのポケが輝かないんだからさー」

「……まったく、病み上がりの癖に調子に乗って……」

そう言うアイエフは少し嬉しそうな表情を浮かべた。

「えっと、ベールとグレイもありがとね」

「お気になさらないで。あいちゃんの為ですもの、当然ですわ」

「……私はお礼ついでに教えて欲しい事があるのですが」

「なにに？ わたしが答えられることならなんでも答えちゃうよ！ あ、でもスリーサイズを聞きたいなら事務所かプロデューサーを通してね！」

「あなたは世界の災厄となる存在だとお聞きしたのですが、本当ですか？」

「華麗にスルーされた!? しかも質問がなんか意味不明!？」

「……まあ、期待はしていませんでしたが、まんまと乗せられていたようですね」

だがグレイの顔には悔しそうな表情は微塵も見取れない。

「今回は無事でしたが、あなたも女神なので、今後は気をつけるのですわよ?」

「……あれ、ベール様、もしかしてネプ子が女神だって知ってたんですか?」

「ええ、知っていましたわ」

「……守護女神戦争とかなんとかをやった仲じゃないのか?」

そう。

ネプテューヌとベールはお互い自分の国を持つ女神の一角。

本来なら天界でいつ終わるとも知れない戦いをしている筈の人物なのだ。

凍りついた空気を割って話し始めたのは他でもないベールだった。

「皆さん、ご心配はありませんわ。元より、わたくしは守護女神戦争には興味はありませんの」

「……そうなんですか？」

「ええ。敵対しているのであれば、いくらあいちゃんのお友達とはいえ、助けたりしませんわ」

「けど、女神なのはどうして興味がないんですか？」

「確かに、先代の女神の言葉に従い、守護女神戦争を続けてきましたわ。けれど、わたしには女神としての力と、ゲームさえあれば世界の神になんて興味はありませんわ」

「……ぶっ飛んだ考えの女神もいるもんだな……」

「ある意味、わたしが思っていた以上に凄い人かも……残念な意味で」

「これにはグリーンハート信者のアイエフも苦笑いである。」

「その点、ネプテューヌはどう思っているのですか？」

「んー……実はその辺よくわかんないんだよね。わたし、記憶喪失だしさ」

「……それは、本当ですか？」

「名前以外全部吹っ飛んでるらしい」

「自分が女神だつていうこともノワールから教えてもらつたしさー」

「ノワール……ああ、ラストイシヨンの。ということは既にノワールとは……」

「はい。今ではすっかり仲良しさんです」

「……あなたたちなら信用してお話ができそうですわね」

いきなりベールが神妙な顔付きになった。

「あれ、もしかしてネットゲの勧誘？」

「それはまた今度、キャンペーンが始まつたらお願いしますわ」

「ベールさん、脱線ついでに真面目な話はまた今度にしませんか？今からは厳しいです
し」

「……それもそうですわね。明日、また訪ねて来てくださる？」

「あ、けど、わたしたち……教会にはユニミテスの使いとして……」

「そんなことなら、お気になさらないで。全てわたくしに任せて、あいちゃんはゆっくり
休んでくださいな」

「……わかりました」

ベールの言葉にアイエフが頷き、部屋を出る為に立ち上がる。

「では、また明日ですわ、あいちゃん」

「はい。また明日」

ネプテューヌ達がベールの部屋を後にする。

部屋に残ったのはベールとグレイのみとなった。

「……よかったですね。協力者が見つかった」

「ええ。持つべきものは友達ですわね」

「……では、私も宿に戻りましょうかね」

グレイが立ち上がり、ドアノブに手を掛けると、思い出したように振り向く。

「……」老体に鞭を打つのはほどほどにしてあげてくださいね？」

「うふふ……少しキツイお灸を据えるだけですわ」

それを聞いたグレイも、ベールの部屋を出て行った。

第11話 暗闇に沈む心

「……昨日の今日で教会に正面から入るのは、ちよつと抵抗があるですね」

ネプテューヌの解毒に成功した次の日。

ネプテューヌ一行はリンボックス教会の扉の前に居た。

「きつとベール様がなんとかしてくれているわよ。信じて入るわよ」

不安そうな顔を浮かべるコンパの肩をアイエフが叩く。

そして扉に手をかけ、ゆっくりと手前に引く。

「……お邪魔しま……」

「すみませんでしたー!!」

「ひい!？」

アイエフが扉を開ききるよりも先に、イヴオワールが土下座の姿勢のままネプテューヌ又達の目の前に滑ってきた。

その有様をみたコンパが思わず飛び上がる。

「先日は本当に申し訳ございませんでしたー!」

「いやいや、教会に入って早々スライディング土下座はさすがのわたしもびっくりだよ」
「……えと、これはいつたい……」

「あら、あいちゃん。お待ちしてありましたわ」

困惑するネプテューヌ達の元にベールが現れた。

「えと、あの……これは、誤解が解けたということとで良いんですよね？」

「ええ、これで安心してくださいな。今後このようなことは二度と起こさせませんわ。ね、イヴォワール？」

「ひいひい！は、はい！今後このようなことは二度と起こしませんので、どうかお許しを
！」

ベールがイヴォワールに向けてニツコリと微笑むと、既に青いイヴォワールの肌が更に青くなり、すぐさまベールが言ったことを復唱する。

「けっ……良いザマだな」

「こらアツシュ。そういうこと言わない」

「……早速ですが、急いでお話したいことがありますの。わたくしの部屋に来てくださいな」

そう言ってベールが教会の奥へと歩き出す。

一緒について行こうとしたアシュレイが何を思ったか振り返った。

「……可哀想なあんたにこいつをやるよ」

そう言ってアシユレイが懐から小瓶を取り出す。

中身は勿論先日毒薬。

それを土下座の姿勢を続けるイヴオワールの目の前に置く。

「……そいつは服用すると体の細胞をズタズタにし、一日で死に至らしめる毒だが、心が綺麗な人間には無毒らしいぜ？ 試しに飲んでみるんだな」

それだけ言ってアシユレイは再び歩き出し、ネプテューヌ達に追い付く。

隣に居るアイエフがため息を吐いた。

「あんたも中々根に持つわね……」

「最初は腕でもへし折ってやろうかと思ってたぐらいだ。アレで許してやるってんだからまだ良心的だぜ」

「……お願いだから間違ってもやらないですよ？」

「善処する」

そこでふとアシユレイが一人足りないことに気がついた。

「ベール。グレイさんは？」

「ああ、あの人ですか？ あの人急用が入ったとかで今日は来れなくなったそうですわ」

「……相変わらずよくわからない人だ……」

昔からグレイという人物は誰に何とも言わずふらつと何処かに行ってしまうような人物である。

今回のようなドタキャンはアシユレイにとっては良くあることのようにだ。

と、そんなことを話していると、ベールの部屋へあつと言う間にたどり着いてしまう。「さて、単刀直入に申しますと、奪われてしまったわたくしの女神の力を取り戻すのに協力してほしいのです」

部屋に入り、それぞれが腰掛けると、ベールが口を開いた。

とは言っても、それはにわかには信じがたい話だったが。

「……とりあえず、女神の力が奪われたっていうのはどういうことなんですか？」

「というか、女神の力って奪えるものなのかよ……ん……う？」

「アツシユさん？　どうかしたですか？」

「いや……さっきのフレーズ……どっかで……」

アシユレイの疑問を無視してベールが話を続ける。

「……あれは、お忍びで参加したあるゲームイベントの帰りですわ。わたくしは会場で購入したグッズで両手が塞がり、更に一日中歩いたので疲弊していたんです」

「ということはまさか……」

「フラフラな状態を狙われたわたくしが次に目を覚ました時には、女神としての力がな

くなっていたんですの……」

その話を聞き、一名を除いた全員が呆れたような顔を浮かべた。

その中から唯一除外されたネプテューヌはうんうんとうなづいている。

「……まあいい。そういえば、女神の力が無いっていうのは、結局どういう状態なんだ？」

「そうですわね……具体的に言えば、人間に近くなりますわ。女神化……変身は勿論出来ませんし、シエアの恩恵も受けられず、何より人間と同じように年をとりますわ」

「つまり、普通の人と同じってことですか？」

「そのとおりですわ。なので、わたくしの美貌が衰えてしまう前に、なんとかしても女神の力を取り戻さなくてはなりませんわ」

「一日二日でそうそう変わるモノじゃないがな」

ともあれ、それがベールを助けない理由には到底なり得ない。

「そういうわけですから、あいちゃんたちにはその犯人を捕まえるのを手伝って欲しいんですの」

「わかりました。ネプ子を助けてくれた恩返しも含めて協力させてください」

「流石にこの事は教会の方々には相談できなかったので、助かりますわ」

「ということは、教会の人たちはこのことを知らないんですか？」

「力を奪われた、なんてことが広まってみる。シェアに響くのはまず間違い無い」
「ええ。それに、国民の方々を不安にさせる訳にもいきませんし」

そこでアイエフがふと閃いたような素振りをした。

「もしかして、ベール様が部屋に籠るようになった本当の理由って、ゲームの為じゃなくて……」

「バレないためにも、なるべく人との接触を避けていましたの」

「本当か……?」

「まあ、その時期にネットゲームの大型アップデートが入った、というのもありますけど」

「やっぱりな……」

話が横に逸れかけた所でベールの携帯に着信が入る。

「はい、わたくしですわ……わかりました。今何処に?……今から急いでそちらに参りますわ。それまで足止めをお願いしますわ」

「ねえねえ、今の電話って何?」

「わたくしの力を奪った犯人を発見したそうよ。詳しい話は道中お伝えします。今は急いで向かいましょう」

リーンボックス教会を出て、ベールの力を奪った犯人が居るといふ場所に急いだ。

「で、力を奪った犯人って言うのはいったい誰なんだ？」

山岳地帯を急ぐ中、アシユレイが口を開いた。

「ネプテューヌの暗殺についてイヴォワールを問い詰めていると、コンベルサシオンという人物が出て来ましたわ。ルウイーの宣教師で、例の毒をイヴォワールに渡したのもコンベルサシオンですわ」

「そいつが犯人って訳ですね。でもなんでそのコンベルサシオンが犯人だと？」

「恐らく、コンベルサシオンはネプテューヌが女神だということを知っているとされます。魔王崇拜者を始末するのが目的なら、ネプテューヌだけを狙うのは不自然ですもの」

「言われれば確かにそうです……！」

「女神を狙う人間や組織が多いとは考えにくい……だとすれば……」

「犯人はルウイーの女神、ホワイトハート様の手の者というわけですね」

「少なくともコンベルサシオンは黒だ」

考えは一つに纏まったようだ。

「なんかよく分からないけど名推理キターー！」

「それにしてもなんでねぶねぶだけで、ベールさんは命を狙われてないですか？」

「……恐らく、わたくしが守護女神戦争に興味が無いことを知っていて、生かしていても

害は無いと考えたのでしよう」

「それにしても、よくそれだけの情報で犯人を特定しましたね。流石ベール様です」

「わたくしはただ、手に入れた情報から推理しただけですわ……さあ、目的地が見えて来ましたわよ」

そう言つてベールが指差した先には簡易的な検問所が設置されていた。

そこにはフードを被つた女が立っている。

「くそ……まさかこんな所で足止めをくらうとは……」

「やつと見つけたわよ！コンベルサシオン！」

「よくもわたしを殺そうとしたなー！絶対許さないんだからー！」

「ちつ……何かおかしいと思つていれば……女神共が来るまでの時間稼ぎだったとはな」

フードで目元は見えないが、その声には明らかに憎悪感を感じることができた。

「コンベルサシオンと言いましたわね。あなたにはネプテューヌを狙つた罪の断罪と、わたくしから奪つたものを返してもらいます」

「ほお、ただのオタク趣味の腑抜けた女神だと思つていたが……一応頭は回るようだな」

「ふふつ……ゲーマーを舐めないでくださる？あなたの反抗は、先月発売した推理ゲームの犯人と手口が同じだったただけですわ」

「まさに、ゲーマー探偵ベールって感じだね！」

「新ジャンルの名探偵さんの誕生です」

「……つつこまんぞ」

「く……どこのメーカーか知らんが余計な物を……！」

結論に至るまでの過程はどうあれ、既に反抗を自白したも同然である。

不意にコンベルサシオンが着ているフードを脱ぎ捨てた。

血が通っていないのかというほど白い肌。

茨をあしらった服装に魔女風の三角帽子。

「……あー！プラネテューヌで会ったおばさんだー！」

目の前に居るのは始めて鍵の欠片とエネミーディスクを見つけた場所。

そこに現れた女その人だった。

「そのとおり、コンベルサシオンは私の仮の姿だ！」

「あなたたち……彼女を知っているの？」

「はい。プラネテューヌでわたしたちから鍵の欠片を奪おうとしてきた悪い人です」

「力を奪う……どつかで聞いたことあると思ったら……！」

「あの時は遅れをとったが、今日はそうはいかんぞ」

女がアシユレイを憎たらしそうに睨む。

前にやられたことを根に持つているようだ。

「そつちがその気ならこつちだつて！」

「もう一回やろうつてんなら、もう一回ぶちのめすだけだ！」

ネプテューヌが光に包まれ、女神の姿となる。

それと同時にアシュレイも男へと変身する。

「覚悟は出来てるんだろな？」

「相手があなたなら、手加減はしないわ」

「ほう、ならばやってみるがいい！」

二人に向けて魔法弾が発射された。

それを回避し、ネプテューヌが接近する。

「ヤア！」

「ふん！」

女がネプテューヌの一撃を何も無い空間から作り出した槍で防いだ。

そのまま数回剣を打ち合い、鏑迫り合いになる。

「ぬう……邪魔だ！」

「くっ……」

剣を弾かれた勢いでネプテューヌが後ろに下がる。

「悪いな。次は俺だ！」

そこにアシユレイが割り込んだ。

「おおおおお！」

絶え間ない連打に耐え切れず、女がバランスを崩す。

「フォーム・ドライ！」

「ぐおお!？」

剣を大鎌へと変形させ、それをフルスイングで振り抜いた。

衝撃を吸収するように女が後ろに下がりながら耐える。

「法陣展開……………」

アシユレイの目の前に六つの小さな魔法陣が円形に現れ、シリンダーのように回転を始める。

「ぶち抜け！ガトリングレイジ！」

魔法陣一つ一つから高速で火炎弾が打ち出される。

「舐めるな！」

女はそれに対し、自分も魔法弾を高速連射して相殺する。

「収束……………」

それを見たアシユレイが六つの魔法陣を一つに束ねる。

「解放！」

一つになった魔法陣が爆発的に巨大化。

そこに渾身の掌打を打ち込む。

「ルビーブレイズ！」

先ほどとは比べものにならない大きさの火炎弾が発射され、女を飲み込んだ。

「……………」

「……………はっ！」

黒煙を振り払いながら女が姿を表す。

倒すことは出来ていないが、結構なダメージは与えたようだ。

「チィ……………やはりその姿はハツタリではないようだな……………」

「返す物を返せば、今なら見逃してやらんこともない」

鎌を突き付けながらアシュレイがそう言うと、女が不意に笑い始めた。

「フツフツフ……………これが私の本気だとも思っているようだな……………」

「悪いけど、そんなハツタリはわたし達には通用しないわ」

「この姿を見た後で同じ事がいつまで言えるかな？」

女が光に包まれる。

それ様子はネプテューヌが女神化する時に放つ光と全く同じだ。

「まさか……その姿は!?」

緑の髪に周囲に浮いた多数のユニット。

電源マークのようなものが見て取れる紫の目は明らかに女神のものだった。

「そうだ。貴様の女神の力を利用してもらった!」

「いくら見た目が変わっても!」

ネプテューヌが偽グリーンハートに突撃する。

「ハア!」

剣が振り下ろされる。

完全に捉えた。

「遅いな」

「なっ……!?!」

残像のみを残して偽グリーンハートの姿が掻き消えた。

「ネプ公!」

「おっと危ない」

ネプテューヌの背後で槍を振り下ろそうとしていた偽グリーンハートにアシユレイ

が斬りかかる。

だがその一撃もあつさりとかわされ、あまつさえ首を掴まれてしまう。

「あぐ……!?!」

「フーン！」

「アツシユ！」

投げ飛ばされたアシュレイが地面を転がる。

「この……!?!」

「止まって見えるぞ！」

ネプテューヌが剣を振り切る前に偽グリーンハートの攻撃がネプテューヌを打つ。

アシュレイとは反対方向に吹き飛ばされ、地面に強かに体を打ち付けた。

「ねぶねぶ！大丈夫ですか!?!」

「わたしは大丈夫よ……それよりアツシユが……!?!」

コンパがネプテューヌに駆け寄り、応急処置を施す。

「せやあ！」

「はああ！」

ベールとアイエフが偽グリーンハートに攻撃を仕掛ける。

「シレットストーム！」

だがその攻撃が届くよりも先に偽グリーンハートの魔法が二人を吹き飛ばした。

「あいちゃん！ベールさん！」

「デメエ……何のつもりだ!」

現在偽グリーンハートを挟んでアシユレイが他の四人から孤立しているような状態だ。

「なに、お前には苦汁を飲まされたからな。礼として最初に冥土に送ってやる……」

そうやって偽グリーンハートがパチンと指を弾く。

すると何処からともなく多数のモンスターが現れ、ネプテューヌ達を取り囲んだ。

「モンスター!?! いったい何処から!?!」

「わからない! けど、とにかく倒してアツシユを助けに行かないと!」

「この程度のモンスターでわたくし達を止められると思つたら大間違いですわ!」

「そう言うな、今回は特別な舞台を用意したのだ!」

偽グリーンハートが手にした槍を地面に突き立てる。

するとそこから禍々しい煙が噴き出し、一瞬にして辺りを包み込んだ。

「な、なんですかこれは!」

「目くらましのつもり!」

「フツフツ……今に分かる……」

モンスターの一体に黒い光が集まり、体が黒く変色し、血管のような赤い模様が体に浮かぶ。

汚染化という現象だ。

変化はその一体だけではない。

一体が汚染化すると、その周りにいるモンスターも釣られるように体を黒く変色させていった。

「嘘でしょ……!?!」

「汚染化モンスターでいっぱいですか?!」

「ハーハツハツハ！さあ、暫くそいつらと遊んでいるが良い！」

「くっ……アツシュ……」

暗い視界の中でもアシュレイの姿だけはしっかりと捉えることができた。

「どうだ？仲間が苦しんでいる様を眺めている気分は？」

「……最悪……だ。舐めやがって……」

「悲しむことはない。お前を始末すれば、すぐにあいつらにも後を追わせてやろう」

「誰が……死ぬかよ……!」

アシュレイがゆっくりと剣を構え直した。

……

「……ああー！」

「ほらほら、さっきまでの威勢はどうした？」

アシユレイが懸命に剣を振るうが、偽グリーンハートには擦りもしない。

それもそのはず、アシユレイの動きは先程よりも段違いに鈍くなっていた。

「ぐ……」

「そおらー！」

まるで遊ぶように槍を振るう。

だがそれも避け切れないほどアシユレイは疲弊している。

長時間の戦闘を行えば、それは無理も無いものかもしれない。

「つまらん。まさか始める前からこの有様ではなー！」

「が……」

倒れ伏したアシユレイの背中を踏み躪る。

実は戦闘を始めてからまだ五分と経っていない。

それどころか対した攻撃も食らっていない。

だがそれでもアシユレイは既にボロボロだった。

「(くそ……力を入れれば入れるほど……体の不快感が増していく……なんでだ……」

「？」

「ふん、抵抗もしない奴を黓つても何も面白くない……そうだ」
偽グリーンハートの顔が狂気に歪む。

「これからネプテユーン達をお前の目の前で殺してやろう」
「な……!? テメエ……!」

「貴様は寝ている!」

立ち上がりかけたアシユレイの脇腹に蹴りがめり込んだ。
おもちゃのように地面を転がる。

「恨むのなら、自分の無力を恨むのだな」

偽グリーンハートが魔方陣を展開する。

矛先はネプテユーン。

「やめ……ろ……!」

だがネプテユーンはモンスターの対処に追われ、こちらに気が付いていない。
「やめろ……!」

偽グリーンハートの腕が降り上がる。

「ヤ……メ……」

腕が、振り下ろさ

「口オオオオオオ!!」

「っ!？」

アシュレイの体から発生した衝撃波に飲まれた偽グリーンハートが吹き飛ばされる。空中で体を捻り、墜落は阻止した。

「くそ……今回はなんだ!？」

以前男になったアシュレイにやられた記憶が蘇り、歯を噛みしめる。

アシュレイの周囲には黒い渦が出来上がっていた。

「ネプ子……これ!？」

一方その頃、ネプテューヌの側でも変化が確認できた。

「煙が……引いていつてる!？」

「それだけではありませんわ!？」

汚染化していたモンスターが次々に倒れていく。

そして倒れたモンスターから少量だが、例の煙が噴き出す。

するとどうだろうか。

煙を吐き出したモンスターが汚染化状態から元に戻ったのだ。

「モンスターさんが元に戻っていくのです!？」

「よくわからないけど都合よ!急いで倒すわよ!？」

全員が邪魔になるモンスターを蹴散らしていく。

「高圧縮です！」

「カオスエツジ！」

「ティコフオトン！」

「デュエルエツジ！」

それぞれが周囲のモンスターにトドメを刺し、アシュレイの元へと急ぐ。

急ごうとした。

「なに……あれ……!？」

ネプテューヌ達の足が止まる。

それもそのはず。

アシュレイがいたはずの場所には真っ黒い繭のようなモノが出来上がっていたのだ。

「……っ！……ちよつとおばさん！アツシユにいったい何をしたの!？」

「黙れ！私が知るか！」

「はあ!？」

「あの男……アンチエナジーを取り込んだのか？だとすれば……」

繭が蠢き始める。

「皆さん、構えてください。何が起こるかわかりませんわ！」

蠢く繭は割れることなく粘土のように形を変え、やがて一つの形で定着した。

「あれは……」

「人……?」

それはまさしく人の形だった。

強いて違う所を挙げるとすれば、その腕が目立つ。

直立しているにも関わらず、腕は地面に着くほど長く、肩から遠ざかるほど太くなつており、その大きな先端部分に酷く湾曲した巨大な爪のような物が刺さるように生えている。

まるでマネキンの肩に肉塊をぶら下げたような姿だ。

「もしかして……アッシュなの……!?!」

「嘘でしょ……!?!」

真っ黒いだけの頭部に黄色く光る丸い目玉が開く。

鉄を引き裂くような音と肉を千切るような音を同時に響かせながら獣が口を開き、

「オオオオオオオオ!!」

吠えた。

「オオオオオオオ!」

獣が駆ける。

「チィ!」

偽グリーンハートが殺気を感じて回避運動を取った。

その一瞬後に獣が残像を突き抜ける。

「ウウウウオオオ！」

地面を抉りながら獣が半ば無理矢理方向転換し、歪な腕で殴りかかる。

あり得ない筈のタイミングで放たれた攻撃を間一髪で避けた。

「アアアアアアア！」

「ぐああ!？」

だがさらに勢いそのまま反転して放たれた裏拳のような攻撃は回避しきれず偽グリーンハートを叩いた。

そのまま崖にめり込む。

「オオオ！」

獣の腕がゴムのように伸び、めり込んだ偽グリーンハートをその爪で崖を抉りながら掴み、そのまま空中でギリギリと締め始めた。

「ぐ……………ふ……………くそ……………力が……………抜ける……………」

偽グリーンハートの体から緑色の光の玉のような物が抜け出る。

それと同時に偽グリーンハートの変身も解けた。

「ベール様！あれって！」

「ええ、恐らくわたくしの力ですわ!」

ベールが目を閉じると、吐き出された光の玉がベールの体に吸い込まれていく。

玉を完全に取り込むと、ベールが目を見開いた。

「この力が漲る感じ……懐かしいですわ」

「ということは……!」

「ええ。後の問題は……」

そう言つてベールが獣を見据える。

女は変身を解いたが、それでも獣は握り潰す力を緩める気は無いようだ。

「アアアア!」

不意に獣が腕を振り上げ、掴んだ女を地面に叩き落とす。

「くそ……これ以上は危険か……!」

「グガアア!」

女がふらつきながらも立ち上がり、獣から離れようとするが、獣は逃がすつもりは無いようだ。

「ちよつとアツシユ! あんたなんですよ!?! もうやめなさい!」

「アツシユさん! 返事をするです!」

「くつ……!」

見かねたネプテューヌが獣の背に近づく。

「アツシユ！もうやめて！相手に戦意は無いわ！」

「ル……………」

今にも追撃を加えようとしていた獣の動きが止まった。

「……………よかった。止まってくれたわ」

「そうね……………っ！ネプ子！後ろ！」

「え……………」

アイエフ達の方を向いていたネプテューヌが振り返る。

そこにはネプテューヌ目掛けて巨大な腕を振り上げる獣が居た。

「キヤア！」

ネプテューヌがギリギリで攻撃を回避する。

伸ばした腕による追撃も剣の腹で受け止めた。

「……………仲間割れか？まあいい……………今のうちに下がらせて貰う……………」

女がその場から去っていくが、獣は気にも留めていない。

「アツシユ……………」

「気をつけてください！アレには敵味方の判別が出来ないようです！」

「オオオオオオオオ！」

「来るわよー！」

獣が真つ直ぐに走ってくる。

三人が後ろに下がるが、ネプテューヌは剣を下ろしたまま微動だにしない。

「バカネプ子！何してるの！」

「……………」

アシユレイがああ獣になってしまったことで放心状態になってしまっているのだ。

「ねぶねぶ！危ないですー！」

「ネプテューヌー！」

獣の腕がネプテューヌに迫る。

肉の潰れる音が響いた。

「……………」

「……………間一髪、間に合ったようですね」

「……………え？」

ネプテューヌが不意に聞こえた声に顔を上げる。

そこには黒いスーツに白い髪の毛の男が、展開した魔方陣で獣の腕を受け止めていた。

「昨日ぶりですね。ネプテューヌさん」

「あなた……………グレイ!?!」

「話は後です」

魔方阵から衝撃波が発生。

吹き飛ばされた獣が崖に激突し、岩雪崩に埋まる。

「ねえグレイ、教えて！アツシユはどうなったの!？」

「後って言うてるじゃないですか……まあ良いでしょう……」

岩雪崩から這い出ようとしている獣を見つめたままグレイが話を始めた。

「今の彼は大量の汚染物資を取り込み、暴走状態になっています。あの獣にアツシユくんの意思はありません」

「汚染物資？取り込むって……アツシユはいつたい……」

「詳しいことはお伝え出来ませんが、今やることは一つです」

瓦礫を跳ね除けた獣が咆哮を上げながら立ち上がる。

「あの獣を止めることです」

それだけ言ってグレイが獣に歩みを進める。

「グルルルル……!」

「……聞こえていないでしょうが……あなたにはまだ私の本気を見せていませんでしたね」

突然グレイのスーツがドロリと蠢き、形を変える。

瞬く間にスーツが黒いフードとなった。

さらに多数の魔方陣を自分の周囲に展開する。

「さて、始めますか……」

被ったフードの下で、グレイがニヤリと笑った。

「オオオ！」

怒り狂う獣がグレイへ走る。

「おっと」

グレイが魔方陣の一つを動かし、獣の攻撃を防いだ。

「アアアアアアア！」

「甘いですねえ」

獣が凄まじい速度で拳の連打を叩き込むが、その全てを魔方陣を巧みに動かし受け止める。

「では……」

魔方陣の一つが獣の腹に張り付く。

「次はこちらの番ですよ！」

「アガア!!」

魔方陣から真空の刃が溢れ出し、獣の腹を切り裂いた。

さらに獣の真下に潜り込んだ魔方陣が衝撃波で獣の体を宙に打ち上げる。
「イグニススファイア！」

さらに空中に浮いた獣の周りに大量の火炎弾が現れ、一斉に獣に迫る。

「グ……オオオアアアア！」

獣は空中で体を捻りながら腕を振り回し火炎弾を弾くが、防ぎきれなくなった弾が獣に張り付き、体を焦がす。

それどころか張り付いた弾は一つに集まり、より大きくなっていく。

数秒後には獣を飲み込み、巨大な火の玉となっていた。

「……エクस्पロージョン！」

グレイが指を弾くと、火の玉が熱波を撒き散らしながら炸裂。

凄まじいダメージを負った獣がベシヤリと地面に落下した。

「アア……ガ……」

「……………」

だがそれほどのダメージを負ってなお、獣が立ち上がる。

すると獣に変化が起きた。

「グ……ギガ……ガアア！」

メキメキと音を立てながら獣の欠損部位が回復していく。

それどころか頭からは角のような器官が生まれ、巨大な尻尾や翼のようなものも確認出来るようになった。

「……まずいですね」

「グレイ？どうしたの？」

「……彼は人としての限界を超えつつあります」

「どういう意味……?」

振り向かずにグレイが答える。

「このままでは、彼は死んでしまいます」

「……え……」

全員の顔に絶望感がありありと浮かび上がった。

「ちよつと……アツシユが死ぬってどういう意味よー」

「このまま攻撃を続けても、彼はあの様に再生をしてしまいます。しかしそれは痛みを先送りにする行為です。許容量を超えた痛みはいずれアツシユくんに襲いかかり、それに耐えきれなかった場合……」

それ以上をグレイは言わないが、先に続く言葉はこの場にいる全員が知っている。

「何か……何か方法は無いの!?!」

「……………」

「グレイ！」

「……賭けになります、聞きますか？」

「……教えてちょうだい！このまま何もしないで終わるなんて嫌！」

それを聞いてグレイが少しだけ笑った。

「ネプテューヌさん……あの獣があなたに襲いかかった時のことを思い出してください」

「わたしに？」

「あの時あの獣は、目の前にさっきまで標的にしていた人物が居たにも関わらず、それを無視してあなたに襲いかかりました」

「そういえば……不自然ね……」

そこでグレイがこれから言うことに何の根拠も無い、と前置きしてから話を続ける。

「恐らくあの獣はあなたの持つ女神の力を嫌っていると思われる。ならばそれをあの獣にぶつけることができれば……」

「アッシュを助けられる可能性があるってこと？」

「限りなくゼロに近いですが……ね」

くるりとグレイが振り返る。

「ベールさん。あなたも協力してくれますか？」

「ええ、当然ですわ」

そう言つてベールが光に包まれ、女神、グリーンハートへと変身する。

「これがベール様が女神化した姿……」

「ベール……ありがとう」

「そういうことは後にしてくださいまし。今は……」

「……ええ。わたしも……覚悟を決めたわ」

「アイエフさんとコンパさんは私の後ろに。お二人に何かあつては成功率にも響きますしね」

「わかりましたです！」

「ネプ子！わたしたちのことは気にせず思いつきりやりなさい！」

ネプテューヌが剣を。

ベールが槍を構える。

「アツシュ……目を覚まさせてあげるわ！」

「グ……ウウ……！」

ネプテューヌとベールが前に出ると、明らかに獣の動きが鈍った。

「来ないのなら、こちらから行きますわ！」

ベールが獣へ突進し、槍を突く。

「ガアア！」

獣が槍を弾き、反撃を繰り出す。

「セイ！」

反撃の腕をネプテューヌが切り払う。

すると獣の切り裂かれた箇所から煙のような物が吹き出した。

「効果あり、ですわね！」

さらにボールが三段突きを打ち込む。

そこからも同様に煙が噴き出した。

「グアアアア！」

痛がるような素振りを見せながら獣が尾を薙ぎ払う。

それをネプテューヌは飛んで回避し、ボールは後ろに下がる。

「はああ！」

ネプテューヌが獣に連続攻撃を繰り出す。

「オオオ……！」

ネプテューヌの攻撃を獣が防御するが、強烈な連撃に耐えきれず防御に隙ができた。

「クロス！」

胴に一閃。

獣の体が浮き上がった。

「コンビネーション！」

ネプテューヌも飛び上がり、トドメの一撃を加える。

が……。

「なっ……!!？」

獣はその翼で空中で体制を整え、あるうことかネプテューヌの剣を片手で白刃取りしたのだ。

そのままもう片方の腕でネプテューヌを掴み、地上のボール目掛けて投げつける。

「キヤア!!？」

「うあ!!？」

ボールは突然の出来事に避けることも受け止めることも出来ず、そのまま衝突してもつれ合いながら地面に転がった。

「バアアアアア！」

さらに獣が口から黒い火炎弾を身動きの取れないネプテューヌ達目掛けて吐き出した。

ネプテューヌ達に命中したそれは同じ色の火柱を立てる。

「ねふねふ!!？」

「ベール様！」

黒煙の中から火傷を負ったネプテューヌとベールが出てきた。

「……ベール。大丈夫？」

「当然ですわ……」

致命傷には至っていないが、足がふらついている。

「身の安全を省みない分、長期戦はこちらが不利ですわ」

「ええ……次の一撃に、わたしの全てを込めるわ！」

獣が咆哮を上げ、空中からネプテューヌ達に向かって猛進してくる。

「セイヤア！」

「はあああ！」

剣と槍が同時に振るわれ、空中の獣を地面に打ち落とす。

背中を削りながらも獣が尾で地面を叩き、その勢いで回転して体制を整える。

「さあ、行きますわよ！ネプテューヌ！」

ベールが三つの魔方陣を後方に展開。

「任せて！ベール！」

さらにネプテューヌが獣の上空に巨大なエネルギーの剣を召喚する。

「これで！」

ベールの魔方陣から巨大な槍が現れ、獣に向けて高速で打ち出された。

「ルルルア！」

獣は打ち出された槍を両腕と口で受け止める。

「トドメよ！」

そこにネプテューヌの剣が降り注ぐ。

「グガガ……！」

獣は上からの攻撃を翼を盾の様に広げ、それ以上の落下を妨げる。

「はあああああ！」

「あああああああ！」

「ギグ……ギグ……！」

だが二方向からの攻撃に獣の限界が来た。

防ぐことが出来なくなった二人の攻撃が獣を貫き、辺りを閃光が包んだ。

「……つはあ、はあ……もうダメ……限界……」

「流石に……疲れますわね……」

ネプテューヌとベールが女神化が体力切れで解除され、そのままその場にへたり込

む。

「グ……」

そこに聞きたくない声が聞こえてきた。

「ガ…………ア…………グ…………」

「…………まさかあれだけの攻撃を受けて、まだ立っていられるなんて…………」

砂煙の中にはあの獣が立っていた。

尾は千切れ、翼は根本を残すのみ。

角も片方が折れ、全身から黒い煙を吹いているが、それでも獣はそこに存在していた。

「…………時間切れです」

「グレイ？」

悲しげな目をしたグレイがネプテューヌの肩を叩く。

「…………アレはもう放つて置くだけでも自壊を始めます。残念ですが、賭けは失敗です」

「そんな…………」

「とは言つても、もう暴れないとは限りません。すぐにでもここから…………」

「…………嫌だ…………」

「ねぷねぷ？」

ネプテューヌが立ち上がり、獣へと走り始めた。

「ちよつとネプ子！危険よ！戻りなさい！」

アイエフの静止も聞かず、ネプテューヌが獣の前に立ち塞がる。

「ねえ、アツシユ！わたしだよ！ネプテューヌ！わかるでしょ！」

「ア……アアガ……アアア！」

「アツシユ！」

ネプテューヌが暴れようとする獣を抱き締めた。

「アツシユ……お願い……目を覚まして……！」

「……ア……」

獣の動きが一瞬止まる。

「ア！アアア！アアアアアア！」

「ねぷっ！」

獣に突き飛ばされ、ネプテューヌがその場に尻餅を突いた。

「ガアアアアアアア！アアアアアアアアア！」

突然もがき苦しみ始めた獣から大量の煙が噴き出す。

煙の勢いが弱まると、獣の動きも次第に鈍っていった。

「ア……あ……」

「……アツシユ！」

膝から前のめりに崩れ落ちる獣をネプテューヌが支える。

黒い体が揮発性を持った物質のように空気に溶けていき、後には見慣れた姿が残つ

た。

「……ああ？……俺……どうなったんだ……？」

「……アツシユ！」

「いつて……ネプ公……？」

ネプテューヌのことをネプ公と呼ぶその人物は、紛れも無くアシュレイだった。

「アツシユ！」

「アツシユさん！わたし達がわかるですか!？」

「……コンパに……アイエフ？……お前ら……」

「バカアツシユ！心配したじゃない！」

「……ギリギリ、なんとかなったようすわね」

「……アツシユくん」

「グレイさん……なんでここに？」

アシュレイの質問にグレイは静かに首を振る。

「今は、休んでください。お願いではありません。警告です」

「……………」

「……アツシユ」

「悪い、ネプ公……このまま……寝かせて……く……」

「アツシユ?...アツシユ!」

アシュレイの意識はその言葉を最後に途切れた。

番外編 愛する者のため

意識が暗がりの中で振り子のように揺れる。

寝ているようで寝ておらず、起きているようで起きていない。

そんな心地良いまどろみの中を俺は漂っていた。

「……アツシユ……?」

少女の声が俺の頭の中で反響する。

心なしか声は二人分聞こえたような気がした。

「……まだ……寝てるの?」

だんだん耳にはつきりと届くようになっていく少女の声はやはり一人分。

だが少し、懐かしいような感じがした。

「アーツシユ!」

「っ……!?!」

体が強制的に縮こまるような痛みを意識ごと上半身が起き上がった。

「あ、やっと起きた。もー、遅いよアツシユ!」

「……………けほっ……………お前なあ……………」

今しがた俺の腹にボディプレスをかました少女……………ダステイがその体制のまま文句
ありげな顔でこちらを見つめてくる。

こちらと同じような顔で睨み返してやった。

「そんな顔したつてダメだよ。アツシユが起きないのが悪いんだから」

「……………今何時だよ」

「今は……………5時だよ」

痛みが引いてきて余裕が出来たのか、思わずため息が出た。

「……………昨日あれだけ6時起床だつて言つただろうが……………」

「しようがないじゃん。目が覚めちやつたんだもん」

「だからつて俺まで起こす必要ないだろ……………!」

「だつて見てよ!」

そう言つてやつと俺の上からどいたダステイが窓を大きく開く。

「ほら!綺麗でしょ!」

「ああ……………」

窓の外には朝日に照らされたリーンボックスの街が広がつていた。

まだ少し青い空に街の緑が良く映える。

「この素敵な景色をアツシユにも見せてあげようっていうわたしなりの優しさだよ！」
「……まあ、良い景色だつてことは認めてやるよ」

「でしょー！」

「……で、寝坊常習犯のお前がなんで今日に限って早起きなんだ？」

「なんでつてそりゃあ……」

後に続く言葉にはだいたい予想がついた。

「……今日がラスティションに帰る日だからだろ？」

「おおー！ 良くわかったね！ さすがわたしとアツシユかな？ まさに以心伝心つてやつだね
！」

「2年も一緒に旅してりや、単純なお前の考え方なんざ嫌でも覚える」

俺たちは丁度一年でこのゲームギョウ界を一周するように旅をしている。

ラスティションからルウィー。

そこからプラネテユース、リーンボックス、そしてラスティションといった具合に。

今日はそのラスティションに帰る当日というわけだ。

「久しぶりにシアンや皆に会えるんだよ！ 寝てる訳にはいかないじゃん！」

「見飽きた街に帰るだけだつてのに、何が楽しいんだか……」

「もー、そんな堅いこと言つてると友達減っちゃうゾ？」

「減るほどいねえよ。作る気もない」

さて、と立ち上がり、ハンガーに掛けていたコートに腕を通す。

「折角早起きしたんだ。さっさと準備して出るぞ」

「りょかい！」

ダステイが指先までしつかり伸ばした手を額に当て、敬礼のポーズを取った。

このテンションがはたしていつまで持続するのやら……。

「……まあ、期待はしてなかったがな」

「くー……くー……」

リーンボックス発の客船に乗り、波に揺られること三十分。

甲板に備え付けられたベンチでダステイは寝息を立てていた。

「他人は起こしといて自分は居眠りかよ……つたく……」

とは言っても、ラストイションへは後四時間以上掛かる。

「ううん……アッシュュー……」

その間、横でマヌケ面を晒しているダステイと一緒に仮眠を取るのもいいかもしれない。

「アイアंकローは……やめて……」

……それにしてもこいつ、どんな夢見てるんだ？

「……寝るか」

一瞬夢の内容に予想を立てようと思ったが、どうやってもシユールな絵面しか浮かばなかつたのでやめた。

ベンチに深く座り目を閉じると、ゆっくりと体を眠気が支配していった。

そして意識が曖昧になったところで一気に覚醒した。

「……なんなんだよ、クソ！」

突如船が異常な揺れを起こし始めたからだ。

立ち上がり、背もたれに立てかけていた剣を手取る。

「お客様！船内に避難して下さい！」

甲板への出入り口から上がってきた乗組員の男が叫んだ。

「おい、何があつた！」

「う、海から巨大なモンスターが現れたんです！危険ですから……」

「そいつは今何処に居る！」

直後、俺の意識が覚醒した原因である船の揺れがさらに大きくなる。

凄まじい水飛沫を上げながらそれは現れた。

「………いつか………！」

海面から顔を出したモンスターは多数の触手を持ったタコのようなモンスターだ。

「直ちに船内へ……!!」

「逃げてどうする?」

「乗員の安全の為に一度リーンボックスへ引き返しますが……」

「んなこつたろうと思つたよ……ダステイ!」

「こういうことにはいち早く早く反応する筈のダステイに向かつて叫ぶ。

「アームロック……それ以上いけない……」

「いつまで寝てんだ!起きろこの馬鹿!」

「ふえっ……アツシユおはよ……もう着いた?……つてギャー!なにあのでつかいもの!」

「敵!邪魔!叩き潰す!行くぞ!」

「すっごい端折られた気がするけどオツケー!」

「そう言つてベンチから勢いよく立ち上がったダステイが傍に展開した小さな魔方陣から杖を召喚する。

「た、戦うつもりですか!?!無茶です!」

「大丈夫大丈夫!なんとかなるつて!」

「船長に伝えろ!あいつから船を離すなつてな!」

剣を背負い、モンスターに向かつて走る。

「ダステイ！足！」

「分かってるって！」

直後、淡い光が俺の体を包み込む。

紙のように軽くなった体でモンスターへと跳躍する。

50メートルがあつという間にゼロ距離となった。

「おらよ！」

剣をモンスターの本体と思われる部位に突き立てる。

モンスターが奇妙な呻き声を上げる。

「う………おお!？」

殺気を感じ、剣を引き抜き後ろに飛び退くが、空中で触手の一本が足に絡みついた。

そのまま船とは反対方向に投げ飛ばされる。

「ダステイ！足場あ！」

「うおおお！先生直伝！方陣展開！」

ダステイが気合を入れて杖を振るうと、モンスターの周りに大量の魔方阵が展開された。
た。

俺は空中で体制を整え、丁度落下地点に展開された魔方阵の一つに着地する。

「間に合った………」

「頼むから海に落とさないでくれよ?」

「アツシユがヘマしない限り大丈夫だよ!」

「そりやどうも!」

横殴りに迫る触手を飛んでかわしつつ、再びモンスターへと斬りかかる。

「そら!」

モンスターに横一閃を刻んだ。

直後、触手が俺を掴もうと迫ってくる。

「そう何度も同じ手に引つかかるかよ!」

剣を稼働させ大鎌……フォーム・ドライへと変形させ、向かってくる触手を飛び越えるようにジャンプする。

触手が足元を通り過ぎる瞬間、触手が通過する位置に鎌の刃を置いておく。

「つとお!」

凄まじい衝撃が体を襲うが、鎌をしっかりと握り、それに耐える。

狙い通り触手の一本に取り付くことに成功した。

「ヤッ……!」

触手の根本側に立ち、刃が食い込んだ鎌を全力で引つ張り上げる。

刃がギロチンのように作用し、繊維を引きちぎる音を響かせて触手が切断された。

鎌を剣に戻し、最寄りの魔方陣へ向けて跳ぶ。

逃がすまいとその他の全ての触手が俺目掛けて伸びる。

「エアスライサー！」

ダステイの声が聞こえたと思うと、俺が着地した物以外の魔方陣が一斉に向きを変え、風の刃を放つ。

俺に向かって集まっていた触手はその攻撃で殆どがバラバラに引き裂かれた。

「そっち送るよー！一気に決めちゃってー！」

「分かってるよー！」

ダステイが光の球をこちらに打ち出す。

魔方陣から跳び、光の球を剣の腹で受け止める。

「これで……」

その光が剣を伝って伸び、巨大な光の柱になった。

「消えろおおおお！」

剣と共に振り下ろされた光の柱がモンスターを真っ二つに切り裂いた。

海に沈んでいくモンスターの残骸に着地し、もう一度跳ぶ。

「……つと」

「ふいー……疲れたあ……」

船に戻った直後、ダステイが大きく息を吐いて座り込んだ。魔法を使うとかなり疲れるらしいが、それを差し引いてもこいつは体力がなさすぎる。

「た……倒したんですか？」

尻餅を着いた姿勢のまま、乗組員がそんなことを言った。

「というかこいつまだ居たのか。」

「……当然だ。勿論、このままダステイションまで行くよな？」

俺の言葉にその乗組員は首を縦に振った。

……………

「あ、シアンだ！おーい！シーアンー！」

ラステイションの港から歩くこと30分。

途中邪魔こそ入ったが、俺たちは無事見知った顔が並ぶ我が家へと帰ってきた。

シアンの顔を見つけたダステイがすぐさま駆け出す。

「おお！お前らか！」

「久しぶり！元気にしてた？」

「見てのとおり、毎日忙しいよ」

額に汗をかいたシアンがカラカラと笑う。

相変わらずそうで何よりだ。

「お前らが帰ってきたってことは……もう一年経ったのか。バタバタしてて全然一年つて感じがしないな」

「そんだけ充実してるってことだ」

「ハハッ、違くない」

そこでシアンが思い出したように手を叩いた。

「そういえば、お前からこれから暇か？」

「クエストでも消化しようとは思ってたが……」

「なんか困ったことでもあるの？」

「ああ。いつも鋼材は知り合いの製鉄所から融通してもらってるんだが、最近採掘場までの道にモンスターが現れて困ってるらしいんだ」

「またモンスターか……」

「ほんと、最近になってめつきり多くなったよね」

五年程前まではモンスターを見かけることなど少なかった。

存在しない訳では無かったが、発見次第腕に自信のある冒険者が我先にと討伐に向か

うので、都心に住むような人達にはモンスターは縁遠いものだった。

「今ではモンスター全体の強さが向上しており、消化が追いついていないような状態だ。」

皮肉にもモンスターのおかげでラステイションはこれまでにない好景気となつてはいるが……。

「で、そのモンスターを討伐すれば良いんだな？」

「ああ。頼めるか？」

「もつちろん！わたし達にかかれば朝飯前だよ！」

「……だそうだ。期待して待つてな、『若社長』？」

「よしてくれ。今この工場があるのはお前の親父さんのお陰だしな」

「その親父がお前に席を譲ったんだ。少しくらい威張つても罰はあたんねえよ」

「あーもう、分かったからさっさとモンスター討伐に行つてこい」

そう言つてシアンがモンスターが採掘場までの道を書いたメモを俺の胸に押し付ける。

「了解しました『若社長』サマっと」

「だから……」

「冗談だ。行くぞダステイ」

「うん。じゃあシアン、行ってくるねー！」

「あんまり無茶するなよー！」

背中越しにシアンの声を聞きながら、俺たちはモンスター討伐に向かった。

「……おかしいな」

「ん、どつたのアツシュ？」

渓谷を進む途中、俺がそう呟くと後ろを着いてきていたダステイが首を傾げた。

「敵の数が少なすぎる」

「えー別に良いじゃん」

「良かねーよ。だいたいこのモンスターの数で問題になるわけないだろ」

この渓谷に入ってから倒したモンスターの数は指折り数えられるほどだ。

「まあ、こういうのはお決まりのパターンだ」

「……ですよねー。ううー、こういうの頭使うから嫌なんだけどなあ……」

背中 of 剣を手に取り、正眼に構え、そのまま何を言うでもなくダステイと背中合わせとなる。

それに気づいたのであろうモンスター達が一齐に頭を覗かせた。

「……多いな。ざっと50は居るか？」

「ぬあー！わたしは今日はもう家に帰って休みたいんだー！」

「そう思うんなら働け。後で好きな物食わしてやる」

「マジですか!?!俄然やる気出てきたー!」

現金な奴……。

そう考えながら目の前……と言うより辺りを取り囲む全ての敵に意識を向ける。

「……来るぞー!」

俺が叫ぶと同時にモンスターの群れが巨大な影を作りながら襲いかかってきた。

「方陣展開!」

ダステイが周囲に多数の魔方陣を展開し、襲いかかる敵を防波堤のように受け止める。

「バーストエア!」

そして魔方陣全てから強烈な魔法の突風が放射され、モンスターを吹き飛ばした。

「そらよっ!」

そしてすかさず俺が崩れた包囲網を掻き回す。

「おらおらどうした!?!」

派手に暴れてヘイトを集める。

集団戦ではダステイを庇いながら戦うより注目を集めながら動き回るほうが効率がいい。

「バレバレだっつの！」

不意打ちのつもりだろうか。

背後から飛びかかってきたモンスターの顎に脚を振り上げ踵を食らわせる。

「フォーム……」

剣を目の前のモンスターに真っ直ぐに突き立てる。

右から殺気。

「ツヴァイ！」

突き刺した剣の左側へ一歩踏み出し、攻撃をかわす。

それとほぼ同時にSSSが稼働。

柄が瞬時に伸び、柄尻がモンスターの胴に激突した。

「おとおおつらよつとお！」

薙刀となった剣を素早く引き抜き、独楽のように回転しながら周囲を薙ぎ払う。

「ダステイ！」

薙刀を剣に戻し、逆手に持ち替える。

「準備オツケー！一発デカイのいっちゃうよー！」

いつの間にか集団から抜け出していたダステイが一旦魔方陣を解除。

そして細い指で目の前の空間を撫でた。

「わたしの十八番！ストームザッパー！」

ダステイの指が通った空間から無数の小さな風の刃が溢れ出す。

刃はそれぞれが意思を持っているかのごとくモンスターへと襲いかかり、モンスターの5割を切り裂き、消滅させた。

「イエーイ！全弾命中！」

「まだ残ってんだろ！気を抜くな！」

とは言ったが、さっきのダステイの魔法でモンスター達はほぼ壊滅状態。

全滅は時間の問題だった。

.....

「いやー働いた働いた！」

「ご苦労さん」

モンスターの集団を倒し終わり、ラストেশヨンの街に戻ってきた俺たちはシアンのところに戻るついでに街を散歩していた。

「おおー！」

高台に作られた広場に差し掛かったところでダステイが突然走り出す。

「見て見てアツシユ！すつごい綺麗だよ！」

「……へえ」

身を乗り出しながら目を輝かせるダステイの目の前には夕日に照らされたラスティシヨンの街が広がっていた。

朝もリーンボックスで同じような状況になったが、これはこれで良い景色だ。

「アツシユ、わたし前々から思ってたんだけどさ」

「……んだよ」

「世界って、素敵だと思わない？」

「はあ？」

いつも突拍子もないダステイの発言には首を傾げるばかりだが、今回は本当に意味がわからなかった。

「……で、どういう経緯でその結論になったわけだ？」

「良くぞ聞いてくれました！まず素敵な人がいるでしょ？」

この時点で突っ込んだことを少し後悔した。

「その素敵な人が住んでる家は勿論素敵な家。その家が集まれば素敵な街。その街が集まれば素敵な国。そんな素敵な国が四つもあるゲームギョウ界は素敵な世界。ほらね？」

「ほらねじゃねーよ。まるで意味がわからんぞ」

「うーん……アツシユにはまだ早かったかな？」

「一生理解出来ないだろうな」

ダステイの後ろを通り過ぎ、再び歩き出す。

「……あれ」

「あ？」

俺に小走りで追い付いたダステイが不意に声をあげる。

振り向くと、俺のコートの端を掴まんだダステイが居た。

「もー、アツシユ。ここ破れてるよ」

「あー……攻撃は全部避けたつもりだったが……目算を誤ったか？」

ダステイが指差した部分にはしっかりと切られた跡が残っている。

旅人をやっている以上、服が破れたりするのは仕方ない部分もあるが……。

「しょうがないなアツシユはー。またわたしが縫ってあげるね！」

「いらねえよ。面倒くさい」

「服の破れは放っておいても治らないよ！遠慮しないで任せてよ！」

「限界まで破れたら新しいの買えば良いだろうが」

「だーめ！物は大切にしないと！」

「はあ……好きにしろ」

どれだけ反論してもこの調子じゃどうしようもなく、結局折れるのはいつも俺だ。

「たっだいまー！」

「戻ったぞ」

「おう、お帰り。首尾はどうだ？」

「バッチリ！完璧！パーフェクト！」

「さすが。助かったよ」

俺たちがシアンの待つ食堂へと帰って来た時にはすっかり夜になっていた。

「じゃあアツシユ。コート貸して」

「はいはい……」

ダスティに絆創膏と合わせてコートを渡す。

絆創膏を見たダスティが露骨に嫌そうな顔をした。

「こんなのいらないよー！わたしだって成長してるんだよー！」

「わかったから取り敢えず持つとけ。使わなかったんなら返せば良いだけの話だ」

「むむむ……シアン！部屋借りるよー！」

「あ、ああ……」

唸りながらダスティがその場を後にする。

それを見送り、カウンターに備え付けられた椅子に座ると、シアンがカウンター越しに身を乗り出して俺に顔を近づけて来た。

「健気だな」

「やめろって言ってるのに聞かねえんだよ」

何を隠そうダステイは裁縫が苦手だ。

いつも俺のコートが破れる度につきはぎをしようとするが、毎度毎度指を絆創膏だらけにしている。

おまけにこれに関しては無駄に頑固。

面倒くさいったらない。

「取り敢えず、飯でも作ろうか？」

「……先に風呂入るわ。あいつはもうしばらく部屋に籠るだろうし」

「了解。お湯は自分で張ってくれよ？」

「わかってるよ」

凝り固まった首を鳴らしながら俺は風呂場へ歩き出した。

「ダステイ、飯出来たぞー」

言いながらダステイが居るであろう部屋の扉を叩く。

風呂から上がり、シアンと飯を作り終えた俺は今だ部屋に籠ったままのダステイを呼

びに来ていた。

「おい、聞いてんのか？」

人の気配はするが、一向に出て来る気配がない。

「……今日はお前の好きなオムライスだぞー」

さつきより小さめの声で部屋の中に呼びかける。

すると扉が少しだけ開き、その隙間からダスティがこちらを覗いていた。

「……………」

「飯だぞ。いつまで籠ってんだよ」

それだけ言って踵を返し食堂に戻る。

「……………」

その途中、不意に後ろを振り返る。

「いつ……………どうかした？」

着いて来ていたダスティが慌てたように両手を後ろに回した。

「……………いや、なんでもねーよ」

それで隠せてると思ってるんだろうか……。

結局ダスティは飯を食う間も左手をポケットに入れたままだった。

行儀が悪いっいたらありやしない。

「さて、俺はもう寝させてもらおうぞ？」

使った食器を重ねてシアンに渡す。

「ああ、片付けはこっちでやっておくよ」

「頼んだ」

「じゃあおやすみ」

頭の横で手をヒラヒラと振りながら貸してもらっている自分の部屋に戻る。

「……………つと、その前にコートだ」

自分の部屋を通り過ぎ、その隣にあるダステイの部屋の前へ。

「おい、ダステイ。コート返せ。聞いてんのか」

扉を叩くが、今回も返事がない。

まだへソ曲げてんのか？

「……………入るぞ」

あいつの性格上部屋に鍵を掛けてないことはわかってるので躊躇なくノブを捻る。

やはりというか、扉はあっさり空いた。

「すー……………すー……………」

「こいつ……………寝てんのかよ」

部屋に入った途端、耳にダステイの寝息が聞こえてきた。

裁縫道具と絆創膏のフィルムが散らばった机に俺のコートを下敷きにして突っ伏している。

「やれやれ……せめてやること全部終わらせてから寝ろ……よっ」

言いながらダステイを抱え上げ、ベッドに寝かせた。

こうなったこいつはちよつとやそつとじや起きないのはわかっている。

起こそうとするだけ無駄って訳だ。

「さて……」

ダステイと入れ替わるように椅子に座り、針を手取る。

今日縫い付けたにも関わらず、既にほどけ掛けているつぎはぎを手早く縫い直す。

「これで終わり……つと」

縫い付けには2分と掛からなかった。

裁縫道具を箱にしまい、絆創膏のフィルムをゴミ箱に放り、コートを掴んで部屋を出る。

「おっ……とっ」

その途中で持っているコートを引つ張られた。

振り向くと、ダステイが絆創膏だらけの手で俺のコートを掴んでいた。

一瞬起きているかとも思ったが、どうやらそうではないらしい。

「……はあ……」

コートを掴む手を引き剥がし、再び歩き出す。

「……………」

扉を開いたところで振り返る。

「……良い夢見ろよ?」

それだけ言つて扉を閉めた。

……………

「……もし、そこのお方」

次の日、クエストを消化する為にダステイとギルドに向かっている途中、裏路地から現れた男に声をかけられた。

「……あんた誰だ?」

「私はない旅商人にございます」

「旅商人……ねえ」

頭から足元までをすっぽりと覆うローブに狐を模したお面をつけた風貌のその人物はどう見ても怪しい。

「旅商人さん？は、わたしたちに何か用？」

「ええ、ええ。実は近くの遺跡跡地に凶暴なモンスターが住みついてまして、はい」
「それを俺たちに倒して欲しいと？」

「船では良いものを見させてもらいました。是非ともあなた方にお頼みしたいと……」
「わざわざ俺たちを狙って呼び止めたのは昨日の船で俺たちの戦いを見たかららしい。」
「アツシユ、どうする？」

「……………」

見るからに怪しいが、遺跡に住むモンスターの話は嘘ではなさそうだ。
遺跡のモンスターがいつまでも大人しくしているとは限らない。

「…………場所を教えろ」

「あ、はい。場所はここです」

男の浅黒い腕がロープを割りながら生え、その手には地図が握られていた。

「…………行くぞ、ダステイ」

「オッケー！」

地図を受け取り、すっかり元気になったダステイと遺跡へと急いだ。

ラストイションの街から遺跡まではそれほど距離はなく、30分も歩けばたどり着く
ことが出来た。

「……なんか不気味なところだね」

「光が入るだけまだマシだ」

足元には苔を生やした瓦礫が積み重なっており、天井に空いた大穴からは曇り空が顔をのぞかせている。

「ていうかモンスターいないね」

「……ガセネタ捕まされたか？」

そう思った直後、空から翼が羽ばたく音が降りてきた。

「うわー……すごい強そう……」

「エレメントドラゴン……強力なモンスターってのはこいつのことか……」

武器を手に取り、構える。

エレメントドラゴンの目がこちらを捉え、威圧する様に吠えた。

「来るぞー！」

「よーし、取り敢えず方陣展開！」

ダステイが何時もの様に周囲に多数の魔方陣を展開する。

「腕！」

「了解！」

俺の腕を赤い光が包み込む。

剣が一気に軽くなった。

「グオオオオ！」

エレメントドラゴンが腕を振り上げ、地面を抉る様に横に風ぐ。

「遅い！」

俺はそれを相手の足の間を潜ることで回避し、振り向きざまに左脚に向かって剣を振る。

剣の刃はエレメントドラゴンの硬い鱗を砕き、肉まで達した。

「アアアアアア！」

右から太い尻尾が迫る。

「そうはさせないよ！」

俺と尻尾の間にダステイの魔方陣が割って入り、尻尾を受け止めた。

それを確認した俺は尻尾に剣を突き立てる。

「フォーム・ツヴァイ！」

一旦突き刺した剣から手を離し、柄尻にミドルキックを打ち込む。

それと同時にSSSが稼働し、杭打ち機のように作用した刃が更に深く尻尾に突き刺さった。

「ダステイ！」

「エナジーチェイン！」

展開されている魔方陣から魔力の鎖が伸び、エレメントドラゴンの体を巻き取る。

尻尾から引き抜き、剣に戻したそれを肩に担いだ俺はエレメントドラゴンの体を鎖を使って登っていく。

「よつとお！」

ある程度登ったところで鎖から跳び、剣を振り上げる。

「貰った！」

剣を全力で振り下ろし、エレメントドラゴンの翼を切断した。

「グガアアアア！」

俺が地面に着地するとほぼ同時にエレメントドラゴンも体に巻き付いた鎖を引き千切ることに成功する。

「ふふーん。買ったも同然だね」

「気を抜くな。まだ倒した訳じゃない」

「もうこれなら魔方陣はいらないかな？なんちゃってー！」

「バアアアアアア!!」

怒りに打ち震えるエレメントドラゴンが一際大きく吠えた。

その直後、ダスティの魔方陣が全て消え失せ、俺の腕を包んでいた魔法もなくなった。

「あれ？あれ!？」

「おい、真面目に……」

「至極真面目だよ！でも魔法が使えないんだよ！」

「なんだって!？」

現にダステイは懸命に魔法を使おうとしているが、煙のひとつすらでやしない。

魔法の使えないダステイは無力に等しい。

勿論敵がこちらの事情を察してくれる訳はない。

気がつけばエレメントドラゴンの巨大な腕が俺たちに向かつて振り上げられていた。

「ちいー!」

「あいたー!？」

ダステイを後ろに突き飛ばし、振り下ろされた腕を剣で受け止める。

強化が無い状態のエレメントドラゴンの攻撃は凄まじく重かった。

「ぐう……!」

「アツシユ！」

「……ここから……逃げろ……」

「え……」

上から更に圧力がかかり、膝を着く。

俺は確信していた。

このままでは全滅する。

「街に戻って……助けを……呼んでこい……」

「でも、それじゃアツシユが！」

「お前を庇いながらじゃ……ぐ……こいつには勝てない……いいから……早く！」

視界の端にエレメントドラゴンのもう一本の腕が見えた。

重圧が一瞬緩み、次の瞬間には俺は殴り飛ばされていた。

壁に背を打ち付け、立ち上がるに立ち上がれない。

「アツシユ……っ……っ……」

こちらを近付いてきていたエレメントドラゴンの動きが止まり、明後日の方向を向く。

「やいデツカいの！わたしは相手だ！」

「っ！……あの馬鹿……っ！」

ダステイはこっちの指示を聞かず、それどころかエレメントドラゴンを挑発し、自らを危険に晒していた。

エレメントドラゴンの口に炎が溜まる。

「危な！」

危険を察知したダステイがすぐさま柱の影に隠れる。

吐き出された炎が遺跡の床を焼く。

どうやらダステイは無事なようだ。

「グオオオオオオ！」

「え……わああああ?!」

エレメントドラゴンはダステイの隠れていた柱を張り手のように殴りつける。

砕けた柱の一部が足元のダステイに降り注ぐ。

気付いたダステイが潰されまいと走る。

幸い大きな瓦礫はダステイに落ちることはなく、せいぜい落下して更に砕けた瓦礫が

背中を叩いた程度だ。

「ハア……ハア……」

元々運動が嫌いだったダステイはエレメントドラゴンの攻撃を回避するだけで大幅に体力を消耗し、既に息が切れ始めていた。

だが敵はどうやら俺のことは忘れているらしい。

「やるなら……今か……?」

剣を地面に突いて立ち上がる。

足が動く。

剣が振れる。

なら戦うだけだ。

「……………」

短く息を吐き、エレメントドラゴンへ駆ける。

「ほらほら………ハア………こつちだよー！」

ダステイは積み重なった瓦礫の上へ登り、叫ぶ。

それを見たエレメントドラゴンはダステイに攻撃をするのでは無く、足を高く上げ、地面を全力で踏み抜いた。

地面が揺れる。

「あ、わ、わわ、うわああ!?!」

高い瓦礫の上に立っていたダステイはその揺れをモロに受け、瓦礫から落下した。

背中を打ったダステイにエレメントドラゴンが近付いて行く。

だがそれよりも早く俺が敵の尻尾を掴む。

「気付いたかよ………だがっ！」

もう遅い。

尻尾をよじ登り、更にエレメントドラゴンの背を登って行く。

今の俺にドラゴンの硬い鱗を砕く腕力は無い。

劍を突き入れる。

「ギャアアアアアア!？」

「流石にここは効く、だろ！」

俺が攻撃したのは既に切断した翼が生えていた場所。

凄まじい痛みにエレメントドラゴンが暴れ始めた。

劍を引き抜き、肩を蹴り地面に跳ぶ。

「ハア……!？」

着地した途端、背中からおぞましい程の殺気を感じ取った。

振り向くと、エレメントドラゴンが拳を握り締め、俺に向かって一直線に向かって来

ていた。

「ぐ……!？」

出来れば回避したいところだが、ここに来て痛みがぶり返してきた。

また足が動かない。

直撃を避ける為、咄嗟に劍の腹で攻撃を受け止めるような姿勢をとる。

「ガアアアアア！」

下から振り上げるような攻撃が激突し、押されるような感覚が腕を襲う。

だがそれは唐突に終わった。

気が付けば俺は両腕を上げており、その先にあつた筈の剣は失われていた。
「やっべ……」

もう少しマシなセリフを言った方が良いか？

これが最後の言葉かと思うと、そう思わざるを得なかった。
視界が赤くなる。

もつとも、それは俺の赤じゃなかったが。

「……は……？」

時が止まったかと思った。

俺の背後で弾き飛ばられた剣が鳴らした乾いた音が俺を現実に取り戻した。
目の前にはダステイ。

それは、いい。

「……ごめん……」

消えているような声でそう言ったダステイの腹からは、黒い爪が生えていた。
ダステイの体が浮き上がる。

空中に投げ出されたダステイは人形のように地面に叩きつけられた。

「グオオオオオ!!」

爪を血で濡らしたエレメントドラゴンが吠える。

邪魔なハエを一匹叩き落とし、さぞかし満足なのだろう。

「……は……は……は……」

踵を返し、落ちている剣を拾い上げる。

「テメエエエエエ!!」

ここで仕留める。

絶対に。

痛みは忘れた。

「ガアアアア!」

エレメントドラゴンが俺を潰すため腕を振り下ろす。

それをギリギリでかわし、手の甲に当たる部分に剣を突き立てた。

刃は鱗をいともたやすく粉碎し、肉を貫く。

「ギヤアアアアア!」

エレメントドラゴンが痛みに耐え切れず、腕をかむしやらに振り回す。

剣を引き抜き、エレメントドラゴンの腕が降り上がる瞬間に腕から跳ぶ。

「あああ!」

フォーム・ドライ。

大鎌がエレメントドラゴンの喉を捉えた。

刃が肉に食い込むが、まだ足りない。

跳躍の勢いのまま、エレメントドラゴンの頭に乗る。

「おおおおおおお!!」

鎌を力の限り引き上げる。

「グ……ガ、ア……アア……」

ブチブチと繊維を千切る音が足下から響く。

「ああああああ!!」

そして、ついにエレメントドラゴンの首が真つ二つになった。

「あぐっ……!!」

頭に乗っていた俺はそのまま頭と一緒に落下し、背中を打ち付ける。

その一瞬後にエレメントドラゴンの胴体が倒れ、頭と一緒に光になって消えた。

「ハア……ハア……げほっ……おええ……」

直後、耐え切れない不快感が体を襲い、それを吐き出した。

だがそんなことはどうでもいい。

「ダステイ……」

半分這いずるように動かないダステイへ向かう。いつの間にか雨が降っていた。

その雨の真ん中にあいつは横たわっていた。

「おい、起きろ……いつまで……寝てんだよ……」
横に座り、ダステイを抱きかかえる。

血が服を濡らしたが、些細なことだ。

「……けほっ……けほっ……あ……アツシュ……」
「気がついたか……!？」

口から血を吐き出し、ダステイが目を覚ました。

俺を見たダステイは少しだけ笑った。

「よかった……アツシュが無事で……」

「ハア……待つてろ……すぐに助けてやる……」

俺の言葉にダステイは首を振った。

「もう……いいよ……」

「やかましい、俺がよくないんだよ……!」

「アツシュ……」

ダステイが雨に濡れた手を俺の頬に添える。

「アツシユは……一人だったわたしを拾ってくれた……」

「やめろ……」

「お父さんとお母さんも……苦しいはずなのに、いつもわたしの前では笑ってた」

「やめろって……言ってるだろ……」

「先生やシアン……街の人たちも……みんな優しく……」

「うるせえ……認めねえぞ……」

「アツシユがいなかったら……わたし……ずっと一人だった……」

ダステイが光のない目で空を仰ぐ。

「わたし……幸せだったなあ……」

「認めねえ……絶対に……」

「やり残した事は……いっぱいあるけど……もう……満足かな？」

「やり残した事があんなら……諦めんよ……」

「……じゃあ、ひとつだけ」

ダステイが両腕を俺の首に回し、頭を引つ張る。

引き寄せられるまま頭を下げた。

あいつの顔がゆっくりと近付き、唇同士が触れ合う。

鉄の味しかしなかった。

「えへへ……わたしの最初で最期……上げちゃった……」

「何が……最後だよ……ふざけんなよ……」

あいつの顔が離れていく。

「せつかく……すすきり終わりそうなのに……そんな顔しないでよ……」

「うるせえ……」

「いつまでもそんな顔してたら……友達出来ないよ？」

「余計なお世話だ……大馬鹿が……」

「ほら、笑って」

そう言ってダステイが笑う。

弱々しかったが、確かにその笑みはあいつの笑った顔だった。

ポロポロの癖に笑っているダステイが馬鹿みたいで、思わず釣られて笑った。

「……………」

あいつはゆっくりと息を吐いた後、それきり息を吸わなくなった。

「……何が……笑ってだよ……」

雨が降る。

「笑えるわけ……ねえだろうが……」

降り注ぐ。

「う……………あ……………うあ……………あああ……………」

雨の音が、誰かの叫びを掻き消した。

「……………」

気がつくと、俺はベッドに寝ていた。

横にはアイエフやコンパも居る。

「俺……………あのまま寝たのか……………」

「アツシュ……………」

声は真横から聞こえてきた。

ネプ公が俺の隣で横になっていた。

「大丈夫？すごいなされてたけど……………」

「そうか……………夢か……………」

そう。

あれは夢。

夢であり、現実だった。

隣のネプ公を抱き締める。

「ねぶ？アツシュ？」

「悪い……………もう少し……………このままでいさせてくれ……………」

「……しようがないね。特別だよ？」

「……………」

今度は絶対に守ってみせる。

結局、朝が来るまで俺の震えは収まらなかった。

……………

「……………」

ラストレイシヨンの墓地。

そこにふらりと男が現れた。

「……………」

墓の前に立ち、手の平を広げる。

すると墓から小さな青白い光が溢れ、手の平の上で集まり、玉となった。

「……これが……世界を破壊するか……一筋の希望となるか……全ては……彼の手に

……………」

光の玉を魔方陣にしまう。

彼女の墓の前で呟いた狐の面の男は、いつの間にか闇に紛れていなくなった。

第12話 嘘・偽物・とぼっち

トンネルを抜けると、そこは雪国だった。

そんなフリーズが自然と口に出るほど真つ白い道をネプテューヌ一行は歩いていった。

「あ、あいちゃん……ぎ、ぎぶいですう……」

「はい、カイロ」

始めてのルウイーの寒さに縮こまるコンパにアイエフがカイロを手渡す。

「ネプ子も使う？」

そう言いながらアイエフが振り返る。

「わーい！雪だー！凄いやあいちゃん！息が白くなるよ！」

が、当の本人は見慣れない雪に大はしやぎで微塵も寒そうな素振りを見せていなかった。

「雪ごときでよくあれだけ喜べるな……」

「まったく……あ、アツシユはいる？」

「いらねーよ。むしろ今日はいつもより暖かいくらいだしな」

「そう。ベール様はどうですか？」

「ありがたくいただきますわ」

順番に聞いて回り、最後になぜか眼鏡をかけているベールに振る。

「どうやら眼鏡は変装のつもりらしい。」

ベールはあのリーンボックスでの一件の後、自国での溜まっていた仕事を片付け、ネプテューヌ一行に合流。

「これからは一緒に旅に同行してくれる事になったのだ。」

「と言っても、仕事は部下にほとんど丸投げしたようだが。」

「では……えいっ！」

カイロを手渡そうとしたアイエフに突然ベールが抱き着く。

「って何抱きついてるんですかベール様!？」

「だってカイロよりあいちちゃんの方が暖かそうなんですもの」

「ひ、人前で恥ずかしいですから離れて下さい!カイロあげますから!」

突然ピンク色の空気を醸し出し始めた二人を少し離れたところでアシユレイ達が見ていた。

「何やってんだか……」

「これに乗せたら……よーし!完成!」

「……で、お前はお前で何してるんだよ」

アシユレイが振り向いた先には自分の身長を越える程の大きさの雪だるまを作り終えたネプテューヌが満足そうな顔をして立っていた。

「お前あの短時間でこれ作ったのか？」

「そうだよ！どやあ！」

「……一周回って呆れる」

「さて、雪も堪能したし、あつちの二人は放っておいて教会に行こうか」

「そうだな」

再び教会へ向けて歩き出す。

するとアシユレイの後ろを着いてきていたコンパが雪に躓いた。

「ひゃあ!？」

「うおつと!？」

前のめりに倒れたコンパがアシユレイの腰にしがみつく。

急な重圧にアシユレイがよろめくが、その場で踏ん張りドミノ倒しになることだけは阻止する。

「コンパ、大丈夫か？」

「(ぎ)、こめんなさいです……」

謝りながらコンパが立ち上がる。

だがなぜかアシュレイの腰に回した手は外さない。

「コンパ？」

「アツシユさん、あつたかいですう……」

「は？」

「へえー。どれどれ……」

「おい、なんでお前まで……」

さらに今度は右腕にネプテューヌが張り付く。

「おお！ほんとだ！湯たんぼみたーい！」

「はあ？」

「……三人とも何してるのよ」

ようやくとベールから解放されたアイエフがアシュレイ達に追いついたが、その異様な光景に呆れを隠せない。

「あいちゃんあいちゃん！アツシユが凄いんだよ！でつかいカイロみたい！」

「ふーん……」

アイエフが興味本位で空いていたアシュレイの左手を握る。

「……本当、凄い熱いわね。アツシユ、熱とかない？」

「……あつたらもつと前から言ってる」

「もしかしなくても、これもあんたの力ってやつじゃないの?」

「アツシユさんの力と言うと、前にお聞きした?」

アイエフの頭越しにベールが会話に割り込んだ。

「たしか細胞変異だったっけ?」

「……俺の力……か」

アシュレイの脳裏にその記憶が蘇った。

それはリンボックスでの一件の後、アシュレイが目覚めた直後まで遡る。

獣と化したアシュレイは全身ボロボロでまともに立つことすら出来ず、ベッドに寝か

されていた。

「……お待たせしました」

ベールを含めたネプテューヌ達が集まっている部屋にグレイが入る。

「それで、大事な話って?」

「ええ。アツシユくんの体について、私なりに考えた結果をお話しようと思ひまして」

「俺の……体?」

アシュレイがベッドに寝たまま首だけを動かして疑問を投げかけると、グレイが静かに頷いた。

「まずお伝えしなければならぬことがあります」

「なんですか？」

「アツシユくんの体……と言うより細胞と言った方がいいでしょう。その細胞はもはや人間とはかけ離れたものになっています」

「……まあ、あんなことが出来る時点でそんな気はしてましたけどね」

グレイ曰く、使えなかった筈の魔法の使用、男への変身、異形への変異などはアシユレイの細胞そのものが根本から変化したと仮定すれば全て辻褄が合うらしいのだ。

「そうなった原因に心当たりはありますか？」

「……モンスターに喰われた、ぐらいですかね」

「……ふむ。ではそのモンスターの影響でその力を手に入れた……と言うのが自然ですかね」

「あのモンスター……俺をこんな体にして何がしたかったんですか？」

「……さあ？」

「さあ……」

「私達には理解出来ない何かがある……としか言えませんね」
グレイの言葉にアシユレイは顔を顰めるばかりである。

「ところで、アツシユってまたあんなのになったりするの？」

ネプテューヌのあんなの、とは先日の獣のことだ。

「いえ、あれは外的要因が作用した結果です。自然にあの姿になることはありませんよ」
「よかったあー。またアツシユと戦うことになるのは嫌だしね」

もう獣が出てくることはないと言き、ネプテューヌの顔に安堵が浮かぶ。

「アツシユくんの力……今は便宜上、細胞変異と呼びましょうか」

「細胞変異……」

「端的に言えば、その場その場の状況に合わせて体を自由に変化……いえ、進化させることができる力ですね」

「なるほど。だからアツシユは自由に男に戻ったり腕を変形させることができるってわけね」

「全てはアツシユくんの意思のまま、です」

聞けば凄いな事だが、その力のせいで今回のようなことが起こってしまったのだ。

アシユレイは素直に喜べない。

「グレイさん、コンベルサシオンがわたくしの姿の時に撒いた煙は何か分かりますか？」
「あの時コンベルサシオンが撒いた黒い煙は汚染物質と言い、人々の負の感情が粒子化したものです」

「もしかして、モンスターが汚染化したのもそれが原因？」

アイエフの言葉にグレイが頷く。

「だからモンスターさん達がみんな汚染化したですね」

「そして、アツシユくんの細胞は汚染物質に強く反応する性質があるようです」

「もしかして、アツシユがあんな姿になったのも……」

「あの異常な密度の汚染物質が原因ですね。汚染物質は空气中に微量ながら含まれていますが、モンスターは汚染物質を集める性質があるので、あの様な異常濃度地帯やモンスターの密集地では注意が必要です」

「不意に来る頭痛はそれが原因か……」

アシュレイはあの獣になる前に感じた不快感はそれより以前にも感じたことがあった。

ラストイションで工場に閉じ込められた時、変身をしようとした直後、突然の頭痛に苦しめられた。

グレイの話を聞いた後ならあの頭痛も領ける。

「では、最後にこれを」

「これって!？」

「それを探しにリーンボックスまで来たのでしょうか？」

グレイが取り出したそれは紛れもなく鍵の欠片だった。

「やったー！これで二つ目だー！」

「どこで見つけたの？あれだけ探しても見つからなかったのに」

「コンベルサシオンが逃げる際に落として行ったんですよ」

「道理で見つからないはずです……」

「ですが、おそらく宿っていたであろう魔力は既に失われているようです」

「ということは……今回はいーすんタイムは無しかあ……」

「ともあれ、これで二つ目だ。残り半分……だな」

こうして鍵の欠片を手に入れ、リンボックスでの目的を果たしたネプテューヌ達は一旦プラネテューヌに戻り、そして現在、コンベルサシオンがルウィーに入るところを見たという情報入手し、教会に急いでいるところなのだ。

「こんにちはー。ホワイトハート様いますかー？」

雪道をカイロや人肌で凌ぎ、ネプテューヌ達はようやくとルウィー教会にたどり着いた。

「ところで、いきなりルウィーの教会に来てよかったのかしら？」

「どういうことですか？」

「コンベルサシオンがルウィー教会の回し者なら、ある意味ここは敵の本陣ですわ。そんな本陣の中に入っても捕まったりしないのかしら」

今のところ、コンベルサシオンとルウィー教会が繋がっている線はかなり濃厚だ。

だとすれば、その大将がいる場所へ正面から作戦もなしに乗り込むネプテューヌ達は飛んで火に入る夏の虫も良いところである。

「……そう言われると今までのノリで教会に来たけど、凄く逃げ出したい気分です」

「どの道、ここでの俺たちの立場を知った方がいい。これからどう動くのが正解かわからないしな」

「はいったからにはしようがないです。とりあえず、ホワイトハート様に会って鍵の欠片とコンドルさんのことを聞きます」

「虎穴に入らずんば虎子を得ず、か……あと、コンドルじゃなくてコンベルだからね」

なんてことを話していると、奥からメイド服姿の少女が出てきた。

「ルウィー教会へようこそ。ホワイトハート様との面会をご希望ですか？」

一瞬ただの一般人かとも思ったが、セリフを聞く限りどうやらこのルウィー教会の職員のようなのだ。

「はいです。聞きたいことがたくさんあるです」

「わたしの名前はフィナンシエ。ホワイトハート様の侍従をさせていただいております」

「わざわざ女神サマの侍従がお出迎えか。人員不足なのか？」

皮肉めいたアシュレイの言葉だが、それもその筈。

他の教会では忙しく歩き回っていた職員が殆ど目につかない。

「他の職員はみんな別の仕事に当たってまして……外は寒かったですよね、お待ちの際に温かいものを用意しますね」

「あ、わたしじっくりコトコト煮込んだプリン（ホット）で！」

「わたしはお砂糖たっぷりのココアがいいです」

「わたしはミルクティーで」

「わたくしにもあいちゃんと同じ物をくださいな。あ、茶葉はダージリンピユアブレンドでお願いしますわ」

「な、何贅沢言ってるんですかこの人たちは……」

「別に無視して構わない……全員後で説教だ」

.....

しばらく備え付けられたソファで待っていると、再びフィナンシェが現れた。

「お待たせしました。面会の準備が整いましたので、ホワイトハート様の元へご案内いたします。わたしについて来てください」

「はいはい！了解！」

ソファから立ち上がり、フィナンシエの後をついていくと、間も無くいかにも大きな扉の前にたどり着いた。

その扉をフィナンシエが三度ノックする。

「ホワイトハート様、旅の方をお連れしました」

「……入ってもらって」

扉の向こうから消えているような小さな声が聞こえて来た。

フィナンシエはそれを聞き逃すことなく、扉を開ける。

そこには白い帽子を被った少女が自身の大きさは正反対の巨大な椅子に座っていた。

「はじめまして、ホワイトハート様。わたし、ネプテューヌ！で、こっちのが……」

「自己紹介はいいわ」

ネプテューヌが挨拶し、続けて全員の紹介を始めようとするが、ホワイトハートはそれを遮った。

「あなたたちのことなら、よく知っているもの」

「あれ？もしかしてわたしたちって有名人？」

「……ちなみに、どういう意味で有名なんだ？」

アシユレイがこんな質問をした理由など一つしかない。

「もちろん、魔王崇拝者……ユニミテスの使いとしてよ」

ホワイトハートが指を弾く。

その直後、多数の兵士が背後の扉から湧き出し、出口を塞いだ。

「まさか!？」

「ここでもですか!？」

「さあ、異教徒……いえ、邪教徒を囚らえるのよ」

「んなこったろうと思っただよ……」

どうやら教会内に人が少なかつた理由は、ユニミテスの使いの濡れ衣を着せられたネプテューヌ達を捕まえるため、別室で待機していたかららしい。

「こいつらがユニミテスの使いか……」

「子供ばかりじゃないか」

「見た目に騙されるな。遠慮はいらない」

「まるで袋のネズミね」

「ブラン……あなた正気なの?」

ベールがホワイトハート改め、ブランを見据える。

「正気よ。この機会に、あなたも始末してあげるわ」

「あらあら、せつかくの変装が見破られてしまいましたわね」

「……変装、ね」

「はじめからバレバレだよー」

「そ、それよりもどうすればいいですか……?」

「さすがに、ここで戦うのは得策ではないわ」

そんなことを言っている間にも兵士達はジリジリと距離を詰めてくる。

「……アイエフ」

「わかってるわよ」

直後、アシユレイがホルダーからナイフを引き抜き、ブランに向かって投げつけた。

「っ……」

ブランはそれを命中する直前で受け止める。

当たりはしなかったが、周りの目を引き付けるならこれで十分だ。

「みんな!わたしについて来て!」

「あいちゃん!!そっちはステンドグラスです!」

「ということはまさか……!?!」

「そのまさかよ!」

アイエフは躊躇なくステンドグラスを蹴破った。

冷たい空気が一気に流れ込んでくる。

「なっ!?!」

「もうこうなりややくそだー!」

「ま、待つてくださいですー!」

「一度でいいから、ガラスを割って脱走したかったですのよね。それ!」

「あばよマヌケ共!」

全員が割れたステンドグラスの穴から飛び出し、脱兎の如く駆け出した。

「まさかあんなところから逃げるなんて……追つて。何が何でも捕まえなさい!」

「はっ!」

兵士達もその穴を通り、ネプテューヌ達を追いかけていく。

「……さて、わたしも追いかけてみましょうかね。彼らよりも先に追いつければ良いのです

が……」

それを部屋の隅で見ていたフィナンシエは兵士達が向かった先とは少し違う方向へ走っていった。

.....

「はあ……ここ、ここまでくればもう大丈夫かな？」

「いえ、きつと追いつかれるのも時間の問題よ。この街道は街に続いてはるはずだから、一先ずそこを目指しましょ」

ネプテューヌ達が街道をひた走る。

降り積もった雪はこちらの足音を消してくれたようで、追手を引き離すことに成功した。

だが雪が消すのはこちらの音だけではない。

ネプテューヌ達はいつどこから来るともわからない追手に怯えながら逃げ続けることしか出来なかった。

「うう……さぶいよお……鼻水が凍るう……」

「あいちゃん……街はまだですか？わたし……眠くなってきました……」

「きつともう少しだから我慢しなさい」

逃げ続けるというプレッシャーと雪国の寒さ。

そして足を捕らえる雪がネプテューヌ達の体力を確実に奪っていった。

「……けど、困りましたわね。教会がわたくし達を敵視している以上、別に協力者を見つけないといけないですね」

「リーンボックスではベール様が協力してくれたからなんとかあったものの、この状況

は詰んでるわね」

「なら、先に協力者を探した方がよさそうですね」

「問題は協力してくれる奴がいるかどうか……だな」

「まだ体力に余裕のある三人が今後のことについて相談をするが、あまり希望は見られないようだ。」

「はあ……やっぱ、すんなり鍵の欠片は見つからないかー」

「でも、一つだけのはつきりしたことがわかりましたわ」

「ねぶ？何がわかったの？」

「姿は見せませんでしたけど、コンベルサシオンのバックにいるのはルウィー教会ですわ」
「でなければ、わたしたちをユニミテスの使いになって仕立てないわ」

「今回の件でコンベルサシオンとルウィー教会の繋がりは疑惑から確信に変わった。」

「けど、わかったからといってわたし達はこれからどうすればいいの？」

「協力者を探しましょう。何も女神様や教会だけが協力してくれるわけじゃないわ」

「まあ、教会が役立たずなのは今に始まったことじゃないかな」

「なら、早く街に行つて協力者を見つけて、お部屋で温まらせてもらおうです」

「……残念ですが、そう簡単にはいかないみたいですよ」

「そう言つてベールが睨んだ先には既にこちらを発見したらしい教会の関係者が立つ

ていた。

「いたぞ！森の中だ！」

「見つかったですう……」

幸い数はそれほど多くない。

ならばやることは一つだ。

「さあ、神妙にお縄につけ！」

「えー、寒いし縄って食い込んで痛そうだから、わたし的には遠慮したいかなー」

「ふん、逆に縛って木に吊るしてやるよ」

「この期に及んでふざけたことを……！」

「お、やるつての!？」

「貴様らの相手をするのは我々ではない！行け、ドラゴン！君に決めた！」

するとその教会関係者は懐からディスクを取り出し、さらにそこから巨大なドラゴンを呼び出した。

「あれつて、エネミーディスクです!？」

「なるほど、やっぱその出処はルウイーだったわけね」

「だったら、本気を出すです！ねぶねぶ！」

「ラジャー！」

ネプテューヌが光に包まれ、女神の姿となる。

「な!? 変身しただと!？」

うろたえる教会関係者をよそに、ベールがアイエフをじっと見つめる。

「……あ、あの、なんですかその期待のこもった眼差しは」

「もちろん、あいちゃんが変身命令をくれるのを待っているのですわ」

「どうやらベールもコンパとネプテューヌのやりとりのようなことがしたいらしい。

「さあ、あいちゃん。わたくしに指示を……」

「え、えと……今はふざけてる場合じゃ……」

「さあ、あいちゃん!」

「あーもうヤケよ! ベール様、お願いします!」

「その言葉、待っていましたわ!」

ベールがネプテューヌ同様に光を纏い、女神化を行う。

「こちらも、本気でお相手をして差し上げますわ」

「もう一人変身した!？」

「いくら変身して見た目が変わろうが関係ない! ユニミテスの使いよ! 俺たちのスー

パーパワーを受けてみるがいい! ウーツ! ハーツ!

「御託は……」

黒い炎に上がり、そこから男になったアシュレイが飛び出す。

「いらねえ！」

そのままドラゴンの顎を蹴り飛ばし、

よろめいたドラゴンが地面に倒れ伏た。

「ああ!？」

「強さを口で説明する前に殴るべきだったな」

「くそ！立て！ドラゴン！」

倒れたドラゴンがゆっくりと立ち上がる。

怒りのこもった眼でネプテューヌ達を見据え、吠えた。

「フン！」

振り下ろされたドラゴンの腕をアシュレイが魔方陣で受け止める。

「ヤー！」

「せい！」

その隙にネプテューヌとパールが攻撃を加える。

「ガアアア！」

「ぐっ……」

ドラゴンがとんぼ返りと同時に尻尾で攻撃を行い、ネプテューヌ達はそれをなんとか

受け止めた。

先ほどからこうして攻撃の僅かな隙について攻撃をしているが、決定打を打てずにいた。

「流石に……強いですわね」

「こんだけ騒げば他の追手がこつちに気付くのも時間の問題だ。一気に仕留めたいところだが……」

アシユレイがドラゴンを睨む。

ネプテューヌ達が攻撃を加えたにも関わらず、やはりダメージを受けた様子はない。硬い鱗と分厚い筋肉が刃を通さないのだ。

かといって、大技を叩き込むような隙は無いに等しい。

どうしたものかと考えていると、ネプテューヌが不意に口を開いた。

「アツシユ、ベール。暫くあいつを引きつけてくれないかしら」

「はあ？」

「わたしに良い考えがあるの」

「……信用ならねえ……」

「わたくしはどちらでも……いかがいたします？」

「……1分だ」

「ありがとう」

直後、ドラゴンが爪で地面を抉り、雪混じりの瓦礫を投げつけてくる。それを合図に三人が散開。

アシュレイは前進しながら瓦礫を掻い潜り、すぐさま跳ぶ。

「ほらこつちだ！」

そしてドラゴンの頭を踏みつけ、背後へと着地。

「グオオオオ！」

振り返りさまの攻撃を転がって避ける。

薙ぎ払いを剣で受け流し、叩きつけをバックステップで回避。

時に下がり、不意に詰め寄ることでの的を絞らせないように集中する。

だが目の前で飛び回る羽虫をいつまでも仕留められないドラゴンではない。

「ちい……！」

巨大な腕から放たれる風圧を伴った一撃にアシュレイの体制が崩れる。

「わたくしを忘れては困りますわ！」

そうするとボールが文字通り横槍をドラゴンの腕に打ち込み、攻撃を逸らした。

「悪いな」

「当然のことをしたままですわ」

「ネプ公！まだか！」

「準備できたわ！二人とも下がって！」

上空から聞こえたネプテューヌの声にベールがアシユレイを抱きかかえ離脱する。

「せええやあ！」

ネプテューヌの掛け声の一瞬後、雪崩かと勘違いするほどの雪がドラゴンを埋め尽くした。

「……驚きましたわ。どうやってこんな大量の雪を？」

「まさかわたしの雪だるま作りのスキルがこんなところで役に立つとは思わなかったわ」

「何にせよお手柄だ、ネプ公」

「もつと褒めてくれても良いのよ」

「それは断る」

直後、雪を跳ね除けながらドラゴンが立ち上がる。

だが天然の雪の氷室の寒さはかなり堪えたようで動きがかなり鈍っていた。

「では、トドメはわたくしが！」

ベールが練り上げた魔力を槍に宿し、ドラゴンを貫く。

するとドラゴンの真下に魔方陣が出現し、竜巻と共にドラゴンの体躯が空中へと打ち

上がった。

「わたくしの究極槍技……その身でとくと味わいなさい！」

さらにドラゴンを連続で貫きながら上空へと登っていく。

竜巻が止むと同時にボールがドラゴンの真上で槍を構え直す。

「これで……トドメですわ！」

ボールが槍を真下へ投げる。

突き立った槍はそのまま地面の魔方陣へとドラゴンを縫い付け、直後に魔方陣から吹き出した風の刃がドラゴンを切り裂き、跡形も無く消滅させた。

「ふう……アッシュさん、そっちはどうなりましたか？」

「この通りだ」

「燃え尽きたぜ……真っ白にな……」

アシュレイがくいと親指で指した先には縄でグルグル巻きにされ、蓑虫のように氣にぶら下げられた教会職員が居た。

アシュレイの左手には真つ二つになったエネミーディスクが握られている。

「アイエフ！」

「はいはい。すっかり斥候役が板に付いちやったわね……」

アシュレイの声に戦闘中居なかったアイエフがひよっこり顔を出した。

「すぐ近くに敵はいないわ。けど、これだけ派手に暴れれば間違いない。誰かが気付いてると思うし、早めに移動した方が良いわね」

「だそうだ。行くぞ」

「えー……わたしもう疲れたよー。アツシユおぶって！」

「わがまま言っちゃだめですよ。ねぷねぷ」

少し考える。

「俺の顔に触れたら考えてやる」

「ホント!？」

「やすやすと触らせはしないがなつと！」

「ねぷ!?!逃げるのってアリ!?!待てー!」

「ねぷねぷ!?!待ってくださいですー!」

アシユレイ達は再び走り出した。

.....

「もう……走れないですう……」

「さて、これからどうするか……」

道なき道を走り続けること数分。

木の影からアシュレイが様子を伺う。

「1、2、3……軽く8人はいるか……」

「多勢に無勢。もう逃げ場がないわね……」

雪道を走り、スタミナを使い切ったコンパを休ませる為に森に隠れたが、その僅かな時間に追つ手との距離を詰められ辺りを囲まれてしまった。

「ここがバレるのも時間の問題だろう。」

「まさに八方塞がりですわね」

「もう強行突破しか無いんじゃない？」

「下手に突っ込んででも状況が悪くなるだけだ」

とアシュレイは言ったが、このまま何もしないというのは最も愚かな選択だ。

意を決し、木に手を掛けた時だった。

「困っているみたいだね」

アシュレイが反射的に動く。

「……辺りの奴らと随分雰囲気が違うが……誰だ？」

「わたしはサイバーコネクトツ。ある人から君たちの道案内を頼まれてきたんだ」

サイバーコネクトツと名乗った少女はにっこりとそう返事を返す。

アシユレイに右腕を掴まれ、喉にナイフを突きつけられているにも関わらず、だ。

「……あなたがルウィー教会の手先じゃない証拠は？」

「証拠か……こればかりは、君たちに信じてもらうしかないね」

下手な返答をすれば殺されるかもしれない状況でサイバーコネクトツィーはあつさりとそう言い放つ。

「あいちゃん、アツシュさん。ここはサイバーコネクトツィーさんを信じるです。悪い人が堂々とわたしたちの前に出てくるわけじゃないですよ」

「それに、こんなもふもふの尻尾や耳生やしてる人に悪い人なんていないよ！」

「……お前の判断基準がわからん」

「あはははっ。相変わらずネプテューヌさんはこっちの世界でも面白いね」

「……はあ……」

深い溜め息を吐き出したアシユレイがサイバーコネクトツィーを解放する。

「わたしの事、信じてくれるかな？」

「いいとも、とはいかない。あくまで今後の返答次第だ」

ナイフを持ち直し、その切っ先を向け直す。

「返答って？」

「MAGES. って奴は知ってるか？」

「……なるほど。うん、もちろん知ってるよ」

「……そうか」

アシユレイがナイフを手の中で回し、ホルダーに仕舞った。

「案内してくれるらしいな。連れていけ」

「分かった。わたしについて来て」

そう言つてサイバーコネクトツトツが走り出す。

事前に嘘の情報を流していたのだろう。

先導されるまま走る道には敵の足跡すら見つけることができなかつた。

「さ、君たちを待っている人はこの先だよ」

「サイバーコネクトツトツちゃんは一緒に来ないの？」

「まだ追つ手をまいたとは限らないからね。街に帰るついでにもう少し攪乱してくる

よ」

「何から何まで悪いわね。気をつけて」

「うん。それじゃ！」

言い終わるより先にサイバーコネクトツトツは来た道をこちらに手を振りながら戻つ

て行った。

「お久しぶりです、みなさん」

「……今度はお前か……」

道を先に進もうと振り返った目の前には遠くない昔に見た顔が立っていた。

「あなたは確かブランの……」

「はい、ブラン様の侍従のフィナンシエです」

「まさか、騙されましたの……!?!」

「落ち着けベール。で、なんでお前がここにいるんだ?」

「もちろん、みなさんを教会から逃がすためです。サイバーコネクトツうさんに協力を仰いだのもわたしです」

「……にわかに信じられない話ですわね」

ベールが不信感を募らせるのも無理は無い。

フィナンシエはルウィーの女神であるブランの側近も側近。

第三者のサイバーコネクトツうはともかく、教会と密接に繋がっているであろう彼女を信じるなんていうのは無理というものだ。

「時間がありません。わたしについてきてください……もし、わたしがあなたたちを騙すような真似をしたのであれば、その時は斬っていただいでかまいません」

「……………」

フィナンシエの言葉に全員が固まる。

暫くの沈黙を破ったのはアシュレイだった。

「……分かった」

「アツシユさん……」

「アツシユ……あんた本気なの？」

『行くも地獄、行かぬも地獄。だったら行って死ねばいい』。意味は言わなくても分かるだろう？」

「だからって……」

「それに……」

アシュレイが素早く背中の中の剣を引き抜き、SSSを稼働させる。

「騙したってんなら、こいつの首を刎ねるだけだ……そうだろう？」

フィナンシエの首には大鎌の白い刃が蛇のように巻きついていた。

「ねえ、なんか訳ありっぽいし、信じてあげようよ」

「ねぶねぶの言う通りです。疑う前に信じてあげます」

「……はあ。まったくあなたたちときたら、とんだお人好しですわね」

「決まりだ」

アシュレイが鎌を剣に戻し、背中に背負う。

するとフィナンシエが突然その場に座り込んだ。

「……………どうした？」

「す、すみません……………腰が抜けちゃいました……………」

「……………」

「あー、アツシユいけないんだー」

「まあ、あんなの突きつけられて平然としてる方がおかしいわね」

「これは、殿方として責任を取らなければいけませんわね」

「アツシユさん。頑張るです！」

「……………」

重苦しい空気を雪国の冷たい風が流していった。

第13話 二度目の初めまして

降り積もった雪をキシキシと踏み締める音が辺りに響く。

「アツシユ、女の子背負ってるんだからあんまり不安定な所を歩かないですよ!」

「分かってるっての……」

集団の最前列を進むアシュレイの背中にはフィナンシエが歩に合わせて上下に揺れていた。

人を背負っている以上、出来ることなら全員が通って踏み固められた道を歩ける最後尾が良いのだが、背負われているのが道案内役なので最前列に行くしかない。

アシュレイがいつも背負っている剣はアイエフが持っている。

「……本当にこの道で合ってるのか?」

「……………」

サイバーコネクトツーツーやフィナンシエが言う通りに真つ直ぐ進んでおり、足下には人が通った形跡のような物も確認出来るが、如何せん同じ風景が延々続けば聞き返したくもなる。

「……………」

「……………」

「おい、フィナンシエ」

「ふえっ?! ……あ、はい、なんででしょう!？」

「…………絶対寝てただろ」

「う…………すみません。最近忙しくてあまり眠れていません…………」

どうやら眠っていたらしいフィナンシエがしょんぼりと肩を落とす。

「お仕事で疲れてるなら大目に見てあげます。それにアツシユさんはあったかいですから」

「疲れとおんぶの揺れとコタツのようなあったかさ! この殺人コンボで寝ないなんて人間じゃないよ!」

「だからって今寝るのはどうかと思うがな…………まあいい。というか、まだ着かないのか?」

「あ、はい、もうすぐ…………見えてきましたよ」

そう言つて指を指した先には街の明かりのような物が確認できた。

「やっただす! 街に着いたです!」

「ほらね、やっぱり信じて正解だったでしょ?」

「周りにも追手らしき人たちはいないようですし……どうやら完全に巻いたようですわね……おや？」

と、ベールが言った直後、街の方から2人組がやって来ているのが見えた。

2人はこちらに向けて真つ直ぐ歩いてくる。

「あいつらは？」

「安心して下さい。彼らは一応味方ですよ」

「……一応？」

その仲間らしい2人組がネプテューヌ一行と合流する。

「やあ、フィナンシエ。久しぶりだね」

「……ふむ、素敵なお嬢さんを二名も連れてくるように見える。彼女らが君が言っていた例の？」

「はい。教会に追われていたところをなんとかお連れすることができました」

「なるほど。わたしの名前は……そうだな、兄とでも呼んでくれ。こちらは弟」

背の高い方は兄と名乗った。

低い方は弟と言うらしい。

「兄さんと弟さんです？不思議な名前です」

「本当の名前ではないよ。コードネームのようなものさ。ねえ、兄者」

「ああ、そうだと。ところで、眼鏡の似合う金髪のお嬢さん。あなたのお名前を我ら兄弟に教えては頂けないでしょうか？」

「まあ、素直な方ですのね。わたくしはベールと申しますわ」

兄の言葉にベールが名乗る。

「ベール……なんとも慈愛に満ちた豊満なる響き……是非、ベール様と呼ばせてください」

すると兄はやたらオーバーなりアクションを取りながらそんなことをのたまった。

「ええ、構いませんわ」

「では、ピンクの髪のアナタの名前はなんというのですか？」

「わたしです？わたしはコンパっていです」

「コンパさん……まるで天使のような豊かな響きの名だ」

弟も弟で兄と同じく大袈裟にそんなことを言う。

「わたし、ネプテューヌ！」

「わたしはアイエフよ」

「アツシュだ」

三人が兄弟に自己紹介をする。

「フィナンシエよ、これからこの方々はおの方に……？」

「はい。少し複雑かもしれませんが……それでも力になってくれると思うんです」

「では僕たちも共に行こう。レディをエスコートするのは紳士の役目だ。コンパさん、さあこちらへ」

「ありがとうございますです」

「ベール様もわたしとご一緒に。この辺りは滑りやすくなっているので気をつけてください」

「あら、お気遣いありがとうございますわ」

そんな会話をしながらベールとコンパは兄弟と一緒に歩き出した。

「……ねえ、あいちゃん」

「ネプ子、あんたも気づいてた」

その短い会話をした直後、二人の頭に急激に血が上っていく。

「あの二人、わたしたちのこと無視してるよね、絶対！こんばとベールだけ鼻肩しちやつてやー」

「なんのつもりかわからないけど、久しぶりにかちんと来たわ」

「ごめんなさい。あの二人は胸の大きな女性にしか眼中にない少々特殊な兄弟なので……どうか気を悪くなさらないでください」

フィナンシエが少し高い所から二人に謝罪の意を述べる。

「なん……………だと……………」

「ここ、ここに来て胸で差別!? なんなのよこの大陸は!?」

が、どうやらそれは二人にとっては逆効果だったようだ。

「(……………ああ、だからフィンアンシエとは口をきくのか)」

特に興味の無いアシユレイはふと頭の隅でそんなことを考えた。

「許せないよあいちゃん!」

「……………ネプ子、わたしが許すわ。変身でもなんでもしていいから、あの二人をギャフンと言わせてやるわよ」

「オーケーだよ、あいちゃん……………あ……………」

「……………ん? どうしたのよ、ネプ子」

その時、ネプテューヌに電流走る。

一瞬の間を置いてネプテューヌが女神化を行う。

「ちよつと、その二人。待ちなさい」

ネプテューヌが前を歩く兄弟を呼び止める。

「む、この声は……………」

「なあつ?! あのちんちくりんがいなくなった代わりにナイスバディなお姉さんだ?!」
流石にこの兄弟もネプテューヌの変化の具合には驚いたようだ。

そしてネプテューヌが言い放つ。

「これがわたしの本当の姿よ」

「我ら兄弟、未熟故に見た目の豊かさしか見抜けなかったことをお許し下さい」
次の瞬間にはネプテューヌの前に兄弟が跪いていた。

「あの……名をなんと申されますのでしょうか？」

「ネプテューヌよ」

「ああ、なんと甘美なる響きの名前だ……」

「まるで心が洗われるような……まるで女神のような名だ……」

掌返しも良いところだ。

しかもそれが両方だというのだから始末がつかない。

「つてかおいネプ子！裏切るの!？」

もちろんそれを見ていたアイエフが文句を言わない訳がない。

「ごめんなさい、あいちゃん。これも、わたしの姿なの……」

「……下衆の極みを見た気分だ……」

「ネ、ネ、ネプ子の裏切り者おおおおおお!!」

アイエフの断末魔のような叫びは白い雪に溶け込んで消えた。

.....

「ベール様……ああ、まるで女神のような素敵なお名だ！」

「女神だけだな……」

合流から暫く歩き、街もだいぶ近くなって来た。

到着まで後数分と言ったところだろう。

「ネプテューヌと言う名も、まるで女神の名を冠しているような素晴らしい名前だよ」

「女神だけだな……」

「あいちゃんがすっかりやさぐれてしまったですう」

「あ、あははは……」

もはやフィナンシエは苦笑いしかすることが無いようだ。

「……で、街に行くのは分かるが、目的地は何処なんだ？」

「「……………」」

「……コンパ、通訳」

「えつと……これからどこに行くんですか？」

「そういえば、女神のような美しい女性に目を奪われ、すっかり忘れていたよ」

「女神だけだな……」

「大きいことは罪だね、兄者」

「小さくて悪かったな」

背後からの小言にアシユレイがバレないようにため息を吐いた。

「端的に説明しよう、我らはレジスタンスだ」

「レジスタンス？」

「……………」

「……………べール」

「レジスタンスはわかりましたわ。けれども、何に對してのレジスタンスですの？」

「それはもちろん、ルウイーの女神、ホワイトハート様に対するレジスタンスさ」

「な、なんですって!?!」

ネプテユースが驚くのも無理はない。

ラストイションのアヴニールは国を牛耳ろうとしていたが、それはあくまで金儲けの延長線。

リーンボックスのゴタゴタの原因は水面下で暴走していた排他的思想が元々の原因だ。

だが今回はそのどちらでもない。

国民が、自分達の意味で、国の象徴である女神に、明確な敵意を持って反旗を翻した

のだから。

「あー……わかるわー……ホワイトハート様も貧乳でしたもんねー……」

……………。

「どうせ胸のない女神様を下ろして自分たち好みの胸の大きな女神様を祭り上げようって魂胆なんですよ、はいはい」

「……ねぶねぶ、あいちゃんのやさぐれ具合が酷くなっているですう……」

「ごめんなさい、あいちゃん……わたしが裏切ってしまったせいで……」

「裏切った自覚があるんなら最初から裏切るなよ……」

と、アイエフの小言にいちいち付き合っていると話が進まない。

「で、フィナンシエ。実際のところはどうかんだ？」

「はい。ルウィーは他の三つの国とは異なる文化を持つ、子供も老人も、みんな笑顔のたえない平和な国でした」

アシユレイの記憶にもルウィーはそういう国という認識があった。

しかしそれはどうやら過去形のようにだ。

「……最近になって、ルウィーは他国侵略のために武力を強化するなど、かつての笑顔溢れる大陸とはほど遠い過激な軍事国家へとなってしまったのです」

「……まさか、あのルウィーがそんなことになっていたなんて……」

「もちろん、そんなのわたしたち国民が望んだことではありません……全てはホワイトハート様の独裁政治によるもの……」

そういうフィナンシエの声はかなり辛そうだ。

「だからわたしたちはかつてのルウィーを取り戻すために、レジスタンスを結成したんです」

「……ん？」

アシュレイの短い声にネプテューヌが気づいた。

「アツシユ? どうしたの?」

「……いや、まだ足りない」

「……どういう意味?」

「こつちの話だ」

アシュレイが背後を振り返る。

「アイエフ。ルウィーについて、何か知らないか?」

「どうせわたしは小さいですよーだ……小さいですよーだ……小さいからなんだって言うのよ……うう……」

「……まだダメージが残っているみたいですよーね」

やさぐれ具合が一周回って泣きそうになっているアイエフにベールも思わず苦笑い。

「ねぶねぶ、あいちゃんが酷くなる一方ですう」

「思っていた以上に気にしていたのね、あいちゃん……」

「……フィナンシエ」

「はい？」

「もう自分で歩けるか？」

「あ、はい。もう大丈夫です。ごめんなさい、ずっとおぶってもらったままで……重かったですよね？」

「お前は軽すぎだ。ちゃんと食わないと体力がつかないぞ」

そう言いながらフィナンシエを降ろした後、ネプテューヌ達に先に行くように促し自分分はアイエフへ近寄る。

「ふんだ。どうせわたしは……はあ……」

「おいアイエフ。いつまで拗ねてるつもりだ？子供じゃないんだしよ……」

「何よ……わたしの身体が子供体型だとしても言いたいのだ！」

「言ってねえし言うつもりもねえし思ってもねえよ。被害妄想も良い加減にしろ。後、剣返せ」

アイエフのやり場のない怒りの矛先はアシュレイの方を向いたようだ。

「そうよね。結局男なんて大きいのが良いに決まってるわよ。どうせアッシュもその口

「なんでしょ?」

「んなわけないだろ」

「まあ口ではなんとでも言えるわよね……」

「あんなデカイのぶら下げて戦闘なんて考えたくもない。今のサイズですらバランス取るのにかなり苦勞してるってのに……」

「……って好みじゃなくて自分に付いてる方の話!? どう考えてもこの流れでそうなるのはおかしいでしょ!」

「冗談だ」

アシユレイのボケにアイエフがいつもの調子でツツコミを返す。

「よく覚えとけアイエフ。『物の価値は密度で決まる』だ」

「密度?……まさか」

「胸に脂肪が詰まってるとかそういう話じゃないぞ。要は皮よりその中が大事って意味だ」

「ふーん……」

興味なさげなアイエフを放ってアシユレイは続ける。

「どれだけ小さなメモリだとしても、その中にとんでもない容量のデータが入ればその価値は自然と上がる」

「……………」

「逆にどれだけ大きな機械でも、中身がスカスカならただのハリボテだ」

「……………」

「で、お前の価値はどれぐらいだと思う?」

アシユレイが踵を返し、ネプテューヌの後を追いかけ始めた。

「…………ま、外見どうこうでいつまでもウジウジしてるようじゃ、たかが知れてると思うがな」

「…………つ! わかったわよ!」

「それで良い」

相変わらず不機嫌そうだが、さつきより遥かに明るい顔になったアイエフがアシユレイに剣を押し付けズンズンと抜かして行った。

「で、アイエフ。ルウィーについて何か情報はないか?」

アイエフとアシユレイがネプテューヌたちと合流し、改めてアシユレイが聞く。

「ルウィーが武装を始めたのはここ数ヶ月の間のことよ。なんでも、ある日を境に突然人が変わったかのようにホワイトハート様が過激な方になったらしいわ」

「ご苦労。ビンゴだな」

「さすがあいちゃんですわ」

「ネプ子はそろそろ変身解いたら？ いざという時に疲れて変身できなくなっても知らないわよっ。」

「それもそうね」

ネプテューヌがやつとちんちくりんと評された元の姿に戻る。

「いったい、ホワイトハート様に何があつたんです、フィナンシエさん」

「それはわたしたちの口から説明するより、これからあなた方に会わせる方に聞いたほうが早いと思います。さあ、ちようど着きましたよ」

と、フィナンシエが指差した先はどうみてもただの一軒家。

あの方だのと言われていた人物がいるとは思えない。

中に入り、少し歩けば目的の扉にたどり着いた。

フィナンシエが教会で見せたような丁寧な動作で扉を三度ノックする。

「……失礼します、こちらが先日ご説明した、強力な助っ人の方々です」

フィナンシエが扉を開ける。

「……今、忙しいの。悪いけど……帰ってもらって」

絨毯の上に寝転び、パラパラと本をめくる少女は間違はなくホワイトハートその人だった。

「「ええええええええっ!?!」」

“四人”の声が部屋の中に響き渡る。

「せっかくの助っ人ですよ。無下に返すわけには……」

「な、な、なんでホワイトハート様がここに!？」

「ここはわたしの部屋よ。いて何か文句ある?」

狼狽える四人を尻目にアシユレイが前に出る。

「……初めまして”……だよな? ホワイトハートさま?」

「……そうね、あなたとは初対面よ」

「え? 初めまして? 初対面? なんで? みんな教会であつたはずだよな? アツシユなんか
ホワイトハート様にナイフまで投げたのに!？」

「……うるさい」

「まったくだ」

ようやく立ち上がり、一人用のソファに座つたホワイトハートの横にフィナンシエが
立つ。

「こちらにおられるのはレジスタンスのリーダーであり、ルウィーの女神であるホワイ
トハートことブラン様です」

「な、なんだってー」

「わけのわからない状況過ぎて、ねぶねぶが変な顔になっちゃつたですう」

「……なんとなくですが、状況が飲み込めてきましたわ。フィナンシエ、このブランが本物なんですわね」

「はい、そのとおりです」

まだわかってないメンバーを見てアシユレイがやれやれと首を振る。

「つまり、俺たちが教会で会ったブランは偽物。本来あの椅子に座っているのはここにいるブランって訳だ」

「しかし……改めてボール様と比べると、我らが女神の胸はなんと貧相で嘆かわしい……」

「……何か言った？」

「いえ何でもありません！」

不意に兄が零した台詞をブランが咎め、それを素早く訂正する。

「コンパさんたちが教会で会ったであろうブラン様は偽物……宣教師のコンベルサシオンが化けた姿さ」

「やっぱりな……」

「コンベルサシオンを知っているのなら話は早い」

「ある日ブラン様は不意を突かれて奴に女神としての力をコピーされ、そして国をも奪われた」

「あいつの顔は思い出してもむしゃくしゃする……信用してたのに……！」

呟くブランの声からはありありと怒りが感じ取れた。

信じていた部下に裏切られ、力を奪われたあげく自分の国を乗っ取られた怒りは計り知れないものだろう。

「それにしてもアツシユさん。いつからあの教会で会ったブランが偽物だとわかったのですか？」

「フィナンシエからレジスタンスの話を聞いた時だ。その後のアイエフの話で確信した」

アシユレイは壁にもたれかかり、ヒラヒラと手を振る。

「女神は国民のシエア……つまりは信仰を受けてその力をより強大なものにする。国と女神は一蓮托生なんだよ」

「それはわかっているわ」

「考えてもみろ。わざわざ女神が国民の心が離れるような真似を思うか？ それもレジスタンスができるほどな」

「あ……」

「反撃する力があるならここでのんびり本なんて読んでる暇は無いはずだ。だがそうしない。理由は……」

「シエアが低下して力が弱まっているから……ですわね」

「そういうことだ。だろ？」

「……癩に障るけど、その通りよ」

そこでブランが改めて全員の顔を見渡す。

ブランの頭はちようどベールを向いたところで止まった。

「あなた、どこかで見た気が……それに、そっちの小さい紫色のも……」

ベールが万を持って眼鏡を外す。

「ふふつ、久しぶりですわね。ブラン」

「ベール、何であなたが!?まさか、ルウイーを……」

「安心してくださいいな。わたくしがルウイーに来た理由はあいちゃん……いえ、ネプテューヌのお手伝いとコンベルサシオンに借りを返すためですわ」

「じゃあ、やつぱりその小さいのは……」

ブランに睨まれ、ネプテューヌが前に出る。

「やつほー、ブラン。久しぶりだね……つて言ってもわたしは全然覚えてなくてごめんね」

「まさか、ネプテューヌがこの国を……いえ、守護女神戦争で勝つためにわたしを……」

「すつつぶ!すつつぶ!すつとーつぶ!ややこしくなる前に言っておくけど、わたしブラ

ンと戦うために来たんじゃないから、それだけは信じて欲しいな」

「あとこいつ、記憶喪失で守護女神戦争のことはすっぽり忘れてらしい。多分興味も無い」

「記憶喪失……あなたが？」

「それはわたしたちが証明するです」

暫く考え込んだブランが口を開く。

「……そこまで言うなら、信じてあげるわ」

「どうです、ブラン様。これ以上ない助っ人ですよね？」

「……確かに、フィナンシエの言うとおりにこれ以上無い助っ人ね」

そこでブランは一息置く。

「けど、協力してもらおうつもりはないわ」

そしてネプテューヌ達の協力を断った。

「これはルウィーの問題よ。他国の女神は帰って……このくらい、わたし一人で解決してみせるわ」

「……ブラン様」

「……気に入らない」

アシュレイが背負った剣を振り上げ、床に突き刺した。

「アツシユ!」

「何のつもり……?」

「俺は、お前みたいに、変に強がつて全部背負つてるつもりになつてる奴が一番嫌いなんだよ……!」

「つもりなんかじゃないわ」

「じゃあなんでこんなところでモタモタしてんだよ。自分の国だろ? 自分でなんとかするんだろ? じゃあ早く偽物なんかぶつ飛ばして自分の国だつて早く言えるようにしろよ? なんてそれが今すぐできないんだよ!」

「……言わせておけば……!」

「いいか! 最初にそのちっこい頭でもよく覚えられるように言つてやる!」

ズカズカとブランに歩み寄り、帽子ごと頭を掴む。

「俺たちは! 何かが欲しい訳でもなければ! お前や国に恩を着せようつて訳でも無い!」

ブランに睨まれようとアツシユは続けた。

「俺たちは! ただの! お節焼きの集まりだ! お前が俺たちをどう思つてようと! 俺たちは俺たちの意思でお前を助けてやる! 覚悟しておけ!」

「……………」

直後、静まり返った部屋が大きく揺れた。

「ね。ぶっ!? な、何ごと!？」

「この揺れ……どうやら外からのようだ」

部屋の扉が乱暴に開けられ、外からレジスタンスのメンバーと思われる人物が入ってきた。

「いったい何ごと?」

「教会のレジスタンス狩りです! ブラン様を差し出さないと皆殺しにすると……」

ブランのこめかみに青筋が浮かぶ。

「……あの野郎」

「聞いたな。出るぞ」

ブランに続き、ネプテューヌ達も外へ飛び出した。

「大丈夫なのブラン。ふらふらだよ……」

「あいつのせいでシエアが減ったせい……けど、問題ない」

威勢良く飛び出したのは良いが、ブランの足下はおぼつかない。

しきりに壁に手をつきながら必死に前に進んでいた。

「くれぐれも無理はなさらないで」

「……わかつてる」

街の広場にはもう一人のブラン……化けたコンベルサシオンが立っていた。

「とうとう姿を現したわね。女神を語る偽物が」

「その言葉、そっくりそのままあなたに返すわ」

「相変わらず強がりだけは一人前ね。けど、それも今日で終わり。その邪教徒共々始末してあげる」

偽ブランが頭の横に手を上げる。

「来て、キラーマシン」

指を弾く音。

直後、空から降ってきたキラーマシンが地面を砕いた。

「こいつ……あの時の……!」

「行くのよ、キラーマシン。見せしめにこの街もろとも皆殺しにしなさい」

「……街もろとも、皆殺し、だと……?」

「ねぶ?……ブラン?」

突如、ブランが豹変した。

「てめえ! わたしだけじゃ飽きたらず、街もみんなも皆殺しにするだ?! ふざけんじゃねえこのカスがっ!」

「ねぶっ!」

「……へえ」

「ね、ねぶねぶ……ブランさんが、ブランさんが怖いですう……」

「も、もしかすると、ブランて普段は大人しいけど、一度キレると爆発する系だったり？」

「はい、それはもう鬼神のごとく……」

「おい外野！ごちやごちやうるせえぞ、黙ってる！」

「……と、いった感じの方です！」

なぜか説明するフィナンシエは自慢気である。

「こ、これが巷で噂のキレる若者ってやつですね、わかります」

「偽物が何をほざこうが無駄よ。キラーマシン、後は任せたわ。やりなさい」

「てめえ、逃げんのか！待ちやがれ！」

踵を返し、その場を後にしようとする偽ブランの後をブランが追いかけてようとする
と、そこに先ほどまで微動だにしなかったキラーマシンが斧で進路を塞いだ。

「……へっ、てめえが代わりにやろうってのか。望むところだ！」

ブランが地面を踏み抜く。

それと同時にブランの身体が光に包まれ、姿を変えた。

白いボディースーツに水色の髪。

赤い目には女神の証である電源マークが浮かぶ。

女神ホワイトハートの姿がそこにはあった。

「ねぷねぷも変身です!」

「ベール様もお願ひします!」

「……いや、待て」

アシュレイが二人の女神化を止める。

「アツシユ?」

「もしや、見ているだけ、と言うわけではありませんわよね?」

「……お前らは街の奴らを避難させろ」

「アツシユさんはどうするんです!?!」

「俺は……」

背中 of 剣を掴む。

「こいつの相手だ」

黒い炎に包まれたアシュレイがブランの隣に並んだ。

「……わかったわ。その代わり、無理だけはしないでよ!」

「我ら兄弟も喜んでベール様の手足となりましょう」

「避難場所はこつちです! 行きましょう!」

「アツシユ! また後でね!」

そう言ったネプテューヌ達がフィナンシェや兄弟共々広場から離れていく。

広場に残ったのは二人と一機だけだ。

「おい、おまえ……」

「気にするな。こういう体質だ」

「そうかよ……」

ブランが大斧を、アシュレイが剣を構える。

「アッシュとか言ったな。期待はしねえぞ」

「こつちの台詞だ」

一瞬視線を交わし、二人が走り出した。

「よつとー」

地面を風ぐ斧の一撃を飛んで避ける。

地面につくタイミングを見計らってキラーマシンが斧を切り返す。

アシュレイが魔法陣を踏み台に空中で跳ねる。

「トロいんだよー」

キラーマシンの肩にアシュレイの剣が突き立てられた。

そのまま剣に高熱を纏わせ、関節を焼く。

直後、アシュレイの背後からキラーマシンのウォーメイスが迫る。

「わたしを無視すんじゃないねえ！」

ブランが斧を投げ、それをウォーメイスにぶつけることで起動を逸らした。

「オ、オオオ！」

金属の軋む音と共にキラーマシンがウォーメイスを振り上げ、真っ直ぐにブランに叩きつけた。

「ブラン！」

「へっ……効くか……っよ！」

なんとブランはあの巨体から繰り出された一撃に耐えるどころか真っ向から受け止め、弾き返した。

ウォーメイスをかち上げられ、キラーマシンに隙ができる。

「こいつを……喰らいやがれ！」

ブランが飛び上がりながら空中で投げていた斧をキャッチし、それを振り下ろす。

その一撃がキラーマシンの右腕を切り落とした。

「頃合いだな……」

アシユレイが肩から離れる。

そして足を虎ばさみのような形に変化させ、薙刀に変型させたSSSの柄を啜え込む。

「ぶった切れるー！」

空中で一回転しながらかかと落としの要領で弱った関節を真つ二つに切断した。

「オオオオオオオ……！」

両腕を切られたキラーマシンが弱々しく吼える。

斧を肩に担いだブランの隣に剣に戻したSSSを足に取り付けたままのアシユレイが着地する。

「けっ、もうこうなったらただのスクラップだな」

「そう言ってる割にはまだやり足りなさそうだな」

「あたりめえだ」

キラーマシンが最後に残った尻尾を二人に向けて振るう。

アシユレイは足に取り付けた剣を地面に突き立て、そのまま再び薙刀に変型させる。

変型の勢いでアシユレイが高く飛び上がった。

「ふん」

ブランは鼻を鳴らし、尻尾を脇で挟むように受け止める。

「よ………つとおー！」

尻尾を引つ張りキラーマシンを引き寄せ、斧を振り上げる。

おもちゃのようにキラーマシンのボディが跳ね上がった。

そしてその真上には剣を手に持ち直したアシュレイの姿が。

「法陣展開……」

キラーマシンの周囲に多数の魔法陣が出現。

「ジャックフロスト！」

魔法陣から雨のように水滴が発射され、それらがキラーマシンに吹き付けられる。

水滴が付着した箇所が一瞬で凍りついた。

吹き付けているのは液体窒素だ。

「オ……オオオ……」

あつという間にキラーマシンは氷像となる。

「これで終わりだ！」

アシュレイがキラーマシンを切り刻みながら共に落下していく。

「そらよー！」

最後に残った塊を蹴り飛ばす。

地面に激突し、その塊も粉々になる。

アシュレイが地面に着くころにはキラーマシンは木っ端微塵になっていた。

……

「アツシユ！無事!？」

「つて何これ……?」

崩壊した広場には原型をとどめていないスクラップが山となっている。

「……よう、遅かったな」

「こっちはもう終わったわよ」

その山の上では元の姿に戻った二人が背中合わせで座っていた。

第14話 信頼と裏切りと

「フィナンシエ。あなたは引き続き教会の動向を探って頂戴」

「はい、わかりました」

ブランの指示でフィナンシエが一礼して部屋を出て行く。

ネプテューヌ達は一旦室内に戻り、作戦会議を行っていた。

「そういえば、ブランに聞きたいことがあるんだけど……」

「……何？」

「鍵の欠片ってアイテムを探してるんだけど、知らない？」

ネプテューヌの話にブランが思慮を巡らせるが、検索には引つかからなかったらしい。

「聞いたことがないわね。何に使う物なの？」

「どこかに封印されてる、いーすんを復活させるのに必要なんだ」

「……それが、あなたたちの旅の目的？」

「そういうことだ」

「でもって、わたしについていろいろ教えてもらうんだ」

「そういえば、記憶喪失だったわね」

「そして、わたくしはコンベルサシオンに女神の力を奪われていた……」

「コンベルサシオン……マジエコンヌ……」

ブランが強く歯噛みする。

「マジエコンヌさんです?」

「コンベルサシオンの本当の名前さ。ブラン様を襲った時に自分からそう名乗っていたよ」

コンパの疑問には弟が答えた。

「……これは、女神同士で争っている場合じゃないわね」

「ええ……ネプテューヌと旅をして気づいたのですけれど、わたくしたちはお互いを知らなさ過ぎますわ。わたくしたちは一度、四人で話をすべきなのではないのかしら」

「確かに……けど、わたしたちにそれができるの?」

「難しいかもしれませんが。わたくしたちはおそらくお互いがお互いを憎んでいる。生まれながらの宿敵として」

ふとベールがちらと後ろのネプテューヌを見る。

「けど、幸か不幸かわかりませんが、あの子が記憶を失ってくれたおかげで、こうして巡

り合うことができずしたわ」

「……え？わたし？やだなあ、急に話を振らないでよー。まだ心の準備ができてないっていうかあー」

柄にもなくネプテューヌが恥ずかしそうにクネクネと身体を捻った。

「当の本人はこんなですけど、おかげで戦場以外の場で、こうしてわたくしたちが顔を合わせられたのも事実ですわ」

「……あのさ、話が難しくてよく分からないんだけど、とりあえずみんなでルウイーを救って、それから四人でお話しようよ」

「……その件について、ネプテューヌ達に改めて言わせてちょうだい」

神妙な顔付きのブランがソファから立ち上がり、ネプテューヌ達の前に立つ。

「お願い……ルウイーを助けて……」

ブランが深々と頭を下げた。

「わたしはどうなつてもいい……けど、フィナンシェや国民のみんなだけは……」
低い頭はさらに低くなる。

「……やれやれ、何ごとかと思つたら……」

「そんなことでしたのね」

「まったくもー、水臭いなーブランはー。ほら、顔上げて」

ブランがゆっくりと顔を上げる。

そこにはにっこりと笑ったネプテューヌが居た。

「守護女神戦争のことなんて忘れてき、みんなでルウイーを救おうよ！それに、女神は助け合いでしょ？」

「仰る通り……だな。見返りなんざいらぬ。あいつには良い加減イライラしてるんだ」

「わたくしも、マジエコノヌに返さなければならぬ借りがありますし」

「みんな……ありがとう」

追い詰められ、長らく忘れていた笑顔がブランの顔に浮かんだ。

「そうと決まれば、今日はもう遅いし寝よう！ブランの家でお泊り会だー！」

「そういたしましょう。ではあいちゃん、わたくしたちは一緒のベッドで寝ましょうか」

「え!? そそそそそんな駄目ですって!？」

「あら、わたくしとあいちゃんの仲ではありませんか。ほら、恥ずかしがらず……」

「じゃあ、ねぶねぶもわたしと一緒に寝るです！」

「いいよ！アツシユも一緒に寝る？」

「断る」

「えーなんでさー。こんな美少女二人が添い寝して上げるんだよー？」

「お前の歯ぎしりを真横で聞きながら寝られるかよ」

「なにおー!？」

「確かに、ねぶねぶの歯ぎしりはちよつとうるさいです……」

「あれ!？こんぱも敵なの!？」

「………こんなのにルウイーを頼んで本当に大丈夫かしら……」

今日の夜もルウイーには雪が降っていた。

………

ネプテューヌ達が寝静まったころ、アシユレイは街外れの丘に座っていた。

「あら、アツシユさん？」

そこにふらりとベールが現れた。

「………ベールか。こんな時間にどうした？」

「最近は何故ゲーム続きで昼に休むことが多かったのです、就寝前の散歩ですわ。アツシユさんは何故ここに？」

「レジスタンスの奴らと作戦会議。その帰りだ。どうせ暇ならベールにも参加して欲しかったな」

「わたくしが? どうしてですか?」

「いや、あの兄弟がな……」

「ああ……そういうことですか」

苦笑いを浮かべたベールがアシユレイの隣に座る。

「……ベール、頼みがある」

「はい?」

「今日現れた偽者のブラン……マジエコンヌが呼んだ機械はラスティシヨンの物だ」

「リーンボックスに来る前に一度戦ったとネプテューヌに聞きましたわ」

「……近いうちに……早ければ明日、俺たちはラスティシヨンに向かうはずだ」

「ルウィーへの輸出妨害ですわね。それがどうかしましたか?」

「俺はもちろん、ブランも自分の手であのキラーマシンを破壊しに行くはずだ」

自分の国をめちやくちやにしている元凶の一つが自分の手の届くところにあるのだ。

乗り込まない訳が無い。

「ネプ公も俺とブランが行けばまずついてくる。となれば……」

「あいちゃんとコンパさん、そしてわたくしはルウィーに残ることになりますわね」

コンパは怪我人の治療ができ、アイエフは現地での情報収集役。

戦力としてベールを残す。

戦術的に見れば妥当といえれば妥当だ。

「アイエフも弱いことは無いが、マジエコン又相手じゃ力不足だ」

「ネプテューヌ達がラストেশションに行っている間に攻めて来られると、レジスタンスや街の人達の指示と誘導も必要ですわね」

「……………」

「……………わかっていきますわ。そんな申し訳なきような顔をしないでくださいな」

まず間違い無くマジエコン又達はネプテューヌ達がいなくなつたタイミングを狙つて攻撃を仕掛けるだろう。

だが具体的な戦力が分からず、おまけに放つておけばその戦力が無尽蔵に肥大化するアヴニールは早い内に叩かなければならない。

つまり、マジエコン又や教会が送り出す敵のほぼ全てをベール一人が相手にしなければならぬということだ。

「……………すまん」

「誰かがやらなければならぬ。その誰かが、たまたまわたくしというだけの話ですわ」

「……………」

あくまでベールは明るく振舞っているが、それと対照的にアシュレイの表情は暗くなるばかりだ。

「……では、約束をしましょう」

「約束？」

「ええ。わたくしはアッシュさん達が戻るまで、決して倒れませんわ」

「そんなの……」

「ですから、アッシュさん達は絶対にラストイションで為すべき事を成し遂げてくださ
い」

ベールは笑っているが、その目には有無を言わせない何かがあった。

「……わかった。約束する」

「……そういえば、少し寒いですわね」

「まあ、ルウイーだしな」

「もう少し、近くに寄っても構いませんか？」

「……好きにしろ」

「では……」

ベールがアッシュレイの近くに座り直し、肩に寄りかかる。

「……暖かいですわね。あいちゃんやネプテューヌの言っていた通りですわ」

「……そうかよ」

結局、アッシュレイ達が眠りについたのはそれから一時間近く後の話だった。

.....

そして次の日。

アシユレイ、ネプテューヌ、ブランの三人はラステイションにやってきていた。

「ここがラステイション……」

「ブランはラステイションは始めて？」

「ええ。プラネテューヌ以外の他国には行ったことないわ」

「なんでプラネテューヌだけ？」

「年に二度の祭典……いえ、なんでもないわ」

「お祭り？プラネテューヌにお祭りってそんなにやってるの？」

「お喋りはそこまでだ。時間が惜しい」

アイエフとフィンアンシエの調査の結果、今日アヴニールからの兵器がルウイーに輸入されるといふ情報をキャッチし、それを阻止する為に三人はラステイションに来ているのだ。

目指すはルウイー行き兵器が保管されているアヴニール第四重機倉庫。

「……そうだ。すっかり忘れてたけど、ノワールに協力してもらえないかな？」

「ノワール？」

「ラストেশヨンの女神サマのことだよ」

「……ああ、そういえばそんな名前だったわね」

「きつとぼつちだから寂しがつてるとおもうよ」

「ぼつちなの？」

「まあ、友達は少なそうだな」

酷い言われようである。

「それはそれとして、俺は反対だ」

「えー、なんでさー。人数が多い方が楽だよ？」

「お前な……ただでさえノワールは前の一件でアヴニールに目を付けられてるんだぞ。これ以上あいつが俺たちと一緒にいるのがばれてみる。教会にあいつの居場所は無くなるぞ」

「むー……」

アシュレイの言っていることは正しいが、ネプテューヌは不満そうだ。

「次に俺たちがあいつと一緒に行動するのはアヴニールを潰す時だ」

「……わかったよ。無い物ねだりは駄目だしね」

「話は纏まったかしら？早く行きましょう」

ブランの言葉に二人が頷いた。

「あれは……なるほど……面白いことになりそうだ……」
それを眺めた女は、一人呟く。

……

「ここが例の工場ね」

暫く歩き、三人は倉庫の前に辿り着いた。

「作戦はあるか？」

「中の兵器を全部壊す。簡単な話よ」

「ブランて見た目に脳筋なんだね」

「……何か言った？」

「いえ、なんでもないです」

「まあ、一番手っ取り早いっちゃあ手っ取り早いな。爆破でもするか？」

「じゃあ、そうと決まれば早速……」

ネプテューヌが閉じ切ったシャツターに手を掛け……。

「たーのもー！」

と、言いながらこじ開ける。

「おいバカネプ公」

それとほぼ同時にアシュレイのげんこつがネプテューヌの頭を叩いた。

「いったー！なにすんのさー！」

「勢いで行動するな。警備に引つかかっただらどうすんだ」

「……でも、セーフだったみたいね」

幸いネプテューヌのアレでは工場の警備システムは反応しなかったようだ。

アレで反応しないのもおかしいが……。

もしかしたら警備システムそのものが壊れているのかもしれない。

「敵は……いないみたいだな」

「これだけ静かだと、少し不気味ね」

「もう、二人とも心配性だなー。大丈夫だって！」

ネプテューヌは無視して二人は武器を取り出し、慎重に一步步を進める。

だが警戒とは裏腹に敵の影さえ見つけることなくお目当ての部屋に辿り着いた。

「見つけた。どうやら、この部屋みたいね」

「さて、どれから手を付けるべきか……」

「フツフツフ……誰かと思いましたが、やはりあなた方でしたか」

直後、暗闇の中からスーツの男が出てくる。

アシユレイ達はその男を知っていた。

「……こつちの台詞だ、ガナツシユ」

「お久しぶりです。アシユレイさん」

「俺としてはそのアホ面は二度と見たくなかったがな」

「その減らず口も相変わらずのようですね」

アシユレイが剣を突きつけるが、ガナツシユは微塵も怯まない。

何かしらの勝算があるようだ。

「ねえ、どうしてアヴニールが兵器をルウイーに売るのが。儲かるのはわかるけど、ル

ウイーが強くなったら損するのはラストেশヨンだよ？」

確かに、アヴニールが兵器をルウイーに売ればルウイーの戦力が上がる。

だが、いつルウイーの攻撃の矛先がラストেশヨンに向くかはわからない。

ガナツシユは知らないことだが、現在の国のトップに立っているのがあのマジエコン

又なら尚更だ。

ノワールの力を奪う為、いつかはラストেশヨンは標的にされるだろう。

だがガナツシユはそれでも不敵に笑った。

「それでいいのですよ、ネプテューヌさん。どうやらあなた方は大きな勘違いをしていらっしゃるようだ」

「勘違い？ どういうこと？」

「ラストイシヨンに住んでいるからといって、誰しもがブラックハート様を信仰している訳ではないということですよ」

「なるほど……そういうことか」

「私の信仰する女神様は、この世でホワイトハート様ただ一人……ホワイトハート様のためなら、ラストイシヨンなど何度でも、何度でも滅ぼして見せましょう！」

「……もう、壊れてるな」

「でも、これはチャンスかもしれないよー」

ネプテューヌの言いたいことはアシユレイにも容易く予想できた。

「プラン、頼めるか？」

「わたしとしても、話し合いで解決できればそれに越したことはないわ」

「最後のお話は終わりましたか？ 私には次の仕事が控えていますので……」

「控えおろー！」

ガナツシユが言い切る前にネプテューヌが割り込んだ。

「なにっ……?」

「控えおろー!控えおろー!この顔が目に入らぬかー!ここにおわすお方をどなたと心得る。こちらにおわすは、ルウィーの女神、ホワイトハート様であるぞー!」

言い終わると同時にブランが女神化し、ホワイトハートの姿となる。

「たわけ者が!テメエ、わたしの顔を見忘れたか!」

「なっ!?!」

「ええい、頭が高い!控えおろう!」

「なんだこのテンション……」

アシユレイは早々にツツコミを放棄した。

「ま、まさか……あなたが……」

「ガナツシユとか言ったな。わたしの為に尽くしてくれてるのはよくわかった。だがな、それで他国やルウィーのみんなに迷惑をかけることなんぞ、わたしは望んじやいねえ」

言葉は荒いままだが、戦闘中とはまるで違う優しい息遣いで言葉を進める。

「今なら許す。だから、取引をやめてくれないか」

ホワイトハートの言葉にガナツシユがうつむく。

「……が……う……」

「……あ？」

ガナツシユの肩は震えている。

そして下げていた顔を上げた。

「貴様なんか違う！ 貴様のような奴が私のホワイトハート様であつてたまるか！ さては、話に聞く最近現れた偽者だな！」

なんとガナツシユは目の前のホワイトハートを否定した。

「何言つてやがる。わたしが本物で、あつちが偽者だ！」

「いいや、貴様が偽者だ！」

「だからわたしが本物だつて言つてんだろうが！ いい加減騙されていることに気づけよ馬鹿野郎！」

「違う違う違う違う！」

ガナツシユは駄々をこねるようにかぶりを振る。

「わたしの天使なホワイトハート様がそんな乱暴な言葉づかいをするわけがない！ よつて、貴様が偽者だ！」

「ああ!？」

「あ……ガナツシユつて、所謂自分の中で妙に美化しちゃうタイプの人かー」
流石のネプテューヌも呆れ顔である。

「こういうのってちよつとイメージと違うことを言ったりするだけでこんなの俺の女神様じゃない！ って言うんだよね。 あいちゃんこそつくり」

「……そういやそんな話あったな……というかりーんボックスに行つた理由って半分はそれだったな」

「いやー、今となつては懐かしいなー」

「うるせえんだよ teme エらー！」

後ろで騒いでいた二人にブランの怒りの矛先が向いた。

「今ので確信しました……やはりあなたはホワイトハート様ではない！ ホワイトハート様は仕事にとてもひたむきで……」

そしてそれに連鎖反応するように誤解が強まった。

「哀れな信者の末路か……」

「ブランの性格が仇になつちやつたね」

「……悪かつたな」

「今度からはもつと信者に対してオーブンになつてみることだな」

「……で、あるからして……ふう……あなた達にはここで消えてもらいます」

先ほどとは一転、冷静になったガナツシユがタブレットを操作すると、四方八方から機械の駆動音が響き始める。

ゾロゾロと大小様々な機械が現れ、あっという間にネプテューヌ達を包囲した。

「いやいや、流石にこの数はマズインじゃない!」

「ちい……こんなにいやがるのか……!」

「……軽く百は超えてるな。いつ終わるのやら」

「ここはアヴニールが管理する兵器倉庫です。ここに踏み込んだ時点であなた達の敗北は決定していたのですよ!」

「そう思うならそうなんだろう。お前の中ではな」

直後、多数の雷が辺りを囲む機械の全てを正確に撃ち抜き、一瞬で機械軍団を壊滅させた。

「何!」

「えっ!?!どこ!?!」

「ここだ」

「上!」

ガナツシュを含めた四人が天井を見上げる。

そこには天井に逆さまに立っている三角帽子の女がいた。

女が地面に降り立つ。

「久しぶりだな、ネプテューヌ」

「MAGES. だ！やっほー！」

「……知ってんのか？」

「知り合いだ。なんでここがわかった？」

「なに、先を急いでいるお前達を見かけたものでな。どうせこんなことだろうと思つて後をついて来たのだ」

「くっ……ですが、ここに保管されている兵器達はこの程度ではありませんよ！」

ガナツシユが再びタブレットを操作すると、先ほどよりは少ないが、新たな兵器達が現れた。

「ネプ公！」

「オツケー！」

ネプテューヌが光に包まれ、女神パープルハートの姿となる。

同時にアシュレイも黒い炎に包まれ、変身を終えた。

「変身完了よ」

「全部纏めてぶっ壊してやらあ！」

「さて、勿論お前も手伝ってくれるよな？」

「愚問だな」

MAGES. が虚空から杖を取り出し、構える。

「さあ、この狂気の魔術師の力……とくと味わうがいい……！」
戦闘が始まった。

第15話 固い約束、折れぬ信念

「邪魔なんだよー!」

アシユレイが近くに寄って来たビットを掴み、サッカーボールのように蹴り飛ばす。

吹き飛んだビットは暫く火花を散らした後、爆散した。

「燃えろ!」

MAGES. が杖を振りかざすと突如火炎の竜巻が発生。

炎は近づいた敵の装甲を溶かし、回路を焼き切り機能を停止させた。

「あーくそ!」

倒しても倒しても視界に入る数が減らないことに苛立つプランが斧を横薙ぎに振るう。

「くっ……流石にこの数は面倒ね!」

ネプテューヌは体当たりを仕掛けて来た中型の敵を刀を盾に受け止め、そのまま刀を返し両断する。

「ふう……ちまちまやってたら終わらないぞ」

「んなこと言われなくてもわかってるよ！」

四人が一旦二箇所が集まり、背中合わせになる。

「では、一纏めにして一網打尽といこうじゃないか」

「そんなことできるの？」

話し合いの途中にも敵はゆっくりと近づいてくる。

「……やるしかないだろ」

「集めてくれれば、後は私が終わらせてやろう」

「おもしれえ！アツシュ！ネプテューヌ！手伝え！」

「わかったわ！」

三人が集団の一角へと走った。

「こつちだウスノロ！」

アシュレイがビットから発射されたビームを飛び越え、背後へと回る。

そしてそのまま剣を投げ、地面に突き立てた。

「はあああああ！」

ネプテューヌは敵の群れに突っ込み、敵を次々と蹴り上げていく。

残った最後の一体をソバットで蹴り飛ばし、同時に抜き打ちの構えを取った。

「テンツェリントロンペ！」

ブランが敵の脇に斧を叩きつける。

そのままハンマー投げのように回転しながら次々と敵を巻き込んでいく。

「ランドグレイブ！」

落下するアシユレイが剣の柄尻を踏み抜き、刃がさらに深く地面に埋まると同時に足下から岩の牙がせり上がり、ビット達を打ち上げた。

「飛びなさい！」

ネプテューヌが剣を振るう。

剣圧による真空波が敵を更に上空へととばす。

「オラァー！」

ブランが回転をやめ、斧を振り抜く。

押し潰された敵の塊が空へ打ち出された。

「上出来だ！」

三人がそれぞれ打ち上げた敵の真下にはMAGES.がいた。

「落ちろ……冥府の底に……」

MAGES.の足元に魔法陣が広がり、そこから六つの魔力弾が発射される。

魔力弾は宙に浮かぶ敵の中心で一つになり、強烈な光を伴って爆発した。

「……凄い威力だな……」

「この程度、造作も無い」

爆発に巻き込まれた敵は跡形も無く消滅していた。

「……頃合いですね」

ガナツシユが呟く。

部屋が一番奥のシャッターが開き、巨大な影が現れた。

「へえ……」こいつが親玉つてか」

「相手に取って不足はないわ」

翼を上げた猛禽類のようなシルエットの大型兵器が動き出す。

一歩一歩を踏み出す旅にブーツが擦れ合い、気味の悪い鳴き声のような音が鳴り響く。

「……来るぞー！」

直後、大型兵器の頭部装甲が開き、そこに搭載されていたプラズマ砲が発射された。

四人が一齐に射線から回避する。

「おおりやあああー！」

ブランが敵の頭部を下から蹴りつける。

が、まるで効いている様子は無く、それどころかプラズマ砲の頭部装甲に挟まれてしまった。

「ぐっ……コンの……!?!」

「ブラン！」

アシユレイとネプテューヌが救出しようと走るが、敵の脚部に取り付けられたバルカ
ン砲で上手く近寄れない。

「MAGES.！」

「任せろ」

一瞬MAGES.の足元に魔法陣が現れたかと思うと、今度はブランの体が赤いオー
ラを纏い始めた。

「お？おお……おおおおりやああああ！」

オーラを纏ったブランが頭部装甲をこじ開け、それどころか装甲そのものを引き千切
る。

オマケとばかりに装甲で頭部をはたき、三人の元に戻る。

「なんだ？力が漲ってくるぜ……」

「私特製の強化魔法だ。持続時間自体は短いが、その分の効果は保証しよう」

ブランと同じオーラがアシユレイとネプテューヌの体からも出始める。

「アツシュ、行けそうかしら？」

「当然！」

三人が走る。

それと同時に敵のバルカン砲が火を吹いた。

「……見える！」

だが三人は弾丸を弾き、かわし、すり抜けながら猛スピードで距離を詰める。接近する三人に対して敵はその巨大な足を振り上げた。

「へっ……」

ブランが振り上げられた足の真下でバットのようにはたきを構える。

そしてそのブランを踏み潰さんと影が迫る。

「そら……よっ！」

ブランの華麗な一本足打法のスイングがプレス機のような敵の足を弾き飛ばした。大きく敵のバランスが崩れる。

「ネブ公！」

「ええ！」

体制を崩されてなお出鱈目に攻撃を続ける左右のバルカン砲へ接近。

「はああああああ！」

「オラオラオラオラ！」

二人が高速の剣舞をバルカン砲へ叩き込む。

トドメに蹴りを入れれば残った弾薬が暴発し、砲が取り付けられていた箇所が吹き飛んだ。

「キアアアアアアア！」

金属音を響かせながら敵が三人から離れるように跳び、翼部のハッチからミサイルを乱射し始めた。

「今更なものに当たるかよー！」

ネプテューヌとブランの二人が空中を滑るように飛び、ミサイルを回避していく。

「これ……返すわー！」

ネプテューヌが発射されたミサイルの一つをキャッチし、そのまま投げ返す。

爆発で敵の攻撃が止んだ。

「アインシュラーク！」

「ガイアブレイク！」

全体重を掛けたブランの一撃と雷を宿したネプテューヌの剣が翼部を切断した。

「ギギアアアアアアア！」

「ちいっ！」

敵がトカゲのような尻尾を振るい、二人を追い払う。

そして再びプラズマ砲にエネルギーを貯め始めた。

「同じ技は……」

アシユレイが走る。

それを確認した敵がプラズマ砲を発射。

「二度も通用しねえよ！」

同時にアシユレイが跳ねる。

プラズマ砲がアシユレイを追うように角度を上げ、壁から天井にかけて一文字の風穴を作った。

「フォーム・ドライ！」

プラズマ砲がアシユレイを捉えるよりも早く炎を灯した鎌を敵の頭部に突き立てる。

「おおおおおおお！」

そのまま尻尾に向かってアシユレイが背を駆ける。

アシユレイが鎌を振り抜いた時には、敵は文字通り真つ二つになっていた。

崩れる残骸が巻き上げた砂煙の中からアシユレイが鎌を剣に戻しながら姿を現した。

「ガナツシユは……逃げたか」

剣を背負いながらアシユレイが三人の所に戻る。

「けつ、逃げ足だけは一人前だな」

「ガナツシユは放っておきましょう。それよりも置いて来た三人が心配だわ」

「ああ……」

アシユレイの足が出口へと向いた直後のことだ。

アシユレイの携帯端末に着信が入る。

デイスプレイには今一番見たくない名前が写っていた。

『アツシユ、聞こえる!?!』

「アイエフ！何があつた！」

スピーカーからアイエフの荒れた声が聞こえてくる。

声の後ろには多数の足音。

おそらくレジスタンス達のものだろう。

『敵の待ち伏せよ！拠点の移動中に襲われた！』

「なんだって!?!」

先日の一件で敵にこちらの場所はばれていた。

だからこそ念入りに計画を練った末に決定した逃走経路のはずだったのだ。

だと言うのに待ち伏せ。

街から出て行くのを見られていたとしても行動が早すぎる。

だが次のアイエフの言葉で合点がいった。

『レジスタンスのメンバーの中にスパイが居たの！気づいた頃にはこのザマよ！』

「今は!？」

『出鱈目に逃げ回ってるだけ! ベール様が囿になつてくれてるけど、こつちには怪我人も居るし追い付かれるのは時間の問題よ! そつちは!？』

「やることはやった! だが今から戻るとなると……!」

『つ……ギリギリまで持ち堪えてみせるわ! だからそつちも急いで戻ってきて!』
それだけ言うといエフとの連絡が切れた。

「くそっ!」

「聞いたわ。ルウィーに急いで戻りましょう!」

「呑気に交通機関の世話になつてたら日が暮れちまう! このまま飛んで戻るぞ!」

「お前らだけでも先に行け! 俺は後から向かう!」

「ふむ……話は大体わかった。アツシユよ、とりあえず落ち着くのだ」

切羽詰まった状況に焦る三人とは対照的にMAGES. は冷静そのものだ。

「一刻を争つてるんだ。無駄話なんかしてる暇は……」

「アイエフの元に私が送つてやる……と言つても無駄話というのか?」

「……なんだつて?」

「三人程度ならば今すぐ、何処へでも送れるぞ」

「……頼めるか?」

「盟友の頼みを無下にする訳にはいかないな」

三人が顔を見合わせ、頷く。

「では、この魔法陣に乗るがいい」

地面に出現した魔法陣へMAGES.を除いた全員が乗る。

「長距離用ゆえ、細かい転移は出来ない。転移先が敵の目の前でも恨まないでくれ」

「MAGES.はついて来てくれないの？」

「私はここで転移陣を操作する必要があるのな。また暫しの別れだ」

「世話になった。転移を頼む」

「うむ。では……転移陣、起動！」

三人が光に包まれ、直後その姿がかき消えた。

「……ルクス・トユネーヴェ・イメイグ・ノイタミナ・シスウム……」

荒れ果てた倉庫の中でMAGES.が一人呟いた。

.....

「こつちよ！遅れないで！」

集団の先頭をアイエフが走る。

逃走を開始してから早10分。

集団故、身を隠すことも出来ないまま走り続けていた。

「はあ……はあ……あいちちゃん……もう……限界……ですう……」

「苦しいとは思うけどもう少し頑張つて！」

音を上げるコンパをアイエフが励ます。

が、走れないのはコンパだけではない。

子供、老人、怪我人、そしてその怪我人を背負って走る人。

正直言つてもう限界だ。

「アイエフさん！前方に敵です！」

「あーもう、次から次へと！」

回り込んでいた僧兵達がディスクからモンスターを呼び出す。

「つ……フィンランシエ！皆をお願い！」

「アイエフさんはどうするんですか!？」

「こいつらの相手をするわ！足止めにはなるはずよ！」

「そんな……」

アイエフがカタールを構え、モンスターの前に立ち塞がった。

「さあ、かかって来なさい！」

挑発に乗ったコールドリザードと呼ばれるモンスターが手にした斧を振り下ろす。アイエフはそれを最低限の動きで避けた。

「パラライズエッジ！」

アイエフが魔法で作り出した麻痺毒を付加したカタールで切り裂く。

「ふっ………！」

痺れで動けないコールドリザードの体を素早く登り、首に足を巻きつける。

「はぁー！」

コールドリザードが暴れる前にその目玉へ深くカタールの刃を突き立てた。

叫び声を上げる間も無くコールドリザードが消滅する。

「つと………っ！………」

着地した直後、背後からの殺気にアイエフが前方へ跳ぶ。

その一瞬後にアイエフが居た位置にアイスゴーレムの腕が叩きつけられた。

「あいちゃん！危ないです！」

「しまっ………！」

更に避ける事を読んでいたのか、サイドから別のアイスゴーレムが迫る。

雪に足を取られ、上手く動けない所に強烈な体当たりが炸裂した。

「あ………う………！」

吹き飛ばされ、地面を転がる。

霞んだ視界でなんとか捉えられたのは腕を振り上げる三体のアイスゴーレムの姿。

「これは……マズいかも……」

アイエフが目を閉じ、形だけの防御姿勢を取る。

暗い視界が白く光った。

「……つたく……マジで敵の目の前じゃねえかよ」

「……え？」

アイエフがゆっくりと目を開ける。

視界にまず写ったのはつぎはぎだらけのコート。

「よう。間に合ったみたいだな」

「……どこがよ。死ぬかと思っただじゃない」

巨龍の腕で三体のアイスゴーレムの攻撃を受け止めているのは紛れも無くアシュレイその人だった。

「ふん！」

アシュレイが腕を振るい、アイスゴーレム達を弾き飛ばす。

腕を元に戻し、中央のアイスゴーレムへと走る。

「ヒートパイル……」

炎を纏った剣を腹部へと突き立て、SSSを起動。

「ブレイク！」

刃が杭打ち機のように飛び出し、アイスゴーレムが粉々に爆発した。

仲間を倒された怒りからか、残った二体のアイスゴーレムがアシュレイの背後から襲いかかる。

「ハアアアア！」

「くたばれえ！」

だがその腕が振り上がるより早く白と紫の閃光が二体を貫いた。

「ね。ぶ。ね。ぶ！」

「ブラン様！」

「みんな、ごめんなさい。遅くなったわ」

ネプテューヌとブランの元にコンパとフィナンシエが駆け寄る。

「さて……この場合は切り抜けたけど、相変わらず状況は最悪ね」

「ベールに加勢する。レジスタンスを避難させる。せめてどちらか一つを消化できれば

いいんだが……」

アイエフを立ち上がらせながらアシュレイがそう呟いた。

「お困りのようですね」

不意に背後からそんな声が聞こえた。

「やあやあ、また会いましたね」

「グレイさん!？」

「……誰だこいつ」

ブランが斧をグレイに突きつける。

「お初にお目にかかります。私はグレイという者です。宜しく願いますね、ホワイ
トハート様？」

「あー……不審に思うのは分かるが、この人は俺に剣を教えてくれた先生だ」

「それに、リンボックスではわたしを助けてくれたわ」

「……敵じゃないんだな？」

まだ半信半疑といったところだが、大人しくブランは斧を降ろした。

「で、今回は何ですか？」

「いえいえ、少しお手伝いを、と思いましたが？」

「手伝い？」

「ここから東にリンボックス行き的大型転移陣を用意しました。向こうの受け入れ準備も済んでいます。是非使って貰えれば、と」

「はあ!?!んの信用できる訳ないだろ!」

ブランが声を荒げる。
それもそうだ。

突然現れた何処の馬の骨ともわからない奴に自分の大切な国民を任せるなどお人好しにも程が有る。

「ほほう、ではその人たちは一体これからどうするんですか？」

「ぐっ……それは……！」

「この寒空の下、いつ終わるとも知れない逃走劇をまだ強いるつもりですか？」

「……ブラン、グレイを信じましょう」

歯を噛み締めるブランの肩にネプテューヌがそつと手を乗せる。

「ネプテューヌ……テメエ、他人事だと思って……！」

「確かにグレイはイマイチ信じがたい所があるわ。でも、レジスタンスの皆も、こんぱとあいちゃんも限界よ」

「わかってる！わかってるけどよお……！」

「ブラン、俺からも頼む。ここで放っておくよりマシだ」

「……あークソ！」

ブランが斧を地面に叩きつける。

「おい、グレイ！私の大事な国民に何かあったらただじゃおかねえからな！」

「わかっていきますよ」

「わたしもレジスタンスの皆について行くわ。道中何かがあるかわからないしね」
「わたしもあいちゃんと一緒に行くです！」

レジスタンスのメンバー達が再び走り出した。

すると一緒に走っていた筈のグレイが急にこちらに引き返して来た。

「そうそう、一つ伝え忘れていたことがありました」

「何ですか？」

「今ベールさんはコンベルサシオン……いえ、マジエコンヌと戦っています」

「マジエコンヌと!?!」

「急いだ方がいいですよ。彼女一人では、あの人にはかないません」

直後、何かが爆発したような音が辺りに響いた。

「あっちか……!」

「気を付けてくださいいね」

グレイの言葉に頷き、三人も走り出した。

やがてグレイも動き出す。

「……『彼女』を……頼みましたよ」

後に残ったのは、誰かの足跡のみ。

.....

「はあ！」

「フン！」

火花を散らしながら二つの影が距離を取る。

「死に損ないが。いい加減楽になつたらどうだ？」

一つはマジエコンヌ。

「そういうわけには……いきませんの……」

もう一つは女神化したベール。

「……ゆけ」

マジエコンヌが懐からエネミーディスクを取り出し、二体のコールドリザードを呼び出した。

呼び出されたコールドリザードはすぐさまベールへと突進していく。

「くっ……!?!」

一体の突進を避け、二体目が振り下ろした斧の軌道を槍で逸らす。

「ガアア！」

最初に突進してきたコールドリザードがベールの背後から横薙ぎに斧を振るう。

ベールはそれを屈んで回避し、同時に槍を脇を通すように後ろに突く。

「つはあー！」

そのまま一回転しながら槍を全周囲に振るう。

巻き起こったかまいたちに切り刻まれ、コールドリザードは速やかに消滅した。

「はあ…… はあ……！」

「最初の威勢はどうした？ 私はまだ本気の半分も出していないぞ？」

「奇遇ですわね…… はあ…… それはこちらですわ……！」

ベールが額の汗を気にも留めず、マジエコンヌへ槍を構え直す。

先程から二人は同じ事を延々繰り返していた。

1体1でマジエコンヌと戦っていたと思えば急に身を引き、エネミーディスクから生み出されたモンスターと戦わせられる。

モンスターの相手が終われば体力の回復したマジエコンヌともう一度刃を交わす。

何度繰り返したかわからない。

ただ疲れだけが溜まっていく。

とても戦いとは言えない、拷問じみた戦闘が続いていた。

「……何故そこまで必死になれる？」

「どういう意味です……?」

ここに来てマジエコンヌがベールに話しかけてきた。

慈悲か、余裕か、傲慢か。

何れにせよこのインターバルはベールにとって有難かった。

「ここはホワイトハートの国。つまりは貴様の敵の国のはずだ」

「……それが?」

「あれだけ守護女神戦争で争っておきながら、何故今になって協力する? 争う相手が減るといふことは、貴様にもメリットになる筈だぞ」

「……確かに、守護女神戦争に勝つのなら、他国をわざわざ助ける必要はありませんわ」
ベールが構えていた槍を降ろす。

「フフフ……そうだろう……今私に忠誠を誓えば、貴様の命だけは助けてやろう」

「忠誠?」

「簡単な事だ。その場に跪き、私に頭を下げるだけだ。そして私がこのゲームギョウ界を征服した暁には、世界の半分を貴様にやろう」

「……悪くない話ですわね」

マジエコンヌの顔が愉悅に歪む。

「恥じることはない。誰だって自分の身は可愛いもの。さあ、躊躇わず私に跪くのぞだ!」

「折角ですが、遠慮致しますわ」

「……なに？」

ベールがふうと息を吐く。

「もう一度言いますわ。断る、と言っているのです」

「貴様……自分が何を言っているのかわかっているのか？この国を守るメリットはないとさつき言ったばかりではないか！」

「……ほとほと呆れますわね。話を聞くのはそちらですわ」

言葉尻こそ穏やかだが、ベールの目には闘志が宿っていた。

「わたくしはあくまで、守護女神戦争に勝つのなら、と言ったのですわ」

「なんだと？」

「元々わたくしは世界の覇権になど興味はありませんし、争っていたのもほとんどはただの正当防衛ですわ」

一転、マジエコンヌの顔が黒く歪む。

「何より、今やわたくし達は絆で結ばれた仲間であり、良き友人。その絆を繋いでくれたネプテューヌのためにも……そして……」

ベールが再び槍を構える。

「女神としてではなく、一人の女として……もう一人の友人との約束を破る訳にはいき

ませんわ!」

マジエコンヌが再びエネミーディスクを取り出す。

「……ふん、そつちがそのつもりならば殺すのみ。どうせ貴様は用済みだ」

エネミーディスクから先ほどまでとは比べものにならない量の新たなモンスターが呼び出された。

「さあ、モンスター達よ! その哀れな女神を消すのだ!」

モンスターが一齐にボールへと襲いかかる。

「32式エクस्पレイド!」

「ゲファイアーヒシユテルン!」

「フレイムリツパー!」

だがそれが届くより前にモンスター達は消滅した。

「……本当に、狙ったようなタイミングですわね」

ボールの目の前には三人の仲間が立っていた。

「ボール! 大丈夫!?!」

「マジエコンヌ……テメエ、覚悟しやがれ!」

ネプテューヌとブランが武器を構える。

ボールの方をアシユレイが顔だけで振り向き、言った。

「今、戻った」

「……約束は守りましたわ」

アシュレイが剣をマジエコンヌに突きつける。

「マジエコンヌ……だったか？あのモンスターの数……お前もエネミーディスクを持つてるのか？」

「当然だ。あのディスクは元々私が作った物なのだからな！」

マジエコンヌが自慢げにエネミーディスクを取り出した。

また新しいモンスターを呼び出すつもりようだ。

「……そうかよ」

アシュレイの手が翻る。

打ち出されたナイフがマジエコンヌの手にあつたディスクを破壊した。

「なにい!？」

「同じ手に二度も引つかかるとはな……とんだマヌケ野郎だ」

「ぐ……良いだろう！この私が直々に貴様らを葬つてやる！」

マジエコンヌが女神化の時と同じ光に包まれる。

「その姿は!？」

「……最悪の気分だぜ……」

マジエコンヌの姿は変身前とは似ても似つかないものになっていた。

白いレオタード風のボディースーツに水色の髪。

女神ホワイトハートの姿だ。

「この姿で貴様を葬った方が兵の士気にも繋がるだろう」

「姿形を変えた所で、所詮それはまがい物よ。本物ではないわ」

ネプテューヌの言葉にマジエコンヌが笑い出す。

「確かに私は偽物だ！だがな、コピーした女神二人の力を合わせるにより、私はオリジナルをも凌駕した力を手に入れたのだ！」

「二人分？ベールのはもう取り戻したはずよ」

マジエコンヌがにやけた顔のまま話を続ける。

「良いことを教えてやろう。私の能力の本質はコピーだ。奪うのはあくまで付加効果にすぎん」

「……つまり、わたくしの力はもうコピーしている、ということですね」

「ふざけやがって……！」

マジエコンヌの言葉を聞いたアシユレイがため息を吐いた。

「オリジナルを凌駕……ね。模倣品が本物に勝てるわけないだろ」

「なんだと？」

「マジエコンヌ、あなたの力はわたし達女神を上回っているかもしれない」
「けどな、わたし達は一人で戦ってるわけじゃねえんだよ！」

「例え一人の力で敵わなくとも、全員の力であなたを倒してみせますわ！」

四人が肩を並べる。

「お前に見せてやるよ……本物の力ってやつをな！」

戦闘が始まった。

「でりゃあああ！」

「おおおおお！」

ブランとマジエコンヌがお互いの斧をぶつけ合う。

「軽いな！」

「ぐうっ……！」

押されているのはブラン。

オリジナルを凌駕したというのは伊達では無いようだ。

「シレットスピアー！」

ボールが脇から召喚した槍を高速で発射する。

「遅いな！」

だがマジエコンヌはそれを難なく回避した。

この姿でもグリーンハートの速さは発揮されるようだ。

「ハアアアアア！」

「オラオラオラ！」

ネプテューヌとアシュレイが剣を振り回す。

だがそれも本来取り回しの悪いはずの斧で受け止め、弾いていく。

痺れを切らし、一旦二人も距離を取る。

「どうした？その程度か？」

四人の絶え間無い攻撃を捌き、かつ相手はまだまだ余裕のようだ。

「アツシユ！」

「……ぶつつけ本番だが、やってみるか？」

「やるつきやねえだろ！」

「何を始めるつもりですか？」

ベールが知らないのも無理はない。

これはアシュレイ達がベールを助けに向かう時に立案したもののだから。

「ふん、何をしようが無駄だ！」

マジエコンヌが猛スピードで四人に接近する。

「行くぞ！タスク・バッドクラウド！」

アシユレイの声にネプテューヌとブランが空高くに飛び上がった。

「何をするつもりだ……?」

様子を見る為にマジエコンの足が止まる。

先ずはブランが動いた。

「くらい……やがれ!」

目の前に巨大な氷の塊を作り、それを蹴りで砕いた後、さらに斧を振るって氷の破片を飛ばす。

「こんなもの、避ける必要も無いな」

言葉通り、飛び散り地面に突き刺さった破片は一步も動いていない筈のマジエコンヌに当たらない。

「貰った!」

続けてネプテューヌが雷を纏った剣を振り下ろす。

放たれた雷光は一番大きな氷の破片へと吸い込まれる。

その雷光は氷の破片から破片へと連鎖し、蜘蛛の巣のような電気の網を作った。

「な……ぐおおおおお!」

マジエコンヌに突如出現したそれを避ける術は無い。

「これは……」

「女神の力をフルに使った連携攻撃……『タスク』だ」

「いつの間にこんなものを？」

「ついさっきだ。成功するかどうかは賭けだったかな」

ネプテューヌとブランが二人の場所まで降りてくる。

「効果抜群ね」

「一気に攻め立てるぞ！」

ネプテューヌとアシユレイが駆ける。

「フォーム・ドライ！」

SSSが稼働。

剣が大鎌へと変型する。

「そら……よつと！」

「しやらくさい！」

柄で打突、そのまま斬りかかる……と見せかけて背後に周り刃を叩きつける。

マジエコンヌも負けじと背を向けたまま斧を背後に回して防御する。

「せやああああ！」

そこに遅れてネプテューヌが正面から斬りかかる。

「チィ！テンツェリントロンペ！」

前後に挟まれる事を嫌ったマジエコンヌが竜巻のように回転を始める。

アシユレイとネプテューヌが慌てて距離を取る。

「そこだ!」

「えっ……きやあ!」

マジエコンヌが突如回転を辞め、大きく一步を踏み出す。

遠心力のまま斧を振り上げ、ネプテューヌを防御の上から吹き飛ばした。

「オマケだ! シレットスピアー!」

「カバー!」

アシユレイが叫ぶ。

直後、マジエコンヌが飛ばした槍の直線上に居た筈のネプテューヌがかき消えた。

「……今のわたくしにはこの程度しか出来ませんが……」

「ボール!」

声の方向にはネプテューヌを抱えたボールが立っていた。

「ていやああああ!」

「何!」

マジエコンヌが殺気を感じ取り、真横に飛ぶ。

それとほぼ同時に落下してきたブランが斧を地面に叩きつけた。

「ブラン！タスク・ホワイトアウト！」

「おうよ！来い！」

アシュレイとブランがお互いに向かい合う。

「くそ……！今度は何をするつもりだ!？」

「おらあああああ！」

「いつけええええええ！」

アシュレイが魔法陣から火炎を放射。

対してブランは極低温の光線を打ち出す。

それらはぶつかり合い、あつという間に辺りを深い霧に包んだ。

「……ふん、何かと思えば目くらましか。そんなものが私に効くと思ったか？」

マジエコンヌの背後から雪を踏み締める音が響く。

「そこか！」

風の速さで距離を詰め、背後に居たアシュレイを切り裂いた。

「!?!……どういことだ!?!」

驚くのも無理はない。

切られた筈のアシュレイがドロリと歪み、霧の中にかき消えたのだから。

「よう、マジエコンヌ」

「ぬうー！」

「蜃気楼って知ってるか？」

「はあー！」

「密度の違う空気に光が引き寄せられる現象のことだ」

「くそー！本物はどこだ!？」

マジエココンヌが声の聞こえた方向へ斧を振るうが、切ったアシユレイは全て偽物。

「……………ぐおう!？」

マジエココンヌの背に深く剣の切り傷が刻まれる。

そして傷は凄まじい速度でその数を増やしていく。

「くそー！くそおおおー！」

「お前はチェスや将棋という詰みに嵌ったんだよー！」

マジエココンヌが交差した腕の隙間から剣を振りかぶるアシユレイの姿を捉えた。

斧を振るう。

「もう遅いつてのー！」

「ぐはあ……………!？」

マジエココンヌが背後からの一撃で空高くに打ち上げられた。

霧の範囲から飛び出し太陽の光に晒される。

「……っは?」

「ジャストミート! いらっしやいませええええ!!」

上空で待機していたブランがありつたけの力を込めて斧を振り下ろす。

防ぐことも避けることも出来ないマジエコンヌはその一撃で地面に叩きつけられた。

「……俺たちの勝ちだ」

晴れていく霧の中で、剣を背負いながらアシユレイが呟いた。

「ぐ……何故だ! 何故勝てんのだ! 女神二人の力を有したこの私が! ……ぐふっ……」

ダメージで女神化を維持出来なくなったマジエコンヌがよろよろと立ち上がり、叫ぶ。

「さすがにタフね。これだけの攻撃を受けてまだ立っているなんて……」

「なら、倒れるまでぶん殴れば良いだけの話だ。奪ったもん全部まとめて返すまでな!」

二人はふらつくマジエコンヌへ武器を構える。

「マジエコンヌ、トドメよ。ルウィーを返してもらおうわ」

「……ふん! こんな国いくらでも返してやるわ!」

マジエコンヌがゆっくりと後ろへ下がる。

「だが、この力だけは貴様らに奪わせはせん! 奪われてなるものか!」

マジエコンヌの槍の先端に魔力が集まる。

「何をするつもり!?」

「こうするのだ!」

マジエコンヌがネプテューヌに槍を投げる。

「ネプ公!」

アシユレイがネプテューヌの前に出、魔力障壁を作り出す。

槍が魔力障壁に触れた直後、強烈な爆風が辺りを襲った。

「くっ……みんな無事!」

「ええ……なんとか大丈夫ですわ」

どうやらさっきのがマジエコンヌの限界だったようで、攻撃を防いだ障壁はひび割れている。

そして障壁の先にマジエコンヌの姿は無い。

「……また逃げられたか」

「勝つには勝ったが……」

「けど、取り戻すものは取り戻せたわ。今は、それを喜びましょう」

「……そうだな」

そう言うブランの表情はあまり優れていなかった。

.....

「いやー、いろいろあつたけどなんとかなつてよかつたねー、ブラン」

「ん……あの時はありがとう、みんな。おかげでルウィーを取り戻すことができたわ」

マジエコンヌとの戦いから早三日。

ネプテューヌ達はブランを加えてコンパの家で話をしていた。

「ところで、後始末とか大変でしょうに、こんなところにあなたがいて大丈夫なんですの？」

「……それお前が言うか？」

「偽物の誤解は解いたし、あとはフィナンシエや優秀な部下たちがいるから大丈夫」

リンボックスヘレジスタンスを迎えに行き、偽物の誤解を解き、ラストイション

……アヴニールとの交易を断つ。

それらがスムーズに進んだのはフィナンシエを筆頭とする部下たちのお陰だ。

「それに、ネプテューヌ達と一緒に行って来いって言ってくれたのはフィナンシエだから」

「良い部下に恵まれたな」

「わたしの自慢の侍従よ」

「それに引き換えあいつらは……」

アシユレイ、アイエフ、ブランの三人がため息を吐く。

「そういえばあの兄弟ってリーンボックスに移住したんだっけ？」

「ええ」

その兄弟がベールの部屋に侵入し、大暴れした結果、女神化したベールにこつてり絞られるのはまた別の話。

「んなことより、これからは俺たちの旅に同行するんだよな？」

「何度か帰るかもしれないけど、基本はそう考えて構わないわ。今度はわたしにネプテューヌたちを手伝わせてほしい」

「ブラン……改めてよろしくね！」

「うん。よろしく、ネプテューヌ」

ネプテューヌとブランが硬い握手をした。

「……そうだ、ネプテューヌの旅で思い出したのだけれど……これ、あなたたちの探しているものでしょ？」

ブランが差し出したのは光る歪な石のようなもの。

「これって……鍵の欠片です!？」

「フィナンシエがあなたたちに渡すようにって預かっていたの。マジエコンヌの部屋で

見つけたそうよ」

「ルウイーのもマジエコンヌが持っていたなんてね……」

「よっぽどイスト何某の封印を解かれるのが嫌らしいな」

何はともあれ、これで三つ目。

残りはあと一つだけだ。

「さて、鍵の欠片も手に入ったことだし、いーすんとやらの話を聞いてみようじゃないの」

「……そういえば、この中であいつの話聞いたことがあるのは俺とネプ公とコンパだけだったな」

「リーンボックスでは聞きそびれちゃったですう」

「行くよ、みんな！いでよ、いーすーん！」

直後、鍵の欠片が浮き上がり、光を発し始める。

「お久しぶりです、みなさん。アイエフさん、ベールさん、ブランさんは始めてですな」「この人が……いーすん？」

「わたしは史書イストワールと申します。今は訳あつて封印されている為、ネプテュー又さんたちに封印を解く為に鍵の欠片を集めてもらっているのです」

三人は急に頭に響いた声に戸惑いの方が大きいようだ。

「イスト何某の説明は後だ。電池が切れたらまた話が出来なくなるんだろ？ 言いたいこと早く言え」

「それもそうですね。みなさん、よくマジエコノヌを倒し、ルウィーを取り戻しましたね」

「あら、こ存じですの？」

「わたしはネプテューヌさんを通して様々な情報を取得しています。ネプテューヌさんが見聞きしたことはわたしにも伝わっています」

「それ本当？」

「ええ。昨夜、午前0時15分にネプテューヌさんがアイエフさんのミルクプリンを……」

「わーわーわー！ いーすんストップストOPP！」

「なるほど……だから今朝わたしのプリンが無かったのね……」

アイエフがゆらりと立ち上がる。

「暴れるなら外でやれ。話が進まん」

「……それで、あなたはわたし達に何を伝えたいの？」

「マジエコノヌの目的についてです。彼女の目的はあなた方女神四人が持つ力を全て手に入れることです」

「随分壮大な目的だな……」

「ですが、コピーとはいえマジエコンヌはブランさんとベールさんの二人の力を手に入れています」

と、なれば話は決まっている。

「彼女が次に狙うのは、ネプテューヌさんかノワールさんです」

「これ以上マジエコンヌに強くなられるのは厄介ですわね」

「この間のルウィーの一件もあるので、すぐに動けるとは思えませんが、用心してください」

「わかりましたです。ねぶねぶはわたしたちが守ります！」

「ネプ公は良いとして、問題はノワールだな……」

「……どうやら、時間のようです。みなさん、申し訳ありませんが、よろしくお願いいたしますね」

「うん、任せてー！」

ネプテューヌの言葉を聞いた直後、鍵の欠片の光が消え、テーブルにコトリと落下した。

「じゃあ、次の目的地はラストイションね」

「ノワール、アヴニール、博覧会、そしてラストイションの鍵の欠片……よくこれだけや

り残したもんだ」

そのやり残した事を終わらせに。

ネプテューヌ一行は再びラスティションへ向かう事を決意した。

第16話 あなたの神は何処に居る？

「……はあ……クソ……」

「開始早々困ったわね……」

「ん？どつたの二人とも？」

コンパの家に帰ってきて早々にアシユレイとアイエフがため息を吐いた。

「どうもこうも、ラストイションへの入国許可が降りないんだよ」

「どういうことですか？」

「どうやらラストイション、他国から一般人を入れないような体制を敷いているらしいのよ」

「つまり、拒否られてるってこと？」

「平たく言えばな」

ラストイションに住む人は知らないことだが、この政策は明らかにネプテューヌ達をラストイションに寄せ付けない為の政策だ。

このような無茶な事をしてても表向きには教会の決定。

つまりは女神の指示ということになる。

アヴニールには何の被害も無いというわけだ。

「実質ラステイションを仕切っているのはアヴニールなわけだし、今まで私たちがしたことを考えれば当然と言えば当然ね」

「けど、困りましたわね。正規の手続きが無理となりますと……」

違法に入国するしかない。

つまり……。

「忍び込むのね」

「しか、ないだろうな」

「なるべく犯罪は犯したくないですけど……でも、この際贅沢は言ってもらえないか……」
人の命、果ては世界の命運とたった一回程度の犯罪歴。

天秤に掛けるのもおこがましい。

「じゃあ、どこぞのデイビットな蛇さんの如く、ダンボールを被って忍びこむんだね！」

「そんな面倒なことほしくないわ」

「ええ。空を走りますわ」

「……空？」

ネプテューヌが頭の上にクエスチョンマークを浮かべる。

「あなた、自分が女神だってこと忘れていませんか？」

「あ、そつか。飛んでいけばいいのか！」

「……やっぱり忘れてたのか……」

「まあ、そういうことよ」

このゲームギョウ界に空を飛ぶ乗り物は無い。

何故か？

答えは簡単だ。

空を飛ぶモンスターが居る。

それだけで空は危険な場所となるのだ。

それに空を飛ぶ乗り物を作ればそれらが行き着く場所も用意しなければならない。

つまり土地と莫大な資金が必要になる。

何をどうしてもリターンがリスクを上回らないのだ。

だったら大型転移陣を作った方が安上がりで速く、安全に国を移動することができる。

これらの理由がゲームギョウ界から空の旅を消し去ったのだ。

「始めての空の旅ですう！楽しみですう」

だが憧れだけは人の心にある。

コンパもその一人のようだ。

「そうと決まれば、早速ラストーションに出発するわよ！」

「「「おー！」」」

「……賑やかなこつて……」

5人が拳を突き上げる中、アシュレイだけがやれやれと肩を竦めた。

……………

「さて、この辺で良いか？」

アシュレイが不意に立ち止まる。

ここはプラネテューヌから東の丘。

モンスターも少なく、同時に人気も少ない。

空へ飛び立つならここが一番良いだろう。

「そうね。ここなら誰かに見られる心配もないわ」

「オツケー。ここで変身すれば良いんだよね？」

「ですわね。それでは……」

三人が体が光に包まれ、その姿を変える。

光が収まれば、そこには三人の女神が立っていた。

「……………」

「?……………あいちゃん、どうかした?」

「なんでもないわ。ただ、目の前にいる三人が女神様だつてことを改めて実感しただけよ」

「ま、女神同士がつるむなんざ、ちよつと前まではわたし達自身ですら考えたことなかったしな」

「では、欠けている最後の一人を迎えに参りましょうか。あいちゃん、わたくしの背中に乗ってくださいまし」

「あ、はい。失礼します」

恐る恐るといった感じでアイエフがベールの背に乗る。

「こんぱもわたしの背中に乗って。楽しい空の旅を体験させてあげるわ」

「はいです。期待しててくださいよ」

「フフツ……………一生忘れられない1日にしてあげるわ」

コンパもネプテューヌにおぶさり、いつでも出発できる体勢になった。

残ったのは……………。

「……………」

「……どうした？早く乗れよ」

「いや、自分より小さい奴に乗るのは少し抵抗がな……」

「バカ言っているとマジで置いていくぞ……」

「冗談だ。道中頼むぞ」

ブランの小さい背にアシユレイが掴まり、全員の準備が整った。

「それじゃ、みんな！行くわよ！」

6人が一斉に大空へと飛びたつていった。

後はのんびり空の旅を満喫……と言いたいところだったのだが……。

「ひやあああああ!?ね、ねぶねぶううううう！止めてくださいですうううう!」

「まだまだ！わたしの全力はこんな物じゃないわ！もつとスピードを上げるわよ！」

「も、もうたくさんですうううう!」

コンパがネプテューヌのゲッター飛行ばりのとんでもフライトにただただ悲鳴を上げ

げる。

「……何やってんだあの馬鹿」

「コンパ……可哀想だけど、代わってあげるのは遠慮したいところね」

「あのネプテューヌに捕まったのが運の尽きだな」

「わたくし達にはトラウマにならない事を祈ることしか出来ませんわ」

「いや、どう考えても手遅れだろ」

ネプテューヌの遙か後ろで今度こそ快適な空の旅を満喫している四人が呟いた。

「暴れるのは良いが、後でバテるなよー。聞いてないと思うがなー」

「……なあ、アツシユ」

「あ？どした？」

「お前は何してんだよ……」

「……何の話だ？」

「しらばっくれてンじゃねえ！『これ』の事に決まってるんだろー！」

普段のブランの髪型はショートカットだが、女神化するともみあげだけが伸びている少し変わったものとなる。

現在、アシュレイの手によってその長く伸びたもみあげの右側が綺麗な三つ編みになつていた。

ご丁寧に魔法で作った赤いリボンの飾りまで付いている。

ブランが怒鳴つたのはアシュレイが右側を終え、左側に移行しようとした矢先のことだ。

「ああ、久しぶりな割に綺麗に出来たと思つたが、不満か？」

「ああ不満だよ、不満しかねえよ！早く解け！」

「あら、いいじゃありませんの。見た目相応で、プツ……可愛い、ですわよ？」

「笑いが堪えきれてねーじゃねえか！」

「あー……えーと……わたしは普通に良いと思いますよ？」

「だからフオローになつてねーんだよ！」

よほど三つ編みにされたのが嫌なのか、ブランの怒りは収まらない。

「何がそんなに嫌なんだ？ 似合ってるぞ？」

「……こういうのは……その……ガラじゃねえんだよ……」

「……お前はもう少し身の回りに気を使った方が良い。自分を磨いて損な事はないぜ？」

「自分を磨くだ？」

「『虎も河辺で体を洗う』ってやつだ。獰猛な野獣でも体は綺麗にする。身の周りを小綺麗にしてみるのもたまには良いんじゃないか？」

「……………」

「どうせ女神化を解いたら元に戻るんだ。それまでこのままでも問題ないだろ？」

「……わかつたよ」

まだ少し不満そうだが、ブランはもう暫くこのままにいる事を了承した。

「そうと決まればペースを上げろ。このままだとネプ公らを見失うぞ」

「調子が出てきたわ！今度はもつとスリリングな技をやるわよ！」

「も、もう空はこりこりですうううう！」

この後、コンパが空の旅へは二度と行かないということを誓ったのは言うまでもない。

.....

「さて、ラスティシヨンに着いたわけだけど、これからどうすんの？やっぱ教会？」

人の目を避けるために降りた街の近くのダンジョンから歩くこと数分。

ようやく街の入り口といったところでネプテューヌが口を開いた。

「シアンのところに行きましょ。どうせ教会に行ってもノワールには会えそうにないし」

「間違いないな」

「あいちゃん。そのシアンという方は、あいちゃんたちの知り合いなんですか？」

シアンという始めて聞く名前にベールが興味を示す。

「はい。アツシユの幼馴染で、前ラスティシヨンに来た時にお世話になった人です」

「……信用してもいいの？アヴニールと繋がってたりしない？」

「そこは俺が保証する」

「繋がるどころかシアンとアヴニールは犬猿の仲なんだ！」

そうこう言っている内にネプテューヌ一行は本格的に街の中へと足を踏み入れた。

ベールとブランの二人は変装……と言うには少し厳しいが、眼鏡を掛け、身分を隠しているつもりで堂々と街中を歩く。

「この間来たばかりなのに懐かしいですね」

「あの時はのんびり街を見て余裕なんてなかったしね。どうする？シアンとこに行く前に少し観光してく？」

「さんせー！」

「いいですね。ちょうどラスティションにはどのようなゲームがあるか気になっていたところなのです」

「わたしも、ラスティションの文学に興味がある」

アイエフの提案に三人のテンションが上昇する。

一方アシュレイの顔はいつもの顰めっ面になった。

「おい、アイエフ……」

「いいじゃない。たまの息抜きも仕事の内よ」

「………つたく………好きにしろ」

「決まりね。じゃあ、少し自由行動にしましょ。2時間後にここに集合ってことで」

「わかりましたわ。それではあいちゃん。参りましようか」

なんでもないようにボールがアイエフの手を取る。

「……えっ、わたしですか!?!」

「わたくしのエスコートはあいちゃん以外ありえませせんわ。それに、あいちゃんとは二人でゆっくりお出かけしてみたかったんですの」

「え、ええええエスコート!?!っていうかそれってデデデデートじゃ……」

「そういうことですから、よろしくお願いしますわ」

ボールは優雅に一礼した後、いまだテンパったままのアイエフを引き連れて歩き出した。

「……えっと、わたしは本屋に……」

「ブランさんの道案内はわたしがするです」

「……いいの?」

「はい。行きたかった雑貨屋さんが、本屋さんのちょうど近くなんです」

「そう……なら、お願い」

「はいです!」

ブランとコンパもボール達とは反対方向へ並んで歩いて行った。

「……さて、一足先にシアンのところに顔出しに行くか」

「ずこー!」

アシユレイが歩き出そうとしたところでネプテューヌがわざとらしく転んだ。

「ちよつとアツシュ!そこはわたしとアツシュがペアになるところじゃないの!」

「知るか。俺はお前とペアになんざなりたくない」

「そんなー!?あの日の事は嘘だったの?あんなに激しくされたのに……」

「そんなあらぬ誤解を招くような事をした覚えはない」

「いやいやほら、作者の作品の中にR-18のタグが付いたのがあるじゃん?あれの話だよ」

「また訳のわからない事を……」

「ねえ待ってよー。遊んでくれたらなんでもしてあげるからさー」

「なんでもクソも、別にお前にしてほしいことなんざないっての」

「うー……こんな美少女がなんでもしていいって言ってるのに……はっ……もしかしてアツシュってホモなの!」

「俺はノーマルのストレートだし、場所をわきまえてるだけだ。節操無しのお前と違ってな」

「えー……口ではそう言ってるけど本当はそっち系なんじゃないの?ほら、ホモは嘘」

つきつていうしきー」

「……何なら今ここで証明してやろうか？」

「……え？ いや、いきなり野外はちよつと……それにわたしこういうのは始めてで……」

「どうした？ あれだけ言っておいて、今更ビビってるのか？」

「あ、アツシユさん？ 目がマジだよ？」

「俺はいつだつて本気だ。特に、こういう時はな……」

「……優しく……してよ？」

「保証は……出来ないな」

「アツシユ……」

「ネプ公……」

「ちよつ、ちよつと！ ストップストップ！ 二人共道の真ん中で何してるのよ！」

道の壁に手を付いたアシュレイと、それらに挟まれているネプテユース。

所謂壁ドンの体勢で際どい会話していた二人にようやく声を掛けた人物がいた。

「あ、ノワール。やつと出てきたね。もうちよつと遅かったら野獣と化したアツシユに食べられるところだったよ」

「誰が野獣だ」

「……え？ やつと？」

「全部演技だ。わからなかったのか？」

「いやー、途中から笑いを堪えるのに必死だったよ」

「嘘お!？」

演技と気付かず、真つ赤な顔で飛び出してきたノワールの顔は騙されたショックで今度は青くなっていた。

「街に入った時からこつちに気が付いていることは知ってたしな」

「そのくせ目が合いそうになったら顔をそむけて他人の振りなんかしちやつてさー。だからぼっちなんだよ」

「だ、誰がぼっちよ! 誰が!」

腕を振り上げてノワールが叫ぶ。

半ばヤケである。

「冗談はここまでだ……久しぶりだな、ノワール」

「長いこと会えなかったけど元氣してた？」

「……一応元氣よ。成果は上がってないけどね」

「そうだよー。ノワールがすっかりしないから結局わたしたちがアヴニールの倉庫を壊すハメになったんだからね」

「……あれ、やっぱりあなたたちだったのね」

ネプテューヌが言っているのはルウィーでの一件でのことだ。

やはりアヴニールの動向を探っているノワールにも伝わっているようだ。

「それで、今回はラストেশヨンに何しに来たのよ」

「他の国でやることが終わったってだけだ。博覧会も近いし、ちょうど良いタイミングだと思っただけ」

「そう……」

「そういえばノワールはなんでここに来たの？」

「私？」

この辺りは完全な工場地帯で買物にはあまり適さない。

ただ散歩するほどノワールも暇じゃないだろう。

となれば、何か目的があつてここまで来たはずだ。

「あ、そうそう。シアンに素材の回収を頼まれてたのよ」

「……博覧会出展用の武器のか？」

「ええ」

「そういうことなら手伝うよ！元々はわたしに頼まれてたことだしね」

「別に手伝わなくても良いわ。私一人で十分よ」

「……だそうだ。行くぞネプ公」

「そうだねー」

アシユレイとネプテューヌが歩き出す。

「え？ちよ、ちよつと!？」

「なんだよ。別に一人で構わないんだろ？」

「た、確かにそう言ったけど……その……人数が多い方が楽かなーと……ね？」

「……………」

「……………」

「そ、それに……そうだ！どうせ二人共暇でしょ？私の素材集めを手伝っても構わないわよ？」

「……………」

「……………」

「えーと、じゃあ……その……」

二人がわたわたと手を動かすノワールをニヤニヤと眺める。

「……ノワール」

「な、何？」

「言いたい事を、正直に、十文字以内で言え」

「う……………」

「ほらほら、早く言わないとほんとに行っちゃおうよ?」

「お………」

「お?」

「お願い、手伝って」

「……句読点含めて十文字。合格だ」

「それじゃ、早速素材集めにレッツゴー!」

「うう……もう!」

こうして三人はラスティションを後にした。

………

「トリコロールオーダー!」

「これで……おしまい!」

ノワールが強烈な三連撃をモンスターに叩き込み、ネプテューヌがトドメの一撃を浴びせる。

「……クリア、だな」

「楽勝楽勝!」

「油断しない。先はまだまだ長いんだから」

敵を倒し終えた三人が武器をしまい、再び歩き出す。

「……ねえ、ノワール。目的のモンスターってどんなの？」

「クリスタルゴーレムっていう水晶の塊みたいな奴よ。フレームの強化にそいつの体に付着した鉱石が必要らしいの」

「場所は？」

「お約束通り、この洞窟の一番奥よ」

「まあ、こんな道中に居るモンスターの素材なら、普通に市場に出回ってるだろうしな」
三人で会話をしながら薄暗い洞窟を進む。

その途中、ノワールが人影を見つけた。

「……誰か居る？」

「ん、どいっ？」

「ほら、あの岩の陰よ」

ノワールが指差した先には黒いフードを被った長身の男。

その場にしゃがみ込み、何やらブツブツ言っている。

「……どうする？なんか怪しそうだけど……」

「いや、あれは……」

「え？ちよつとアツシユ！」

ノワールの声とアシュレイの足音にフードの男が顔を上げた。

「おや、アツシユくんじゃないですか」

「やっぱりグレイさんでしたか……」

「……知り合いなの？」

グレイが立ち上がり、被っていたフードを脱いで頭を出す。

「昔お世話になった先生だ」

「始めまして、グレイと申します」

「……ノワールよ」

二人が挨拶を交わす。

と言つても、グレイこそ穏やかな表情だが、ノワールの顔には明らかに怪しい人物を見る目をしていた。

「それで、グレイはここで何してたの？」

「ええ、これを見てください」

グレイが指し示した場所には奇妙な台座が存在していた。

「これは？」

「実はこの台座、鍵の欠片を設置するための物なのです」

「なんですと?!……つてあれ?その肝心の鍵の欠片がないよ?」

「ここにあるのはあくまで台座だけ。」

台座の模様や装飾からして鍵の欠片が安置されていても見劣りはしないと思うが、ネプテューヌの言う通り台座の上には何も無い。

「どうやら鍵の欠片は誰かに持って行かれた後みたいですね」

「誰かって誰?」

「……マジエコンヌ……ですか?」

「断定は出来ませんね。ここの鍵の欠片が持って行かれたのは一ヶ月ほど前のようですし」

「わかるの?」

「台座の砂埃の量から察するに、間違いないでしょう」

台座には鍵の欠片が埋め込まれていたであろう窪みがある。

その窪みには僅かにだが、砂埃が詰まっていた。

「そういえば、ルウィーの鍵の欠片は見つかりましたか?」

「はい。ルウィー教会のマジエコンヌの部屋にあったそうです」

「……だとすれば、ここの鍵の欠片を持って行ったのは別の第三者である可能性が高いですね」

「マジエコンヌ以外の誰か？」

「彼女……マジエコンヌは、普段コンベルサシオンの名で各地を転々としていましたが、本拠地はルウィー教会だったはずですよ」

「自分の部屋まで用意してるぐらいだもんね」

「そしてそこには鍵の欠片は一つしかなかった。ここの鍵の欠片を入手したのが彼女だとすると……」

「……なるほど」

グレイの話を聞いてアシユレイが頷いた。

「ねぶ？アツシユ、何がなるほどなの？」

「思い出してみろ。ここの台座から鍵の欠片が持ち去られたのは最近の事じゃない」

「うんうん」

「もしここの鍵の欠片を持ち去ったのがマジエコンヌだとすると、ルウィー教会の奴の自室に鍵の欠片は二つあるはずなんだ」

「あ、そっか！」

鍵の欠片が二つなかったという事はラストেশヨンの鍵の欠片を持っているのはマジエコンヌではないという事になる。

「……なんか話が勝手に進んでるけど……一体なんの話？」

話についていけず、後ろでただぼーっと聞いていたノワールが口を開いた。

「あー……ノワールには後で詳しく話す。全員揃ってからの方が都合が良いだろうしな」

「……では、私はもう少し鍵の欠片の情報を集めてみます。持っているのが気のいい人なら譲ってくれるかもしれませんね」

「なんかいろいろ助けてもらってばかりだね。いつもありがと！」

「いえいえ、私はやりたいことをやっているだけです。それでは、また会いましょう」
グレイは三人に頭を下げた後、フードを被りなおしながら洞窟の出口へ歩いていった。

「さて、俺たちもやる事やって帰るぞ」

「……わかったわよ」

「みんなを待たせるのも悪いしね！ちやちやとやちやうよ！」

三人は再び奥へと向かって歩き出した。

……………

ネプテューヌ達がラストステーションの街に戻ってきた時、すでに待ち合わせ場所には全

員が集まっていた。

「みんなお待ちせ！ノワールもいるよ！」

「やっと戻ってきたわね。あんたはともかくアツシユまでいないから何事かと思ったじゃない」

「少し素材集めに行つてな」

「少し見ない間に随分大所帯になつたのね」

「ここに居るのはノワールを含めて7人。」

初めは三人で始めた旅だったが、いつの間にか人数は倍以上になっていた。

「あ、もしかして今までぼっちだったから羨ましいんでしょー」

「だからそのネタいい加減にして！」

「ふうん。あなたがノワールですのね」

「じー……」

ベールとブランの二人が興味ありげにノワールをまじまじと見つめる。

「うう……何よ、この眼鏡の二人は」

「いやいや、ノワールも眼鏡だから」

「探し人も見つかったし、どこか別の場所に移動しましょー」

「そうですわね。さすがに道の真ん中であの話をするわけにはいきませんし……」

「何？もしかして、私に用があつてラステイションに来てくれたの？」

「半分はそうだな」

「ノワール、心なしか嬉しそうだね」

「べ、別に嬉しくなんかないわよ。ただ気になつただけよ」

「ノワールさんも相変わらずですねぇ」

7人は近くのホテルへ向かい、大部屋にチェックインする。

今回、シアンの工場の空き部屋は使えない。

シアンはもちろん、ここにいる7人以外に聞かれてはならない話をするからだ。

「ここならどんな話でもできるはずよ」

「ラステイションのホテル……悪くはないわ」

「わたくしとしては、ベッドはダブルで、もう少しフカフカの方がいいですわ。VIP

ルームはありませんの？」

「さ、さすがにそんな贅沢はできないですう……」

が、そんな話はどこ吹く風で各々リラックスし始めてしまった。

「……………」

「どつたの、ノワール？そんな借りてきた人んちの猫みたいに大人しくしちゃつて」

「だって、知らない人だし……何を話せばいいかわからないじゃない……」

「……ノワールが思っていた以上にぼっちをこじらせていた件」

「だからぼっちじゃないって言ってるでしょ！」

ノワールが叫ぶ。

「……ただ、知らない人とどう接していいかわからないだけよ……」

そしてしよぼくれる。

「……うわぁ」

「なんとというか……いや、言うまい」

流石のネプテューヌとアシユレイもこれには引かざるを得ない。

「ノワール。わたくしたちにそのような気遣いは無用ですわ」

「そうだよ。別にわたしたち知らない仲じゃないんだしさー」

「あなたとは知らない仲じゃないかもしれないけど、そっちの眼鏡の二人は……」

ここで改めてノワールがベールとブランの二人を見た。

「……つてあれ？よく見ればどこかで見ることがあるような……」

「見たことがあつて当然よ」

ブランが眼鏡を外す。

「あ、あなたはルウイーの!？」

「やっとなつていたのね」

「それでは、わたくしも……」

続けてベール。

「嘘お!? リーンボックスの女神!?!」

「ようやく気付いてくれましたのね」

「ねねねネプテューヌ!?! どういうことなの!?! なんでこの二人がラステイションにいるのよ!?!」

パニツクに陥ったノワールがネプテューヌの肩を掴み、ガクガクと揺らす。

「あー、それはねー」

「はっ……もしかして、協力してラステイションを潰そうって魂胆じゃ……」

ノワールは弁解しようとするネプテューヌをスルーして勘違いを続ける。

「しかも、その手引きをしたのがネプテューヌだったなんて……一瞬でも友達だって信じた私が馬鹿だったわ!?!」

そのまま割と洒落にならないレベルまで深読みを始めてしまった。

「いいわ、例え三対一だとしても受けてあげる。けど、これでも私も女神よ。ただで負けてあげるつもりはないわ!?! そして、私の心を踏みにじったことを後悔させてあげるわ!?!」

「はいはい(ぐ)めんよっ」と

「……え？なに？」

アシユレイがノワールの背後に回り、脇の下から腕を回す。

つまりは羽交い締めである。

「スタンバイOK」

「了解！とおっ！」

「いたあっ！」

ネプテューヌが華麗なフライングチョップをノワールにお見舞いした。

アシユレイがノワールを解放すると、よほど痛むのかノワールは頭を抑えてその場に座り込んだ。

「何するのよネプテューヌ！」

「もう、落ち着いてよ、ノワール」

「そうですわ。別にわたくしたちはあなたと戦おうと思っただけではありませんわ」

「……話し合いにきただけ。だから落ち着いて」

「……話し……合い？」

「そ。わたしたち、ノワールとお話しをしに来たんだ。って、その目は信じてないな」
「当たり前でしょ。いきなり人の大陸に女神が3人でやってきて素直に話を聞く方がど

うかしてるわ」

少し前まで守護女神戦争をしていたのだ。

ノワールの言い分もわからなくはない。

「ノワール、お前の身の安全にも関わる。話だけでも聞いてやれないか？」

「私の……安全？」

「ああ、お前の為を思っ言ってるんだ」

「……心配……してくれてるの？」

「当たり前だ」

「……わかったわ。そこまで言うなら聞いてあげるわ」

「……ちよろいね」

「ちよろ甘だ」

少し赤い顔で話を聞くことを了承したノワールに隠れてネプテユヌとアシユレイが呟いた。

……

「マジエコヌ、か……話を聞く限り、アヴニールと繋がってそうな気がするわ」

あれから様々な話をした。

リーンボックスのこと、ルウィーのこと、そしてマジエコンヌと鍵の欠片のこと。

逐一脱線する話を軌道修正していると、いつの間にか夜が近付いてきていた。

「その口ぶりは、わたしたちの話を信じてくれるんだね」

「正直、嘘だと思いたい内容だけど、最近のアヴニールの動向とも一致するし、信じない理由がないわ」

どうやらノワールはネプテューヌ達の話聞いて、考えを改めたらしい。

「確かにあなたたちの言う通り、当分は纏まっていた方が良さそうね」

「となれば、暫くは鍵の欠片の搜索だな」

「グレイさんの話が本当なら、鍵の欠片を持っているのはマジエコンヌではない別の誰か……でしたわよね？」

「ダンジョンでその台座が見つかったことは、鍵の欠片を持っていったのがただの一般人じゃないのは確実ね」

「商人に売られたか、その誰かがまだ持ったままか……」

「いずれにせよ、骨が折れるのは確実ね」

その誰かはすでに他の国へ行っている可能性もある。

下手をすればどこか別のダンジョンで死んでいる可能性まである。

なるべく国内で見つけたいところだ。

「後は博覧会ですね」

「……結局、アヴニールの出し物は分ならずじまいだったな」

「あれ？あのキラーマシンとか言うのじゃないの？」

「あれはすでに量産体制に入っていた。出すならまだ未発表のものだろう」

「関係ないわ。博覧会より前にアヴニールを潰せばいいのよ」

と、物騒なことを言い始めたのはブラン。

「マジエコンヌが動けない今こそ、アヴニールを潰すべきよ」

「ブランがアヴニールをよく思っていないことはよくわかりましたわ。けど、だからこ

そ落ち着くべきですわ」

「アヴニールを敵に回すってことはラスティションを敵に回すってことだから、全面戦

争になりかねないわ」

そこでネプテューヌがふとあることに気がついた。

「つかぬ事をお聞きしますがノワールさん。もしかして、まだ教会にハブられてる？」

「……ぷっ」

「ネプテューヌ！変な言い方しないで！そしてそこは笑うな！」

「だって女神なのにハブられるって……ぷっ」

「だーかーらー！ハブられてるんじゃないわ！アヴニールが独裁を強めてきたってことなの！」

ネプテューヌとブランにいじられ、ノワールが半ばヤケになりながら叫んだ。

「女神さん同士だとお話しが進まないのはわたしの気のせいですか？」

「気のせいじゃないわ……」

「というか、ブランに限っては笑える立場じゃなかっただろ……」

「それで、ノワール？アヴニールが独裁を強めてきたって話だけど……」

「ええ。あなたたちが去ってから、私なりに正体を隠しながら国民の為にいろいろ尽くしてきたわ」

「いないと思われていたブラックハートが再び国民の前に現れたとなれば、シエアは確実にながっただろう。」

「そのかいもあって、教会も女神派の勢いを取り戻しつつあったわ」

「あった……ね」

「……それに危機を抱いたアヴニールは女神派を完全に教会から追い出して、更に支配力を高めたの」

「それで、ルウィーにあんな兵器を……」

「そんな状況だから私も教会には戻りづらくて、今はシアンのところに居候中なわけ」

「ノワールさん、かわいいそうですね」

「そんな訳だから、迂闊にアヴニールには手を出さないほうがいいわ。今は耐えるしかないの」

以前より遙かに高まったシエア。

しかしアヴニールの支配力はそれを上から押さえつけているようだ。

むしろ状況は以前より悪化しているのかもしれない。

「……とりあえず、アヴニールをどうするか考えるのはまた今度だ。時間はまだある。今日はもう休むぞ」

「そうだね。わたしも喋りっぱなしで疲れちゃったよ」

「わたしも疲れたです」

「シアンのところに行くのはまた明日ね」

「では、誰が何処に寝るかを決めましょうか。あいちゃん、今回も一緒に寝ましようか？」

「あ、はい……わかりました」

「……あ、シアンに今日は戻れないって連絡しないと……」

こうしてラストেশションの夜は更けていった。

.....

「ねえ、誰か起きてる？」

「起きてませんわよ」

「……起きてるじゃない」

「べール様……寝てる人が起きてないなんて言いませんよ……」

「静かにして」

「ブランの言う通りだ。喧しい」

全員がベッドに入って約一時間ほど。

ノワールの声になんとなく眠れなかった四人が目を開けた。

ネプテューヌとコンパは未だぐっすり眠っている。

起きる気配すらない。

「……なんだか不思議な気分ね」

「……と言いますと？」

「私たちって、少し前までは天界で戦ってたでしょ？」

「……そうね」

「その私たちが今こうやって、同じ部屋で寝てるなんて……まだ少し信じられなくて

……」

かつての敵が今は味方。

何十年、何百年と戦いを繰り返したというのに。

この僅か数か月で、その溝は埋められようとしていた。

「……正常な人間なら、戦いなんて望まない。意味がないなら尚更だ」

「意味……わたしたちには、世界の覇権がかかっているって伝わってますけど……」

「覇権、ね。んなもん手に入れて何がしたいんだ？」

「……そういうあなたは自分の信仰してる女神に勝ってほしくないの？」

ブランの言葉にアシュレイの顔が沈む。

「……アツシユさん、どうかしましたか？」

「そういえば三人は知りませんでしたね。アツシユは女神を信仰してないらしいんで

す」

「信仰してないって……四女神の誰も？」

「信仰なんざ、一文の得にもならない……そんだけだ」

「……アツシユ、もしかしてあんた……妹さんのことが原因じゃないの？」

アシュレイが露骨な舌打ちをした。

「アツシユ、妹がいたの？」

「あ……えーと……」

「あいちゃん？」

「……1年前に死んだ……よくある話だ」

その言葉に全員が静かになる。

ネプテューヌたちの寝息だけがやけに耳についた。

「あいつが死んだ時……喉が潰れるまで泣いたさ……けど……どんなに泣いても、あいつは帰ってこない。当然だけどな」

「アツシユ……」

「どれだけ神に祈ろうが、どれだけ泣き叫ぼうが、時間は元に戻っちゃくれない」

「アツシユさん……」

「この世界に『神』はいない……本来の意味での話だな」

布団を顔まで被り、全員から顔を背けるように横になる。

「神なんかにすがらなくても、俺は真っ直ぐ立てる。一人で歩ける。その為に俺は強くなつたんだ」

それきりアシュレイは喋らなくなつた。

ここまで重い夜は、今夜が初めてだった。

第17話 波乱の博覧会

「シアン、いるかしら？」

「おう、ちよつと待ってろ」

朝、ネプテューヌ達はシアンの工場にやってきていた。

ノワールの声にシアンが奥から顔を出す。

「やっほー、シアン！」

「お久しぶりです。シアンさん」

「元気してた？」

「おっと、お前たちも一緒か！少し見ない間に二人も人数が増えてるじゃないか」

「始めまして。わたくしはベールですわ」

「……ブランよ。よろしく」

「こんな可愛い子を6人もはべらせて、いい身分だな？」

「からかうな。苦勞の方が多い」

アシユレイがひらひらと手を振りながら返事を返す。

「それはそれとして、見てくれよこの工場を！見事に元通りだろ？」

「元通りと言うより、前より立派になった気がするです」

「……機械こそジャンク品の再利用だが、型番自体は新しい型だな……どういふことだ？」

工場の機材を眺めながらアシユレイが呟いた。

「アヴニールが利用してるジャンク置き場から拝借したんだ。あいつらどんどん機材を新しいのに置き換えるからな」

アヴニールは常に最新の機材を使って新製品の開発を行っている。

それを逆手にとった訳である。

ジャンク品の利用に関してはアヴニールよりシアン達の方が一枚上手のようだ。

「ああ、ノワール。素材の方はどうなった？」

「もちろん手に入れたわ」

ノワールが洞窟にいたクリスタルゴーレムから採取した鉱石をシアンに渡す。

「おおっ！これこれ！これを待っていたんだよ！これで限界出力に耐えられるフレームが出来る！」

「……楽しそうだな、お前」

「当たり前だろ？じゃあ、さっそく武器の改修に取り掛かせてもらおう。今は時間が惜

しいからな」

「そういえば、博覧会っていつなんですか？」

「……そういえば言っただけじゃなかったな」

「3日後よ」

「そうですか、3日後ですか」

そこまでコンパが言い切り、頭を傾げた。

「つて3日後です!?!大変です、時間がないです!」

そしてもう博覧会まで日がないということにやつと気付き、慌て始める。

「そういうことだから、わたしは工房にこもらせてもらう。それじゃあな!」

挨拶もそこそこにシアンは工場の奥へ早足で戻っていった。

「行っちゃったです……」

「ねえ、これからどうする?」

「……私の勤が正しければ、きっとアヴニールは博覧会で何かするはずよ」

「何かって……なに?」

「わかっているならもうとつくに対策を立ててる」

「少なくとも、アヴニールの新兵器はマジエコンヌにとって必要な物のはずよ」

ブランの言葉にはその場にいるほとんどが頷いた。

そうでないのならプランに化けていたマジエコノヌがアヴニールと関係を作る必要がない。

ただの排除すべき障害であつた筈だ。

「なんにせよ、全ては3日後の博覧会でわかる。それまで各々準備を欠かさなよ?」

.....

「そんなわけで、3日後ー!」

「騒ぐな。つーか誰に話してるんだよ」

博覧会当日、ネプテューヌ達は会場に足を踏み入れていた。

この3日でやることはやった。

微調整に次ぐ微調整でシアン作の武器……アルマツスは最高の出来に仕上がっている。

後は何事もなく博覧会が終わつてくれるのを待つのみだ。

「これが、ラストイション最大の科学博覧会……」

「どう?すごい規模のイベントでしょ!これだけでも凄いでしょうけれども、まだまだラストイションには凄い技術が沢山あるのよ!」

興味深そうに辺りを見渡すブランに自慢げにノワールが話しかける。

ブランが突然頭を止めた。

「物販ブース発見。ちよつと覗いてくるわ」

「目当ては物販かい！」

どうやら武器兵器まみれの展示物より売り物の方がご所望だったようだ。

「ねえ、ノワール。ゲームを出展する企業はありませんの？」

「今回のテーマは武器や兵器だから、ゲームを出展するところなんてないわよ」

「そんな……それだけを楽しみにしていましたのに……」

ゲームの出展なしという情報にベールのテンションが一気に下がる。

「あのねえ……わたしたちは遊びに来てるわけじゃないのよ」

「わかっていますわ。けど、せっかくのイベントですもの。少しくらい楽しんでもいい

ではありませんの」

「そーだそーだ！ベールにさんせー！」

脇からネプテューヌが騒ぐ。

「ネプテューヌも乗っからないの！もう、どうしてあなたたちはこうも緊張感がないの

よ！アツシユも何か言っ……」

ノワールが振り向く。

が、そこにアシュレイの姿は無い。

「あれ？アツシユは？」

「お手洗いに行くって言ってたです」

「なんでこのタイミング!?!」

「少しくらい待つてあげましよ。お腹を下したってわけでもないんだし、すぐに戻ってくるわよ」

.....

「くそ.....この体だとマジで我慢が効かないな.....」

男の体ではある程度堪えられる尿意も、女の体ではそうはいかない。

おかげでアシュレイは人ごみの中を早歩きでトイレへ向かうハメになっていた。

幸い案内板が壁に貼り付けられているので肝心のトイレが見つからないということ
はなさそうだ。

「あー.....やっとなついた.....」

最後の肉の壁を潜り抜け、ようやく目的地まで辿りついた。

そして躊躇なく「男子」トイレへ。

「ちよ、ちよちよちよちよちよと待った！」

そのアシユレイの腕が誰かに掴まれた。

「……ああ？なんだよ？」

アシユレイが振り向くと、そこには白いコートを着た少年が立っていた。

「なんだよ？じゃないよ！ここ男子トイレだよ!？」

「んなこと知ってるよ、何がおかしい」

「全部だよ全部！君女の子でしょ！」

「はあ？……あー……」

そこでようやくアシユレイは自分が女ということに気がついた。

普段はほぼ男女共用のトイレを使うのでたまに男女別のトイレを利用するところううことになるのだ。

「……確かにそうだな」

「……なんか引つかかるけど、わかってくれて良かったよ」

少年が手を離す。

「まあ、別に誰もいないしここでも構わないだろ」

アシユレイが再び一歩踏み出す。

「わかってなかったー!?!待てい！プリーズウェイト！」

何故か英語混じりになりながら少年がアシユレイにしがみついた。

「お前もしつこいな……………」

「こつちのセリフだって！」

「それと」

「え？」

どうやら少年は気がついていないらしい。

「しがみついて人を止めるのはいいが、手の位置には気を付けろ」

「……………あ？……………うおおおおおおお！」

少年が後ろからしがみついた結果、幸か不幸かその手はちょうどアシユレイの胸を鷲掴みする位置になってしまっていた。

とはいえ、気がついた後もしっかり三秒ほど感触を楽しんだあたり故意なのかもしれない。

ちなみにもちろんアシユレイはブラなどつけておらず、コートを除けば上はタンクトップ一枚だ。

「あー、えーと、ご……………ご馳走様！違う！ごめんなさい！」

振り向いて睨むアシユレイに顔を真っ赤にしながら少年が頭を下げる。

「……………ふん」

一つ鼻を鳴らし、アシュレイは隣の女子トイレに向かう。

それに気付いた少年がアシュレイの背中を追いかける。

「ちよ、ホントにごめん！わざとじゃな……いいい!」

「……ん？おおう!」

焦ったのか、少年が躓き、声に振り向いたアシュレイにぶつかつた。

耐える間も無く二人してその場に倒れこむ。

図らずも少年がアシュレイを押し倒す形になつた。

「……お前、絶対わざとだろ……」

「違う！断じて！神に誓つても良い!」

「神サマなんぞに誓う前に離れろつて……っの!」

「アウチ!」

アシュレイに蹴り飛ばされ、その反動で少年は後転の要領で床に後頭部をぶつけた。

アシュレイもその場で跳ね起き、コートに付いた汚れを払う。

「ふ、不幸だ……」

「つたく……もうついてくんなよ?」

それだけ言つて、アシュレイは渋々女子トイレへ。

「……俺もトイレ行くぞ」

むくりと起き上がった少年も後頭部を抑えながら男子トイレへと入って行った。
「……あー、マジでこの体でトイレ行くの面倒だ」

それからしばらく、男のとは明らかに工程の多いそれに文句を言いながらアシュレイがトイレから出てきた。

「さて、もうすぐセレモニードな。さっさと合流するか」

「あれ、もうそんな時間だったっけ？」

「……………」

「それにしてもセレモニードかー。話を聞くだけっていうのはあんまり好きじゃないんだよなー」

「おい」

「え？何？」

「なんでお前がついて来てるんだよ……………」

颯めつ面のアシュレイの後ろからは先ほどの白コートの少年がついて来ている。

「いやー、実は知り合いを探してるんだよ」

「知るか。自分で探せ」

「癖つけがあつてあちこち跳ねてる紫の髪の小さい女の子知らないか？友達なんだよ。

いや、そうじゃないっていえばそうじゃないんだけどね？」

アシユレイはその少年が言う人物を知っていた。

というか、ついさつきまで一緒にいた。

「……そいつなら知ってるが、名前を名乗らないような奴には教えられないな」

「おっと、そういえば言っただけだったな」

少年がアシユレイの隣に並ぶ。

「俺はヒロム。別の次元のゲームギョウ界から来たんだ」

「……………」

「あ、別の次元っていうのは別に信じなくてもいいぞ？説明が長くなるし」

「……アシユレイだ」

「ん？」

「アシユレイ……俺の名前だ。ただし、呼ぶ時はアツシユだ」

「……オーケー、えーとアツシユ？」

「それでいい。ついてこい、探し人のところまで案内してやるよ」

……………

「あ、やっと帰ってきたわね」

「悪い、待たせたな」

「早くしないとセレモニーが始まっちゃおうよ！」

待ち合わせ場所に戻ってきたアシュレイにいち早く気付いたノワールとネプテューヌがアシュレイを手招きする。

「アツシユさん？その後ろの人は誰ですか？」

「ああ、こいつは……」

「えーと、初めまして……でいいよな？俺は別次元から来た……」

「ただの痴漢だ」

「ワッツ!？」

「ち、痴漢!？アツシユ、何かされたの!？」

「い、いや俺は……」

「トイレで胸を触られた」

「トイレでなんて……ハレンチですわ！」

「オマケに押し倒された」

「えーと、押し倒されたってその押し倒されたってことだよね……？」

「もう嫁に行けない」

「……テメエ……わたしの友人に手エ出しといて覚悟はできてんだろうな……!」

「……あれー？なんか俺大ピンチ？」

「はいはいストップ。冗談が過ぎるわよ」

敵意を剥き出しにするネプテューヌ一行と狼狽えるヒロムの中にアイエフが割って入った。

「た、助かったぜ……えーと、アイエフ……だよな？」

「あなた、さつき別次元からって言ってたわよね？ということはMAGES.の知り合
い？」

「ああ。俺はヒロム。改めてよろしくな」

「ヒロムさんですね。わたしはコンパです」

「おお！そっちはやつぱりコンパか！俺が知ってる二人より随分大きいな！」

こちらのネプテューヌ達は知らないことだが、ヒロムやMAGES.の存在する通称
神次元でのアイエフとコンパは5歳程度の子供なのだ。

まだ10代とはいえ、子供の姿を見慣れているヒロムにとってはアイエフとコンパの
姿は大きく見えるのだろう。

「わたし、ネプテューヌ！こっちのぼっちぽいのがノワールド、あとの二人がベールと
ブラン！よろしくね！ヒロくん！」

「だから誰がぼっちよー！」

「こつちでもネプ子たち四人は変わらないな」

騒ぐ八人へシアンが合流する。

「お前ら！そろそろセレモニーが始まるぞ！」

そうシアンが言った直後、中央の台にマイクを手にしたガナツシュが立った。

「会場におこしの皆様。本日は我がアヴニールが主催する総合科学博覧会にお越しいただき、ありがとうございます」

「あいつ、なに勝手にアヴニール主催に変えてんのよ……協会、っていうか私が主催なのに」

ノワールが愚痴る。

その間もガナツシュの話は続いていたが、アヴニール主催では記念すべき第一回だのこれも皆様のご支持のお陰だの割とどうでもいいことだった。

「で、あるからして、この度は特別にオープニングセレモニーをご用意しています」

「オープニングセレモニー？」

「音楽の演奏とかか？」

パンフレットにもこんなものは書かれていなかった。

会場がざわつく。

「オープニングセレモニーは総合科学博覧会の趣旨にのっとり、出展物によるエキシビ

ジョンマツチです！もちろん、エントリーするのは我が社が誇る新兵器！」

「茶番ね。エキシビジョンマツチって言いながら、結局は自分とこのを宣伝したいだけじゃない」

アイエフが呟いた。

ガナツシユの口元が歪む。

「そして！それに対する相手は……下町からのエントリー！パッセ工房！」

ネプテューヌ達全員の心臓が跳ねた。

「ちよつとちよつとシアン！どういうことなの!?わたし聞いてないよ!」

「わたしだつて聞いてないさ！いきなり過ぎてわけわかんないよ!」

「どうやらシアンも知らないらしい。

となれば……。

「ガナツシユの野郎……ハメやがったな……!」

「エキシビジョンマツチは10分後に開始します。両者は準備をお願いします」

「準備つたつて……何をしろつていうんだよ……」

「シアン……」

「……焦るのは分かるが、とりあえず落ち着け」

「こうなつたら道は二つに一つ。」

逃げるか、その逆かだ。

「どうする？ 逃げる？」

「無理よ。こんな大勢の中逃げるなんて会場の人が許してくれないだろうし、そんなことしたらシアンたちみんなの頑張りが無駄になっちゃうわ」

となれば、残された道は一つだけ。

壇上から一旦降りたガナツシユが狼狽えるネプテユーヌ達を見ていた。

「……やはり、驚いているようです」

「だろうな。だが、これだけの舞台を揃えてやったんだ。奴等も逃げられはせんよ」

ガナツシユと一緒にネプテユーヌ達を睨んでいるのはマジエコンヌだ。

「それよりも、アヴニール側の兵器は大丈夫なんだろうな？」

「ご安心を。彼女らとの戦闘データを元に改良を重ねた新型です」

「だが、くれぐれも手は抜くな」

「もちろんです。幸いコレの調子も良いようですしね」

そんな話をしていたガナツシユ達にアイエフが気が付いた。

「アツシユ、あれ。ガナツシユの隣にいる奴……！」

「マジエコンヌ……自分が見えないからって高みの見物か……！」

「すべてマジエコンヌが仕込んだことだったのね」

「これで、マジエコンヌとアヴニールの繋がりはつきりしましたわね」

「クソ！やるしかないのか……!?」

「……話がよく見えないけど、何がヤバいんだ？」

ヒロムが呟く。

「お前……他人事だと思つて……」

「つまり、そのエキシビジョンマッチでアヴニールとかいうのの新兵器をぶつ飛ばせばいいんじゃないのか？」

「……あ」

「たしかに、それはそうですけれども……」

「……ねえ、ノワール。トロフィーをもらう為には、誰から見ても一番凄いつて証明すればいいんだよね？」

ノワールが頷いた。

「女神の名の元、博覧会の審査は公平に行われるわ」

「だったら、シアンが作った武器が一番だつて今ここで証明しちやえばいいんじゃない？」

「……まったく、簡単に言ってくれるわね」

「けど、そこがねぶねぶのいいところす」

「ピンチはチャンス。この大舞台で勝って見せれば、凄いアピールになるはずだぜ？」
「……馬鹿共が」

アシュレイが振り向く。

「シアン、武器の調子はどうだ？」

「……残念ながら、絶好調だ」

「……決まりだ」

決断は済ませた。

あとはそれに賭けるのみ。

「となれば、問題は誰が武器を使うかですわね」

「この中だと、ネプテューヌかノワールじゃない？」

「ネプテューヌ、あなたが使いなさい」

「いいの？」

「元々その武器をテストしてたのはあなたでしょ？だから、譲るわ」

ノワールは全てをネプテューヌに託したようだ。

「それに、私は審査する立場だしね。いい？しっかりとこアピールするのよ？」

「おっけー！そういうことなら任せてよ！」

「俺も出る」

「アツシユも?けど、武器はひとつしかないわよ?」

「この剣も、元々はパッセで作られた武器だ。見世物にはしたくなかったがな」

「言い出しつぺの俺は応援しか出来ないけど……頑張ってくれ!」

となれば、アヴニールと戦うのはネプテューヌとアシユレイの二人だけとなる。

再びガナツシユがマイクを持った。

「それでは、これよりエキシビジョンマッチを開始します!」

すると舞台の床が開き、そこから多数の装甲板と大小様々な砲塔を携えた珍妙な戦車がせり上がってきた。

どうやらこれがアヴニールの新型らしい。

「それじゃ……頼むぞ、お前ら」

「任せろ」

シアンの声の背に受けながら二人も舞台へ上がった。

「よーっし、最初から変身して全力全開でいくよー!」

「あ、バカネプ子!こんなところで変身したらみんなに正体が……」

アイエフが慌てて止めようとする。

が、一向にネプテューヌが変身する気配はない。

「……あれ?あれあれ?あいちゃん、変身できないんだけど、どゆこと!」

「そんなことあるはずないわ」

同様に三人も女神化しようとするが、ネプテューヌと同じく不発に終わった。

「どうということなの……!?!」

「アーツハツハツハツハ！どうやら戸惑っているようだな」

舞台の向こう側からマジエコンの笑い声が響く。

「……まさか、あなたのせいぞろい？」

「ご名答。お前達からコピーした力とシエアエナジーを解析し、女神化を封じる装置を完成させたのだ！」

「いつの間にそんなものを……」

「フフフ……私の優秀な僕が働いてくれたお陰さ。そして、どうやら効果があるのは貴様らだけではないようぞろい？」

「まさか……アツシュ!?!」

マジエコンの言う通り、アシュレイは立ってはいるものの、グラグラと不安定に揺れていた。

「アツシュ!大丈夫なの!?!」

「なんでアツシュまで!?!もしかしてアツシュって女神だったりするのかわ!?!」

「……体が重い……変身も、無理だ」

「そんな……」

直後、舞台の周りに青白いバリアが整形された。

「この新兵器にはゴム弾を装填していますが、皆様の安全を考慮し、バリアフィールドを展開させて頂きます」

ノワールがバリアを叩くが、小さく波紋が走るのみでビクともしない。

「それではエキシビジョンマッチ……開始！」

そして無情にも開戦の合図がかかってしまった。

第18話 因縁の決着

開始直後、敵の正面に取り付けられた主砲が火を噴いた。

「あつぶなあ!？」

「ぐっ……!？」

ネプテューヌが横っ飛びに、アシユレイは転がって回避する。
すると今度は副砲が稼働。

狙いはアシユレイだ。

「ちい……ネプ公！俺は援護に回る！あいつを頼む!？」

剣の腹を盾に銃撃を防ぎながらアシユレイが指示を飛ばす。

普段のアシユレイなら走って避けるのだが、今はそれが出来ない。

体や武器の重みが急に増したような感覚に陥り、体が思ったように動かないのだ。

「とは言われてもこの武器どうやって使うかわかんないんだけど!？」

「はあ!？元々はお前がテストしてた武器だろうが!？」

「そうなんだけど！なんか変なのが追加されてるんだよ！これなんなの!？」

ネプテューヌの持っている武器は鉄の刀身にビームを纏わせた片刃の剣の形をして
いた。

他の武器と違うところは峰に多数の穴が空いていることと、柄と刃の間に銃の引き金
のような物が存在することだ。

「ネプテューヌ！それはブースターよ！」

バリアの外に居るノワールが叫ぶ。

「剣を振る時に引き金を引くのよ！」

「振る時ってなんか難易度高くない!?!」

アシユレイを攻撃していた敵が一旦攻撃を止め、主砲をネプテューヌに向けた。

「うわわわわわ!?!」

焦ったネプテューヌが引き金に指を掛けたまま柄を握りこむ。

すると峰の穴から推進剤が噴射され、無理矢理剣が振られた。

同時に主砲が発射される。

それらはジャスタロタイミングで噛み合い、ネプテューヌの剣が放たれたゴム弾を両断
した。

「うわっ………とと………!」

勢い余ってその場で二回転ほどしたネプテューヌが体制を整える。

「よくわかんないけど……なんとかかなりそう！」

ネプテューヌが武器を構え、一気に敵に接近していく。すると敵に変化が起こった。

敵は一気にバツクし、ガシャガシャと装甲板の位置を移動させていく。

そして、戦車が「立ち上がった」。

「……マジかよ」

瞬く間に敵は二本足のロボットへと変型したのだ。

直後、敵は脚部に取り付けられたローラーで移動しながら副砲を連射し始めた。

「面倒臭い……！」

アシュレイが弾丸の雨を魔力障壁で弾きつつ、敵へ接近していく。

「おらあー！」

関節部を狙ってアシュレイが剣を振り下ろす。

が、装甲板の一枚が稼働し、アシュレイの攻撃を弾いた。

体制を崩されたアシュレイに容赦ない蹴りが炸裂。

地面を転がりながらもなんとか立ち上がる。

「げほ……クソ……！」

「いんのー！」

ネプテューヌがブースターを吹かしながら剣を振るつた。

装甲に一文字の痕を付けるが、切断には至らない。

「あんまり効いてないよ!?!」

「だったらハンドルを捻るんだ!」

「ハンドル?」

「柄よ!」

シアンとノワールの声にネプテューヌが自分の剣を見てみると、確かに柄にはハンドルのような物を取り付けられている。

ネプテューヌが抜き打ちのように剣を腰に当て、ハンドルを捻ると鍔の部分にランプが一つ灯った。

「っ!ネプ公!」

アシユレイが叫ぶと同時に敵の後部のハッチが開き、四発のミサイルが発射される。

「行けるか……!?!」

ホルダーからナイフを投擲。

二本はミサイルに衝突し、誤爆させた。

無事だった残りの二発がネプテューヌに迫る。

「どおりやああああ!」

ネプテューヌが迫るミサイルにブースターを起動し剣を振るう。直後、剣が伸びた。

纏わせたビームが一気に出力を増したのだ。

その一撃でランプは消えたが、見事にミサイルの迎撃に成功。

「……わーお」

そのネプテューヌの目の前には全ての砲塔を自分に向けた巨大なロボットが立っていた。

それらが火を噴く。

「……………あれ？」

しかしその衝撃はネプテューヌには届かなかった。

それもそのはずだ。

「……………はあ……………はあ……………」

「アツシユ……………」

ネプテューヌの前にはアシュレイが立ち塞がっていた。

剣を盾にしていたが、そこから外れた弾丸は体で受け止めたらしい。

服の下は青痣だらけだろう。

「……………頼むぞ」

それだけ言って、アシユレイはその場に崩れ落ちた。
目を閉じたネプテューヌが再びハンドルを捻る。

「……うん」

もう一度捻る。

「任された！」

ネプテューヌが目を開く。

強くハンドルを捻ると、呼応したように剣が鳴る。

ランプは三つ灯っていた。

副砲から弾丸が発射される。

「おりやりやりやりやー！」

ネプテューヌが走りながら弾丸を切り落としながら走る。

ブースターはまだ使わない。

接近するネプテューヌに装甲板の一枚が突き出される。

「そこだー！」

ブースターを起動し、剣を振る。

その一撃は装甲板を容易く切り裂いた。

危険と判断したのか、敵が大きく下がる。

「逃がさないよー！」

抜き打ちの構えを取り、軽くジャンプすると同時に引き金を引く。

ブースターの推進力がネプテューヌの体を大きく押し出し、敵の目の前まで連れてきた。

勢いのまま正面の一番大きな装甲板を両断する。

敵の本体部分が剥き出しになった。

スピードを殺さず、一回転。

「とどめええええええ！」

ラスト一発。

渾身の縦一閃が敵を捉えた。

巨体がゆつくりと左右に倒れ、間もなく爆発。

直後、割れんばかりの歓声が上がった。

ネプテューヌ達は見事エキシビジョンマッチを制したのだ。

「よっしゃー！勝ったどー！」

「やれやれ……なんとかなるもんだ」

観衆にVサインを送るネプテューヌの後ろで剣にすがりつつアシュレイが起き上がった。

「……なん……だと……?!」

「まさか女神化を封じられた状態であれほどの兵器を退けるとは……なかなかやりますね……」

呆れたような顔でネプテユヌを眺めるマジエコヌの隣でガナツシユが顎に手を当て、頷く。

「えーい！ 関心しとる場合か！」

「耳元で怒鳴らないでください……！ こつちだつて自慢の新兵器を壊されて悔しいんです」

「なら、アレを使え」

言い合いをしている二人の元に中年の男が現れた。

アヴニール社長のサンジユだ。

「……社長、アレというのは……アレのことですか？」

「我が社の兵器が人間に劣るなどあつてはならん」

「しかし、アレはまだ調整中では……」

「構わん」

「ぐぬぬ……アレがなんだか知らんが、それで今度こそ女神共を葬れるなら出し惜しみをするな！」

「クライアントもそうお望みだ。このままではせつかく築き上げた我が社の地位も落ちてしまう。出せ」

「……つく！どうなつても知りませんよ！」

ガナツシユがタブレットを操作する。

「ねぶねぶが変身できなかつたときはどうなるかと思つたですけど、無事に勝つてよかつたです」

「それに、シアンの武器がアヴニールの兵器より凄いつてことは十分証明できたはずよ」

「ええ。誰が見ても間違いないわ」

「おい、勝負はついた。早くバリアを……」

解除しろ。と言い切る前に異変が起こつた。

再び舞台の床が開き、新たなロボットが姿を現す。

今度は完全な人形のロボットだ。

「おい、なんの真似だ！」

「そうだそうだー！いい加減負けを認めろー！」

「フン！たかが前座を一機倒しただけで調子に乗るなよ、ネプテューヌ！」

マジエコンヌが高らかに叫ぶ。

「次はこのハードブレイカーが相手だ！」

ハードブレイカーと呼ばれたロボットのアイカメラに光が灯り、ゆっくりと立ち上がる。

「そんな……アツシユさんとネプテューヌにもう戦えるほどの体力はありませんわ!」

「全部仕組まれてたつてことか!？」

「打つ手なしかよ……くそ!」

絶望するネプテューヌ達を眺めるマジエコンヌが笑った。

「さあ、試合を始めろ!」

「どうなつても知りませんからね……エキシビジョンマッチ、第二試合……開始!」

開始の宣言を受け、ハードブレイカーがネプテューヌ達に接近し、腕のブレードを振り上げる。

「アツシユ!」

ネプテューヌが動けないアシユレイに飛びかかり、攻撃から逃がした。

振り下ろされたブレードは舞台を容易く切り裂き、地面に深い亀裂を作った。

「せめて変身できれば良いんだけど……まあ、無理だよね」

「万事休すか……?」

諦めかけたその時、二人はとある異変に気がついた。

「……あ?」

「あれえ？」

なぜかハードブレイカーはブレードを地面に突き立てたまま固まっている。

よく見れば先ほど光っていたカメラアイの光も消えている。

「な、何が起った!? 何故急に止まるのだ!」

ハードブレイカーの異変にマジエコンヌ自身も焦っていた。

ということはこの機能停止は意図的なものではないということだ。

「だから言ったではないですか。まだ調整中だと」

ガナツシユがタブレットを叩くが、やはりハードブレイカーに反応はない。

「調整中だからといって止まるなど許されると思っているのか! せっかくネプテユヌ

を葬るチャンスなのだぞ!」

「そうは言っても、この様子じゃ再起動は無理ですね」

タブレットの画面はハードブレイカーのエラー報告で埋め尽くされていた。

お手上げ、といった感じでガナツシユも肩を竦める。

「……もしかして、ギリギリ助かったっぽい?」

「だと、いいんだがな」

「ええい! まどろっこしい!」

マジエコンヌがガナツシユのタブレットを奪い、バリアを解除。

タブレットを投げ返し、自ら舞台へと乗り込んできた。

手を振り上げ……

「動け、このポンコツが！」

ハードブレイカーを思いつき叩いた。

「……えー」

「ひと昔前のテレビじゃねえんだから……」

しかし二人の考えに反し、なんとハードブレイカーは動き始めてしまった。

「ねぶっ!？」

「ウソでしょ、起動したの!？」

「そんな無茶苦茶な……」

さすがのガナツシユもこれには呆れを隠せない。

「はーっはっはっは！所詮機械など叩けばどうにでもなるのだよ！」

ブレードをゆつくりと引き抜き、カメラアイが禍々しく光る。

「さあ、ハードブレイカーよ！今度こそ女神共を……」

マジエコンヌが言い切る前にハードブレイカーの胸部から発射されたビームが壁を

貫いた。

「ど、どうしたのだ！攻撃するのは壁ではなくこいつらだ！」

「これって、もしかして……」

「壊れて暴走しているわ」

「……っていうかこれさつきとは別の意味でヤバくないか!？」

ヒロムの言う通り、暴走したハードブレイカーは手当たり次第に攻撃を行い、会場を破壊していく。

すでに会場の人達はパニックだ。

「これでは、博覧会どころではありませんわ」

「なんとかしてアイツを止めないと!」

「つ!アツシユ!ネプ子!逃げて!」

アイエフが叫ぶ。

「逃げれるんなら……」

「とつくに逃げてるってば!」

アシユレイを背負って走るネプテユーンの背後にはブレードを振り上げるハードブレイカー。

今度は逃げられない。

「ねぶねぶ!」

「ネプテユーン!」

ブレードが振り下ろされる。

直後、金属音が鳴り響いた。

「ふう……間一髪」

「お前……ヒロム！」

ネプテューヌ達の目の前には一対のガンブレードを交差させながらハードブレイカーの攻撃を受け止めるヒロムが居た。

「よつとー！」

剣を振り払い、ハードブレイカーを弾き飛ばす。

不意に振り向いたヒロムの手に魔法陣が浮かび上がった。

「ケアルド」

癒しの光がネプテューヌとアシユレイを包み込んだ。

二人の体が一気に軽くなる。

「おお！助かったよヒロくん！」

「どういたしまして」

「お前……戦えたのか？」

「ここは俺に任せてくれ」

改めてヒロムがガンブレードを構えた。

「さあ、タイマン張らせてもらおうぜ！」

ヒロムがハードブレイカーへと駆ける。

その間に二人はノワール達と合流。

近くにはガナツシユも居る。

「おい、ガナツシユ！強制終了はできないのか!？」

「ぐっ……先ほどから何度か試していますが、外部からの信号を受け付けてくれません」

「せめて女神化ができれば……」

「……ってそうよ！女神化よ！」

ノワールがガナツシユに詰め寄る。

「ガナツシユ！女神化を妨害してる装置を早く止めて！」

「止めるも何も……ハードブレイカーの頭部に組み込まれているジャミング装置をどう

やって止めるのですか？」

「なんでそんな所にあるのよ!？」

「頭を壊さなくても、さっきのマジエツチみたいに叩けば壊れてくれないかな？」

「さすがにそんな虫のいい話が……」

「可能性としては、十分ありえます」

なんとガナツシユはネプテューヌの考えを肯定した。

「あの装置はまだ試作の物を無理やり頭部に組み込んだので、強い衝撃を与えられれば……」

「……ヒロム！聞いたな！頭だ！」

「合点承知！」

ヒロムがハードブレイカーの頭部に向かってガンブレードを連射する。

しかし弾丸はハードブレイカーの周囲に展開されたエネルギーフィールドに阻まれ、頭部には届かなかった。

とはいえ、それは戦い始めた最初からなのでヒロムも特に驚いた様子はない。

「おっとー！」

足下へのなぎ払い。

飛んで回避しつつ、弾丸を撃ち込む。

するとハードブレイカーはフィールドで防がず、回避運動を取った。

「……なるほど」

距離の離れたヒロムにハードブレイカーがビームを発射。

それを涼しい顔で体を逸らしながら避け、同時に背後でガンブレードを連結。

「デイバインプラスターー！」

バスターソードモードとなったガンブレードから強力な魔力砲を打ち出す。

が、それはフィールドに防がれてしまった。

ハードブレイカーがブレードをヒロムに向かって真っ直ぐに突き出す。

「タイミングバツチリ！」

ヒロムは剣を逆手に持ち替え、切っ先を地面に付けた。

そのまま引き金を引く。

「セイハーロー!!」

反作用でヒロムが弾丸のように打ち出された。

ブレードをスレスレで交差し、空中で体を捻る。

渾身の飛び蹴りがハードブレイカーの頭を打ち据えた。

「あのフィールドを突破した……?」

「アレ、どうやら攻撃してる時は展開できないみたいだったからな。そこを狙わせてもらったって訳だ」

地面に倒れたハードブレイカーからジャンプしながらこちらに戻ってきたヒロムがそう言った。

「何はともあれ、これで……」

「オツケー!変っ身!」

四人が光に包まれる。

光が治れば、そこには四女神の姿があった。

「暴れたい奴は前に出ろ！残りは避難を手伝え！」

「よっしゃ！」

「こいつは私たちがやるわ！」

「わかったわ。じゃあ、後は頼んだわよ」

「街の人達はわたくし達に任せてくださいいな」

アシユレイの声に四人がすぐさま動く。

荒れ果てた舞台の上にはノワール、ブラン、そしてヒロムが残った。

男へ変身したアシユレイも三人の隣に並ぶ。

「つしゃ！キバっていくぜ！」

「あなたの罪を数えなさい……ここで断罪してあげるわ！」

「……お前の一人舞台は終わった」

全員が各々の武器を構える。

「ここからは、俺たちのステージだ！」

「さあ、シヨータムだ」

戦闘が始まった。

「インパルスエッジ！」

「牙龍天衝！」

ノワールとヒロムの剣閃が衝撃波となりハードブレイカーへ迫る。

しかしそれはフィールドにぶつかり、辺りに風圧を撒き散らすだけに終わった。
ハードブレイカー本体にダメージはない。

反撃のビームが発射される。

「ちい！」

アシユレイが前に出て障壁でビームを打ち消した。

「もう！あのバリアほんとめんどくさいわね！」

「だったらぶっ壊すだけだ！」

「いくら硬くても壊れない物はない……タスク・ヘビースマイル！」

アシユレイの声にノワール、続いてブランが走る。

「受けなさい！」

ハードブレイカーに向かって剣を振り上げたノワールの姿がかき消えた。

直後、無数の剣閃がフィールドを揺らす。

止めの飛び蹴りをかまし、そのままフィールドを蹴って宙返り。

「ブラン！後は任せたわよ！」

間髪入れずにブランが突入する。

「どつ………」

右足が地面を踏み抜く。

「せえええええい！」

全身全霊を込めて振り抜いた一撃が激突。

大きく歪んだフィールドが空気に溶けるように消えた。

「す、すげえ……」

「言ってる場合か！行くぞ！」

後ろに下がった二人が変わってアシユレイ、少し遅れてヒロムが突入する。

接近する二人を嫌がったのか、ハードブレイカーが左右から挟み込むようにブレードを振るった。

「効くかってのー！」

アシユレイが両腕を広げ、その手のひらの前にそれぞれ障壁を作り出してブレードを弾く。

「隙だらけだぜー！」

アシユレイの上を飛び越えたヒロムがバスターソードを真一文字に振り下ろす。

ハードブレイカーの胸に大きな裂傷が走る。

「よつと……」

バスターソードを振り上げながら連結を解除。

空中で回転する二本のガンブレードを右手は順手、左手は逆手に掴む。

「そらそらあー！」

そのまま絶え間ない連続攻撃をハードブレイカーに浴びせた。

左手のガンブレードを突き刺し、体を捻る。

「迅旋風！」

引き抜くと同時に回転。

真空の刃がハードブレイカーのボディに斬撃の後を残した。

しかしいつまでも反撃しない相手ではない。

「っ…………とおー！」

横薙ぎの一撃をバックステップで回避。

追撃の突きも宙返りでかわした。

そのブレードをスライディングで掻き潜るのはアシュレイ。

そのままハードブレイカーの背後に回る。

「捕まえた…………」

龍の腕でハードブレイカーの胴を掴み、そのまま飛び上がる。

「落ちろー！」

空中で一回転しつつハードブレイカーを地面に投げ飛ばす。

バウンドして跳ね返ってきたそれを蹴り、斜め下のハードブレイカーへ魔法陣を展開。

「ヒロム！」

「了解い！」

ヒロムがガンブレードを斜め上のハードブレイカーへ構え、引き金を引く。

「レッツドビート！」

アシユレイは龍の腕で魔法陣を連続で殴りつけると、その衝撃が火炎弾となってハードブレイカーへ降り注いだ。

「乱れ撃つぜええええ！」

「ドラフラフラフラア！」

二人が打ち出した弾がハードブレイカーへ殺到。

ある程度打ち込んだところでヒロムがガンブレードを連結させ、ハードブレイカーに投げる。

胴体を貫いたそれは背後のアシユレイの手に収まった。

魔法陣を展開し、それを蹴る。

「そらよー！」

アシュレイの胴薙ぎ一閃がハードブレイカーの上半身と下半身を切り分けた。

「……良い剣だな」

「……そりやどうも」

物珍しげにヒロムのガンブレードを眺めたアシュレイがそれを持ち主へ投げ返す。

その後ろでは上半身だけになったハードブレイカーがフライトユニットで浮き上がり、なおも暴れようとしていた。

「しつこいわね。そろそろ壊れたらどうなの？」

「動けるなら動けなくなるまで叩くだけだ！タスク・ブラックダスト！」

アシュレイが剣に炎を纏わせ、ノワールは空へ。

「灰は灰に……」

炎の剣を地面に突き立てた。

ハードブレイカーの周りに炎の渦が巻き起こり、装甲を焦がす。

爆発がハードブレイカーのボディを打ち上げる。

「塵は塵に！」

ノワールが高速移動と同時に剣撃を宙に浮かんだハードブレイカーに叩き込み、地面に打ち落とす。

「紅！」

「十文字斬り！」

地面に衝突する直前にアシュレイの横薙ぎ。

止めにノワールが真つ直ぐに剣を振り下ろす。

「成敗！」

アシュレイが剣を振って纏った炎を消し、ノワールが剣を地面に突き刺す。

その後でハードブレイカーが派手に爆発四散した。

「……終わったな」

「私たちに掛かればこんなやつ、物の数じゃないわ」

「にしても、お前凄いな……」

「あ？」

戦闘が終わり、ヒロムがアシュレイに話しかけてきた。

「ノワール達に連携攻撃の指示出したり腕をドラゴンみたいにしたんだよ」

「連携は前に教えてたしな。腕は……こういう体質だ」

「どんな体質だよ……というか、お前ノワール達と知り合いなのか？」

「……ん？」

何やら話がズレ始めてきた。

「おい、ヒロム……気付いてねえのか？」

「なにが？というか自己紹介してなかったな。俺はヒロム。お前は？」

「……わかってないみたいね」

「……はあ……」

アシユレイが黒い炎に包まれる。

収まった頃には女の姿に戻ったアシユレイが居た。

「……え？さっきの奴が消えてアツシユが？え？どういうこと？」

「そういえば、変身してるところはお前見てなかったな」

戦闘開始時、アシユレイは三人の背後で変身し、その後で横に並んだ。

つまりヒロムはアシユレイが男だということを知らないまま戦っていたのだ。

「さっきの男も俺だ。どっちかと言うとあっちの姿の方が俺の本当の姿だけだな」

「ああ、男の姿の方が本当の姿なのね、どうりでさっき男子トイレに……つてちよつと待

てよっ。」

ヒロムの顔が青くなる。

「という事は俺はトイレの前で……」

アシユレイはヒロムが恐れている事を察する。

「……男を押し倒したり胸を触ったりして顔を赤らめてたって訳だ」

その上で、現実を突きつけた。

ヒロムがガツクリと膝を着く。

「オウマイゴオオオオツツド!？」

「チャンチャン……と」

荒れ果てた開場跡にヒロムの絶叫が木霊した。

第19話 魔王誕生

「あー……もうだめ……疲れた……」

「のっけからノワールさんが怠け者になっている件……」

「ここはラステイションのホテル。」

ベッドの上では疲れ切ったノワールがぐったりしていた。

理由は簡単。

「博覧会の一件から今日までずっと働き詰めだったんだから仕方ないでしょ……」

と、いうわけだ。

怪我人の救護、建物の改修、アヴニール分社及びその工場の解体。

ついでにモンスターに関するトラブルの解決を含めた書類と顔を付き合わせては現地に赴き、帰ればまた書類とにらめっこ。

そんな生活が一週間も続けばこうなるのも頷ける。

「けど良かったじゃん。あの事件のおかげで復権できたんだからさ」

「ようやく元通りって訳だな」

「その件に関しては感謝してるわ。ヒロムもありがとう」

「あれくらいなら朝飯前だって」

あの一件からノワールのサポートについていたヒロムが肩を竦めた。

サポートとは言うが、モンスター討伐系のクエストはほぼ全てヒロム一人がこなしていた。

「……ノワール、体は大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。何回も言ってるじゃない」

アシユレイがこう聞くのには意味がある。

あの一件の直後、瓦礫に埋もれた人がいないかなどを確認していると、隠れていたマジエコンヌが一瞬目を離れた際にノワールの女神の力をコピーしたのだ。

強大な敵を倒し油断していたのかもしれない。

疲弊していなければ防ぐ事が出来たかもしれない。

とはいえ、それは起こってしまった。

幸い三人がすぐさま助けに入った為、完全には力を奪われずに済んだ。

「……そういえば、お仕事はもういいんですの？」

空気が重くなってきたと判断したパールが話題を変える。

「ええ。教会からアヴニールの連中も追い出したし、街のみんなのお陰で博覧会の開場

の修理も順調よ」

「アヴニールはどうなるの?」

「教会の管理の元、まっとうな会社に変えていくわ。本社も解体しても良かったんだけど、技術力は目を見張るものがあるから、ラストイションの発展のために活かそうと思ってるわ」

ノワールはこう言っているが、それはアヴニールの解体によって出てくる失業者を抑える面が大きい。

これもノワールなりの優しさである。

「もちろん、兵器開発なんて二度とさせないけどね」

「そう……良かったわ」

「じゃあ、ガナツシユや社長のサンジュは?」

「サンジュの方は責任をとって社長を辞任。今はシアンの所で働いてるわ」

「シアンのとこで!?!なんでなんで?」

ネプテューヌの疑問にはアシュレイが答えた。

「元々サンジュは俺とシアンの親父達とは共通の友人でな。流石に可哀想だったんだとよ」

「ガナツシユはどうなったの?」

「行方不明よ。けど、たぶんルウィーに帰ったんじゃないかしら？熱心なブランの信者だったし、アヴニールが利用できない以上この国にいる必要はないもの」

「案外、次はプラネテューヌやリーンボックスに来てたりして！」

「悪い冗談はよしてくださいな……」

「ねぶねぶ……それ笑い事じゃないですよ……」

「なんにせよ、その辺で途方に暮れるほど頭は悪くない。どこかで生きてるだろうさ」

そんな話をしてしていると、不意に部屋にノックの音が響いた。

「おっす、お前から久しぶりだな！」

「シアンこそ久しぶり！元気してた？」

部屋に上がり込んできたのはシアンだ。

「お陰様でな。今じゃ忙しくて猫の手も借りたくらいだぜ」

「ノワールから聞いたよ、社長さんを雇ってあげたんだって？」

「長いこと現場から離れていても、元は技術屋なだけあってだいぶ助けてもらってるよ。つと、それはそうと今日はお前らに渡したいものがあったってきたんだ」

シアンが腰のポーチに手をつ突っ込んでまさぐる。

「これ、もしかしてお前らが探してたものじゃないか？」

しばらくしてシアンが取り出したのは光る石のようなもの。

紛れもなく、それは鍵の欠片だった。

「シアン、これどうしたの？」

「お前らがぶっ壊したハードブレイカーを解体してる時に出てきたんだよ。どうも、こいつを動力源にしてみたいなんだ」

「どうりで、どこを探してもないわけです」

「あそこの鍵の欠片を持っていったのはアヴニールの奴らだったって訳か」

ノワールがラストイション復興に走り回っている間もネプテューヌ達は鍵の欠片を探していたが、ハードブレイカーの内部にあるのでは見つけないのも当然だ。

ともあれ、これで鍵の欠片が四つ全て集まったことになる。

「けど、どうして動力源なんかに使われてたのかしら？」

「これはガナツシュが偶然見つけてきたらしいぞ。調べると凄いいエネルギーを持っているから動力源にしたんだとき」

「まさに、瓢箪から駒とはこのことね」

「驚いたで思い出したけど、本当に驚いたのはこっちなんだぞ。お前も知ってたなら教えてくれれば良いのに……」

「言ったら博覧会に集中出来なくなるのは目に見えてたからな」

シアンが言っているのはネプテューヌやノワール達が女神だったということだ。

あれだけ会いたがっていた女神がまさか自分の知り合いだったとは夢にも思わないだろう。

「……けど、本当にいいのか？女神様相手に今までどおりに接しろって……」

「いいのいいの！シアンとはそういうの抜きにしたお友達なんだから。ね、ノワール？」

「ええ。私もあなたのことは大切なお友達だと思ってるわ。それに、今更他人行儀になられても困るわ」

「そういうことだから、いい加減諦めなさい、シアン」

「……だな。ま、わたしとしても今までどおりの方が気が楽だしな。それじゃ、渡す物も渡したし、わたしはこれで！」

「ああ、またな」

言うが早く、シアンが来た扉をくぐって部屋を出て行った。

「……さて」

「経緯はともあれ、これで4つ揃ったわね」

「揃ったのは良いとして、それどうするんだ？」

部屋の壁に背を任せながらヒロムが呟く。

「こいつがあれば、イスト何某の封印を解く事ができるんだとさ」

「イスト……何？」

「……話を聞いた方が早いだろ」

「という訳で！いいよ、いーすーん！」

テーブルに置かれた鍵の欠片が光を放ち、その場に浮き上がった。

「どうやら、4つ全ての鍵の欠片を手に入れたようですね」

「この人がイストワール……」

「……っついーすんじゃねえか！」

「あれ？ヒロくんいーすんのこと知ってるの？」

「ああ、こっちの次元にもいるからな。俺の知ってるいーすんとは随分雰囲気が違うけど……」

「ヒロムさん。ネプテューヌさん達を助けて頂き、本当にありがとうございます」

「いいんだよ。友達だしな」

「けど、いーすんごめんね。マジエコヌにノワールの力をコピーされちゃったよ」

「……ノワールさんの力を手に入れ、マジエコヌは女神様三人に匹敵する力を持ったことになります」

女神三人に匹敵する力。

強大すぎて、どれほどかも想像出来ない。

そして問題はさらに強くなる可能性があるということだ。

「ネプテューヌさんの力が奪われる前に、一刻も早く私の封印を解いてください」

「で、あなたが封印されている場所って何処にあるの？まさか、天界だなんて言わないわよね？」

「安心してください。わたしが封印されている場所はプラネテューヌです」

「……えらく大雑把だな」

「プラネテューヌのどこなんですの？」

「……申し訳ありません。詳しい場所までは……」

イストワールが封印されている場所はプラネテューヌ。

情報はこれだけのようだ。

何もわからない、よりはマシといった所か。

「なら、一旦プラネテューヌに行きましょう」

「そうね。コンパの部屋を拠点にしたほうが効率的だわ」

「けれども、どうやってイストワールを探すんですの？」

「情報が無いなら、手に入れるまでだ」

「かたっぱしからいーすんを探すつきやないね。今までもなんとかあったんだし、だいじょーぶー」

「そうです！きつとなんとかなるです！」

そんな状況でもなぜかネプテューヌ達は楽観的である。

「まったく、呑気というか前向きというか……」

「けど、こういうのは嫌いではないですわ」

「そうね。悲観的になるよりはマシ」

「じゃあ、次はいーすん探しに、プラネテューヌに行つてみよー！」

次の目的は決まった。

不意にヒロムが手を挙げる。

「俺もパーティーに参加するよ」

「ほんと!? やったー!! ヒロくんが居れば百人力……」

「駄目だ」

ヒロムの提案を切ったのはアシュレイだ。

「えーなんでさー! 人が多い方が楽だし楽しいじゃーん!」

「お前は黙つてろ」

「なんで駄目なんだ? 別に皆の足を引っ張つたりは……あ……もしかしてまだあの時の

「と怒つてたりする?」

「……あれは別にどうでもいいし、そうじゃない」

アシユレイが真っ直ぐにヒロムの目を見つめる。

「曲がりなりにもお前は異世界の人間だ。これ以上俺たちには深く関わらないでくれ」
「けど……」

「……いいか、これは俺たちの世界の問題だ。俺たちの世界で起こった問題は、俺たちが片付ける……そうだろ？」

アシユレイの言葉にヒロムが目を閉じ、暫く考える。

そしてふう、と息を吐いた。

「俺たちの世界……か」

決心がついたのか、ヒロムが顔を挙げる。

「わかった。俺はこの件に関してはもう踏み込まないようにするよ。あーけど、助けが欲しいなら言ってくれよ？すぐに駆けつけるぜ！」

「……期待しないで待ってろ」

「じゃあ、ヒロくんとはここでお別れだね。助けてくれてありがとう！また会おうね！」
「おう！またな！」

三人が拳を軽く突き合わせる。

それが再会の約束になることを信じて。

.....

「第128回！いーすんはどこだ会議ー！」

「100回近く盛ってんじゃねえよ……」

「ここはコンパの家。」

全員が思い思いの位置でのんびりしている。

「それじゃ、さっそくだけどもみんなが集めてきた情報の報告をお願い」

「わたしはなんにもなっしんぐー！」

「……あなたには端から期待してないから……他のみんなは？」

アイエフが他の5人を見渡す。

「わたしも何も見つけられなかったです」

「私も全然駄目だわ」

「わたくしも、それらしきところは見つけられませんでしたわ」

「わたしも見つけられなかった……」

「同じくだ。ここまで見つからないと本当にプラネテューヌに封印されてるのか怪しく

なってくるな」

「冗談でも言わないでよ。ただでさえ苦労してるんだから……」

この会議は毎日の終わりに行っている。

つまりラストセッションの鍵の欠片を手に入れてからもうすぐ一ヶ月が経とうとしているのだ。

しかしどれだけ時間が流れようと、全員の口から発せられる言葉はほぼ同じであった。

「あいちゃんはどうかだったの？」

「わたしも知り合いの子たちに協力してもらってるけど、なんの情報もないわ」

「全員ダメダメかあ……こんな時、もう一回いーすんとお話し出来ればもう少しヒントもらえるかもしれないのに……」

「あれから全然連絡ないですう……」

いかに場所がプラネテューヌとわかっていても、協力者含めてたった数十人で国を隅々まで探すのには骨が折れる。

現にこれ程の期間を費やしている。

一ヶ月もあればマジエコヌの傷も全快し、再び行動を起こすかもしれない。

そこでネプテューヌの力が奪われでもしたら……。

「……ふと思っただけで、プラネテューヌの教会に協力は頼めないのかしら？」

「そうですね。プラネテューヌのことは、やはりプラネテューヌの教会に頼るのが一

番ですわ」

「たしかに、そう言われればそうかも。なんで今まで気づかなかつたんだろう?」

「他の国の教会が役立たずだったのがだいたいの原因だろ。なあ?」

アシユレイのセリフにネプテューヌ以外の女神三人がバツの悪そうな顔を浮かべた。

「あんまり大つぴらにしたいくなかつたけど、背に腹は代えられないわね。そうと決まれば、さつそく教会に行きましょ」

全員が頷き、教会……プラネテューヌの象徴でもあるプラネタワーへと向かった。

.....

同時刻、某所にて。

「.....」

静かな部屋。

青い壁と床。

正方形の空間の真ん中には台座。

その上には一冊の本が浮かんでいる。

「.....」

本の名前はイストワール。

彼女は何も言わず、ただその場に存在していた。
そうするしかなかった。

「ふん、気分はどうだ、イストワール？」

「マジエコヌ……」

壁の一面が開き、マジエコヌとポロボロのローブを被った男が姿を現した。

「女神共はお前を探すのに手間取っているようだな」

「……………」

「私の傷も癒えた。後はネプテユーン……あいつの力を奪うのみだ」

「ネプテユーンさん達はあなたには決して負けません」

「信じたければ信じるがいいさ。私の勝利は揺るがん」

マジエコヌがつかつかとイストワールに歩み寄り、乱暴に掴み上げる。

「貴様はもう暫く、女神共をおびき寄せる為の餌になってもらうぞ。この世界を手に入れる為には貴様の協力も必要なのだ」

「誰があなたに協力なんて……」

「フフフ……今の内に強がっておくんだな」

それだけ言ってマジエコヌはイストワールを元の位置に戻し、部屋を出て行った。

「……ネプテューヌさん……」

「女神達が心配ですか？」

機械的な声が男の口から発せられる。

顔は狐の面で隠され、ボイスチェンジャーをつけているかどうかはわからない。

もしかしたらロボットの類の可能性もある。

「……ついて行かなくて良いんですか？」

「もはや彼女の目に私は写っていません。それに私自身があなたに用があるので」

「マジエコンヌの側近であるはずのあなたがわたしに？」

「……あなたに教える事、そして同時に伝えてほしい事があるのです」

「わたしに……ですか？」

マジエコンヌの側近である人物からの伝言。

正体すらわからない人物からの言葉など嘘か本当かもわからない。

「……わかりました」

しかしイストワールはその頼みを断る事が出来なかった。

顔も、声もわからないが、男は酷く悲しそうに見えたのだ。

「では……」

男の話は暫く続いた。

そしてそれはイストワールでさえ驚かざるを得ない事だった。

.....

「こんにちはー」

「おおっ！誰かと思えばいつぞやのロリっ子じゃないか！」

ネプテューヌの声に気づいたのは前にネプテューヌとコンパにパスを作ってくれた職員だ。

「わたしたち、プラネテューヌにあるダンジョンについてお話が聞きたいんです」

「誰にも知られていないような超珍しい超レアな、いかにも隠しっぽいダンジョン知らない？」

「超珍しいレアでいかにも隠しっぽいダンジョンか……」

職員が顎に手を当て、暫く考える。

そして思いついたように拳を打った。

「噂でしかないんだけど、昔々……それはもう凄い昔、先代の女神様の時代に伝説の四英雄たちが修行をしたと言われているダンジョンがプラネテューヌにあるらしいんだ」

「おおっ!?なにそれ、なんかすっごくそれっぽいね！それでそのダンジョンはどこにあ

るの?」

「あくまで伝承でしか伝わってないから、誰もどこにそのダンジョンがあったかなんて知らないんだよ……」

「そっか……」

ダンジョンの場所はわからなかったが、手がかりゼロではなくなった。

後は伝承とやらを紐解けば答えが見つかるかもしれない。

「私の方でも調べてみるよ。教会にはそういった伝承に詳しい人もいるだろうしね。時間が経ったらまたおいでよ」

「うん、わかった。それじゃ、教会のお兄さん、よろしくね!」

「ああ、任せてくれ」

情報を貰ったネプテューヌたちは教会を後にし、再び街を歩き出した。

「さて、わたし達も伝承について調べましょ」

「けど、どうやって調べるの?」

「そういえば、女神さん達はその時代のことは何か知らないんですか?」

「私たちもその時代のことはよく分からないのよ。生まれた後も、ほとんど天界にいたし」

「そうですね。生みの親である先代の女神様のこともおぼろげですし……」

女神三人もこの事は知らないようだ。

ネプテューヌがため息を吐く。

「頼りの綱のノワールたちも駄目かあ……」

「記憶喪失のあなたに言われるとイラツとくるわね……」

「……伝承についてなら、知ってる」

口を開いたのはアシュレイだ。

「女神様でも知らないような事をあんたが!？」

「昔、グレイさんに教えて貰ったんだ」

そう切り出したアシュレイが伝承について話を始めた。

その昔、世界には女神が五人居た。

人の幸せや喜び。

正の感情を受け、それを糧とする四柱の女神。

そして人の悪意や憎悪。

負の感情を一身に受け止めるたった一人の女神。

四柱の女神はお互いに争い合い、その領土を増やす。

負の感情を司る女神はそれを一人見守る。

世界はそんな女神達の存在によって均衡を保っていた。

しかしそれは突然崩壊した。

負の感情を司る女神がモンスターを生み出し、人々を襲わせ始めたのだ。

四女神はそれぞれの国を守る為に戦ったが、モンスターの力は凄まじく、ゆつくりと疲弊していった。

その不安から発せられた負の感情は悪の女神に降り注ぎ、さらにモンスターはその数を増やした。

事態を重く見た四女神は戦争を中断。

四ヶ国が結集して悪の女神を倒そうと考えたのだ。

その時、女神は自らの祝福を受ける勇者を一人づつ選び出した。

勇者達は厳しい修行の末、何者にも劣らない力を身につけた。

四女神と四人の勇者は見事悪の女神を打ち倒し、世界を平和に導いた。

四人の勇者は四英雄と呼ばれ、その生涯を終えるまで人々から感謝され続けた……。

「……俺が聞いたのはここまでだ」

アシユレイの話に六人は思い思いの顔をしていた。

「五人目の女神……」

「そんなの居たの？」

「わたしが読んだ絵本にはそんなの書かれてなかったですう」

「わたしだって知らないわ。災厄を呼ぶ存在から人々を守ったってことしか……」

どうやら全員話に出てきた悪の女神のことは知らないようだ。

「ちよつと待つて……」

ブランが口を開いた。

「なんでグレイはそんなことを知っていたのかしら……?」

「確かに……一般には知られていないことですね」

「そうなのか?」

特に改めて調べる気もなく、これが常識だと思っていたアシユレイが疑問符を浮かべる。

「……まあ、そのことはまた改めて本人に聞きましょ。今はダンジョンのことよ」

「とはいえ、先ほどの話からはダンジョンの情報はわかりませんわね」

「……よし!じゃあもうこれしかないね!」

ネプテューヌが足元に転がっていた木の枝を拾い上げた。

「……どうすんだよそれ」

「これを倒して、倒した先に進むの!きつとわたしたちを導いてくれるはず!なぜなら

わたしは主人公だから!」

「何、その凄く古典的な方法」

「……『立ち止まるぐらいなら適当に走れ』 ってやつか」
「そういうことー！えい！」

コトリ、と倒れた木の枝は西を向く。

「この方向は……郊外の森を指してるわね」

「けど、あつちには森林公園と地下の洞窟があるくらいよ。例のダンジョンなんてあるかしら……」

現実的に考えれば無いという結論になるのが自然だろう。

「……ねえ、あいちゃん。せっかくだしき、行ってみようよ」

しかしネプテューヌは僅かな可能性に賭けるようだ。

「案外身近な所にあるかもしれないしき。一から探してみるのもアリだと思うな」

「……一から……か。どうだ、アイエフ？」

「……そうね。何もしないより動いた方が建設的だし、行きましょ」

こうしてネプテューヌ達は三度あの自然公園へと足を運んだ。

……

「さて、これで一周か」

「なんもないね」

自然公園内をくまなく探したが、それらしき入り口は見つけられなかった。

「そういえば、ここがネプテューヌが落ちた場所なの？」

「そうだよ。ここでこんぱに拾ってもらったんだ。で、記憶の手がかりを探して初めてきたダンジョンもここなんだ」

「アツシユさんともここぞ？」

「ああ」

「じゃあ、あそこに空いている大穴は？」

ブランが指差した先には不自然な穴がすっぽりと口を開けている。

「あれは、わたしが落ちて突き刺さったところが陥没してできた穴だよ」

「あの時はいきなりだったのでびっくりしたですよ。けど、ねぶねぶのいい思い出す」

「俺の中では災難の始まりだけだな」

「……あれ？もしかしてネプテューヌさんたち？」

背後から呼びかけられ、振り返るとそこには獣の耳を模した帽子を被った少女が立っていた。

「お、サイバーコネクトツーじゃん！久しぶりー！何してんの？」

「最近、この辺りに不審者がよく出没するらしいから、見回りをしてるんだ」
「不審者だと？」

「通報によれば、狐のお面をした奴らしいんだ」

「狐の……面？」

そのワードにアシユレイの苦い記憶が蘇る。

「ネプテューヌさんたちはどうしてこんなところに？」

「そうそう、この辺りにいかにも怪しい隠しダンジョンの入り口みたいなの見つけないかった？」

「入り口……は見なかったけど、怪しいといえばこの下の洞窟なんて凄く怪しそうだよね」

「この下の……洞窟です？」

サイバーコネクトツーツーが地面を指差し、つられてコンパも地面を見た。

あの洞窟はこの自然公園よりも多くの思い出がある。

1 度目はネプテューヌの女神化、イストワールとの出会い。

2 度目はアイエフとの出会い、マジエコンヌとの初遭遇、そしてアシユレイの変身。

忘れたくとも忘れられない。

「そっちも探索するか……」

「じゃあ、わたしたちは洞窟に入ってくるよ！またね！」

「うん。気をつけてね」

サイバーコネクトツーに見送られながら一旦自然公園を出る。

そのまま真下にある洞窟へと足を踏み入れた。

「ねえ、アイエフ。プラネテューヌの鍵の欠片ってここにあったのよね」

「ええ、そうよ」

「……そう」

「どうしたの、ノワール？」

「んー……気のせいだといんだけど、何か引つかかるのよ」

「隠し通路のこと？」

「ええ。けど、具体的に何がどう引つかかっているのか全然わからなくて……」

「考えてわからないことは放っておけ」

ノワールが唸っていると不意にネプテューヌが立ち止まった。

「あれ？」

「ん？どうしたのよ、ネプ子。そっちは行き止まりよ？」

「ねえ、あいちゃん。なんかこの先変じやない？行き止まりなのに、風が吹いてるよ？」

「なんですって!!」

全員が行き止まりを見つめる。

「……本当ですわ。僅かですけど、この壁に向かって空気が流れていますわ」

「……………」

アシユレイが壁にナイフを投げる。

するとナイフは壁の中に消え、更に壁の向こうからカラカラとナイフの転がる音が響いた。

「……ビンゴ、だな」

「この壁……よく見ると魔法でできた幻影ですわ」

「音から判断するに、この先に道が続いているみたいだな」

「ねぶねぶ、お手柄です！」

「いやあ、それほどでも。これも主人公たる幸運つてやつ？あ、ご褒美はバケツプリンがいいな！」

褒められたネプテューヌが照れた様に体をよじる。

「馬鹿言つてないで先に進むぞ」

「きつと、この先にイストワールが封印されているはずよ」

7人が壁の中へと入っていく。

そこには先ほどの洞窟とは打って変わって機械的な壁と床が辺りを埋め尽くしてい

た。

「いかにも、な所だな」

「そうね」

そして目の前には大量の敵。

どうやら意地でもここから先には行かせたくないらしい。

「随分な歓迎だな」

「なら、こつちも全力で答えるだけ」

全員が一齐に武器を構える。

「さあ、行くぞ！」

.....

敵を蹴散らしながら道を進んでいく。

「魔粧・氷結樹！」

「インパルスブレイド！」

アイエフが魔法で敵を凍結させ、すかさずそこにノワールが剣撃波で追撃。

氷像となった敵がバラバラに砕け散った。

「……打ち止めか」

「こうも長時間戦うと、流石に疲れますわね」

「けど、かなり奥まった所まで来たわ」

目の前の扉を潜ると、一際広い空間に出た。

「いーすんがいるところって、ここかな？おーい、いーすーん！」

ネプテューヌが叫ぶ。

「待っていたぞネプテューヌ。随分遅かったではないか」

直後、部屋の奥の扉が開いた。

現れたのは先ほどの声の主。

「デメエ……」

「マザコンヌ！」

「誰がマザコンヌだ！」

マザコンヌ改め、マジエコンヌが7人の前に立ちはだかった。

「あなたがいるということは、どうやらここにイストワールが封印されていることは間違いないようですわね」

「そのとおりだ。鍵の欠片を揃えた貴様ならきつとたどり着くと思って待っていたぞ」

「そっか、なにか引つかかかると思っていたら、そういうことだったのね」

ノワールが呟く。

「どうやら先ほどの違和感の正体を掴んだようだ。」

「簡単なことだったのよ。鍵の欠片を揃えた私たちがここに來ることなんてわかりきったことだったんだわ」

「っ！ネプ子、あんたは逃げて！」

「え!?!」

アシュレイが戸惑うネプテューヌの手を取り背後の扉へ走る。

「……………」

「ちい！いつの間に……………」

しかしそこには狐の面を被った男が立っていた。

「ふん、せっかく誘い込んだのだ。ゆっくりしていけ」

「はいそうですか……………なんて行くかよ！」

五人が変身し、一斉に狐の面の男へと斬りかかる。

「……………」

男が指を鳴らす。

異変は突如起こった。

「……………え!?!」

「どゆこと!？」

ネプテューヌたちの変身が強制的に解除されたのだ。

空中で一気に失速し、隙を晒す。

「……………」

男は何も言わず、眼前に巨大な魔法陣を展開し、ネプテューヌたちを弾き飛ばした。

「く……………う……………どうして女神化が……………」

「それに、力が入りませんわ……………」

「くそっ!どうなってやがる……………!」

「アヴニールの作ったハードブレイカーに搭載されているジャミング装置……………まさかあいつらが独自に開発したとでも思っていたのか?」

「まさか……………お前らが……………」

剣を杖にアシユレイがなんとか立ち上がる。

「そうとも!あいつらは女神化を封じる魔法を機械に組み込んだに過ぎん!」

マジエコンヌが歩き出す。

目線の先は……………。

「いけない!ネプ子、逃げて!」

「あいちゃん……………けど……………」

「く……おぉー！」

ふらつきながらもアシユレイが男に斬りかかる。

だがそれはあっさりとかわされ、逆に足払いで地面に倒されてしまった。

男はその背を容赦なく踏みつける。

「美しい友情劇だな。だが、ネプテューヌ！ 貴様が逃げれば、ここにいる連中を皆殺しにするぞで」

「そんなのハツタリよ！ いいから逃げなさい！」

「なら、ハツタリかどうか貴様の命で証明してやろう」

マジエコンヌの足が止まり、アイエフの目の前に杖に取り付けられた刃が突きつけられた。

「……くっ！」

「あいちゃん！」

「どうだ、ネプテューヌ。貴様の力を差し出せば、こいつらの命は助けてやるといっ
？」

「わたしの、力と交換？」

「そうだ、悪い条件ではないだろう？ 貴様が持つ女神の力と交換だ。コピーではなく、差し出してもらう」

「ふざ……っけんな！」

アシュレイが踏みつけられながらもなんとか立ち上がろうと腕を地面に押し付ける。

「ここでお前の力がこいつの手に渡つたら……こいつはその力でもつと沢山の人を殺す……ゲホツ……お前が助かれれば、死ぬのは俺たちだけだ……！」

「……そいつを黙らせろ」

不意に背中への重圧が消えた。

すると今度は逆に体が宙に浮かぶ感覚。

逆さまになった男が魔法陣を展開しているのを見たアシュレイがようやく男に投げ飛ばされたのだということを知った。

「ぐああああああ！」

魔法陣から放たれた魔法の剣がアシュレイの体を貫き、壁に縫い付ける。

「……………」

男が新たな剣を召喚し、ピクリとも動かないアシュレイへ近づいていく。

「待って！」

男の歩みが止まる。

声の主はネプテューヌだ。

「……わかったよ。わたしの力をマジエっちにあげる。だから、みんなを助けてあげて

「！」

「バカネプ子！何考えてんのよ！」

「わたしの女神の力でみんなが助かるんだったら、安い取引だよ。それに、記憶がないせ
いかな？女神であることに執着とかないんだよね」

「ねぶねぶ……」

「ネプ子の馬鹿……」

絶望的な状況だが、ネプテューヌは笑っていた。

「みんなの命に比べれば、女神の力なんて安いもんだよ。特にわたしのはね」
「懸命な判断だ。ではそこで大人しくしている」マジエコンヌが杖を振りかざすと、ネプテューヌの体がゆっくりと宙に浮き始めた。
そしてネプテューヌの胸に槍の切っ先を突き立てる。

「きゃあああああつ!!」

禍々しいオーラと共にネプテューヌの体から紫の光が抜けていく。

マジエコンヌが槍を引き抜くと、光は玉となり、マジエコンヌへと吸い込まれていっ
た。

ネプテューヌに傷はない。

「ハーツハツハツハツハ！やつと……やつと女神の力を全て手に入れたぞ!!」

マジエコンヌが高らかに叫ぶ。

「これで！私は真の女神に……いや、それすらも超越する神になったのだあああああつ!!」

地面に倒れ伏すネプテューヌが顔を上げた。

「約束だよ。みんなを助けて……」

未だニヤついたままのマジエコンヌがネプテューヌを見下ろす。

「つくづくおめでたい頭をしているな。あんな約束、誰が守るものか」

「そんな！約束したじゃん！わたしの力をあげる代わりにみんなを助けてくれるって！嘘つきー！」

「何とでも言え。所詮は弱者……負け犬の遠吠えにしか聞こえん！」

ふとそこでマジエコンヌが何かを思いついた。

「そうだ。せっかくだ、冥土の土産に面白い余興を見せてやろう」

指を鳴らす。

するとマジエコンヌの傍に一冊の本が転移してきた。

「これを見る。この本こそ、貴様らの探すイストワールが封印された姿だ」

「それが、いーすん……」

「おい、イストワール。聞こえているのだろう。やっとわたしは真の女神へなったの

だ」

「マジエコンヌ……あなたという人は……」

「早速だが、イストワール。貴様の力を使わせてもらう」

「言った筈です。あなたに貸す力なんてありません」

「ならば、無理にでも貴様の力を使うまでだ！」

「まさか！そんなことができるはず……」

イストワールが天高く掲げられる。

「さあ！史書イストワールよ！人々の畏怖の記憶を呼び起こし、魔王ユニミテスを作り出すのだ！」

直後、閉じられた本の隙間から次々と黒い粒子が溢れ出す。

その粒子は一つに固まり、どんどんその大きさを増していく。

「~~~~~!!」

この世の物とは思えない音が部屋に響く。

異形の存在。

魔王ユニミテス。

「そんな、ウソでしょ……ユニミテスってあいつが広めた架空の魔王じゃなかったの!?!」
「その通りだ。だが、その記憶を具現化し、モンスターとして誕生させたのだ！空想上の

魔王をな！」

「何よその馬鹿げた話は！」

「だが、事実魔王ユニミテスはここに誕生した！」

マジエコヌ又はイストワールを手放し、再び傍に浮かべる。

「さて、誰から殺してやろうか……」

「……コンパ？」

アイエフの呼びかけにコンパは答えず、代わりにジリジリとマジエコヌとの距離を詰めていく。

「……なるほど……マジエコヌ！」

「……なんだ？絶望して自ら殺されたいのか？」

「そんな訳ないでしょ！」

「では、なんだというのだ？」

「わたしがそのハツタリ魔王を倒してやろうってことよ！」

アイエフの眼前に黒い魔法陣が広がる。

「見せてあげるわ……わたしの真の力を！」

「面白い。やってみろ」

さらにユニミテスの足元にも魔法陣が発生。

「さあ、血に飢えた死霊の宴を始めましょう！」

魔力の玉が魔法陣から打ち出され、ユニミテスの頭上に集う。

「魔界粧・黒霊陣！」

魔力玉がユニミテスに降り注ぎ、爆風が辺りを包んだ。

舞い上がった煙が視界を奪う。

「……………」

「……………ふん」

「……………!!」

煙の中には無傷のユニミテスが立っていた。

咆哮が辺りを揺らす。

「もう終わりか？」

「……………そうね。あれがわたしの全力。もう打つ手ないし、煮るなり焼くなり好きにすれば良いわ」

「ようやく無駄な足掻きだとわかったか。では……………」

アイエフの口元が歪んだ。

「なんて、ね」

「いーすんさん、ゲットですよ！」

「何イ!? 貴様アアアアアア!」

「ひいひい!? 逃げるですううう!」

走るコンパ。

追うマジエコンヌ。

直後、マジエコンヌに魔力弾が殺到した。

「ちい! 今度は何だ!」

「流石だな、アイエフ。あの密度の魔力反応なら、転移も楽だったぞ」

マジエコンヌの前に立ちはだかったのはMAGES.だ。

「っ……………おおおおおおお!」

アシユレイが無理矢理剣を引き抜き、MAGES.に攻撃しようとしていた目の前の男を殴り飛ばす。

「……………どうして……………ここがわかった?」

「事前にアイエフから連絡を受けていたのだ。自分の強い魔力反応をキャッチすれば助けに来てくれ、とな」

イストワールを救出し、全員が一箇所に集まることができた。

とは言っても、前方にはマジエコンヌとユニミテス。

後方には正体不明の男。

取る手は一つのみ。

「逃げるぞ、準備は良いか？」

「ああ……」

「ふん、健闘に免じて今回は逃してやろう。そしてアツシユとか言ったか？」

マジエコンヌが女神達ではなく、アシュレイを呼んだ。

「なんだよ……」

「貴様に良いことを教えてやろう」

「何の話だ……!？」

「後ろをよく見るんだな」

「……?」

アシュレイが後ろを振り向く。

そこには変わらず男が立っていた。

「……」

男が半分割れた狐の面を外す。

「……は？」

「え!？」

「嘘……でしょ?」

「フフフ……貴様が貴様を知った時、貴様は絶望せずにいられるかな？」
「……転移、開始」

アシュレイには既にマジエコンヌの声は聞こえていなかった。

光に包まれるアシュレイの視界に最後まで映っていたもの。

それはアシュレイがグレイと呼んでいた人物の顔だった。

第20話 名無しの化け物

「やっとなついたあ……冷たいプリン……」

「プリンってあんた……水じゃないのかよ」

「わたしも、もう一歩も動けないですう」

帰るなりソファに倒れこんだネプテューヌにアイエフが突っ込む。

あの洞窟奥での戦いの後、転移先からしばらく歩きようやくコンパの家に戻って来たのだ。

「流石の私も、もう駄目だと思ったわ」

「我ながら、これだけの人数をよく安全な場所に転移できたものだ」

「……………」

「アツシユさん、大丈夫ですか？」

「……ああ、なんてことはない。敵が……一人増えただけだ」

「グレイ……ルウィーで会った時から胡散臭い奴だとは思っていたが、まさか敵だった

とはな……………」

未だに沈んだままのアシユレイの横で苛立った様子のブランがテーブルを殴りつける。

「……とりあえず何とか逃げ切れたけど、いよいよ本格的にヤバくなってきたわ」

イストワールこそ取り戻したものの、マジエコンヌの手に四女神の力が揃い、その下には魔王ユニミテス。

そしてグレイ。

対してこちらはネプテューヌの力が奪われ戦力大幅ダウン。

詰みも近い。

「はあ……まさか、ネプテューヌがあそこまで聞き分けのない子だったなんて……」

「あれほど、マジエコンヌに力を奪われてはいけないと言っていましたのに……」

「駄女神ね」

「うう……何この言われよう……」

全員からの批難の声にネプテューヌがたじろぐ。

それだけの事をしたのだ。

こうなるのも致し方ないだろう。

「あの……お疲れの所申し訳ありませんが、ことがことなので一刻も早く私の封印を解いて欲しいのですが……」

コンパの腕の中から発せられたイストワールの声にネプテューヌが顔を上げた。よっぽど話を逸らしたかったらしい。

「おー、そうだった！逃げるのに精一杯ですっかりいーすんのこと忘れてたよ」

「そうです！こつちにはいーすんさんがいるです！いーすんさんなら、なんとかしてくれるはずです！」

イストワールをテーブルの真ん中に置く。

「そんじゃ、さつそくー……って、いーすん。封印ってどうやって解くの？」

「鍵の欠片を組み合わせることで、一つの鍵になります」

鍵が出来上がるとなれば、やることは一つ。

御誂え向きにイストワールには本が開かないように大きな南京錠のような物が取り付けられている。

「それを使って、本についてる鍵を外せばいいんだね！」

「立体パズルみたいです」

とりあえず四つの鍵の欠片をテーブルに転がす。

欠片の形は歪だが、幸いピースは少ない。

それほど完成に時間は掛からないだろう。

「えーと、こつちがこうで……こつちがこうでしょ……うー……んー……？」

ネプテューヌがその内二つを手に取り、欠片の凹凸をそれとなく押し付け合う。

「……完成形はわかっているんだ。ピースひとつひとつじゃなくて全体像を考えろ」

「おお、なるほど！ん、じゃあこつちじゃなくて……こつち？」

「そこはここのパーツではないのか？」

「じゃあこつちのパーツは？」

「向きを逆さにすれば、ここと噛み合うはず」

ブランがネプテューヌの手からパーツを奪い取る。

ノワールからもパーツを受け取り、組み合わせた後、ボールにパス。

「そんでもって、これが最後のパーツね」

「あいちゃん、最後は二人の共同作業ですわ」

「ベベベベール様と共同作業お!!」

「良いからさっさとやれ……」

全てのパーツが組み合わさり、手の平大の鍵となった。

「うう……わたしが作ろうと思ってたのに……むー……」

「ごめんなさい、じれったくてつい……」

「じゃあ、ねぶねぶはいーすんさんを解放する係りです。はい、鍵です」

ふて腐れるネプテューヌにコンパを伝って鍵が渡される。

「ありがとうこんぱー！やつぱり持つべきものはこんぱだよね！」

鍵の先を鍵穴に向ける。

「それじゃ、開けるよ！いーすん！」

挿し入れ、捻る。

鈍い金属音の後、錠と鍵が光になって消えた。

「ありがとうございませす、ネプテユーヌさん。そしてみなさん。これで封印が解けました」

ゆつくりと本が開き、光が溢れ出す。

そして出てきた。

「お初にお目にかかります。私がいーすんこと、イストワールです」

一メートルにも満たない人形のような少女が。

「……………」

「おや？どうかしましたか、ネプテユーヌさん？みなさんも…………」

「……………」

「な？」

「なんか期待してたのと違あーうーうー！」

ネプテユーヌの絶叫が部屋に響いた。

.....

「……つまり、それがお前の本当の姿ってわけだな」

「そうなりますね」

ネプテューヌを落ち着かせ、改めて質問したアシュレイにイストワールが頷く。

「いーすんさん、ちっちゃくて可愛いですうー！」

無駄に小さいイストワールの姿はコンパには好評なようだ。

「イストワール。復活してすぐで悪いんだけど、マジエコンヌとあの魔王ユニミテスをなんとかできない？ ついでにネプ子の女神の力も」

「……あれ？ 聞き間違いかな……今わたしがついでだったような……」

「……とりあえず黙ってろ」

「……申し訳ありませんが、私は今の彼女と魔王ユニミテスを止められるような大それた力はありません」

全員の期待を裏切り、イストワールは首を横に振った。

「困るわ。わたしたちはあなたの力が頼りで復活させたのだから」

「もちろん、手がないという訳ではありません。そして、それも含めて皆さんには話さな

ければならないことが沢山あります」

「どうやらイストワールにはマジエコン又達を止める手が何かしらあるらしい。

「では……何から話しましょうか……」

「はい！じゃあわたしが質問するです！いーすんさんは何者なんですか？」

「いきなり直球な質問ね」

手を上げたコンパにブランが突っ込む。

「が、それはこの場にいる全員が気になっていることだ。

「私は、先代の女神様に作られた人工生命体なのです」

「人口生命体!？」

「なんの為にそんなものを？」

「このゲームギョウ界の歴史を記録する為です。女神様達が二度と道を踏み外さないように」

「……悪の女神」

「はい。アシユレイさんの話に出てきた、かつて四英雄が打ち倒した女神のことです」

そしてさらにイストワールは驚くべき事を口にした。

「その悪の女神こそ、皆さんの知るマジエコン又その人です」

「なんですと!？」

「悪の女神は四英雄に倒されたのでは？」

「はい、倒されました。しかし消滅には至らず、四女神の力で先ほどのあの場所に封印したのです」

あの魔窟の奥にあった場所は本来マジエコンヌが封印されていたそうだ。

「しかし何者かが彼女の封印を解き、代わりに私が封印されてしまいました」

「封印を解いたのは誰なの？」

「わかりません。ですが恐らく、私を封印した人物と彼女の封印を解いた人物は同一の者と思われれます」

イストワールはマジエコンヌの復活を知り、单身あの場所に乗り込んだ結果、罠にかかり封印されてしまったのだ。

「封印を解かれ、自由になったマジエコンヌはあなた方生まれたての女神たちを仲違いさせ、争わせました」

「女神の力を手に入れるため……って訳か」

「かつてマジエコンヌがなぜモンスターを作り出して人々を襲わせたのか、そして現在の彼女が何の為に力を集めているのかはわかりません」

「どんな理由があろうとも、私たちの世界を渡すつもりはないわ」

これでイストワールとマジエコンヌに関する情報は粗方集まった。

「次は、ユニミテスを倒す方法を教えて」

「方法は簡単です。あの魔王は私に記録されていた人々の魔王の記憶を媒体に作られました」

「人々の記憶……もしかして……!」

「はい。人々の中にある『魔王ユニミテス』の存在を『弱いもの』に書き換えれば良いのです」

「つまり、あのデカブツを雑魚だと信じ込ませれば本物のあいつも弱体化するって訳か」
人々の記憶から作られたモンスターという魔王の存在を逆手に取る作戦のようだ。

確かに、これなら案外楽に魔王を倒せるかもしれない。

「けど、どうやって人々の記憶を書き換えるですか?」

「向こうはユニミテスの使いをつかって、長い時間をかけて偽りを広めた」

「そんな状態で街中で暴れられでもしたら、手遅れになる可能性もあるな」

「けどさ、それしか方法がないなら、ダメでもやってみようよ!ダメだったら次を考えればいいだけでしょ?」

「……そうね。こればかりはネプテューヌの言う通りだわ」

幸いにもこちらには四人……今は三人だが、女神がいる。

発言力に関しては最高峰だろう。

「ところでネプテューヌさん。以前約束したことなんですが……」

「約束？わたしーすんと約束なんてしたっけ？」

「……いつまでたつても言わないから薄々感付いてはいたが、お前自分の旅の目的忘れてただろ……」

ネプテューヌ、コンパ、アシユレイの三人で旅を始めた時の目的。

それはもちろんネプテューヌの記憶に関することだ。

「そういえばそんな約束してたね」

「ネプテューヌさんさえ良ければ、今すぐにも記憶の修復を行いますよ？」

このゲームギョウ界に生きる人々一人一人の記憶すら記録しているイストワールなら、ネプテューヌの記憶を修復するなど訳ないだろう。

「あー、それパス。やっぱあの約束なし」

しかしネプテューヌはあっさり自分の旅の目的を捨てた。

「どうしてですか、ねぶねぶ。せっかくいーすんさんが治してくれるですよ」

「そうよ。その為にいままで頑張ってきたんじやない」

「見ず知らずの私に助けを求めるほど取り戻したいのではなかったのか？」

「んー……確かにそうなんだけど、取り戻しちやダメな気がするんだ」

コンパとアイエフに説得されるが、ネプテューヌの気持ちは変わらない。

「どうしてよ?」

「だってわたしがこうやってノワールたちとお友達になれたのって、ノワールたちが憎いっていう記憶がなかったからだと思うんだ。もし、わたしが記憶を取り戻しても今までどおりノワールたちと付き合えるか……正直不安なんだよね」

「ま、んなこつたらろうと思つたよ」

アシユレイがやれやれと首を振る。

「確かに、ネプテューヌのおかげで今わたしたちはここにいる」

「バラバラだったわたくしたちをネプテューヌが結びつけたと言つても過言ではありませんわね」

「そういうことー!」

「ネプテューヌ、あなたの本心はどうなの?」

納得のいかない様子のノワールがネプテューヌと向き合つた。

「さつきから聞いてれば私たちのことばかり気遣つて、あなたは本当にそれでいいの?」「気遣つてくれてありがとうノワール。けど、わたしの本心も変わらないよ。せつかく仲良くなったノワールたちとは楽しい思い出ばかりなのに、今更何百年も憎みあつてた戦いだけの記憶なんていらぬよ」

大きくため息を吐いたノワールが少しだけ笑う。

「……まったく……あなたらしいわね」

「そういうことだから、いーすん。せっかく治してくれようとしたのに、ごめんね」
「いいんです。ネプテューヌさんが自らそれを選んだんですから」

最早この場にネプテューヌの意思に反対する人物はいなかった。

「……さて、次は俺の番だ」

「あれ、アツシユもなんかいーすんと約束してたっけ？」

「俺の体についてだよ。というかそれがなかったらお前らの旅になんざついていかなかったっての」

「……………」

アシュレイがその話題を出した直後、イストワールの様子がおかしくなる。

「…………イストワール？」

「どったのいーすん？お腹でも痛い？」

「わかりました。覚悟が出来たらついてきてください。外で待っています」

「は？…………おい！」

アシュレイの制止を聞かず、イストワールは窓から外に飛び出した。

「なんだってんだ…………」

「場所を移した…………ということは他の人たちには聞かせられないことなのでしょうか

「？」

「……………」

劍を背負い、ドアノブを捻る。

「……………少し待ってろ」

「行つてらっしゃーい」

ネプテューヌの声を背中に受けながら、アシユレイが扉を開けた。

……………

すっかり暗くなった外に出れば、すぐにイストワールの声がアシユレイの耳に届いた。

コンパの家の裏に足を踏み入れる。

案の定、イストワールはそこにいた。

「……………こんなところに呼び出してどうするつもりだ？」

「……………」

イストワールは俯いたまま一言も話さない。

「……………別に元の体に戻れなくてもいいさ。苦勞はあるが、上手く付き合っていく」

「アツシユさん……」

アシュレイの足元から黒い炎が吹き出し、男の姿になる。

「だから教えてくれ。俺の体がどうなってるのか、この力はなんなのか、どうしてこんな体になったのかを」

「……わかりました」

アシュレイの言葉にイストワールに決意を固めたようだ。

「……単刀直入に言います」

「……………」

「この世界のアシユレイという存在はすでに死んでいます」

「……………は？」

理解できなかつた。

「おい、どういう意味だよ……」

「そのままの意味です。もうこの世界にアシュレイという人物は存在しないのです」

「ふざけるな……！俺は確かにここに……！」

「はい。確かに『あなた』はここに存在しています」

「意味わかんねえんだよ！はつきり言いやがれ！」

怒りがこみ上げるのにそれほど時間はかからなかつた。

「あの日、アシュレイさんを襲ったモンスターの事は覚えていますか？」

「当たり前だ……！」

「では、そのモンスターに取り込まれ、体内でガスを吸わされた事も？」

「何が言いたい……!?!」

「お願いします。答えてください」

歯を食いしばり、目の前の小さな体を掴んで怒鳴り散らしたい衝動を抑える。

「……ああ、そうだ。そのガスのせいで俺は……!」

「違うんです」

イストワールが静かに首を振った。

「アシュレイさんが吸ったガス……あれはただの麻酔ガスだと思われませう」

「そんなわけない! だったらなんで俺はこんな体に……」

「あのモンスターはまずアシュレイさんにガスを吸わせ、意識を失わせました」

声を遮り、イストワールが話を続ける。

「まず……だと……!」

「そしてモンスターはアシュレイさんの体を溶かし、自分の体と混ぜ合わせました」

最早訳がわからない。

混ぜ合わせる?

何のために?

「肉体的にも精神的にも高度に融合したモンスターは、アシュレイさんの記憶を頼りに姿を変えました」

イストワールの小さな指がまっすぐ前を指差す。

「それが、今のあなたです」

「俺……!?!」

「アシュレイさんはモンスターと融合し、別の存在へと『生まれ変わった』のです。故に先ほど、アシュレイという人物がもうこの世界に存在しないと云ったのです」

目の前が真つ暗になりそうだった。

全身を氷細工の槍で刺されたような錯覚に陥り、気を抜けばその場に倒れかねない。

「あなたの不思議な力も全てこれで証明できるのです」

「じゃあ……細胞変異の力は……?」

「融合前のモンスターが持っていた自由に姿を変えることが出来る能力の副作用です」

「この姿になる時のあの黒い炎はなんだよ……?」

「あれはアンチエナジー……あなた方が汚染物質と呼んでいたものが急速に集合して炎に見えていただけです」

汚染物質……グレイは人の負の感情が粒子化したものだと言っていた。

本名の名称はアンチエナジー。

シエアエナジーと同等にして対極の存在。

「原理はわかりませんが、あなたには周囲のアンチエナジーを操作、吸収する能力があるようです。あなたの変身も、モンスターに発生する汚染化と原理は同じです」

「じゃあ……あのリーンボックスでのことは……？」

「キャパシティーを超え制御不能となったアンチエナジーの負の感情に取り込まれ、暴走したのが原因です」

「モンスターやエネミーディスクのことは……」

「モンスターはアンチエナジーの集合体です。そしてエネミーディスクはモンスターを作り出すためにアンチエナジーを溜め込みます。それらが影響していたのでしよう」

「……………」

『彼』は何も言えない。

不可解なこと全てに説明が出来るのだ。

唯一アンチエナジーの操作に関しては詳しくわからないが、それがどうこうしたとて結論は何も変わらない。

「……………理解……………してくれましたか？」

「……………」

ふと、ある考えが『彼』の頭をよぎった。

そしてそれは瞬く間に『彼』の全てを支配した。

「ちよつと待てよ……………」

「まだ理解仕切れませんか？」

「じゃあ、俺は何だ……?」

「はい?」

この言葉にはイストワールも疑問符を浮かべた。

「アシュレイが死んで……俺はアシュレイじゃない……なら俺の頭の中にある『アシュレイ』の記憶はなんだ?」

「え? 体は元のアシュレイさんではなくっているというだけで内面……精神や記憶はあなたのままで……」

「そんなこと証明出来ないだろ……!」

黒いシミはその範囲を広げていく。

「俺は今の今まで自分を『アシュレイ』だと思って行動してきた……けどそれはただの勘違いで、本当はモンスターに命令された事を自分の意思だと思い込んでただけなんだろう!」

自分の考えや意思は全て『彼』の体を構成するモンスターの意のまま。

思ったこと、感じたことも全て。

そこに『彼』の自由意志など存在しない。

まるで操り人形。

今までの自分を全て否定されたのだ。

「俺は生前の『あいつ』の真似事をしてるだけの人外……モンスターなんだろう！」

「ち、違います！あなたはモンスターなんかじゃ……」

「いや、違わない。アンチエナジーとか言ったか？それを取り込んで強くなるなんてまさにそうじゃねえか！」

溢れ出したものは、もう止められない。

「それに、俺の女の姿は『あいつ』の記憶を漁って作られたんだよな！じゃあ俺の記憶なんざいくらでも弄り回せるってことじゃねえか！」

「あ、アツシユさん！落ち着いてください！」

『『あいつ』を取り込んだモンスターが勝手に作った記憶とやらがいくつ俺の頭に仕込まれてるかもわかりやしねえ！もしかしたらこの体になってからの事も全部『俺』の都合のいいように記憶されてるのかもな！』

そこにふらりと影が訪れる。

「俺は……奴らと同じ……モンスターだ！」

「……アツシユが……モンスター……？」

声に振り向く。

そこにはネプテューヌが立っていた。

「ネプ公……」

「ね、ネプテューヌさん! どうしてここに!？」

「……二人とも遅かったから……迎えに……」

動揺を隠しきれしていない。

「ねえ、いーすん……アツシユがモンスターだなんて……嘘だよね……?」

「そ、それは……」

違う。

そう言い切れないほど『男』の存在は奇妙だった。

「なんで……なんで違うって言ってくれないの?……なんで……」

「……………クソツ!」

「あ、アツシユさん!」

「アツシユ! 待ってよ!」

『男』は背中に羽を生やし、空へと飛んでいく。

「そうだ、変身して……って変身出来ないんだっ!」

慌ててネプテューヌが『男』を探すが、既に日も落ちた空に『男』の姿は見つけられなかった。

「ごめんなさい、ネプテューヌさん……私がアツシユさんを混乱させたばかりに……」

「アツシユ……」

それから、アシユレイは行方不明となった。

第21話 存在の証明

「はあ……はあ……」

プラネテユーヌの街を走る。

「ネプ子！」

「……あいちゃん！」

後ろからアイエフに呼びかけられたネプテユーヌが足を止める。

「見つけた？」

「ううん、どこにもいない……」

「あーもう！こんな大事な時にどこほつつき歩いてるのよ、あのバカ！」

アシユレイが姿を消してから既に一週間が経過している。

かたつぱしからホテル、飲食店、病院、ギルドなどを回り、見ていないか探しているがどこにもいないのだ。

ノワールたち三人も念のため自分の国に戻り、アシユレイを探しているが見つからない。

「これだけ探しても見つからないなんて……」

「……アツシユ……」

思わずネプテューヌが俯く。

「……ネプ子、今日はもう帰りなさい」

「あいちゃんは どうするの？」

「……わたしはもう少し探してみる。それじゃあね！」

アイエフが再び走り出し、プラネテューヌの街に消えた。

その場に一人残されたネプテューヌは足を休める為に近くのベンチに座る。

『俺は……奴らと同じ……モンスターだ！』

「……アツシユは……モンスターなんかじゃ……」

一人呟いた言葉は人混みに紛れて消えた。

……

剣を振るう。

「はあ……はあ……」

切り裂かれたモンスターが光になって消える。

「ふん！」

地面に剣を突き立て、飛びかかってきたモンスターを龍の腕で掴み、握りつぶした。指の隙間から光が漏れる。

「あああああ！」

その腕を力任せに振るえば周りのモンスターを吹き飛ばし、叩きつければ地面が揺れた。

「逃がすか……」

背を向け、その場から逃げ出すモンスターの足を左の鳶の腕で掴み寄せる。

「死ね……」

右腕が鋼鉄に変化。

引き寄せたモンスターの腹部を貫く。

醜い叫び声を上げながらモンスターが消えた。

「……………」

両腕を元に戻し、刺した剣を引き抜く。

隠れていた一体が背後から襲いかかってきた。

「……………」

直後、背中から剣山のように無数の棘が生え、モンスターを串刺しにする。

棘を元に戻すと同時にモンスターは変わらず光になった。

「なに……やっつてんだろうな……」

『男』は木に背を付け、その場に座り込む。

この一週間、ほぼ不眠不休無飲食で戦い続けていた。

何体殺したかは四桁を超えてから数えていない。

人間ならば倒れるどころか死んでいる。

しかし『男』は死ななかつた。

死ねなかつた。

空腹や喉の渴きは最初の2日だけ。

それ以降はまったく感じなくなつた。

おそらく体そのものが食事や睡眠を必要としない体になつたのだろう。

「……………」

????
ア ッ シ ュ

「っ！」

????
ア ッ シ ュ

声は聞こえなくなった。

代わりに辺りに新たな気配。

「……………いいぜ、来いよ……………こっちは今すつごく機嫌が悪いんだよ……………！」

剣を構えれば、また無数のモンスターが襲いかかってきた。

……………

「伝説の武器？」

「はい。この前は言いそびれましたが、マジエコンヌを倒す為の唯一と言っていい方法です」

現在、コンパの家にはいつものメンバーにMAGES.を加えた7人が集まっていた。

もちろんこの場にアシュレイの姿は無い。

テーブルの上には以前伝承について調べてくれると言った教会職員が纏めた資料が並べられている。

少し前に置いていったらしい。

「伝説の武器ってなんなんですか？」

「伝説の武器ってというのは、かつて四英雄が悪の女神のいる天界への道を開くと同時に、災厄を振り払った……つまり悪の女神を倒した武器のことよ」

「伝説の武器は女神の天敵とも言える存在です。悪の女神との戦いの後は、悪用されないよう各国に祀られています」

「つまり各国に一つづつ存在する伝説の武器を全て集めれば、マジエココンヌを止める事ができる。」

「祀られている詳しい場所はわからないの？」

「わからないことはないですが、調べるのに3日かかります」

「3日もかかるの!?!」

「これなら、ググった方が早そうだな」

3日も待つていればマジエココンヌが動き出してしまう。

のんびりしている時間はもう残されていないのだ。

「すみません。歴史の全てを確認していると、自然とそれだけの時間がかかってしまうのです」

「じゃあ、しばらくは自分たちで伝説の武器を探しつつ、アツシユの搜索を続けましょ」
「せっかくプラネテューヌまで来ましたし、今日はわたくし達もプラネテューヌでアツシユさんを探しますわ。いいですよね、ネプテューヌ?」

「……………」

「ネプテューヌ、聞いてるの?」

「ねぷっ!? な、何? どうしたの?」

一言も話さなかったネプテューヌが慌てたように顔を上げる。

「だから、今日は私たちも一緒にアツシユを探してあげるっていつてるのよ」

「ほ、ホント!? ありがとう、ノワール、パール、ブラン!」

「……無理に笑わなくてもいいんですよ?」

「なんのこと? えつと……わたし、アツシユ探しに行ってくるね!」

「ちよつと、ネプテューヌさん!」

逃げるようにネプテューヌがコンパの家を出ていった。

「ネプテューヌ……」

「シヨックなのはわかるし、心配なのもわかるわ」

「けど、何をあんなに焦ってるのかしら……」

「……ネプテューヌさんがあなつたのも、アツシユさんが居なくなつてしまつたのも、
全ては私のせいなのです」

「いーすんさん?」

「……その話、詳しく聞かせて」

今日この日まで、ノワールたちは『彼』のことを知らなかった。

「嘘でしょ……」

「アツシユが……」

「……のんびりしている場合ではありませんわね」

最初に立ち上がったのはベールだ。

「わたくしも探しに行つてまいりますわ！」

「ベール様！わたしも！」

アイエフもそれについていく。

「では、私も動こうか」

「わたしもお手伝いするです！」

MAGES. とコンパ。

「わたしも行くわ……」

「……もう、みんなわがままなんだから！」

続けてブランとノワールも探しに出て行つた。

「……アツシユさん……どうかご無事で……」

残つたイストワールが呟いた。

.....

「.....」

夜、『彼』はプラネテューヌから西の森を越えた先の崖に立っていた。
下は海だが、その手前には岩が積み上がっている。

「.....」

こんなところまで来て、することなど一つしかない。

「これは.....持っていていけない」

背負った剣を地面に突き刺す。

つぎはぎだらけのコートを脱ぎ、剣の柄に引つ掛ける。

「.....」

一歩踏み出す。

崩れた小石が落下し、岩とぶつかり砕けた。

「.....俺も.....あいつらみたいに消えるんだろうかな」

これまで散々見てきたあの光。

ここから飛べば、『彼』もその光を放つのだろうか。

残念ながらその光を『彼』が見ることはない。

「…………ふう…………」

息を吐き出し、後ろを向く。

前からだと、反射的に身を守ってしまうかもしれないからだ。

後は後ろに倒れるだけ。

しかしそれは出来なかった。

「やつと…………見つけた…………」

「…………何をしに来た」

目の前には十字キーのような髪留めを付けた少女が立っていた。

「アツシユ…………みんなのところに帰ろう？」

「俺に名前はない…………帰る場所も…………意思も記憶も…………」

「でも…………」

一歩踏み出したネプテューヌの頬から血が流れ出す。

背後の木にはいつの間にかナイフが突き刺さっていた。

「それ以上近づくな」

「っ……………」

「俺は人間じゃない…………俺といれば、いつか必ず後悔することになる」

「…………後悔したっていい。わたしは…………」

「黙れ！」

叫ぶ。

「帰れって言ってるのがわからないのか！そんなに死にたいのか！」

「わたしの知ってるアツシユはなんの理由もなく人を傷つけたりしない！」

「そんな奴はもうこの世にいない！死んだんだよ！」

「死んでなんかない！ここにいろよ！」

「っ！」

ネプテューヌの喉に何かがぶつかった。

足元にはナイフが転がっている。

さつき当たったのはナイフの柄だ。

「次は当てる……さつきと帰れ……！」

「……………」

「……俺は、この世界に必要な存在なんだ……最期くらい……一人にしてくれ」

「……嫌だ……」

俯いたネプテューヌが呟く。

「ここまで一緒に頑張ってきたのに！こんなのが最後だなんて！そんなの嫌だよ！」

「駄々をこねるな……俺は人間じゃない……モンスターなんだ。いつか必ずお前らを傷

付ける」

「それでもいい！一緒に居たいよ！」

ネプテューヌが歩を進める。

ナイフの柄に手を付けるが、何故かそれ以上動けない。

「たとえモンスタードったとしても、アツシユには死んでほしくない！」

「……………っ！」

「わたしは……………ううん、わたしだけじゃない……………ノワールも、ベールも、ブランもあいちゃんもこんぱもみんなみんな！」

ネプテューヌの小さな体が『男』を抱き締める。

「みんな……………アツシユのことが大好きなんだよ!？」

「……………」

「お願いだよ……………死ぬなんて言わないで……………」

『男』の震える両手がネプテューヌの肩に。

そのまま突き飛ばす。

「それでも俺は……………お前と一緒ににはいられない……………」

傍のコートと剣を手に取り、尻餅を着いたネプテューヌの横を通り過ぎる。

「あばよ……………ネプ公……………」

声の主は暗い森の中に消えて行った。

一人残されたネプテューヌは後を追うことも出来ない。

「……………うう……………ひつく……………なんでき……………なんで……………えぐつ……………」

栓を切ったように溢れ出したそれは冷たい土を湿らせた。

「ネプテューヌさーん！」

「っ!？」

不意に聞こえた自分を呼ぶ声に急いでそれを引つ込める。

「……………いーすん!こっちだよ!」

「ネプテューヌさん!どうしてこんなところに?」

「そんなのどうだっていいでしょ!それよりなんか用事?」

「はい、実は……………」

……………

「各国に女神の偽物!？」

今朝の7人は再びコンパの家に集まっていた。

「はい。どうやらマジエコンヌはその偽物に英雄の武器を破壊させるつもりのように

す」

「不味いわね……先手を打たれた……」

「けど、これで英雄の武器がある場所はわかったも同然。これはチャンスよ」

「偽物の後を付け、英雄の武器の場所まで案内してもらおうわけですわね」

偽物の後を付ける作戦が成功すれば、イストワールが検索を終える3日後より早く伝説の武器を集められるかもしれない。

「けど、モタモタしてたら偽物を見つげる前に破壊されてしまうわ。ここはパーティを分けましょう」

「そうですね。今回ばかりは全員で各国を回る訳にはいきませんし……」

「となれば、女神化が出来ないネプテューヌに人数を割いて、わたしたちは一人で偽物を倒しましょう」

「当然よ。私たちが偽物なんかには負けるわけじゃないじゃない！」

「それが最善の策ね。ネプ子、良いわよね？」

アイエフが黙ったままのネプテューヌに同意を求めるが、当のネプテューヌは黙ったまま。

しかし今回は話を聞いていなかったわけではなく、なにやら悩んでいるようだ。

「うー……ん」

「何よ？文句あるの？」

「んー……ある！」

「はい!？」

「では、ネプテューヌはどのような割り振りが良いんですの？」

「……先に言っておくけど、この場にはいない人は頭数に入れちゃだめよ」

「大丈夫だよ、ブランー。さすがのわたしもそんなことしないよー！」

釘を刺したつもりブランにネプテューヌはいつも通りの笑みを浮かべる。

「えっとね、ノワールたちが自分の国に行くのは変わらないんだけどね」

「まあ、当然よね」

「で、MAGES. はノワールのお手伝いに行つてあげて！」

「ふむ、構わないが……それだけか？」

「そんなもつて、あいちゃんがベールのところで、こんぱもブランと一緒に行つてきて！」

ラストイションにはノワールとMAGES.。

リーンボックスにはベールとアイエフ。

そしてルウィーにはブランとコンパ。

各国に二人ずつ分配するようだ。

しかしこれには大きな問題がある。

国は四つ、頭数は七。

余った一人は……。

「馬鹿ネプ子！それだとあんたが一人で偽物の相手しなくちゃいけないじゃない！」

「そうです！今のネプテューヌさんには女神の力はないんですよ！」

「それにもし一人のところをマジエコンヌに狙われでもしたら……」

全員から猛反発を受けるが、ネプテューヌはいつも通りだ。

「大丈夫大丈夫！一人で無理なんかしないし、女神の力のないわたしはマジエっちにもノーマークでしょ！」

「でも……」

「みんな心配性だなー。そんなに心配なんだったら自分の偽物をパッと倒してプラネテューヌに戻ってきてよ！」

「ネプテューヌ……」

「ほらほら、モタモタしてたら偽物に英雄の武器を壊されちゃうよ！」

「……わかったわ」

以外にも最初に頷いたのはノワールだった。

「ノワール……!?!」

「私は自分の偽物を速攻で倒してネプテューヌの援護に行く予定よ。ま、あなたたちに

は出来ないでしょうけど」

「……んだと!？」

「……そこまで言われて黙っていても女神の名が廃りますわね」

ノワールの挑発にブランとベールが乗せられる。

「そうと決まれば早速参りますわよ! あいちゃん!」

「え!? あ、はい! それじゃあ、行ってくるわ!」

嵐のようにベールとアイエフの二人が出ていった。

「おいコンパ! わたしたちも行くぞ! 何がなんでも二人より先に偽物を倒してやらあ
!」

「ぶ、ブランさん!?! 目が怖いですう……!?!」

コンパがブランに引きずられるように出て行く。

「では、そろそろ私たちも行くぞ」

「……ノワール」

「なによ、こっちは急いでるんだけど」

「……ありがとう」

「……後で美味しいもの奢りなさいよね」

それだけ言ってノワールとMAGES.も後を追うように出ていった。

残ったのはネプテューヌとイストワールの二人。

「……行つてしまいましたね」

「そうだねー……なんかお腹空いてきちゃったなー」

「こんな時に何を言っているんですか……」

「いいじゃん！ お腹空いたんだもん！ そうだ、いーすん。コンビニでなんか買ってきてくれない？」

「自分で買いに行けばいいじゃないですか」

「わたしは、いーすんが買ってきたものが食べたいな？ なんちやつてー！」

「……わかりました。適当になにか買ってきます」

「プリンもよろしくねー！」

イストワールもコンビニへ行き、ネプテューヌだけが残った。

「……そんじゃ、わたしも頑張っちゃおうかな！」

そして、コンパの家は無人となった。

……

「……………」

薄暗く、埃っぽい部屋。

窓からは月明かりが差し込む。

ベッドには死体のように動かない人影があつた。

「俺は……」

手にした写真立ての中には四人の人物が写っている。

しかしその人物達はそれを眺める『男』とは別人だつた。

「……」

この家がかつて『男』が『アシュレイ』だつた時に住んでいた場所だ。

現在は一人しか住んでおらず、その住人も滅多に家に戻らないため、半分空き家のようになつていた。

とは言つても、その最後の一人の住人も死んでしまつたが。

「よつと……うわ、きつたね」

木の軋む音と共に部屋の扉が開かれた。

「……やっぱりここにいたか」

「……」

入ってきたのは青い髪にゴーグルを付けた女。

『アシュレイ』の幼馴染だつたシアンだ。

「なにしてんだよ、こんなところで」

「……俺が……知りたいね」

シアンはつかつかと歩み寄り、『男』の隣に座る。

「……なんか、昔を思い出すな」

「……」

「1年前、あいつが死んで……お前も抜け殻みたいになっちゃって……」

「それは『アシユレイ』だ」

「……なんだって？」

「今の俺に……名前はない……名無しの……モンスターだ……」

「……」

暫く沈黙が続く。

「んー……いや、やっぱりお前はアツシユだ」

「違う……『あいつ』はもう死んだ」

「だったら、お前をその『あいつ』だって思い込ませてくれ」

「……どういう意味だ？」

シアンの言葉は今の『男』には理解出来なかった。

「『あいつ』の姿で、『あいつ』の声で、『あいつ』みたいな事をしてる……お前以上に『あ

いつ』に似た奴なんか絶対いない」

「……俺はモンスターだ」

「人間じゃなかったら何がいけないんだ？」

「なんだと……？」

「『機械の価値は密度で決まる』……『あいつ』の親父さんの言葉だ。意味、わかるよな？」

皮ではない。

大切なのは中身。

「お前は、わたしの工場を命がけで守ってくれたし、お前のおかげでわたしは今もこうやって仕事を続けられる」

「……………」

「『あいつ』じゃない。『お前』に助けられた奴はわたし以外にも沢山いるはずだぜ？」

シアンは『男』の言葉の全てを否定し、同時に『男』の存在全てを肯定した。

「シアン……教えてくれ……俺は……なんなんだ……？」

「……少なくとも、お前はわたしの命の恩人。ついでに、幼馴染のそっくりさんってところだな」

「……………」

「さつき、ノワールが来たよ」

「ノワールが？」

「アツシユを見かけたら、伝えてくれたってな。けどあいつはもう死んでるらしいし、代わりにお前に伝える」

一呼吸置いて、再びシアンが口を開く。

「腐れ縁の奴が危ないってな」

「あいつが……」

「……いつてやれ」

シアンが『男』の背を叩くが、『男』は動かない。

「まだ踏ん切りつかないか？」

「……」

「だったら、半年前に言いそびれたことを言っただけや」

「半年前？」

「『あいつ』の親父さんから、知り合いが悩んでたら言っただけや」

「なんだよ……それ……」

「『やりたいことをやれ』……だとき。そのまんますぎると思わないか？」

「……そうだな」

二人が少しだけ笑い合った。

「……けど、わたしはこの短い言葉に親父さんの全部が詰まってる気がするんだ」

「……………」

「お前のやりたいこと、やりに行けよ」

「……俺の……やりたいこと……」

立ち上がり、傍にあつた誰かの形見の剣を背負った。

窓を開け、縁に足をかける。

「……なあ、シアン」

「どうした？」

「俺には名前が無い。お前が……付けてくれ」

それを聞いたシアンがニヤリと笑った。

「アシュレイ……それがお前の名前だ」

「……アシュレイ、か……いい名前だ」

「だろう？」

「……行つてくる」

埃を撒き散らしながらアシュレイは空へ飛びたつた。

「おいおい、もう少し静かに行けないのかよ……」

言いながら、地面に転がった写真立てを拾い上げ、テーブルの上に戻す。写真立ての中の四人はみんな笑っていた。

.....

「はあ……はあ……」

走る。

目指すはプラネテューヌ。

「……おい……『俺』はもっと早く走れないのかよ……!」

自分のようで自分ではない自分に文句を言う。

「もっと早くだ……もっと……!」

????
アツシユ

「こんなもんじゃねえだろ!おい!」

????
イコウ

「ああ……！行くぞ！『俺』！」

いつの間にかアシュレイは黒い豹の姿になり、四つの脚で走っていた。朝日がアシュレイの黒い毛を照らす。

……

「てやあああ！」

ネプテューヌが剣を打ち合う。

相手は自分。

女神。パールハートの姿をした偽物。

「よいしょおー！」

剣を弾き飛ばす。

腕をかち上げられ、偽物が隙を晒した。

が、そこを攻めることは出来ない。

「あつぶなあ?！」

サイドから攻撃してきた偽物の対処に追われていたからだ。

攻撃を受け止めるとさらに背後から殺気。

「いっいっいっ!」

剣を流し、同時に横に転がって背後から振り下ろされた剣を回避した。

急いで立ち上がり、剣を構え直す。

「いやー……ここまで自分の顔が沢山あるときさすがのわたしもドン引きだよ……」

現在ネプテューヌは四方八方を偽バールハートに囲まれていた。

一体一体はそれほど強くなく、こんな状態でも数体は倒すことは出来たのだが、敵は現在進行形で増殖しておりそろそろ取り返しがつかなくなってきたところだ。

「うーん……無理して一人でくるんじゃないかな……つと、そんなこと考えてる場合じゃないね!」

前方から二人が迫る。

「よ……」

ネプテューヌはそれに怖気付くどころか前進。

剣を逆手に持ち替え、一体の攻撃を受け流すと同時にもう一体の武器を絡め取って奪う。

「しよつとー!」

二人のちょうど間をすり抜けたネプテューヌが振り返りざまに奪った剣でなぎ払い。

その一撃で二人の偽物が同時に光になって消えた。

「それー！」

奪った剣を集団に投げる。

避けきれなかった偽物が胴を貫かれて消えた。

今度は三方向から三人。

「おりやりやりやりやー！」

それに対してネプテューヌはその場で回転しながら全ての攻撃を弾き、流し、受け止める。

「隙ありー！」

首を狙った一撃をしゃがんで回避しつつ一体に足払い。

左手で浮かんだ足を掴む。

「でりやあああー！」

そのまま回転し、残りの二人を巻き込んで投げ飛ばす。

「32式エクスブレイド！」

落下地点に魔力で形成した巨剣を落とす。

爆風に巻き込まれて落下地点の近くにいた偽物達も巻き込んで消滅させた。

「いっ！？」

劍を背中に付けるように背後に回す。

直後、強烈な衝撃がネプテューヌを襲った。

左足を前に出し、なんとかその場に踏ん張る。

しかしその判断は間違이었다。

前方からもう一人。

劍はすでに振りかぶられている。

「あー……やば……」

すでに踏ん張っている足の力を抜いて移動なんて事は出来ない。

劍は背中で前に構え直す時間なんて存在しない。

苦し紛れに空いた左腕で頭を庇った。

「邪魔するよ」

不意に聞こえた声。

来るはずだった痛みは無い。

ネプテューヌがゆっくりと目を開ける。

「やれやれ……同じ顔ばかりで気色悪いな」

つぎはぎだらけのコート。

短い黒髪。

奇妙な剣を手にした男がネプテューヌの前に立っていた。

「待たせたな」

「……おせーよタコ！……だっけ？」

その人物は間違いなくアシユレイだった。

二人が剣を構え直し、背中を合わせる。

「……ネプ公」

「ん」

「このしばらく、色々考えた」

「……」

「考えた……けど、やめた」

「やめた？」

「何も変わってなかったんだよ」

肩越しに視線が交差する。

「俺は、俺のやりたいことをやるだけだ。俺が何なのか、なんてのは抜きでな」

「……そっか」

「けど、正直お前の前に立つのはもう飽きた」

「……」

「だから……」

アシュレイが思う今のネプテューヌへの感情。

それはもう保護ではない。

「背中……任せろ」

信頼だ。

「……そこまで言われちゃネプ子さんもやぶさかじゃないよ！」

二人の視線は再び前に。

もう背後を見る必要はない。

「行くぞ、ネプ公」

「行くよ、アッシュ」

二人の踵がトンとぶつかり、その足が地面に着くと同時に二人の姿がかき消えた。

「おおおおお！」

「それぞれー！」

集団の中に突っ込み、剣を振り回す。

瞬く間に包囲網は崩れ、半ば乱戦のようになっていた。

「遅いつてのー！」

アシュレイが背後からの突きを逆手に持った剣を後ろに回して防ぐ。

そのまま足を後ろに振り上げ、上空に蹴り飛ばし。

「そらよー！」

同時に飛び上がり、龍の腕で叩き落とした。

そして剣を上段に構える。

「バーンダイブ！」

着地と同時に剣を振り下ろせば、あたりを爆炎が包んだ。

「よいしよおー！」

ネプテューヌが相手の剣を上空に弾き飛ばし、武器を失った偽物を横一閃で切り捨てる。

「はい後ろー！」

剣を逆手に持ち直し、背面突き。

防ぐことも出来ず、偽物の一体が消滅した。

そこに全方位から偽物が殺到。

「ところがそう上手くはいかないんだなーこれがー！」

弾き、上空に飛ばされていた偽物の剣が落下してくる。

それを掴み、回転。

二本の剣で防ぐと同時に切る。

「んー、今度から二刀流にしようかな？」

そんなことを言うネプテューヌの周りには偽物が多数倒れていた。

「ネプ公！」

アシュレイの呼びかけにネプテューヌが振り向く。

アシュレイがネプテューヌの方にまっすぐ走ってくる。

「オツケー！」

理解したネプテューヌもアシュレイに向かって走る。

アシュレイが剣の切っ先を地面に付け、大きく一步を踏み出すと同時にネプテューヌが跳んだ。

「そら……」

「よつとー！」

ネプテューヌの下をくぐったアシュレイがネプテューヌの背後に迫っていた偽物を切り上げる。

そしてネプテューヌもアシュレイの背後の偽物を縦真一文字に切り裂いた。

「……きりがないな」

再び背中を合わせる。

「こういう偽物は、本体を倒すと全部消えるっていうのがセオリーだね！」

「その本体はどこだよ」

「奥で動かないやつだよ！」

アシュレイが視線をずらすと、集団の奥に一体だけ孤立している個体が見えた。

「……行つて！」

ネプテューヌは本体の相手をアシュレイに任せた。

つまり今二人を囲んでいる偽物達を全て自分一人で相手をするということだ。

一見無謀にも思える。

「……任せた」

「任された！」

しかしアシュレイはネプテューヌを信じる。

信じて、走る。

「さあ来い！」

剣を構え直したネプテューヌに何度目かわからない剣が振り下ろされた。

「退け！」

目の前に立ち塞がった偽物達を切り捨てながら前に進む。

そしてようやく本体の目の前にたどり着いた。

「……悪いが、倒させてもらう」

「……………」

「何も言うことは無いってか……………」

向かい合った二人が静かに剣を構える。

「……………」

「……………」

先に動いたのは偽物の方だ。

袈裟切り。

「ふんー」

剣を受け止め、すぐさまカウンター。

しかし相手も負けじと受け止めた。

お互いが剣を打ち合う。

それはだんだん速さを増していき、やがて剣をぶつける音が一瞬たりとも途切れることがなくなった。

そして終わりは一瞬。

「ああー」

「……………」

ひととき大きな音を響かせ、衝撃で後ずさりながらも体制を整える。

「フォーム・ドライ！」

SSSが駆動。

一瞬で大鎌と変形したそれを構え、距離を詰める。

「……………」

袈裟切り、反転して殴打、抉るような切り上げ、振り下ろし、踏み込んで切る……と見せかけて刃を敵の背後に回し、引き寄せるように刃をぶつける。

緩急の激しい連撃が敵の判断力を鈍らせていった。

アシユレイの横薙ぎの一閃が受け止められる。

「かかった！」

「!？」

腕が翻る。

鎌の刃が剣を絡め取り、真つ二つにへし折った。

「フレイムリッパー！」

バックステップで距離を取りつつ、鎌を振る。

吹き出した炎が刃となり、敵に迫る。

「っ！」

もちろん当たってくれる敵ではない。

だが、これでいい。

「逃がすか！」

アシユレイの左腕が蠢く。

鳶が敵の脚を絡め取り、地面に叩きつけた。

「終わらせる……」

フォーム・アイン。

長剣に炎を灯し、アシユレイが走る。

「オラオラオラオラー！」

連撃が偽物の体を切り裂く。

そして左腕のアッパーと同時に魔法弾を放ち、上空へ。

炎の結界が広がり、敵を閉じ込めた。

「方陣……展開！」

さらに結界の周りに多数の魔方陣が生み出される。

「フォーム・ツヴァイ……」

薙刀を構え、結界の中の敵に一撃。

移動先の魔方陣を蹴ってさらに一撃。

蹴って、さらに一撃。

「おおおおおー！」

結界の周りを赤い閃光が走る。

真下から切り上げ、上空で体を捻る。

フォーム・ドライ。

「デモン……」

真上に展開した魔方陣を蹴る。

「ブレイズ！」

鎌を振り抜き、地面に降り立つ。

臨界点を越えた結界は強烈な熱線を撒き散らしながら爆散した。

「……終わった……な」

残っていた偽物も動きが止まり、消えていく。

その集団の中に一人だけ立っている人物。

「……ネプ公」

「アツシュ……」

武器をしまい、お互いが歩み寄る。

「……本当にアツシュなんだよね？」

「ああ」

「本当の本当？」

「そうだよ」

「夢じゃない？」

「……さあな」

曖昧な返し。

沈黙が流れる。

「アツシユー！」

「うおおおおお!!」

いきなり飛びついてきたネプテューヌにアシユレイが押し倒された。

「いつて……お前な……!!」

「えへへー……」

「……つたく」

自分の胸に笑顔で頬ずりする少女を見て、文句を言う気も失せる。

「アツシユ」

「なんだよ……」

ネプテューヌが顔を上げ、アシユレイを見つめる。

「おかえり！」

「……ただいま」

『男』はようやく、帰る場所を見つけたようだ。

第22話 紫の風

「すまん。悪かった」

コンパの家。

全員揃ったところで灰色の髪を揺らしながら頭を下げるアシユレイが真っ先にそう言った。

「……………」

視線が下を向いているアシユレイにはわからないことだが、ネプテューヌ達は皆口を開け呆然としている。

「こんな大事な時に一人で勝手に混乱してみんなに迷惑をかけた。謝って許されるとは思ってないが、それでも言わせてくれ。本当にごめん」

沈黙を責められていると勘違いしたアシユレイがさらに謝罪の意を述べた。

これ以上この状態が続くと土下座しそうだ。

「顔を上げてくださいいな」

「……………」

アシユレイがゆっくりと顔を上げる。

しかしそこに不満な顔の人物は誰一人としていなかった。

「最初から怒ってなんかないわ。自分が自分じゃないなんて言われたら、誰だってパニックになるわよ」

「けど……」

「それにこうして戻ってきてくれた訳だし、何も気にすることなんかないじゃない」

ノワールとアイエフが暗い顔のアシユレイを元氣付ける。

「それよりも、アツシュさんが無事だったことが嬉しいです！」

「どうしても償いがしたいのなら、またわたし達と一緒に戦ってちょうだい」

「お前ら……」

「だから言ったでしょー。そんなに気にしなくても大丈夫だつて」

「何より、お前がいなくては戦力に響く。お前はこのパーティになくってはならない存在なのだ」

全員の似たりよつたりなセリフにアシユレイが大きくため息を吐いた。

「まったく……バカばかりだな」

「でも、嫌いじゃないでしょ？」

「悔しいがな」

呆れたように肩を竦めるアシユレイの前にイストワールが飛んでくる。

「あなたではなく、謝るのは私の方です。本当に申し訳ありません」

「別にいい。知りたいって言ったのは俺だし、知らないままにして良いことでもない」

「ありがとうございます……それと、実は以前伝えていなかったことがあるのです」

「伝えていなかったこと？」

イストワールはどうやってアシユレイの秘密を知ったのか。

答えは簡単だ。

「先日話したことは全て、 그레이さんから教えてもらったことなのです」

「 그레이さんから!？」

「はい。あなたに伝えるようにと……」

그레이はあの狐の面の男の正体。

つまりはマジエコノヌの手下ということだ。

あの時の光景は今でもアシユレイの脳裏に焼きついている。

「けど、なんで 그레이はそんなことをわざわざ教えたのかしら?」

「アツシユを混乱させ、あわよくばパーティそのものを瓦解させる為。分かりきったこ

とだわ」

그레이のことを良く思っていないブランがそんなことを言った。

確かに敵の腹心であるはずのグレイが敵に塩を送るとは考えにくい。

敵に自ら開示する情報は、ブラフか、敵を混乱させるものか、あるいはよほど必要なものであるかだ。

「その可能性が高いとは思いますが……」

「なに？わたしの推理に文句があるの？」

「そうではありませんけど、どうしてもグレイさんが悪い人には思えないのです」

以前グレイはネプテューヌの解毒に積極的に協力してくれた人物。

暴走したアシュレイを救えたのも少なからずグレイの存在があつたからこそだ。

マジエコンヌの敵であるはずの二人をわざわざ助けて彼に何の得があるのだろうか。

「……アツシユはどう思うの？」

「……わからない」

昔からグレイはニヤついた顔の裏で何を考えているのかわからない人物だった。だからこそ。

「会って、問い詰める。何にせよ、あの人とは戦わなきゃならない」

「そのためにも、まずは英雄の武器とユニミテスの討伐ね」

本来、このメンバーはそれに関する報告をするためにこの場に集まったのだ。

「では、早速皆さんの手に入れた伝説の武器を見せてください」

「ラストイシオンに祀られていた武器はこの通りよ」

ノワールが伝説の武器の一つを取り出す。

見た目はショートソードのようだが……。

「……なんかこのデザイン……どつかで見たような……」

「逆に私は見覚えがありませんけど……ノワールさん、ラストイシオンに祀られていた武器は英雄マウスロープの双式巨銃だったと思うのですが……」

そう言われてノワールと一緒にラストイシオンに行っていたMAGES.以外の全員がもう一度ノワールが持ってきた武器を見る。

どれだけ見ようとショートソードだ。

とても銃には見えない。

それとも剣からビームでも出るのだろうか。

だったらそれこそ銃の形をしていた方が良い。

「……元の武器は偽物の自爆に巻き込まれて粉々になっちゃったわ」

「壊されたんですか!?!」

「でも安心して。シアンたちラストイシオンの技術者たちがパーツを活かして私専用で作ってくれたの」

「……どうりで見覚えがある訳だ」

「銃じゃないんですが……大丈夫でしょうか……」

正直不安だが、大丈夫だと信じるしかないだろう。

「わたしも無事に持ってきたわ。これよ」

ブランが取り出したのは無駄に金色に光るハンマーだ。

「ぶ、ブランさん……ルウイーに祀られている武器ってたしか……」

「英雄ハイブリッジの連槍よ」

「どう見てもハンマーだろ……」

「しかも金色で、いかにも大乱闘って感じがするんですが……」

「どうやらルウイーの伝説の武器にも何かしらあったらしい。」

「随分昔に耐久年数と老朽化の問題が起きてハンマーに作り替えたらしいわ」

「作り替えるにしても何だってハンマーに……」

「けど、安心して。柄の芯に連槍を使っているそうよ」

「あの……今のお話のどこに私は安心すればいいのでしょうか……」

「全部よ……」

「……」

「全部よ」

「……まあ、同じポールウエポンだし、ノワールのよりかは原型留めてるだろ」

4つの英雄の武器の内、二つがご覧の有様だ。

古来から、二度あることは三度あると言う。

となれば……。

「次はわたくしの武器ですわね。見てくださいな、この立派な槍を！」

「……………」

「……イストワール」

「……リーンボックスで祀られている武器というのは、英雄ツイーゲの大賢弓ではありませんでしたか？」

「弦が切れたり、弓が折れたりカビが生えたりして使い物になりませんでしたので……」

「どんなお粗末な管理をすればそのような有様になるのだろうか。」

「市販の剣だろうともっと丁寧に保管する。」

「それで、槍に改造したんですね」

「もはやどこが弓なのかさっぱりじゃねえか……」

「……はあ……見事に3つとも原型を留めていませんね……」

「イストワールがネプテューヌを心底不安げな様子で睨んだ。」

「まさか、プラネテューヌに祀られているツリーベルの三元戦剣まで原型を留めていないなんてことはありませんよね？」

「安心してよ、いーすん。それ以前に、わたし持ってきてないんだから」

「……アッシュさんが一緒に居ましたし、奪われたということはなさそうです……」
「それについては俺が話す」

ネプテューヌの説明では要領を得ないことはまずわかっていたので、代わりにアッシュが前が出る。

「偽物が現れたのは地下のプラントだったんだが、そこには英雄の武器はなかったんだ」
「なかった？では英雄の武器はどこに？」

「その真上。プラネテューヌの教会に祀られていた」

「では、場所がわかっていっているのになぜここに英雄の武器がないのですか？」

「教会の人が貸してくれなかったんだ。貸すには女神様の許可が必要だーって」

あの後、ノワール達が戻ってくるまでの数日間、二人は何回か貸してくれないか頼みに行ったがいずれも追い返されてしまった。

「けど、なんでネプ子の偽物は英雄の武器がある教会じゃなくて、地下プラントを襲ったのかしら？」

「……これは俺の勤なんだが……」

「ほう……言ってみろ」

「場所を間違えたんじゃないか？」

「……ねぶねぶならやりかねないですう……」

閑話休題。

「それにしても困りましたね。これでは武器が一つ足りません」

「私たちが持つてる3つじゃだめなの？」

「相手はマジエコンヌです。一つ欠けた状態では不安が残るんです」

とはいえ、ネプテユーンが女神だと証明できなければ最後の一つの武器は手に入らない。

そしてその女神の力はマジエコンヌが持っている。

諦めるしかないだろう。

「しかたありません。3つの英雄の武器で挑みましょう」

「それに、わたしたちには武器なんかよりも頼りになる仲間がいるもんね！」

「ようやく攻勢に出れる……か」

そう思った矢先だ。

「~~~~~!!」

地鳴りと共に以前聞いたことのある鳴き声が響いた。

「この妙にトラウマな感じの声はもしかして……」

「一歩遅かったか……!」

「どうやら外からのようです」

アシユレイが立ち上がり、窓を開く。

その直後。

『ハーツハツハツハツハツハ！』

例の高笑いがプラネテューヌの街に響き渡った。

『聞こえるか！下界に這う蛆虫ども！私の名はマジエコンヌ！今日より女神に代わり、このゲームギョウ界を統べる絶対なる神である！』

「この声……一体どこから聞こえているの……」

「拡声魔法……発信源は……」

「あそこですわ！」

ベールが指差した先。

ビルの隙間からユニミテスの体の一部が覗いていた。

「……行くぞ！大事になる前に！」

「りよーかい！」

全員がコンパの家を出る。

向かう先は、プラネタワー前広場。

.....

広場にはあつという間に人集りが出来ていた。

その中心にはマジエコンヌとグレイ。

そしてユニミテス。

「お、おい……女神様に代わって支配するってどういうことだ!」

「それに……あいつの後ろにいる化け物はいったいなんだ!」

心胆の強い男が一步前になると、周りの人たちも次々に口を開き始めた。

ここまではマジエコンヌの筋書き通り。

「無知な貴様らに教えてやろう。これこそ、ゲームギョウ界の終焉の鐘を鳴らす魔王ユ

ニミテスだ!」

マジエコンヌの宣言に答えるようにユニミテスが吼える。

「あ、あれが……ユニミテス……」

「た、助けてくれ……パープルハート様……」

人知の外の存在であるユニミテスに怯える人々が次々と跪き、指を組んで自らが信仰する女神の名前を呼んだ。

「幾ら願おうが、パープルハートが貴様らの前に姿を現すことはない」

その心の支えを手折るようにマジエコンヌが言葉を発する。

「何故なら！この魔王ユニミテスに敗れたのだからな！」

「嘘だ！あのパープルハート様が魔王なんかに負けるはずがない！」

「そうよ！デタラメよ！」

「ふん、愚か者共が。この場に姿を現していないのがその証拠だとわからんのか」

その発言に折れた人々が顔に絶望を浮かべた。

「そ、そんな……」

「まさか……パープルハート様が……！」

そして広場にパープルハートを呼ぶ声はゆつくりと消えていった。

「うう……わたしまだ死んでないのに……」

拡声魔法でマジエコンヌと人々の声を聞いたネプテューヌが泣きそうになりながらもプラネテューヌの街を走る。

「まったく、ネプ子が変わ身できないからって好き勝手言ってくれちゃって」

「ですが、これにより少なくともユニミテスがネプテューヌさんより強いと思ひ込まされたはずですよ」

人々の記憶から生まれた存在。

記憶が更新されればユニミテスの存在も更新される。

「マズいな……」

「今のマジエコノヌの言葉で、ユニミテスは女神よりも強いという存在になったはずですわ」

「なら、これ以上強くなる前にやっつけるです！」

人集りを掻き分け、ようやく広場にたどり着いた。

「マジエコノヌ！そこまでだよ！」

「ほお……よく逃げずに再び私の前に現れたものだな、ネプテユヌ！」

「プラネテユヌもゲームギョウ界も、お前の好きになんてさせないんだからね！」

「たかが人間に成り下がった小娘に何ができるといふのだ？」

「ちよつと、私たちのこと忘れてないかしら？」

ネプテユヌの隣に女神三人が並ぶ。

「……グレイさん」

「……あなたは、ここに居ないものと思いましたが……」

改めてアシユレイとグレイが向き合った。

「人ならざる身で、なおも彼女たちを守ろうというのですか？どちらかと言えば、あなたはこちら側の存在だというのに」

「……俺が人であるかなんてのはどうだっていい……」

アシユレイがアンチエナジーを取り込み、姿を変える。

「そんなことより、もっと大事なことがある……それだけです」

「……そう、ですか」

「俺たちはマジエコンヌを倒す。立ち塞がるなら、容赦はしません……!」

「……ならば、その前にこの異形を打ち払いなさい」

ユニミテスがズンズンと足音を響かせながら前に出てきた。

「……ここに来说言うのもなんだけど、これ倒せるのかなあ……」

「なにガラにもなく弱気になってんだよ」

ネプテューヌの隣にいた三人はいつの間にか女神化していた。

「ここでアイツを倒せば『弱い』ってみんなが思ってくれるはずよ」

「それに、種は蒔きましたわ。今は芽が出ることを信じて戦うしかありませんわ」

全員が武器を構え、ユニミテスが吼える。

「行くぞ!」

戦いの火蓋が切って落とされた。

「はああああああ!」

ノワールが素早く斬りかかる。

ユニミテスの大木のような腕がその一撃を容易く受け止めた。

反対の腕が持ち上がる。

「でやああああー！」

振り下ろされる前にブランが斧で腕を弾き飛ばした。

ユニミテスの体制がわずかだが崩れる。

「ルビーブレイズー！」

そこにすかさずアシュレイが巨大な火炎弾を打ち込む。

「~~~~~！」

ユニミテスの4本の足が収束した蜘蛛の胴体のような下半身。

そこに存在する巨大な口が開いた。

「~~~~~!!」

その口内に光が集まったかと思えば、次の瞬間には巨大な黒い魔法弾が打ち出された。

魔法弾はアシュレイの火炎弾を飲み込み、なおも前進を続ける。

「ちいー！」

追撃を行おうとしていたアシュレイは一旦足を止め、前方に魔方陣を展開。

さらに腕を鋼鉄に変化させる。

「っはあー！」

魔方陣と魔法弾が触れ合う瞬間、アシユレイが魔方陣を裏から殴る。

その衝撃は何倍にも増幅され、魔法弾を押し返す。

それによりなんとか魔法弾の相殺に成功した。

「~~~~~！」

ユニミテスもその様子を指を咥えて見ているだけではない。

自分に纏わり付いているノワールとブランを両腕で掴み、アシユレイ達の方へ投げ飛ばす。

「もう！どれだけデタラメなパワーしてるのよ！」

空中で体制を整え、各々武器を地面に突き立てることでなんとか地面と激突することは回避した。

「~~~~~！」

ユニミテスが吼え、背中にある金色の翼のような部位が大きく広がる。

「なんだよあれ……！」

「悪趣味ですわね……！」

その翼には無数の目。

全てがこちらを見つめている。

その目の内、一つが怪しく光った。

「……マズイ！」

アシユレイが前に出て剣を振るう。

金属音が響いた。

弾き飛ばしたのは小さな黒い矢だ。

次々と別の目が光りだす。

「来るぞ！」

雨のように黒い矢が放たれる。

「はああああああ！」

ベールとノワールが降り注ぐ黒い雨を弾き飛ばす。

弾かれたそれは壁を貫き、地面に食らいついた。

やがて雨は止む。

「はあ……はあ……やってくれるわね……」

「……いや、まだ終わりじゃないみたいだぞ！」

ユニミテスが両腕を上げる。

すると黒い矢はひとりで動きだし、嵐のようにアシユレイ達を囲んだ。

「タスク・プロテクション！」

いち早く敵の思惑に気がついたアシユレイが指示を飛ばす。

「おらよー！」

ブランが地面を殴りつける。

アシュレイ達を囲むように分厚い氷の板が現れた。

ユニミテスが開いた拳を握り締める。

それを合図に黒い矢は一斉にアシュレイ達に殺到した。

「はあー！」

ベールが槍を振るう。

氷の板を包むように巨大な竜巻が発生。

矢はその軌道を逸らし、氷の板に斜めに突き刺さる。

正面からでは防げなくとも、斜めからならば防げる。

避弾経始という概念だ。

嵐が止み、動きを止めた矢は霧散して消えた。

「さあ、反撃だ！」

四人が走りだす。

「~~~~~！」

ユニミテスが両腕に魔法弾を作り、それを投げ飛ばす。

「効くかっつての！」

「お返しよー！」

ノワールとブランがその魔法弾を武器で打ち返した。

反応できなかったユニミテスはそれをモロに受ける。

「ベール！タスク・グリーンザッパー！」

「了解しましたわー！」

アシユレイが素早くユニミテスに接近。

「おおおおおー！」

龍の腕でユニミテスをかち上げる。

「これでー！」

ユニミテスの足元に潜り込んだベールが頭上の槍を回すと、巨大な竜巻が起き、ユニミテスをさらに上空へと巻き上げた。

「防げるもんなら防いで見せろー！」

竜巻にアシユレイとベールが乗る。

流れに乗ったまま二人が中央のユニミテスへ無数の魔法の槍を放つ。

最初こそ防いでいたユニミテスも不安定な体制のまま四方八方から飛来する槍を捌くことはできなかった。

一本、また一本と体を槍が貫いていく。

やがてユニミテスの体は竜巻のさらに上へ投げ出された。

そこには手にした槍を構えたベール。

「さあ、落ちなさい！」

槍を投げる。

それはユニミテスの体を貫き、ユニミテスごと猛スピードで落下。

地面に巨体を縫い付ける。

「トドメだあああああ！」

それを追うように落下してきたアシユレイが槍の底部に踵落としを打ち込んだ。

その衝撃に呼応し、魔法の槍が破裂。

衝撃波を伴ってユニミテスの体が爆散した。

二人が仲間の元に戻る。

「……やったの？」

「言わなきやいいものを……」

アシユレイとベールの攻撃でユニミテスは上半身を失った。

しかし、残った下半身の切断部が蠢き、ゆつくりと再生を始めたのだ。

「ちっ……しぶといヤロウだぜ」

「これでもまだ火力不足か……」

「何故だ！女神共より圧倒的に強くなっていくはずなのに、何故押されている！」

一時的とはいえ、ユニミテスがやられたことにマジエコンスが狼狽える。

「どうやら、蒔いた種から芽吹いてきたようですね」

「なんだと!?! 貴様ら何をした!?!」

ユニミテスは人々の記憶から作られた存在。

記憶が更新されればユニミテスの存在も更新される。

「簡単よ。伝説の武器を取りに戻った時に、魔王なんて嘘っぱちだってみんなに説明してきたのよ」

「お前ら……いつの間に……」

「流石に全員が信じたわけじゃないけど、それでもかなりの数の国民が信じてくれたわ」

「ぐぬぬぬ……」

「ルウィーもレジスタンスだったやつらが協力してるんだ。これで弱体化しないわけがねえ」

「ネットも、わたくしの方で掌握済みですわ」

しかし、それだけではまだ足りない。

少なくともここにいるプラネテューヌの人々はパープルハートがユニミテスに負けたと信じ込まされている。

現にユニミテスは再生を終え、再び立ち上がろうとしていた。

「なら、次はネプ子の番よ」

「わたし!？」

急に話を振られたネプテューヌが慌てたように声を上げる。

「で、でもさ……わたしが言っても信じてくれるかな……ほら、女神だって証明しようにも変身できないし」

「それならわたしが、みんなに証明するです!ねぶねぶが女神様だってことは、最初からずーっと一緒だったわたしがよく知ってるです!」

「こんば……うん!」

ネプテューヌが咳払いをしながら広場の近くに集まった人たちの方を向く。

「議会の方と、このテレビを見ているプラネテューヌ国民の方には、突然の無礼を許していただきあいたー!」

そして言い切る前にアシレイの拳がネプテューヌの頭を打った。

「何こんな時にふざけてんのよバカネプ子!」

「だってー!いきなりだから何を言っでもいいかわかんないんだもん!」

「だとしても、んな堅苦しい挨拶なんざいらねえだろ!」

「極端な話、テキトーに『いえーいみんなのねぶねぶだよー実はプラネテューヌの女神

だったんだー今は訳あって変身できないんだごめんねー』くらいでいいのよ!」

「あいちゃん、ねぶねぶのモノマネそっくりです。台詞もねぶねぶが言いそうです」
「いやあ……さすがにそれはテキトー過ぎる気が……」

一息で例えを言い切ったアイエフにネプテューヌが否定的な発言をする。

「おい、聞いたか!あの子、パープルハート様らしいぞ!」

「まじかよ!パープルハート様って普段はあんなに小さかったのか!」

「うそお!?わたしまだ何も言っていないどころかあいちゃんの台詞で信じちゃうの!」

ネプテューヌが驚くのも無理はない。

普通信じない。

しかしこの場の人たちはそうではなかった。

「あの子って、よくギルドの仕事とかやってくれてる子よね?」

「どこかで見えたことがあると思っていたら、ワシが子供の頃にお会いした女神様と瓜二つじゃ」

「なんだよ、パープルハート様がやられたなんて嘘じゃねえか」

「あらやだ、あの子ったらいつもうちでプリンを買ってくれてる子じゃない。女神様が鼻屑にしてくれていたなんて嬉しいねえ」

火種は瞬く間に周りの人々を巻き込み、すでにこの場にネプテューヌを女神だと信じ

ない人間はいなくなつた。

「おおっ！よくわかんないけど超展開キター！でもってなんだか力が湧いてきた気がするよー！」

「ねぷねぷ！気がするじゃなくて、本当に湧いてるですよ！光ってるですよ！」

コンパの言う通り、ネプテューヌの体から紫の光が放たれている。

そして光はひとつではない。

「ベール様たちも光ってますよ!?!」

「これは……いったい何がおこっているんですの!?!」

「もしかしてこれは……シエアの共鳴……!?!」

イストワールが呟く。

「きょうめい……です?」

「おそらくですが、世界の危機に対し、人々が女神様をより強く信じているのが原因かもしれません」

「つまり……ここで起きていることが世界全体で起こってるってのか!?!」

一人が祈れば、その隣の人も祈る。

そしてその隣も。

その隣も。

火種が燃え移るように。

波紋が広がるように。

「なら、どうして女神じゃなくなったねぶねぶも影響を受けているんですか？」

「予想ですが、人々がネプテューヌさんを自分たちの女神様として求め、そして望んでいるからではないでしょうか」

ネプテューヌの頭にアシユレイの手が置かれる。

「……やるじゃないか」

「え？わたし何もしてないよ？」

「お前がそう思っている、これは紛れも無いお前の才能だ。人を引き寄せ、結びつける。味方も、敵も、見知らぬ他人も」

天性のカリスマとでも言おうか。

ネプテューヌにはそれがある。

「ネプテューヌさん。今のあなたなら再び……いえ、新たな女神様になれるはずですよ！」

「おおっ！なら、主人公らしく美味しいところもらっちゃうんだから！」

ネプテューヌが改めて広場の人たちに向き合った。

「みんなー！今からわたし、変身するよー！」

割れんばかりの歓声が辺りを包む。

「わたしの変身に……刮目せよ！」

ネプテユーンが光を放つ。

そしてゆっくりと光が収まっていく。

「変身……完了よ」

長く伸びた紫の髪。

青い瞳には女神の証である電源ボタンを模したマークが浮かぶ。

女神、パープルハート。

「あいちゃん、ねぶねぶが変身したです！」

「ようやく復活って感じね」

「みんな、待たせたわね」

「遅すぎだったの」

ネプテユーンが四人に合流する。

「女神様が四人揃った今なら、ユニミテスを倒せるはずですよ！」

「だとさ。いけるか？」

「当然よ。さあ……行くわよ、みんな！」

再生を終えたユニミテスが吼えた。

「さあ、覚悟しなさい！」

再びノワールが斬りかかる。

ユニミテスの腕が先ほどと同じように防ごうと動いた。

「さっきまでの私と思っただら大間違いよ！」

ノワールの剣が迷いなく振るわれる。

その一撃はユニミテスの右腕を真つ二つに切り落とした。

「~~~~~!?!」

驚いたような声を上げたユニミテスが後ろに下がり翼を展開。

無数の目が開かれる。

「同じ手は……」

矢を撃たれる前にノワールが翼を根本から断ち切った。

切断されてなお目はノワールを見つめる。

「二度も通用しないわ！」

鋼鉄のように硬い翼をノワールが折り、砕き、分断する。

翼は瞬く間に木っ端微塵となった。

「これで……終わり！」

ノワールの姿が一瞬消え、地面に降りる。

指を弾けば、無限の剣閃がその残りカスすら消滅させた。

「~~~~~!」

ユニミテスの口が開き、禍々しい光が集まっていく。

「タスク・レフトハンド!」

「承知いたしましたわ!ネプテユーン!」

「ええ!」

ネプテユーンがリボンのような細長い魔法路を作り、それをスプリングのように巻いて筒状に。

そしてさらにその魔法路にネジ巻き状に電撃を流す。

「~~~~~!」

ユニミテスから魔法弾が放たれた。

「ベール!」

「全力で参りますわ!」

ユニミテス、魔法弾、魔法路、そしてベールが一直線に並ぶ。

「ちえいさー!」

ベールが魔法路の中央を通すように槍を投げる。

魔法路に槍が入った直後、槍が一気に加速。

青白い光と雷鳴を引き連れ、魔法弾とユニミテスの脚部を貫いた。

「?!?!?!」

「左手の法則だ。流石に効いただろ！」

「一気にケリをつけてやるぜ！」

脚部が使い物にならなくなったユニミテスにブランが迫る。

「~~~~~！」

ユニミテスが障壁を展開。

接近を拒む。

「なんだって叩き切る、超弩級の戦斧の一撃！」

一歩大きく踏み込み、斧を振るう。

その一発で障壁が粘土細工のように砕かれた。

続けて振り下ろし。

ユニミテスの足元から氷山が隆起し、天高く打ち上げた。

ブランもそれを追いかける。

「おつちろおおおお！」

大きく振りかぶった一撃がユニミテスを捉え、地面に叩きつけた。

「~~~~~！」

「ネプテューヌ！」

剣を抱えたネプテューヌがユニミテスへ駆ける。

残った左腕がネプテューヌに迫る。

しかしその腕はネプテューヌに届くより前に地面に落ちた。

「ネプ公！ やつちまえ！」

ユニミテスの腕を切り落としたアシユレイが叫ぶ。

「これがわたしの全力！」

ネプテューヌの一撃がユニミテスを吹き飛ばし、結界の中に閉じ込めた。

「ハアアアアアア！」

結界の周りを高速で飛びながら連続で攻撃。

「ネプテューン……」

高く飛び上がり、真下に剣を構える。

「ブレイク！」

結界を破り、ユニミテスごと剣を地面に突き立てれば、光の柱が立ち上り、ユニミテスを跡形もなく消滅させた。

「……わたしたちの勝ちよ」

ネプテューヌの声に再び辺りから割れんばかりの歓声が鳴り響いた。

「……まさか、ユニミテスを打ち破るとはな」

「魔王ユニミテスはもういないわ。観念するのね、マジエコンヌ」
ネプテューヌが剣をマジエコンヌに突きつける。

「ふん。たかが想像の産物を倒しただけで調子に乗るなよ、女神共！私が貴様ら四人の力を宿していることを忘れてはいないだろうな！」

ユニミテスを失ってなお、マジエコンヌには余裕がありありと感じられた。

「いい加減諦めたらどうなの？こういう言い方は好きじゃないけど、多勢に無勢。あなたに勝ち目はないわ」

「それはどうか〜！」

「諦めないというなら、容赦しないわ！」

ネプテューヌがマジエコンヌに斬りかかる。

「ふん〜！」

マジエコンヌが杖を振るう。

それらが触れた瞬間、ネプテューヌの剣が砕け散った。

「な……………!?!」

「脆い！その程度の武器で私に傷をつけられると思うな！」

「やはり、英雄の武器でなければ太刀打ち出来ないの……………」

女神の武器は実体を持った武器にプロセスサユニットを纏わせることで発現する。

元がなまくらでも女神化すればそれなりの剣にはなるが、今回ばかりはそうはいかない。

英雄の武器でなければ、先ほどのようにたちまち砕かれてしまうだろう。

「なら、わたしたちに任せてもらおうか！」

「っ!?まさか、貴様らの持つそれは!?」

改造やプロセッサユニットで形状が変わっているが、マジエコンヌはブランたちの持つ物が英雄の武器であることを看破したようだ。

「……マジエコンヌ様、状況はこちらが不利です。一旦引きましょう」

「ちい……わかつている！」

「では……」

「逃げるつもり!?!」

「逃げる?ちがうな。世界の終焉までに時間をくれてやろうというのだ。せいぜい残された時間を楽しむのだな……」

グレイが開いた魔法陣にマジエコンヌが乗り、何処かへと転移する。

「グレイさん……」

「……近いうちに、また会いましょう。待っていますよ」

そう言ったグレイも転移し、脅威はひとまず去った。

「…………ふはー！逃げてくれて助かったー。正直こっちも体力とか限界だったんだあ」
変身を解いたネプテューヌがその場に座り込む。

「おつかれさまです、ねぷねぷ。かつこよかったですよ」

「ほんと!?!コンパにそう言ってもらえるだけでも復活した甲斐があつたつてもんだよ」
続けて残りの三人も女神化を解く。

「あとは、マジエコンヌただ一人ですわね。時間がどうこう言っていた気がしますが…………」

「確かに気になるわね。けど、今日はもうへトへト…………考えるのは明日にしない？」

「わたしもノワールに賛成。休みたいわ」

「じゃあ、帰ってみんなで勝利のプリン、食べようよ！」

「……………」

わいわいと騒ぐネプテューヌたちの背後で、アシユレイは一人、師の居た場所を見つめていた。

第23話 眞実を知る人形

「……………？」

目が覚める。

辺りを見回すが、どれだけ見ても見覚えはない。
違う。

見覚えがないのではない。

何も知らないのだ。

「気がついたようだな」

目の前から女性がゆっくりと歩いてくる。

「……………私……………は……………」

「今は、何も言わなくていい」

その女性が自分に手を差し伸べた。

「話し相手になつてくれないか？ここは暗くて寒い。それに私一人だ」

「……………それが、私の役目ならば」

「役目なぞ仰々しい言葉を使うな」

そしてにつこりと微笑む。

「今日からお前は私の息子だ。お前は好きなように遊び、学び、私の知らない世界を見てこい。気が向いたら、私にその話を聞かせてほしい」

「私が……息子……」

懸命に手を伸ばす。

「私の……お母様……」

伸ばした手が、彼女の手を掴んだ。

……

天界。

空に浮かぶ浮遊大陸。

その一角に二つの人影が立っていた。

そこはかつて四女神が神の座をかけて戦った場所。

木は倒れ、地は抉れ、戦闘の余波かはもうわからないが、砕けた石たちがその大地を囲うように浮いていた。

「英雄の武器……二度もこの私の前に立ち塞がるとは……」

「……………」

「ちっ……自動人形などに任せず自分で破壊したほうが確実だったか？」

「……………」

独白のようにマジエコンヌは言葉を並べる。

それらには苛立ちがありありと浮かんでいた。

「おい」

「……如何致しましょう」

「貴様がやることはもう決まっているだろう？あのポンコツ共と違うところを私に見せてみる」

「……御意に」

マジエコンヌの指示に、グレイは従う。

従うことしかできないのだ。

踵を返し、グレイはその場を去る。

「……私は……どうすれば良かったのでしょうか……」

グレイの呟きを理解する者はいない。

.....

「うまい！こんぱー、ご飯おかわりー」

ネプテューヌが空になった茶碗を掲げてコンパに意思表示する。

「ねぶねぶ、もう五杯目ですよ？食べ過ぎじゃありませんか？」

「育ち盛りだからね！あと三杯はいけちゃうよ！」

「じゃあ、ねぶねぶがもーっと大きくなるように昔話みないな山盛りにするですね」

「よろしくー！」

現在ネプテューヌたちは作戦会議も兼ねてコンパの家で少し早めの昼食を取ってるところだ。

「おまたせー。唐揚げ揚がったわよー」

「おー、あいちゃん気が効くー！」

キツチンから唐揚げが積まれた皿を持ったアイエフが出てくる。

「じゃあ、わたしはレモン絞るねー。ぴゅー、っと」

皿がテーブルに置かれた直後、ネプテューヌが添えられていたレモンを唐揚げに満遍なく絞った。

それを見たブランがテーブルを叩く。

「てめえ、何しやがる！」

「何って、唐揚げにレモンかけたただけだよ。あ、もしかしてブランって、レモンそのまま食べる人だった？」

「ちげえよ！何唐揚げにレモン絞ってんだよ！唐揚げにレモンとか唐揚げに対する冒険以外の何ものでもねえだろうが！」

どうやらブランは唐揚げにレモンをかけたことがお気に召さなかつたようだ。

「おおっ！レモン絞らない派の人って実際にいたんだ！ネット以外で初めて見たかも」

「……いい、覚えておいて。レモンをかけると揚げたてサクサクの衣がしんなりしてしまうわ。それはギルティよ」

「そう？私はレモンをかけた方が味がさっぱりして好きだけど？」

「普通に食べても美味しいのですが、そのままだと少々コツテリし過ぎますしね……」
と、ノワールとベール。

この辺りで既にネプテユヌとアイエフは自分が食べる物が乗った皿を避難させている。

「ぼっちと年増は黙ってる！」

「誰がぼっちよ誰が！」

「聞き捨てなりませんわ！歳はほとんど一緒のはずですよ！それに、子供みたいなあ

なたにだけは言われたくありませんわ」

「これ以上レモン派に唐揚げを穢される前にまとめてぶっ飛ばしてやる！」

「望むところですよ。何故、唐揚げにレモンがついてくるかも分からないようなお子様に、レモンの存在意義を分からせてあげますわ」

そう言つて三人が食事そつちのけで立ち上がり、武器を構える。

もちろん英雄の武器だ。

「べール、ここはレモンを絞る派どうし、共同戦線で行くわよ」

「ええ。リーンボックスとラストイションの初の共同戦線ですよ」

「数じゃこつちが不利のようね……ネプテューヌ、あなたはどつちななの？まさか、レモンを絞る派ではないわよね？」

急な飛び火にネプテューヌが若干飛び跳ねる。

「ネプテューヌを引き入れようとしても無駄ですよ、ブラン」

「さつきネプテューヌが唐揚げにレモンを絞つたことこそが、レモンを絞る派である証拠よ！」

「そのどろがレモンを絞る派の証拠だつて言うの？レモンを絞る派に気を効かせて、自己犠牲の精神で唐揚げにレモンを絞つた可能性もあるわ」

「あなた馬鹿なの？ネプテューヌがそんなに気が利くわけじゃないじゃない」

「なんかの気の迷いがあつたかもしれねえだろ！」

「……なんかわたし目の前で凄く失礼なこと言われてるような気が……」

紛れもなく失礼な言葉の応酬に人知れずネプテューヌが凹んだ。

「実際のところどうなんですか、ネプテューヌ？」

「絞らない派だよな！」

「何言ってるのよ、レモン絞る派に決まってるわ。そうよね？」

「わたしは美味しければどっちでも！」

「「あ？」」

「ひい!？」

どちらにも加担しないことで事を穏便にしようとしたネプテューヌだが、どうやら逆効果だったようだ。

「テメエ、中立とかふざけてんのか！」

「唐揚げ論争は絞るか絞らないかの二つ限り……中立など認めませんわ」

「中立を通そうっていうのなら、レモンを絞らないことを認めている時点で、あなたはレモンを絞る派の敵よ！」

「こうなりや一人でも構わねえ！てめえら全員唐揚げの名の下にぶっ飛ばしてやる！」
そこにゆらりと現れる影。

ブランの肩が掴まれる。

「んだよ！こっちは今大切な話……を……」

ブランが振り向くと、そこにはとても、とても冷ややかな目をした黒髪の男が立っていた。

付いているエプロンがなんとも似合わない。

「……な、何……よ……」

「……俺が言いたいこと……分からないか？」

地の底から響くような声がアシユレイの口から発せられた。

「分からないなら……いいさ……」

するりとブランの肩からアシユレイの手が降りる。

「食事の礼儀作法も知らないような駄女神共には……きつちり教育を受けさせてやらな
いと……なあ？」

鬼も裸足で逃げだすような殺気を放つアシユレイに、立ち上がっていた女神三人も腰
が抜けたようにその場に座り込んだ。

「まあ……とりあえず食えよ……冷めたり……ましてや残したりなんかしたら……食材
に失礼だしな……」

「「……………」」

「返事」

「「はいー」」

食事の後、ネプテューヌを除いた女神三人が正座させられたまま一時間ほどみつちり説教されたの言うまでもない。

このことは直接の関係がないネプテューヌやイストワールたちを含めた7人のトラウマとなり、知らないのは私用で出かけていたMAGES. だけであった。

.....

「.....おお、戻ったか」

目の前の大きな扉を開けると、彼女はいつも通り大きな椅子に腰掛けていた。

こちらを見るのは一瞬。

彼女の視線はすぐさま自分の背後からついてくる人物に注がれた。

「まさか友人か？」

「あ、はい。初めまして」

「前々から付き合いはありましたが、ここに来てみたいと言ったものですので」

「あの.....ご迷惑でしたでしょうか？」

「いや、むしろ歓迎したいくらいだ。人々はここを恐れて近づかないからな」
朗らかな口調でそう言った彼女に背後からほつと息を吐く声が聞こえる。

「これからもそいつと仲良くしてやってほしい。無愛想だが、お前を嫌っているわけ
はない」

「わかつていますよ」

彼女が手を差し出せば、背後からの足音が自分を追い抜き歩きだす。

「暇な時はいつでもここに来るといい」

「ありがとうございます」

腰まで伸びた銀の髪が美しいその人が、彼女の手を握り返した。

.....

「こほん……さて、お腹も膨れたところで作戦会議を始めたいと思います」
食事を終え、食器も片付け全員がテーブルに戻ったところでイストワールが音頭をと
る。

議題はもちろんマジエコンヌの居場所だ。

「あのイストワールが封印されていた場所は調べたけど、あれ以来誰かが入った形跡は

なかったわ」

「あそこを探す時にほとんどの場所は回りましたが、拠点らしき場所や拠点にできそうな場所もありませんでしたし……」

「マジエコンヌの居場所はもうわかっています」

「本当……!?!」

イストワールの言葉に全員が驚きの声を上げる。

「彼女は、恐らく天界にいます」

「天界に？」

「プラネテューヌにある天界への転送機にログが残っていました。間違いないでしょう」

「天界への転送機……そんなものがあるのか？」

「女神様たちは普段その転送機を使って天界と下界を行き来します。ノワールさんたちには馴染み深いのでは？」

「ええ、もちろん知ってるわ」

ともあれ、その転送機を使えば天界に向かうことができるようだ。

ようやくこちらから打って出れると思った矢先のことだった。

『ハーツハツハツハツハツハツハツハ！』

「いい加減聞き飽きたっつーの……!」

このような笑い声を放つ人物は一人しかない。

『聞こえているか、下界に巣食うゴミ虫どもが!』

マジエコンヌの声が響き渡る。

どうやらこの声は天界から下界中に発信されているようだ。

『これより、私は神の力を持って下界を消滅させることを宣言する!』

「追い詰められてる癖に、相変わらず口だけはでかいじゃない」

「ですが、追い詰められた者ほど、何をしてくすかわかりませんわ」

ベールがそう言った直後、何かが爆発したような衝撃と音が部屋を揺らす。

「こつちか!」

アシュレイが窓を開けて外を見る。

原因はすぐ近くにあった。

ネプテューヌもアシュレイの脇から顔を出し、音の原因を見つける。

「なにこれ? 隕石?」

「いや………いつは………」

道端には中くらいの岩がコンクリートを砕き、地面にめり込んでいた。

ネプテューヌの視線は下だが、それに対してアシュレイは上を向いていた。

「……まさか!?なんと恐ろしいことを……!」

「ちよつと、何一人で納得して驚いてるのよ!」

「こいつはただの岩じゃない……」

降ってきた岩の正体。

それは天界から降り注いだ岩だった。

「恐らくマジエコンヌは天界を……天界そのものを下界に落下させるつもりです!」

「天界そのものですって!」

「そんなことができるの?」

「女神四人の力を手に入れた彼女なら、不可能ではありません」

「つまり、この隕石の何倍も大きいのがめちやくちや落ちてくるってこと!」

「冗談じゃない!衝撃波で何もかも吹き飛ばぞ!」

ネプテューヌたちがパニックに陥っているのと同時刻。

ヒロムはプラネテューヌ領土の平原でクエストに勤しんでいた。

「……つたく、好き勝手言いやがって……」

モンスターの討伐を終え、武器をしまった直後にマジエコンヌの声が聞こえてきたの

だ。

「にしても……これはやばいな……」

ヒロムが空を見上げる。

ただっ広い平原に視界を遮る物はない。

その様はまさに世界の終わり。

濁った空から伸びた光と、それを追いかける煙がいくつもの線を描いていた。

あの光の中には天界から落下してきた大小様々な岩が存在するのだろう。

「とりあえず、プラネテューヌに戻るか……」

ヒロムが歩き出そうと思ったその時だった。

背後から波が押し寄せるような音が聞こえてきた。

もちろんヒロムが立っている場所は平原の真ん中。

海などない。

「……い!? ちよつと待てよー!」

ヒロムがすぐさま飛翔魔法のエアログライドを発動し、その場から飛び上がる。

迫るソレを確認したヒロムは続けて高速移動魔法のアクセルダッシュを使い、ゲームギョウ界を見下ろしながら高速で飛び回った。

「おいおい……マジかよ……!」

全ての国の領空を飛び回ったが、ヒロムが目にしたものはどれも同じような光景だった。

ポケットから携帯を取り出し、すぐさまコール。

「……MAGES.！不味いことになった！」

「ヒロムか。そんなに慌ててどうしたのだ？」

MAGES. がかかってきたコールに応答すると、自然とネプテューヌたちの視線もMAGES. に移った。

「なにになに？ヒロくんと話してるの？」

「……ふむ、知っている。先ほど現物を確認したところだ……なんだと!？」

MAGES. が珍しく驚きの表情を浮かべる。

「……了解した。他の奴らには私から連絡を取る……無理をするなよ……ルクス・トクネーヴェ・イメイグ・ノイタミナ・シスウム」

いつもの別れの挨拶を交わし、携帯をしまう。

いつになく神妙な表情だ。

「ヒロムは何だつて？」

「……世界各地で大量のモンスターが発生。それぞれの国へ一斉に進行を始めたそう
だ」

「世界各地!？」

「なんでこのタイミングで!？」

「どうやら先ほどのマジエコンヌの言葉とこの隕石が人々の不安を煽り、モンスターの発生を促進しようですね」

モンスターはアンチエナジীর塊。

そしてアンチエナジীর人々の不安や悪意などから生まれる。

いかに女神が強かろうと、人々の心に巢食う『もしも』を消し去ることは出来ない。

「私はこれから同じ次元の仲間たちとモンスターの迎撃にあたるつもりだ」

「このモンスターの発生と降り注ぐ隕石を止めるには、マジエコンヌを倒す他ありません」

「おお！ようやく最終決戦って感じだね！」

「そうと決まれば、早速天界に行きましょう！プラネテューヌのゲートに案内して！」

素早く身支度を整えたネプテューヌたちがコンパの家を飛び出す。

目指すは、プラネテューヌ教会。

.....

静かなながらも平和な日々。

それは突然終わりを告げた。

「女神様！モンスターを生み出して人々を襲わせてるなんて嘘ですよね！」

扉を開けて早々に銀の髪の彼女はそう言った。

「……………」

「女神様……………」

「今すぐここから出て行け。そしてこれ以上私に関わるな」

「…………嫌です」

「…………私の制御下を離れたアンチエナジーが結晶化し、モンスターとなった。元を正せば私が引き金なのだ」

「だからって…………あなたが全部責任を背負うなんておかしいですよ…………」

二人は俯き、会話も途切れる。

モンスターの原因がわかった途端、あれほど争いあっていた四女神は急に一致団結。

お母様を討伐すると大々的に宣言したのだ。

女神は自分の国の中から勇者なる人物を選び出し、女神の力を分け与えたいらしい。

自分も含めてこちらは二人。

絶望的な状況だった。

こちら側から下界へのアクセスを遮断して時間を稼いでいるが、長くは持たないだろう。

「……私も戦います」

「馬鹿を言うな。負け戦に手を貸すなど……」

「構いません！」

しかし彼女は食い下がった。

「私は女神様の力になりたいんです！お願いします！」

「……………」

「……………」

「……いいだろう」

お母様の手から光が放たれ、それが彼女の体に吸い込まれる。

「私の力の一部だ。お前に渡しておく」

「……必ず返します」

彼女の目には、絶望は浮かんでいなかった。

……………

「ちーっす！おっひさー」

教会の扉を開けた直後、ネプテユーンがフランクな挨拶をする。

「ああつーき、君は……!」

「どーもー! プラネテューヌの女神、パープルハートことネプテューヌでーっす! ちよつと天界へのゲート借りるねー」

「あんたはぶざけてないで、早く先にいく!」

アイエフがネプテューヌの首根っこを掴んで奥へと進んでいった。

イストワールに案内されるまま教会の扉を開けていく。

やがて中央に魔法陣が設置された部屋にたどり着いた。

「これが天界と下界を繋ぐゲートです」

イストワールがゲートの近くにある端末を操作し始める。

「……………」

「イストワール?」

「ダメです……天界側からアクセスをカットされているようです」

「ちよつと! それじゃあ天界に行けないじゃない!」

ノワールが叫ぶ。

天界側からアクセスをカットできるならプラネテューヌ以外の国も同じだろう。

これで天界への道は断たれてしまった。

「困りましたわね……」

「みんな、死んじやうんですか……もうどうにもならないんですか……？」
「コンパ……」

「話は聞かせてもらった！」

「下界は滅亡する？」

「縁起の悪いことを言うな……」

扉を開けてやってきたのは以前から世話になっている教会職員だ。

「あなた、ここの人よね。私たちになんの用かしら？」

「のんびりしている暇はないの。用件があるなら早くして」

「は、はい。ゲートが使えないのであれば、かつて四英雄が天界に行くのに創りだした道……虹の橋を使うというのはどうでしょう？」

「そうですよ、その手がありました！」

虹の橋。

かつて四英雄が悪の女神のいる天界へ渡る際に使ったものらしい。

「問題は今も使えるかどうか……」

「既に教会のものが遺跡のシステムも作動すべく準備しています。あとは、鍵さえ揃えば動いてくれるはずですよ」

「鍵、ですよ？」

「ロリっ子……じゃない。パープルハート様、これを……」

「え、なにこれくれんの？ありがと！」

教会職員が差し出した刀をネプテューヌが受け取る。

鞘から柄を引き抜けば、乾いた音と共に鍛え上げられた鋼の刃が顔を出した。

埃一つない刀身が鏡のように照明の光を反射している。

「遺跡より天界に虹の橋をかけるための鍵となるのは四英雄の武器です。そして、マジエコンヌを倒すのにも必要だと知り、至急ご用意しました」

「つまりこれが英雄の武器って訳か」

アシユレイがふと横を見ると、イストワールが頭を抱えていた。

「まさか……」

「数百年以上前の武器が使い物になるはずがないからね。他の女神様たちの武器同様、パープルハート様に合うように打ちなおしたんだ！」

「……やっぱりな」

何故そのままの形で保存しておけなかったのか。

理解の追いつかないアシユレイとイストワールが溜め息を吐いた。

「ともあれ、これで天界に行けるって訳だな」

「はい。それでは、さっそく遺跡に向かいましょう！」

四つ目の英雄の武器を手に入れたネプテューヌたちは教会を後にする。

目的地である遺跡はプラネテューヌの近郊に存在し、移動にそれほど時間はかからなかった。

中に入り先に進むと、すぐに行き止まりにたどり着いた。

「ここです。ここから四英雄と先代の女神様は天界に向かったのです」

「けど、行き止まりだよ？天界にはどうやって行くの？」

「……四方の壁に大きなへこみがあるわね。もしかして、ここに四英雄の武器をはめ込むんじゃないかしら？」

「……ちよつと待て。はめ込んで認証ってことは……」

「はい。もはや面影がなくなってしまうた武器では、はめ込むことも無理だと思います」

「ここにきて形を変えたことの弊害が出てきた。

「ここが無理なら本当に道は閉ざされてしまう。」

「無理矢理はめ込むしかないんじゃない？」

「そんな無茶苦茶な……」

「なら、今の形に合うようにくぼみを大きくするだけ」

「頼むからやめろ……壊れでもしたら一発アウトだぞ……」

「ダメで元々。可能性があるなら試してみる価値はあるはずよ」

無理を通せば道理が引つ込む、と言わんばかりの女神たち。

そもそも今困っているのはその女神たちのせいだということには気がついていないようだ。

「で、イストワール。どこに何をはめ込むんだ？」

「……まず、北の壁に英雄の槍を」

「わたくしですわね！」

「違います！この場合は英雄ハイブリッジの連槍ですから、ブランさんの武器です！」

「あら、そうでしたわ……おほほほほほ……」

意気揚々と出てきておいて勘違いだったということにペールが若干顔を赤らめながら後ろに下がる。

代わりに出てきたブランがハンマーと化した槍をくぼみに……。

「イストワール、はめたわ」

「今、変な音がしませんでしたか？」

「気のせいじゃないかしら」

「何故目を逸らすんですか……えと、次は東の壁に英雄マウスロープの双式巨銃を」

「次は私の番ね！……けど、元々銃だったくぼみにどうやってはめようかしら？」

英雄の銃は元は二丁の拳銃だったようで、どう考えても剣がはめ込めるようなくぼ

みではない。

「ノワールさん。くれぐれも無理なはめ方はしないようお願いしますね」

「大丈夫よ、こうやって……」

ノワールが慎重に刃を掴み、柄をくぼみに押し込む。

奇跡的にくぼみと柄の幅が同じだった為、はまるにははまった。

「側から見ると壁から剣が突き出ているに非常には危ないんですが……まあ、いいとしましょう。次は、南の壁に英雄ツイーゲの大賢弓を」

「だと思つて、既にはめてみましたわ。ほら、ぴったりですわ」

「ベールさんなにやってるんですか!？」

イストワールの視線の先には弓の形に合うようにはめ込まれ、ありえないほどしなつた槍があつた。

これで折れないのは流石腐つても英雄の武器といったところか。

「最後はわたしの番だね!」

「ネプテューヌさん、くれぐれも無理なはめ方だけはしないでくださいね?」

「大丈夫! だつてほら! カリカリ削つて刀の形にしておいたもん!」

「それが無理なはめ方だつてんだよ馬鹿ネプ公!」

「あいだー!？」

「ああ……神聖な遺跡の壁になんて……」

嘆くイストワールの後ろでネプテューヌがアシユレイから拳骨をもらう。

多少、というより問題しかなかったが、なんとか全ての武器をはめ込む事ができた。

「……色々納得できませんが、天界に向けて虹の橋をかけてみます」

「……頼む」

イストワールが部屋の中央で目を閉じる。

「古の英雄たちよ……いざ、神界への扉の封印を解き放ってください！」

すると部屋から湧き出した光が空へと伸びていく。

それは雲を突き抜け、光の軌跡は虹となった。

まさに虹の橋だ。

「これで天界への道は開かれました。よかったです……」

イストワールがほっと胸を撫で下ろす。

不安要素まみれだったが、なんとか安心して安心したようだ。

「……それじゃあ、わたしたちはここまでね」

ネプテューヌたちが虹の橋に足を掛けようとしたところで不意にアイエフがそう

言った。

「え？あいちちゃん、ここまででってどういうこと？」

「そのままの意味よ。正直、わたしとコンパはアツシユみたいに特別な能力を持つてる訳でもなければ英雄の武器を使える訳でもないしね。足手まといになるだけよ」

「少し前から、あいちゃんと一緒に決めてたです」

どうやらアイエフたち二人は地上に残り、天界の戦いには参加しないようだ。

「けど……」

「あーもー！決まったことをうじうじしない！わたしたちは地上であんたたちを待つ！あんたたちは天界でマジエコンヌをぶっ飛ばす！簡単なことでしょうが！」

「あいちゃん……うん、わかったよ！」

「ねぶねぶ、頑張ってくださいです！応援してるです！」

「ありがとう、コンパ！」

二人になっこりと笑ったネプテューヌが踵を返す。

「……それじゃあ、行こっか！ゲームギョウ界を救うために、天界に！」

6人が虹の橋を登っていく。

ネプテューヌたちの姿はあつという間に見えなくなつた。

「……それじゃ、わたしたちも準備を始めましょうか！」

「はいです！」

それを見送つた二人も遺跡を後にする。

二人にはまだやることがあるのだ。

.....

目を逸らしたかった。

目は逸らせなかった。

「う……………あ……………」

「ぐ……………げほっ……………」

彼女が切られたのとお母様の胸が貫かれたのはほぼ同時だった。

剣が引き抜かれ、お母様がその場に倒れる。

「……………哀れなものね」

血に濡れた銀の髪を見下ろしながら紫の女神が呟く。

「あんな奴の肩をもつからこんなことになるのよ」

「あんな……………奴……………?」

「これはあなた自身が招いた結果。自業自得よ」

そう言つて紫の女神は彼女の血を避けるように通り過ぎる。

「自業、自得……………?あなた達が来なければ……………こんな……………」

「わたしたちがここにいるのはあなた達が原因よ。そんなことも忘れたのかしら？」
「……何も……知らない癖に……知ろうともしなかつた癖に……」

彼女が一度離れた剣を握り締めた。

「パープルハート！」

「……え？」

「お前が！あの人を語るなあああああ!!」

紫の女神は咄嗟に身を庇い、腕に大きな切り傷が刻まれる。

「貴様！」

「待って」

黒の勇者が銃を構える。

それを制止したのは紫の女神その人だった。

彼女の体がゆっくりと傾き、べちゃりという水音と共に倒れ伏す。

「女神……様……」

「お前……」

光のない目がゆっくりと閉じられ、彼女は呆気なく死んだ。

「嘘……だ……そんな……」

ずりずりと這いずりながら彼女に近付く。

彼女の頬に触れるが、既に温もりはなかった。

「う……………ああ……………あ……………」

「ぐ……………おとおおとおお！女神……………共おとおお！」

「みんな、こいつを封印するわよ」

立ち上がろうとするお母様の体を弾丸と矢が貫く。

膝から崩れ落ちたお母様の足元に魔法陣が現れた。

「許さん！私は！必ず貴様らを……………」

魔法陣から現れた棺桶にお母様の体が吸い込まれる。

蓋は閉じられ、何重にも巻かれた鎖を錠前が繋ぎ止めた。

そして現れた鍵は4つに砕け、女神の手に。

「……………終わったわね」

棺桶が消える。

何処かに転送されたのだろうか。

銃口が頭に突きつけられる。

「おい、こいつは……………」

「……………放っておきましょう。こいつ一人で何が出来るとも思えないわ」

8人が歩き出し、最後尾の紫の女神が扉を閉める。

暗く寒い部屋に残されたのは自分一人だけとなった。
「……………」

冷たい肉の塊。

壊れたそれを壊れるほど抱きしめた。

静かな部屋に、小さな水滴の音がやけに大きく響く。

「……………」

「…………… 그레이さん」

「…………… 来ましたか」

アシユレイの呼びかけに 그레이が静かに目を開けた。

第24話 狭間にて揺蕩う

天界。

虹の橋。

その終点で、男は待っていた。

アシュレイたちの方をグレイがゆっくりと振り向く。

「……………この先には彼女……………マジエコンヌ様がいいます。彼女の元に行きたければ、私を倒してから。簡単でしょう?」

皮肉を言うようにグレイは首を傾げた。

顔は笑っているが、その笑みは酷く自嘲的に見える。

「グレイさん……………あなたは何故マジエコンヌの味方をするのですか?」

「……………」

「教えてください……………」

「……………良いでしょう」

一息を吐いて、グレイは話を始めた。

「私と彼女の繋がり話を話す前に、私の本当の名前を覚えておきましょうか」
「本当の……名前？」

グレイは目を伏せ、自分に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

「私の名前は『自動人形1号』。マジエコンヌ様により作られた人工生命体です」

グレイの放った言葉は、ネプテューヌたちの思考を止めるのには些か強力すぎた。

回復する前にグレイが話を続ける。

「マジエコンヌ様は私の母親同然。彼女の意思が私の意思です」

「だったら教えてください……なんでマジエコンヌは世界を？」

「……私が生まれたのは、数百年前……先代の女神が現役だった頃です」

伝承の時代をその目で見てきた男の昔話はそう切り出された。

遙か昔、世界には五人の女神が居た。

四柱の女神は世界の覇権を賭けて争い、もう一人の女神は人々の負の感情を管理していた。

四つの国が争い、それから生まれた負の感情を国を持たない女神が請け負う。

そんな奇妙なバランスで世界は成り立っていた。

成り立っているつもりだった。

簡単な話だ。

たった一人の人物が世界中の全ての人間の不幸を背負えるだろうか？

答えは非。

管理を離れた負の感情……アンチエナジーは世界に拡散。

やがてそれは集結し、実体を持った。

人知では計り知れない異形の存在。

モンスターだ。

それは世界各地で発生、国を襲い始めた。

それだけならまだ良かったのだ。

あろうことか女神はモンスターを人為的に生み出していると解釈。

大々的に『悪の女神』を討伐すると言い放ったのだ。

モンスターは悪の女神を襲わないことがそれに拍車をかけた。

降り注ぐ雨を、溢れ出した泉を止めることなど出来はしない。

噂は世論となり、世論は世界の意思となった。

悪の女神と呼ばれた彼女には友人がいた。

彼女の息子が連れてきたのだ。

友人は彼女の力になると言った。

彼女は友人に力を与えた。

その友人は英雄たちと同じく女神の力の一部を得た、いわば5人目の英雄となった。とはいえ、多勢に無勢。

結果的に彼女は敗北。

友人は生き絶え、彼女自身も封印された。

悪の女神討伐成功の知らせは瞬く間に世界に広がり、人々の不幸を消し去った。

皮肉にも無実の罪で封印された悪の女神によつて、世界は平和になった。

めでたしめでたし。

「……本当に……おめでたいですね……」

グレイがそう呟いた。

「あなた達にわかりますか？ 捻じ曲げられた歴史の奥底に閉じ込められた、彼女の苦しみが……！」

怒り、悲しみ、苦しみ、絶望。

全てが混じったようなグレイの表情に誰一人として言葉を発せない。

「……彼女の死と、理不尽な運命にお母様の精神は壊れてしまいました……私が封印を解いた時、既にお母様は私の知っている優しい彼女ではありませんでした」

そこにあるのは世界への絶望と女神への復讐心。

そしてその思いを晴らすための力への渴望。

「……もう一つ……聞きたいことがあります」

「……なんででしょう？」

アシユレイはプラネテューヌの地下施設でグレイを見たときから、ずっと聞きたかったことがあった。

「……あいつを……殺したのは……あなたなんですか……」

「……そうです」

「っー」

次の瞬間には、グレイが変身したアシユレイの剣を魔力障壁で受け止めていた。

「なんの……ために!?!」

「……あなたの妹は、私とお母様の友人だった女性……5人目の英雄の生まれ変わりなのです」

「生まれ変わり!?!」

腹部に向かって空気砲が発射される。

吹き飛びながらも剣を突き立て、地面に一本の線を刻む。

「彼女の魂には、生まれ変わってもなお分け与えられた女神の力が宿っていました。そしてお母様はそれを望んだ。だから私は彼女を……殺したのです。魔封じの結界を使ってね」

「……全部……あんたのせいだよ……」

強く握り締められた剣がガチガチと震えている。

「……ようやく戦う気になったようですね」

グレイの周囲に六つの魔法陣が展開された。

「……やるしか、ないようですね」

「言われなくても最初からそのつもりよ……」

ネプテューヌたちも女神化を行い、それぞれが武器を構える。

「さあ、来なさい。手加減は……できませんよ！」

魔法陣が一斉にその矛先を向けた。

「おおおおお！」

アシュレイが突っ込み、グレイに剣を振り下ろす。

しかしそれは間に割り込んだ魔法陣に受け止められた。

「ぐっ!？」

「エナジーチェイン」

殺気を感じ、アシュレイが素早く下がる。

足元に別の魔法陣から放たれた魔法の鎖が足元に突き刺さった。

ギリギリかわしたと安堵した直後、鎖が突き刺した地面ごと引き抜かれ、そのまま岩

を投げ飛ばしてきた。

急いで剣を振り岩を砕くと、次は岩の向こうから魔法の剣が飛んでくる。アッシュレイは既に剣を振り抜いており、防ぐことはできない。

「アッシュー！」

割り込んだネプテューヌが魔法剣を叩き斬り、なんとか無傷で済んだ。

バックステップで全員のところに戻る。

「一人で走らないで！わたしたちがついてるから！」

「……悪い」

ネプテューヌの言葉に頭に登った血を下ろす。

次にアッシュレイが前を向いた時、グレイの目の前で四つの魔法陣が円を描くように回転しているのが目に入った。

「来るぞー！」

「カエルム・ルーメン」

四つの魔法陣から巨大な光線が発射される。

全員が素早く真横に飛び、攻撃を回避。

同時にグレイを挟み込むように動く。

「ブラン！」

ベールとノワールが左右から切り掛かり、それを残った2つの魔法陣が防いだ。その隙にブランがグレイに肉薄。

「懐に入りやこつちのもんだ！」

大斧がグレイに振り下ろされる。

「ぬるいですね」

「なっ……!?!」

グレイは一歩足をずらした。

その僅かな動作だけで轟音をたてながら岩盤を砕いた斧を回避してみせた。

「それ……つとー！」

斧の持ち手を蹴り上げ、宙に飛ばすと同時にブランに正拳突きを打ち込む。

ブランも負けじと腕を交差させ、それを防いだ。

反動で背後に飛ばされる。

「ほら、忘れ物ですよ！」

グレイが落下してきた斧をさも当然のように掴み、ブランに投げ返してきた。

避けようと動くブランを2つの魔法陣が挟む。

「つーちつくしよおー！」

それぞれ魔法陣から二本の鎖が伸び、四肢を絡め取った。

強制的に大の字に開かれたブランに回転する斧が迫る。

「ちいー！」

アシュレイが龍の腕をブランの前に差し出し、斧を自ら受け止めた。

刃が肉を裂き、骨を打つ。

「ぐ……う……!?!」

「アツシユー！」

「……つらあー！」

ブランが自力で鎖を引きちぎり、四人がアシュレイのカバーに入った。

その五人を魔法陣が取り囲む。

「つ……タスク・ファイアオール！」

「ジャックフロスト」

アシュレイの声にノワールが剣を地面に突き立てる。

魔法陣から液体窒素が噴射されるとネプテユーンたちが炎の壁を取り囲んだのは

ほぼ同時。

触れるものを全て凍てつかせる冷気に炎が勢いを弱めていく。

「はあー！」

ペールが槍を振るう。

突風に押し出された炎の壁が火力を増し、急激にその範囲を広げた。
一気に押し返す。

「ふむ……」

グレイは正面に魔力障壁を展開。

難なく迫る火炎を凌いだ。

一旦魔法陣を自身の周囲に呼び戻す。

「ふっ……ああっ！」

アシユレイが左腕からブランの斧を無理矢理引き抜く。

斧を手放し、血の溢れ出す腕を抑えると、ゆっくりとだが、血はその勢いを弱めていった。

細胞変異の力で治癒力は増加しているものの、傷は深い。

「すまねえ、アツシユ……」

「つはあ……そういうのは、後にしろ……」

「強い……ですわね」

「でも、ここで止まるわけにはいかないわ」

「……お前らに、頼みがある」

グレイが軽く腕を振るうと六つの魔法陣が組み合わさり、一つの大きな魔法陣となっ

た。

「フアントムブレード」

巨大魔法陣から無数の剣が射出される。

「……頼んだ！」

五人が左右に分かれて走り出す。

グレイは魔法陣を回転させ、片方を追いながら剣を打ち続ける。

「オラア！」

「はああ！」

グレイが射出を停止、分解した魔法陣の内2つを背後に回す。

斬りかかってきたブランとノワールの攻撃を容易く受け止めた。

「やああ！」

「せえい！」

今度は前からベールとネプテユース。

これも防がれる。

「おおお！」

ネプテユースたちに反撃をしようと動いていた残り2つの魔法陣が突如軌道を変えた。

アシユレイの龍と化した両腕が受け止められる。

左腕の傷が開き、血が噴き出そうと構わず力を込める。

「ぐ………おとおおお！」

「……シヤドウサーヴァント」

ネプテューヌたちの攻撃を受け止めていた魔法陣が衝撃波を放ち、四人の体を後方に飛ばした。

そのまま地面へと張り付いた魔法陣からズルリと黒い何かが伸びる。

粘土のように形を変えていき、黒はグレイの姿を取った。

「へっ、こいつらがわたしたちの相手ってか！」

「アツシュ！後は任せるわ！」

ネプテューヌたちが目の前に現れた幻影と戦闘を開始する。

「さて………」

呟いたグレイがアシユレイを抑えていた魔法陣からも衝撃波を放った。

後ろに下がりながら腕を元に戻し、剣を構え直す。

「これで、二人きりですね」

「……………」

遠、中距離はグレイの独壇場。

かといって体術にも優れるグレイに接近戦では先ほどのように返り討ちに遭いかねない。

だからこそ、グレイの動きを身をもって知っているアシュレイが前に出てきたのだ。残った2つの魔法陣がグレイの背後へ移動する。

「昔を……思い出しますね」

「……あの頃から、何も変わらない」

左腕の痛みは忘れた。

目の前の男だけに全神経を集中させる。

「さて、始めますか……」

「倒す……何がなんでも……!」

同時に二人が動きだした。

「はあああああ!」

グレイに剣を振り下ろす。

リーチは得物を持ってしているアシュレイの方が上。

グレイの手足が届かない距離をキープする。

「ライトニングボルト」

攻撃を回避していたグレイが不意に呟いた。

反射的に横に飛ぶ。

先ほどまで立っていた位置に巨大な雷が降り注がれた。

「剣は上達したようですが、これはどうですか？」

上空の魔法陣が続けて雷を落としながらこちらに近づいてくる。

アシユレイは一旦離れ、グレイの周りを時計回りに走り、雷から逃げる。

「……っ！」

小さく息を吐き出し、足に力を込めた。

一気に距離を詰める。

「せえいー！」

「見え見えですよ」

着地と同時に右上から剣を振り下ろすが、グレイは難なく回避。

勢いを利用し、そのまま左の回し蹴りを放つ。

「遅いですね」

左腕であっさりと受け止められた。

だが、それでいい。

剣を地面に突き刺し、三本目の足とする。

右足が浮き上がり、狙うのは顔。

しかしそれにさえ反応したグレイの頭が後ろに下がる。

「おっと!？」

靴に仕込まれた刃が伸びる。

グレイの体が弾かれるように背後に離れた。

手放され自由になった左足、空を切った右足の順番に着地。

腰を捻り、剣を投げつける。

「へえ、やりますね!」

回転する剣の柄を正確に掴んだグレイが剣をそのまま投げ返してきた。

アシユレイも同様に剣を掴み、再びグレイに接近戦を仕掛ける。

「おおおおお!」

剣を振るい、返し、突き出し、叩きつけ、僅かな隙に正確に差し込まれる拳打をいな

していく。

「フォーム……」

突き出した剣をグレイが後ろに下がって回避。

「ツヴァイ!」

刃が伸びる。

しゃがんでかわされた。

頭上で薙刀を回し、縮こまったグレイに左斜めに振り下ろす。

「動きが緩慢ですよ！」

グレイはしゃがんだまま左手を背後の地面につき、そこを軸にするように下がった。遠心力の乗った刃が地面に叩きつけられた衝撃で土煙が上がる。

その奥にグレイの顔が現れた。

「フォーム・アイン！」

柄を引き寄せ、薙刀を剣に戻す。

直後、剣の刀身越しに蹴りが打ち込まれ、衝撃に逆らわないように背後に飛んだ。グレイの正面、アシュレイの足元に魔法陣が現れる。

「フレーム……！」

打ち出した火球が空中で混ざり、激しく収縮。

開いた掌を相手に向ける。

「イグニツション！」

握りつぶす。

爆発的に肥大化した火球の熱線と衝撃波が辺りを支配した。

「っ!？」

息を荒げたのはアシュレイ。

煙の向こうから伸びた鎖がアシュレイの足を掴んだ。

次に自分の身に起こることを予知し、垂直に跳ぶ。

「う……おおおお!!」

体が一気に引つ張られ、そのままグレイを中心に振り回される。

凄まじい遠心力が体を襲うが、剣だけは離すまいと力を込めた。

「さて、あなたはどうしますか?」

風の音に紛れてグレイの呟きが聞こえる。

軌道上に割り込んだ魔法陣から槍が生えた。

「マジかよ!」

この勢いで槍に突っ込めば、確実に死ぬ。

防御は意味をなさない。

アドレナリンが湧き出し、一瞬の内に凄まじい量の情報が脳を駆け巡る。

「間に合うか!」

思考を終え、実行に移す。

アシュレイが意を決し、自由な左足をハサミに変異させる。

そして絡め取られた自身の右足を脛から切り落とした。

トカゲの尻尾切りと同じ原理だ。

遠心力のまま打ち出されたアシュレイの股を槍の刃が通りすぎていく。
「ぐっ……」

右足の無い状況で着地など出来るわけもなく、無様に地面を転がる。

「なるほど……しかし……」

顔を上げたアシュレイの目の前にはグレイが立っていた。

顔を青くするより早く腹部に衝撃。

転がった先で、また衝撃。

「はぁ……ぐう……」

「ハイ・グラビティ」

「がぁぁぁぁぁ!?!」

立ち上がろうとしたアシュレイの体に強烈な重力波が襲い掛かる。

内臓が潰れ、口から血が吹き出た。

「……………」

「……………これがあなたの終わり……ですか」

呆気ないものですね、と付け足したグレイの手に魔法剣が生み出される。

その矛先は未だ幻影と戦っているネプテューヌに向けられていた。

それを投げつける。

「!?」

しかしそれは直前で阻止された。

殺気に振り向いたグレイの顔面に拳が叩き込まれる。

「まだ……終わってない……!」

転がっていた右足にはいつの間にか蔦が伸びており、何処かに引きずられていく。

そしてそれは在るべき場所に戻った。

「あんたを倒すんだ……今日、ここで!」

しっかりと両足で立ち、杖にしていた剣を地面から引き抜いたアシュレイが叫ぶ。

「……良いでしょう」

グレイが立ち上がり、投げようとしていた剣を構えた。

「これで……終わりです」

お互いに正眼に構え、その時を待つ。

「……………」

「……………」

今。

「おおおおお！」

「はあああああ！」

刃が噛み合い、火花を散らす。

お互いに剣を弾く。

体勢が崩れたのはアシュレイ。

「トドメです！」

突き。

狙いは喉。

「そこだ！」

「なっ!？」

隙を晒したのはフェイク。

アシュレイの蹴りがグレイの剣を砕いた。

剣を掲げ、振り下ろす。

「…………お見事」

そう言ったグレイは、笑っていた。

「影が……」

「消えましたわね」

ネプテューヌたちと戦っていた幻影が突如霧散。

それは戦闘が終わったことを示していた。

ネプテューヌがアシユレイと合流しようとするが、ボールがそれを押し留めた。

「はあ……はあ……」

アシユレイが疲労から変身を解く。

目の前には自らの師が横たわっていた。

「……私は……何がしたかったのでしょうか……」

自分の手にへばりついた血を眺めながらグレイが呟く。

「……グレイさん」

「……」

「俺を襲ったモンスター……あいつなんででしょう？」

「……どうしてそれを？」

「……声が……聞こえるんですよ……あいつの声で……アツシュって……」

それは初めてアシユレイが変身した時に聞こえた声。

そしてアシュレイが自らの正体を明かされた時に聞こえた声。体に響く、あの、声。

「……そう、ですね……私の知る、全てを話しましょう」

グレイの話にはまだ続きがあった。

一人残された男……グレイは封印された母親……マジエコンヌを助ける為、様々な地を転々とした。

魔術を極め、書物を片っ端から読み漁り、どんなことも全てその身に吸収した。

そして遂にマジエコンヌの封印を解くことに成功。

しかし、既にマジエコンヌはグレイの知る優しい人物ではなくなっていた。

それからグレイはひたすらマジエコンヌの手足として動いた。

イストワールを封印し、産まれたてのネプテューヌたちを高度な情報操作により仲違ひさせ、守護女神戦争を再発。

エネミーディスクを作ったのも、サンジュをそそのかし、アヴニールを発足させたのもグレイだ。

全てはマジエコンヌの為。

また彼女のあの優しい微笑みを見たい。

その為にグレイは行動してきた。

とある日、グレイはマジエコンヌからある指令を受けた。

指令は、ルウイーのシエアエナジーを研究している人物を殺し、その研究物を奪うこと。

グレイはそれを実行。

しかし問題が起きた。

殺害現場を子供に見られたのだ。

研究者には娘がいた。

グレイは親同様に殺そうかと思つたが、どうしてもその少女を殺めることができなかった。

グレイは少女の記憶を消し、ルウイーから離れたラストイシヨンの河原に捨てた。

記憶を消された少女は後遺症で精神崩壊に至つたが、そんなことはグレイにとってはどうでも良いことだ。

後に少女は街の少年に拾われ、暖かい家庭で幸せに暮らした。

マジエコンヌの計画が順調に進む中、グレイはラストイシヨンの街で剣を振る少年を見つけた。

なんとなく、グレイは少年に剣の振り方を教える。

すると少年は自らを先生と呼び、様々な知識を求めた。

人付き合いの久しいグレイは人に教授することにのめり込み、少年に自らの長い長い旅で得た知識を伝えた。

ある日、少年が自らの妹をグレイに紹介する。

グレイは目を疑った。

その妹は、かつて自分が記憶を奪った少女だったからだ。

久々にマジエコンヌからの招集をかけられたグレイは彼女から新しい指令を受けた。

それはかつて自分たちと戦った女性の魂を持ってこいとの事。

グレイは初めて反論した。

『殺すのではなく、分け与えた力を引き出すだけではダメか』と。

グレイはすでに知っていた。

あの少年の妹こそがあの女性の生まれ変わりだと。

答えは、非。

グレイは絶望した。

絶望しながらも、彼女に従うことしかできなかつた。

計画は、成功。

少女は死に、その魂の回収にも成功した。

その成果に対し、マジエコンヌはひとつ鼻を鳴らしたただけだった。

グレイは悟っていた。

自分ではこの人を救うことは出来ない。

そして、この悲しみの連鎖を断ち切ることも出来ない。

グレイは女神の力を引き抜いた少女の魂の残りカスに新たな体を与え、野に放った。少女はかつて生活を共にした少年とひとつになった。

当然だ。

グレイ自身が少女に頼んだのだから。

彼と共に世界を旅し、そして、この悲しみを終わらせるように、と。

少年が得たアンチエナジーを操る力は、少女の魂に残った女神の力の残滓が原因だったのだ。

「後は……あなたの知るままです」

「……………」

アシユレイは、何も言えなかった。

グレイの目から涙が流れていたからだ。

「私は……何をしてきたんでしょう……？」

その涙は贖罪。

その言葉は懺悔。

「お母様を守れず、彼女を見殺しにし、あの子の親を奪い、あの子自身さえも殺め、そして……あなたの運命さえ狂わせた……！」

涙が、流れる。

「そして今、世界さえ壊そうとしている……」

その涙も、血に食われて消える。

「私は……私は……！」

「……あなたがやったことは、間違ってたかもしれない」

その涙をアシュレイの手が受け止める。

消えないように、しっかりと。

「でも、それでも……」

アシュレイがゆっくりと言葉を紡ぐ。

「あなたは、俺の先生です」

グレイも、その言葉を静かに受け止めた。

「……あなたに、2つ、お願いがあります」

「なんですか？」

「彼女を……止めてください……悲しみを……その剣で……断ち切るのです……」

「……わかりました」

師からの言葉を、声を、胸に刻む。

「もう一つ……顔を、よく見せてください……」

血に濡れた手がアシュレイの頬に添えられた。

それを拒む理由はない。

「……本当に……よく似ています……」

手が、滑り落ちた。

「……『アツシユ』……向こうで……待っていますよ……いつまでも……」

グレイがかつて、彼に初めて出来た友人の名前を呼んだ。

光が、放たれる。

「お別れです……」

光が収まった時、アシュレイの目の前には緑の大地が広がっていた。

彼が世界に残したものは何一つなかったが、アシュレイの心に何か、とても大切なものが新しく根を下ろした。

「……」

「……アツシユ」

アシュレイの背後から変身を解いたネプテューヌの声が届く。

「行こう。終わらせるんだ、全部……」

「……うん！」

残すは、ただ一人。

全ては、悲しみを断ち切るために。

最終話 生まれ変わる物語

イストワールに導かれるまま天界を走る。

「アツシユ、体は大丈夫なの？」

「もう治った。心配するな」

ネプテューヌの声にアシュレイが走りながら答える。

すでに傷は塞がり、戦闘中に傷が開くこともないだろう。

「皆さん！あそこです！」

イストワールが指差した先には幻想的な天界の風景に混ざり、無骨な洞窟が存在していた。

洞窟は入り口からすぐに階段が設置されており、あたりを照明が照らしている。

どう見ても人為的に作られた場所であることは明らかだ。

「ここに……マジエコンヌが……」

「……行きましょう」

階段をゆっくりと、慎重に下りていく。

階段を降りた先には大きな鉄の扉が待ち構えていた。

「……………」

無言でアシユレイが扉を押す。

扉はズルズルと音を立てながらも、素直にその口を開けた。

「……………」

「かつて、先代の女神と四英雄がマジエコンヌたちと戦った場所です」

一歩ずつ足を進める。

扉の先には、だだっ広い空間が広がっていた。

部屋の隅や天井に設置された照明以外に何、というものは一つとしてない。

「……………」

不意に、アシユレイの足が止まった。

眼下にはとても古いものだが、血痕らしきものが確認出来た。

しかしそれはほぼ周りの床と同化しており、見つけようと思わなければ見つけられないほどだ。

何故気付けたのか。

その血が這いずった先。

その奥に存在する暗がり。

「ようやくここまでたどり着いたか……待っていたぞ」

「マジエコンヌ……!」

そこには玉座に座るマジエコンヌの姿があった。

「貴様らがここに来たということは、奴は死んだか」

そう呟くマジエコンヌの言葉は酷く無感動で、他人事のような無関心さだった。

「あんたは……何も思わないのか……自分を慕ってきた……息子同然の奴が死んで……何も感じないのか!」

「知るか」

吐き捨てる。

「奴はただの駒の一つにすぎん。私の指示に忠実に従う駒だ。壊れたのなら、また新しい駒を用意するだけの話だ」

今のマジエコンヌにとって、グレイはただの道具だった。

壊れたのなら、代替品を用意するだけ。

アシユレイが拳を握り締める。

「アツシュ……」

「……マジエコンヌ! 天界を落とすなんて馬鹿な真似はやめなさい!」

「ふん、やめろと言われて誰がやめるものか!」

ノワールの言葉をマジエコンヌは容易く跳ね除けた。

しかし、それはある意味ノワールにとって好都合な返事だった。

「なら安心したわ。ラスティションを無茶苦茶にしてくれた借り、今日こそ返してあげるわ！」

「アヴニールが好き勝手振舞う間、おどおどと指をくわえて見ているしかなかった非力な女神が何を言う」

マジエコンヌの挑発に、ノワールは一つ鼻を鳴らすのみ。

一歩前に足を踏み出す。

「確かに私はちよつと要領が悪かったり、不器用な感じがあるのは自分でもわかるわ。それでもね、シアンたちの為に良い国にしようって一生懸命頑張ったのは本当。そして、それはこれからも続けていくつもりよ」

ノワールの姿が光に包まれる。

背中まで伸びた白い髪。

身の丈ほどある黒い大剣。

ターコイズブルーの目には女神の証であるマークが浮かぶ。

「だって、私はラスティションの女神なんだから！」

ラスティションの女神、ブラックハート。

「はっ！口先だけは達者になったようだな」

「では、わたくしからは一言、お礼を言わせていただきますようか」

今度はベールが前に出てきた。

「礼だと？女神の力を失ったことがバレるのを恐れ、一人閉じこもっていた臆病者のお前がかな？」

「確かにあなたの言うとおりに、わたくしは女神の力を失った自分を否定されるのを怖れていましたわ。臆病者と罵られるのも致し方ありません」

ベールが静かに目を伏せる。

「……ですが、女神の力を失ったおかげでわたくしはあいちゃんやコンパさん。そしてここにいるネプテューヌたちと出会い、わかり合うことができましたわ」

ベールの姿を女神化の光が包み込む。

若草色の髪。

手には緑刃の槍。

女神の証が浮かぶ紫の目がゆっくりと開かれる。

「大切な友人との出会いをくれた貴女にお礼を……そして、それを奪わせないためにも、ここで討たせていただきますわ！」

リーンボックスの女神、グリーンハート。

「それが貴様の戦う理由か？くだらん……他人など操るだけの存在だ！」

「孤独になったあなたには、もう仲間の大切さがわからないみたいね」

マジエコンの言葉にブランが静かに返す。

「仲間？ルウィーを奪われ、信者に偽物と罵られ、教会を追い出された貴様から、よもや仲間を説かれるとはな！」

「……起こつてしまったことを、変えることは出来ないわ」

小さく息を吐き、脳裏に浮かんだ苦い記憶を追い出した。

「けど、フィナンシエやレジスタンスのみんなは、わたしをずっと信じてついてきてくれた」

ブランが女神化の光を放つ。

氷のように冷たい水色の髪。

携えるは大斧。

炎のように赤い目の奥には女神のマークが燃えている。

「ただだけ惨めになろうと、わたしを信じてくれる人がいる！それだけで命をかけて戦う理由は十分過ぎるんだよ！」

ルウィーの女神、ホワイトハート。

「戯言だな……命は利用するもの。自ら命を捨てるなぞ愚かだ」

「お固いなーマジエっちは。友達とわいわいするだけでも結構楽しいよ?」

ニコニコと話すネプテューヌをマジエコンヌが睨む。

「友……そんなもの、なんの役に立つ? そんなものは自らの首を絞めるだけの存在だ!」
「うーん……まあ、良くも悪くも友達って自分じゃないからさ……喧嘩だってするよ。急にいなくなつて、悲しい思いもした……」

ネプテューヌがちらりと横に立つ友人を見た。

「けど、そういう辛いことや悲しいことも、全部みんながいるからこそそのものだってわたしは思うんだ!」

「ネプ公……」

「嬉しいことも悲しいことも全部ひつくるめたのが今のわたし! 昔のことは忘れちゃったけど、今のわたしには今のみんながいる!」

光の柱が立ち上る。

バイオレットの髪。

目の前に現れた大太刀をその手で掴んだ。

青い目には女神の証が輝く。

「みんなの世界を守る為に、わたしはあなたを倒す!」

プラネテューヌの女神、パープルハート。

「ふん！貴様らがどう足掻こうが、滅びから逃れることはできん！世界を滅ぼし、貴様らを滅することで私の悲願は達成されるのだ！」

「……マジエコノヌ、あなたにはもう言葉は届かないのですね」

「……哀れだな」

「何……？」

アシユレイが呟いた。

「悲しい奴だよ……お前は……」

「貴様……何が言いたい？」

「恨まれて、恨み返して、また恨まれる……そんなことを何度繰り返しても何も救われない。何も終わらない」

「案ずるな。全てはここで終わる……この世界と共にな！」

「……正義論に興味はないが、これだけは言える」

アシユレイの体にアンチエナジーが取り込まれていく。

黒い炎の中から黒髪の男が現れた。

「あんたは、間違ってる」

背負った剣を引き抜き、突きつける。

これが、最後の戦い。

「……来るが良い！」

「あんたの悲しみ……俺が……俺たちが断ち切る！」

剣を胸の前まで引き戻し、同時に駆ける。

彼我の距離は瞬く間にゼロとなった。

「はああああああ！」

アシユレイの剣とマジエコノの槍が噛み合う。

そのまま得物を打ち鳴らし、火花を散らす。

「ぬん！」

不意に放たれた掌底を剣の腹で受け止めた。

その反動で後ろに下がると同時にノワールとベールが前に。

「はあ！」

「遅い！」

ベールの突進をいなしたマジエコノの頭上に影が射す。

特大の炎を蓄えた剣を振りかぶったノワールがそこにいた。

「ヴォルケーノダイブ！」

剣が地面に叩きつけられると同時に強烈な爆風が辺りを襲う。

マジエコノは魔力障壁を展開。

衝撃を和らげつつ追撃を回避した。

「見えているぞー！」

障壁を背後に回す。

回り込んだブランが斧を振りかぶっていた。

「ナメんなー！」

振り抜いた斧は障壁と激突し、砕き割る。

「ちいー！」

「せえええええいー！」

直後、マジエコンヌの腹にネプテユーナの飛び蹴りが刺さった。

吹き飛ぶマジエコンヌを先回りし、剣を構える。

「ビクトリィー……スラツシュー！」

渾身の一撃がマジエコンヌの体を捉えた。

さらに吹き飛び、地面に叩きつけられる。

「……今のは、痛かったぞー」

そして何事もなかったかのように立ち上がった。

「そんな……効いてないの!?!」

「言っただろう、痛かったと」

そう言うマジエコノヌの体に刻まれた傷を黒い何かが覆う。

それが消えた時、そこにあつたはずの傷はなくなつていた。

「再生した!？」

「おそらくあれは、アンチエナジーの力です!」

「だつたら再生出来なくなるまで叩くだけよ!」

ノワールが一人マジエコノヌに突進していく。

「だが足りない……」

「レイシーズダンス!」

マジエコノヌは初動のサマーソルトを飛んで回避。

ノワールも追いかける。

ハイキックは逸らされたが、続く回し蹴りがマジエコノヌの槍を弾き飛ばした。

「もらった!」

ノワールが剣を振るう。

響いたのは金属音。

「足りないぞ」

「……え?」

マジエコノヌが手にしていたのは、黒い大剣。

ノワールの手に握られている物が、マジエコノヌの手にもあつた。

呆気にとられているノワールの腹にマジエコノヌのつま先がめり込む。

「がふ……」

天井に背中を打ち、そのまま落下。

その下には剣を掲げたマジエコノヌ。

「落ちろ！」

剣を叩きつけられ、ノワールの体が弾丸のように弾かれる。

「ノワール！」

飛んできたノワールの体を偶然近くにいたアシュレイが受け止めた。

「おい、大丈夫か！」

「けほっ……大丈夫、じゃないわよ……」

「ンの野郎！」

ブランが手から複数と魔法弾を生成。

「ふん」

それを見たマジエコノヌの剣が光を放ち、形を変える。

今度はブランの斧になった。

同じく手から魔法弾を生み出す。

「打ち砕け」

「ゲフェーアリヒシユテルン！」

全く同時に同じフォームで魔法弾を打ち出した。

空中でぶつかりあったそれが冷気の爆風を放つ。

「ぐっ……押し負けた!?!」

明らかに爆風はブランの方に傾いていた。

青白い冷気突き破り、マジエコンヌが現れる。

「っ!?!」

「油断はいかんな」

ブランが斧を風ぐが、それを見透かしたようにマジエコンヌはしやがんで回避。

「吹き飛ばー！」

そのまま斜め下から決るように斧が振られる。

わき腹にめり込み、飛ばされた勢いのまま壁にクレーターを作った。

「はあああああああ！」

背後からベールが槍を突き出す。

その一撃は同じ槍で弾かれた。

「くっ……レイニーラトナピユラ！」

お互いが高速で槍を突き出す。

触れるのは切っ先だけ。

鏡に攻撃しているように正確に防がれる。

「遅いな」

その内の一発。

マジエコンヌは僅かに刃を下にずらし、突かれると同時に跳ね上げる。

「なっ!？」

たったそれだけでベールの槍を止めた。

頭上で槍を回し、遠心力のまま無防備なベールのわき腹に芯を叩きつける。

「ぐ……………う……………!」

弾き飛ばされ地面を転がったベールに追撃しようとしたマジエコンヌが足を止めた。

「やあ!」

「はあ!」

「やはり来るか……………」

マジエコンヌが振り返り、右手に紫の太刀。

左手に再び黒の大剣を呼び出す。

それらでアシユレイとネプテューヌの剣を受け止めた。

「くっ……なんてパワーなの……!?!」

「言った筈だ。私は貴様らの力をコピーし、女神をも超えたと!」
腕を振るい、二人を弾き飛ばす。

「猿が人間に勝てると思うか!?!」

マジエコノヌが一瞬で距離を詰め、三人が剣を打ち合う。

二体一にも関わらず、押しているのはマジエコノヌ。

「貴様らは私にとつて……」

再び弾き飛ばされた。

マジエコノヌが二本の剣を腹の下で交差させる。

「ただの小賢しい猿に過ぎん!」

それを振り払えば、放たれた光の刃が二人を飲み込んだ。

「ふん、他愛ない」

静かになった部屋を見渡しながらマジエコノヌが玉座へ歩く。

中断していた天界落としを再開するつもりだ。

「……まだ生きていたか」

マジエコノヌが振り返ると、そこには瓦礫をどかしながら立ち上がるネプテユーンとアシュレイの姿があった。

「誰が……死ぬかよ……」

「わたしたちは、自分の為に戦ってる訳じゃないわ」

ノワールが剣を杖に立ち上がる。

「私たちの背中には、下界の……ゲームギョウ界のみんなの命が掛かっているのよ！」

ブランが壁から体を引き抜き、ふらつきながらも立ち上がったベールの隣に立つ。

「彼らが、わたくしたちの背中を押してくれる……」

「これじゃあ、死んでも死に切れるかっての！」

全員が再び武器を構えた。

「負けれない……意地があるんだよ！」

「……ならば、何度でも殺してやろう！」

マジエコンヌが走る。

狙いはブランとベール。

「ぬん！」

左手の大剣がブランの斧と噛み合う。

続けて右の太刀。

「させませんわ！」

「バレているぞ！」

太刀を背中に回し、背後からの槍の一撃を防ぐ。

そのまま回転切りで二人を弾き飛ばした。

「シレットスピアー！」

マジエコンヌが魔法陣を展開し、ボールに向けて魔法の槍を打ち出す。

それを間一髪回避したボールは自身の槍をマジエコンヌに向かって投げた。

「どこを狙っている！」

しかしそれはあつさりとかわされてしまう。

武器を失ったボールにマジエコンヌが迫る。

「終わりだ！」

マジエコンヌが太刀を突き出す。

「それは……」

目を閉じ、一步を踏み出した。

刃が肩を抉るが、怖れず進む。

「どうでしょう！」

更にもう一步。

懐に入り込み、踏みしめると同時に背中を押し当てる。

鉄山靠。

「ぐおう!？」

鈍い音と共にマジエコンヌの体が後ずさる。

背後から殺気。

「どおりやあああああー！」

ブランが斧を振り下ろす。

左手の大剣で受け止め、反撃の右が迫る。

「ベールー！」

ブランの左手が翻る。

マジエコンヌの太刀が弾き飛ばされた。

「確かに受け取ったぜー！」

ブランの左手には先ほど投げたベールの槍が握られていた。

そのまま剣一本となったマジエコンヌに連撃を浴びせる。

「こいつで……！」

斧を振り上げる。

ガードの上からマジエコンヌの体を強引に空中へ跳ね上げた。

斧を投げ捨て、槍を構える。

「どうだあああああー！」

放たれた槍が剣を砕き、マジエコンヌの腹を貫いた。

「が…………ぐ…ふつ……………!」

着地と同時に血を吐く。

腹には風穴が空いていたが、それもすぐにアンチエナジーの集合体が埋め尽くし、修復を始めた。

「タスク・ディザスター!」

アシユレイの声。

「行くわよ、ノワール!」

「へましないでよね!」

ネプテューヌとノワールがマジエコンヌに連続攻撃を仕掛ける。

「なめるなあああああ!」

マジエコンヌは二本の剣を再召喚し、それを迎撃。

「はああああああ!」

「ぬ…………ぐう…………!?!」

先ほどのダメージが残っているのか、マジエコンヌが徐々に押し負けていく。

「もらった!」

ネプテューヌが剣を弾き、その一瞬の隙にノワールが蹴りを見舞った。

「おおおおお！」

「せやあああああ！」

三人が剣撃波を放つ。

衝突した剣撃波はマジエコンヌのそれを飲み込み、マジエコンヌに斬撃痕を残した。

「アツシユ！」

「終わらせるぞ！タスク・ミッシングパープル！」

二人がマジエコンヌへと走る。

「オラオラオラオラー！」

電撃を纏ったアシユレイの連続切りがマジエコンヌを捉えた。

「ネプ公！」

一瞬で背後に回り、掌底でマジエコンヌの体を吹き飛ばす。

そこをネプテューヌが飛んできたマジエコンヌをかち上げ、結界に閉じ込めた。

「これが、わたしたちの全力よ！」

そのまま高速で斬撃を浴びせる。

「行きなさい！」

ネプテューヌの締めの一撃がマジエコンヌの体を真上に吹き飛ばす。

天井を砕き、外に出た。

「これで……」

ネプテューヌも飛び上がり、マジエコンヌを追撃。

更に上空へ。

ラストに高く打ち上げる。

「トドメだあああああ！」

そこに先回りしたアシュレイが真っ直ぐに剣を振り下ろす。

流星のように落下したマジエコンヌは地面を削り、やがて止まった。

「はあ……はあ……」

アシュレイとネプテューヌの後を追って、ブラン、ベール、イストワールの三人も地

上に上がってくる。

「……………がはっ……………！」

これだけのダメージを受けてなお、マジエコンヌは生きていた。

とはいえ、最早まともに動ける体ではなく、回復も追いつかない有様だ。

「何故だ……女神を超える力を得た私が……何故負ける……！」

「マジエコンヌ……もう、良いだろう？」

アシュレイが剣を下ろす。

「お前の負けだ……もう、戦う必要はない」

「なんだと……?」

「俺たちを……女神を……世界を壊したって、きつとお前は何も救われない……」

そして手を差し伸べた。

「もう、何も壊さなくても良い……誰かを恨むこともない……それで良いじゃないか……」

「……………」

「頼む。この手を取ってくれ」

全ては、悲しみを断ち切るため。

彼が望んだことを、アシュレイは彼女に申し出た。

「……………フフフ……………」

マジエコンヌが柔らかく笑い出す。

「ハ、ハハハ……………」

そしてそれは

「ハーツハツハツハツハツハ!!」

狂気を帯びていた。

「っ!?!」

「アツシユ!」

ネプテューヌの悲鳴にも似た叫びにアシユレイが手を引く。

手の平に熱が走った。

「何も壊す必要はない!? 誰も恨む必要もない!? 誰も救われたい!」

マジエコヌの手にした剣にはアシユレイの血が滴っている。

「元より私は救いなど求めていない! 否! 救われる者など存在する必要もない!」

狂気に飲まれたマジエコヌが叫ぶ。

「女神を殺し! 人間を殺し! 世界を殺し! 私自身をも殺す! その為に私は全てを投げ

打ったのだ!」

「歩み寄る気は……分かり合う気はないのか!」

アシユレイの言葉はマジエコヌの耳に届かない。

届く筈もない。

「貴様に……究極を見せてやろう! さあ、這いずれ! 恐れよ! 幕切れだ!」

マジエコヌの体におぞましい量のアンチエナジーが吸い込まれていく。

「ぐ……おおお!」

急な突風に押し出され、地面を転がった。

「……おい、なんだよ……これ……」

「これが……マジエコヌ……なんですの……?」

「マジエコンヌ……あなたは人の姿すら捨て去ろうというのですか……？」
黒い霧が晴れた時、そこにいたのは先ほどのマジエコンヌとは似ても似つかない存在だった。

頑強な黒い皮膚に、巨大な爪と翼。

体の節々には赤黒い角が突き出し、その姿はドラゴンに見える。

しかしそれから発せられるプレッシャーは次元が違う。

「グオオオオオオオオ!!」

「ぐ……クソ……!!」

アシュレイが剣を構える。

構えたつもりだった。

「はぁ……ちつくしよ……!!」

手にした途端に剣は手から滑り落ちた。

もう限界だった。

振り返れば、他の四人も女神化を維持するだけで精一杯。

とても戦える状況ではない。

「……こんなところで……終わるかよ……」

諦めたようにアシュレイが膝を突く。

すると眠気が襲ってきた。

「悪い……もう……無理だ……」

それに逆らうことなく、アシユレイは静かに目を閉じた。

「それじゃあ、行くですよー。さん、にー、いち……こんぱー!」

不意に聞こえた声に、アシユレイの意識が一気に覚醒した。

顔をあげる。

「はーい。みんな、盛り上がってる?今回限りの生放送、コンパの部屋の時間よ!」

「コンパに……アイエフ?」

「進行はプラネテューヌの看護学生、コンパとわたし、ゲームギョウ界に吹く一陣の風、アイエフでお送りするわ」

そこにはカメラの前で笑顔を振りまくコンパとアイエフの姿があった。

カメラを持っているのはアイエフの友人だろうか?

視線が合うと、コンパが手を振った。
どうやら幻覚ではなさそうだ。

「わたしたちは今、女神様のお家……天界に来てるです！」

「さあ、よく見ておきなさい。これが今ゲームギョウ界を滅ぼそうとしてる存在よ！」
カメラがマジエコンを捉える。

生放送と言っていたということは、今下界ではこの醜悪なマジエコンの姿がお茶の間のテレビに映っているということになる。

「そして、この化け物と戦うのは我らが四女神と……えーと……勇敢なる若者！」
「みんな怪我してるです！」

「けど、五人は絶対こいつに勝つわ！テレビの前みんな！自分の信じる女神様を信じ
てあげて！」

「……好き勝手言いやがって……」

ヒーローショーか何かと勘違いしているんじゃないかと思うアイエフの言葉で少し
だけ気が紛れた。

しかしそれはアシユレイの気を紛らわせるだけでは終わらなかった。

「これは……」

イストワールが声をあげる。

五人が顔を上げると、いつの間にか自分たちがいる浮島を虹色の幕が包み込んでいた。

ネプテューヌたちが立ち上がる。

「凄い……内から力が漲ってきますわ……！」

「いーすん、これは？」

「これはシエアストリーム。高密度のシエアが幕のようになる現象です」

「そんなこと、ありえるの？」

「理論上は不可能ではありませんが……まさかこの目で見られようとは……」

「これなら、誰にも負ける気がしねえぜ！」

四女神が再び武器を構えた。

シエアの量は衰えるどころが更に増え続けている。

「ガ……グウ……オ……！」

逆にマジエコンヌは苦しそうに声をあげた。

アンチエナジーがシエアエナジーとぶつかり、お互いに相殺しあう。

「……それじゃ、ここで中継と繋いでみましょうか！」

「中継のヒロムさーん！出番ですー！」

アシユレイがポケットから携帯を取り出し、テレビと繋いだ。

丁度画面が切り替わり、ヒロムが写し出されたところだった。

『……えーつと？もうこれ撮れてんの？……あ、マジで？はい、中継のヒロムです！』
「ヒロム、今何処にいるの？」

『俺は今、プラネテューヌのプラネタワー前広場にいます！教会からあぶれた人でいっぱいだぜ！』

ヒロムが一步横にズレると、尋常じゃない量の人が集まっていた。

「それじゃ、現地の人たちの言葉を聞かせてちょうだい」

『了解！ネプ子……じゃなかった、パープルハート様たちに一言！』

『パープルハート様！頑張ってください！』

『あんな奴に負けないで！』

『早く帰ってきて、またうちのプリンを買って頂戴ね！』

ネプテューヌへの応援の言葉が電波に乗って天界に響く。

しかしそれだけではない。

『実は俺、パープルハート様よりブラックハート様の方が好きでしたー！』

『私、グリーンハート様のファンになります！』

『ブランさーん！俺を殴ってー！』

『うおおおお！みんな頑張ってくれー！』

プラネテニューヌから自国以外の女神を応援する声さえ聞こえてきた。

『あの……………!』

『ん、何だいお嬢さん?』

不意に女の子がヒロムに話しかけてくる。

『えっと……………女神様と戦ってる男の人の名前ってわかりますか……………?』

『当然知ってますとも!あいつの名前はアツシユだ!』

『ありがとうございます……………』

改めて女の子が赤い顔でカメラの方を向いて一言。

『あ、アツシユさん!頑張ってくらひゃい……………く、ください!』

それだけ言った女の子は逃げるように人混みの中に飛び込んだ。

『……………アツシユとかいう奴!負けたら承知しねえぞ!』

『四女神の中に一人だけ男かよ!末長く爆発しろ!』

『アツシユ!絶対に勝ってくれよ!』

『お前が!お前たちが!俺たちの最後の希望だ!』

《アツシユ!アツシユ!アツシユ!アツシユ!アツシユ!》

鳴り響くアツシユコール。

携帯をしまい、立ち上がる。

いつの間にかアシュレイの体はほのかに光っていた。

「……暖かい」

「アツシユ!?それは……!」

「アツシユさん、もしかやあなたは!」

地に落ちた剣がゆつくりと浮き上がる。

「……刮目しろ……これが俺の!変身だ!」

アシュレイの体が光の球に包まれた。

その光は分裂し、形を変える。

銀に染まったコートと剣。

傍にはプロセツサユニットが浮かぶ。

青い目にスタート、そして再生と呼ばれるアイコンを模した光が現れた。

「アツシユが……女神化した!」

「いえ、これは女神化ではありません!前例がないので何が違う、とは言えませんが

……」

姿は男のまま、全身を銀のプロセツサユニットに包まれたアシュレイの足が地から離れ、宙に浮かぶ。

「アツシユ、大丈夫?」

「問題ない」

「グ……オオオオオオ!!」

吠えるマジエコノヌに銀の剣を突きつけた。

これが、最後の戦い。

「さあ、クライマックスだ!」

これが、旅の終着点だ。

「グアアアアウ!!」

マジエコノヌがその巨体からは想像できないスピードで突進。

拳を振り下ろす。

「あたらねえよ!」

全員がその場を散り、岩盤を砕く一撃を回避。

そのままブランが反撃を行う。

「バアアアアアアアアア!!」

「うお!!」

しかしそれはマジエコノヌの強烈な咆哮による音波砲により足が止まり、無効にされた。

動けないブランにマジエコノヌの牙が迫る。

「ブラン！」

ノワールがブランに半ばタックルするように、デッドゾーンから逃がした。

「そこだ！」

「せい！」

アシユレイとボールがマジエコンヌの翼に武器を振り下ろす。

翼膜を引き裂いた。

だがその傷は次の瞬間には再生する。

「なんだと!？」

マジエコンヌが二人に尻尾を振り下ろした。

それによって地面から噴き出した炎の柱が襲いかかる。

出来る限りの全力で後ろに下がり、ギリギリ攻撃を避けることに成功した。

「今のマジエコンヌはアンチエナジーの塊です！物理的なダメージはほとんど効果がありません！」

「じゃあどうしろってんだよ！」

「直接シエアエナジーをぶつけてください！そうすれば相殺反応でダメージを与えられるはずですよ！」

「ゴアアアアア!!」

そうイストワールから言われた直後、アシュレイにマジエコンヌの爪が迫る。

「直接ぶつける……」

爪を受け流し、すぐさま構え直す。

光が手にした銀の剣を包んだ。

「はあー！」

振り下ろした刃はマジエコンヌの腕に真一文字の傷跡を残す。

マジエコンヌが痛みに呻いた。

腕に刻まれた傷は黒く硬化し、再生する気配はない。

「ガアアアアア!!」

マジエコンヌが地面を踏み抜き、上空へ飛び上がる。

口元に魔法陣が展開された。

「ちいー！」

超巨大な熱線がマジエコンヌの口から発射される。

射線上のアシュレイは魔力障壁を展開。

「ぐ……う……おおおおお！」

凄まじい重圧がアシュレイを襲うが、なんとか熱線を弾く。

軌道を逸らされた熱線は浮島に巨大な風穴を開けた。

「グオオオオオオ!!」

更にマジエコンヌは周囲に無数の魔法剣を召喚し、それを雨のように落下させる。

「いい加減……」

アシュレイが降り注ぐ剣を切り払いながら距離を詰める。

「ゴアアアアア!!」

マジエコンヌの拳をかわし、それを脇に挟んだ。

「大人しくしろっての!」

そのまま全身でマジエコンヌの巨体を地面に投げつける。

マジエコンヌはそのまま地面に激突し、その巨体を土に埋めた。

「今だ!」

アシュレイが叫ぶ。

「さあ、行きますわよ!」

暴れながら地面から起き上がるマジエコンヌにボールが槍を構えて突進。

「ガアアアア!!」

赤黒い爪が迫る。

それが触れる直前にボールの姿が掻き消えた。

「キネストラダンス!」

ベールが現れると同時に風の刃がマジエコンヌの体を刻む。

その刃は甲殻を砕き、傷口を黒く染めた。

「グオオオオオオ!!」

薙ぎ払われた大木のような尻尾を脇で受け止める。

「そのままじつとしてろよ!」

そこに割り込むのはブラン。

空高く飛び上がり、斧を頭上高くに構える。

「ぶった斬れろおおおお!」

振り下ろされた一撃がマジエコンヌの尻尾を寸断した。

「グ……ガアアアア!!」

「これで!」

「決める!」

ネプテユヌとノワールが走る。

マジエコンヌは翼を羽ばたかせることで生み出した真空波を放った。

ネプテユヌは飛び上がり、それを回避。

「トルネードソード!」

ノワールは光を纏った剣を風ぐ。

真空波が掻き消え、道が出来た。

「これで……トドメ！」

紫の太刀による渾身の一撃がマジエコンの胴を切り裂いた。

「ガ……ゴ……グ……！」

マジエコンの体がゆっくりと倒れていく。

「グウウ！」

しかしマジエコンはすんでのところで踏みとどまった。

そのままその大きな翼で自らを覆う。

「いい加減倒れなさい！」

ノワールが急に動かなくなったマジエコンに剣を構えて走った。

振り上げた剣が降りるよりも先にマジエコンが禍々しいオーラを放つ。

「きやああああ!？」

それに触れた瞬間、ノワールが凄まじい勢いで弾き飛ばされた。

「くっ……シレット……！」

「待て！」

魔法陣を展開したボールをアシユレイが止める。

「これは……不味いことになりました……！」

「いーすん？何が不味いの？それに、なんでマジエコノヌは急に動きを……」

マジエコノヌは変わらず翼を閉じ、動かない。

まるで何かを待っているかのようだ。

「マジエコノヌは今、体にアンチエナジーを溜め込んでいます」

「溜め込む？なんでそんなことをしなきゃならねえんだよ？」

「……まさか！」

アシユレイの頭に浮かんだのは考えうる限り最悪の状況。

「マジエコノヌは、自爆しようとしています」

「……そうなたら、どうなる？」

「天界はおろか、下界さえも飲み込み、不毛の大地に変えてしまうでしょう」

「何よそれ!?ならなのおさら早く止めないといけないじゃない！」

ノワールの言葉にイストワールは首を振る。

「今マジエコノヌが展開している防御結界は、同時に起爆スイッチでもあります」

「マジエコノヌ一人だけでもこの天界をチリにする程度のアンチエナジーは持つてる

……つまり……」

誰かが犠牲にならない。

選べなければ、全てが死に絶える。

「俺が残る……お前らは……」

「っ！駄目！絶対駄目！」

アシユレイの言葉をネプテューヌが遮った。

「わがままを言うな！このままじゃ全員が死ぬんだぞ！」

「だからってアツシユが死ぬのは嫌！みんなが死ぬのも嫌！いつそわたしが……」

「ふざけんな！お前には自分の国があるだろうが！」

「お二人とも喧嘩はやめてください！」

「……………」

全員を沈黙と絶望が支配する。

選べるはずもない。

タイムリミットだけが刻一刻と近付く。

「あーもう！じれったいわね！」

意外にもそれを破ったのはアイエフだった。

「ここまで来て！今まで出来もしないこと全部ひっくり返してきたのに！なにこんなと

ころで諦めムードに入ってるのよ！」

「そうです！諦めちゃ駄目です！」

そう言う二人の足は、震えていた。

目の前の死に怯えながらも、ネプテューヌたちを信じる。

何も出来ないからこそ、何かをする。

「……言いたくなかったが、一つ……可能性がある」

アシュレイが、呟いた。

「可能性？」

「恐らくだが……結界を破壊してから解放まではタイムラグがある……」

「まさかその隙に逃げるのですか？」

「いや、ラグは恐らく持つて数十秒だ。間に合わない」

「だったらどうすんだよ!？」

「……お前らの力を、俺に預けてくれ」

アシュレイは気付いていた。

自分の体の異変。

それはこの奇妙な姿だけではない。

「今の俺は……アンチエナジーに加えて、他者のシエアエナジーを操ることが出来る」

「他者の……!？」

「まさか、女神の力を束ねようというのですか!？」

アシュレイが静かに頷く。

「ラグがどれだけの時間かはわからない、俺が四女神全員の力を受け止められるかどうか、そもそもそれでマジエコンヌの蓄えたアンチエナジーに打ち勝つことが出来るのかも」

わからないこと尽くしだ。

そして失敗すれば、ここにいる全員が生き絶える。

成功すると思う方がどうかしている。

「……上等だ！ やってやろうじゃねえか！」

「分の悪い賭けほど、燃えるものはありませんわ」

「そうね。それしかないなら、あなたに全部託すわ」

だというのに、誰一人として反対する者はいない。

今まで苦楽を共にした仲間の絆。

「アツシュ……」

「ああ……」

再び五人が武器を構える。

「行くぞ!!」

アシユレイの声に全員が魔力を集中させる。

まずは第一段階。

結界の破壊。

「ゲフェーアリヒシユテルン！」

「シレットスピアー！」

「バニシングバスター！」

「32式エクスブレイド！」

「カエルム・ルーメン！」

五人の特大魔力が放たれた。

それらはマジエコンヌを取り囲む結界に衝突し、黒い火花を散らす。

「いっけえええええ!!」

巨大な亀裂が入り、結界が砕け散った。

すぐさまマジエコンヌの目の前に黒い渦が生まれる。

それは光を飲み込むブラックホールのようにも見えた。

イストワールが叫ぶ。

「今です！女神の力を、アツシユさんに！」

「おうともよー！」

ブランが手の平から白く光る球を放った。

アシュレイはそれを掲げた銀の剣で受け止める。

「……後は、頼んだわよ」

変身の解けたブランが小さく呟き、少しだけ笑った。

「次はわたくしです！受け取ってくださいいな！」

ベールが打ち出した緑に輝く球を剣で受けると、一気に剣から光の柱が立ち上る。

「帰ったら、みんなでランチでも食べに行きたいですわね」

風になびく金色の髪を抑えながらベールが微笑んだ。

ブラックホールはどんどんその大きさを膨張させていく。

「いい？外したら承知しないわよ！」

黒く光るノワールの力が剣に吸い込まれると、光の剣は更に輝きを増した。

「最後はあなたよ！ネプテューヌ！」

最後に残った親友の名をノワールが叫ぶ。

「アツシユ！」

紫の光。

光の剣はマジエコンヌを飲み込むほどのものとなった。

「……やっちゃえー！」

ネプテューヌが拳を突き上げる。

「……力、貸してくれるよな？」

????

うん

アシュレイの周囲に浮かんでいたプロセッサユニットが光に包まれ、剣に吸い込まれた。

「グ…………ゴ…………オオオオオオオオオオオオオ!!」

ブラックホールが砕け、破壊エネルギーが放出される。

「…………これが！俺の！俺たちの！女神と！人間の力だ！」

剣を振り下ろす。

「これで…………終わりだああああああああ!!」

黒と白の光が、触れ合った。

「……………」

振り下ろしたアシュレイの剣。

その先には、マジエコンヌ。

「……………」

黒い石のように固まったマジエコンヌはやがてゆっくりと倒れ、砂のように崩れ去る。

優しく吹いた天界の風が、黒い砂を吹き飛ばした。

「……………」

「……………勝ったの？」

「……………多分な」

不安げなノワールにアシユレイが曖昧な返事を返す。

「……………ねえねえみんな！」

「ネプテューヌ？どうかしましたか？」

ネプテューヌが全員を呼んでなにやら耳打ちをした。

それを聞いた反応はみんなそれぞれ。

「ね、いいでしょ!？」

「なんか馬鹿っぽくて嫌なんだけど」

「まあ、ネプテューヌらしいといえは、らしいですわね」

「馬鹿正直ね」

「とうかただ馬鹿なだけだろ」

「あーもう!そういうのいいから!」

アイエフがカメラを五人に向ける。

「それじゃ、行くよー!せーの!」

「「「ピース!!」」」

.....

「あ、そのお肉もーらい!」

「ちよつと!それが焼いてたお肉よ!自分が食べる分は自分で焼きなさいよ!」
あれから3日。

ネプテューヌたちはプラネターの屋上広場でバーベキューを楽しんでいた。

「……ベール、離しなさい。そのしいたけはわたしのよ」

「いいえ、これはわたくしが初めから狙っていたものですわ」

元々はネプテューヌが強引に進めたこの計画だったが、ノワールたちも隕石やモンスターの被害で忙しい中、なんとか予定を組んでくれたのだ。

おかげで今、こうして楽しく食事をする事が出来ている。

「ていうかネプテューヌ、あなた野菜も食べなさいよ！栄養が偏るわよ！」

「細かいなノワールは。こういうところでは、何も考えずに自分が食べたいのを食べるのが良いんだよー！というわけでそのお肉もよこせー！」

「いい？キノコといえばわたし、だからこのしいたけを食べるのにふさわしいのはわたしよ」

「いいえ、このしいたけに限ってはわたくしにも譲れないものがありますわ！わかったら箸を離していただけませんか？」

そんな仲睦まじい様子をアシユレイは眺めていた。

「何やってんだか……」

「みんなで協力してマジエコノヌを倒したっていうのに、ちよつと目を離したらこれなんだから……」

「ねぶねぶたちらしいです。ケンカが出来るのも平和になった証拠です」

「それもそうですね……おや？」

不意にイストワールが持っている通信端末に連絡が入る。

「どうかしたのか？」

「いえ、シエアクリスタルに何か異常が発生したみたいなんです」

「……それ大丈夫なのか？」

「取り返しのつかないことになってもいけませんので、ちよつと見てきます」

そう言つてイストワールが広場を後にしようとする。

「……イストワール」

「はい？なんで……」

アシユレイに呼ばれ、イストワールが振り返つた。

そして全てを理解した。

「……わかりました。アツシユさんが使っていた部屋はそのまま残しておきます」

「助かる」

「……それでは」

「ああ」

短く会話をし、イストワールは広場から出て行つた。

アシユレイは踵を返し、ネプテューヌたちを通り過ぎる。

「あれ？アツシユ？そつちにはお肉はないよ？」

「ネプ公」

「……………」

「お別れだ」

「……………え？」

ネプテューヌが呆気にとられた声をあげる。

「えつと……………どういう意味？」

「そのままの意味よ」

ネプテューヌの疑問に答えたのはアシユレイではなく、ノワールだった。

「元々、わたくしたちが集まったのはこのためでもありますしね」

「仲間の新しい旅立ちよ。素直に見送ってやりなさい」

そう。

この集まりは祝勝会でもあり、アシユレイの送別会でもあるのだ。

ノワールたちが無理をして予定を合わせてくれたのもそういった事情があったから。

「わたし……………何も聞いてないんだけど……………」

「わざとよ。あんたに話したら反対するに決まってるわ」

「……………いつ、決めたの？」

「……………最初からだ。会った時から、このゴタゴタに決着がいたら一人旅に戻るつもり

だった」

最初から。

あの自然公園でモンスターに襲われているネプテューヌとコンパを助けた時から。

「わたしたちと一緒にいるのが……嫌だから？」

「……最初は、そうだった」

アシュレイが俯いたネプテューヌの前に立つ。

「俺は、もう一度世界を見てみたいんだ。あいつを失った悲しみを忘れようとして剣を取ったあの時の曇った目じゃなくて、今の自分にどう世界が写るのか……あいつと一緒に」

昔ではわからなかったこと。

今ならわかること。

それを確かめる為に。

「……アッシュ」

軽くぶつかってきたネプテューヌに腕を回し、頭を撫でてやる。

「……また、会えるよね……？」

「俺は……会いたいね」

いつまでもこうしているわけにもいかない。

頃合いを見てネプテューヌを引き剥した。

「さて……そろそろ行く」

広場の外周に取り付けられた柵の方へと歩く。

「しつかりやりなさいよ」

「ご縁があれば、またご一緒しましょう」

「……バイバイ」

「たまには連絡よこしなさいよ！」

「ねぶねぶ……アツシユさん行っちゃうですよ？」

「……………」

アシュレイがため息を一つ吐き出した。

「……ねぶっ」

俯いていたネプテューヌの頭に何かが覆い被さる。

それを手に取ってよく見てみると、見慣れたボロボロでつぎはぎまみれのコートだった。

顔を上げると、アシュレイと目が合う。

「俺にはもう必要ない。お前にやるよ」

それだけ言って、また歩き出した。

黒い炎を通り抜け、変身を終える。

そして柵の手前で止まり、足元に魔法陣を展開。

「コンパ」

いつも通り、朗らかな笑みを浮かべる。

「アイエフ」

その隣で呆れながらもみんなを見守る。

「ノワール」

強がっているが、今にも泣きそうだ。

「ベール」

顔の横で小さく手を振る。

「ブラン」

珍しく、にっこりと笑っている。

「……ネブ公」

最後に、コートを抱えた少女の名前を呼ぶ。

もう、その顔に影はない。

アシュレイが振り返り……

「……またな！」

そう言つて顔を前に戻す。

そして魔法陣を踏み抜き、空へと飛び出した。

瞬く間にプラネタワールから離れていく。

「……ねえ、さつき……」

「ええ、見ましたわ」

「アツシユ……笑つてたわね……」

「しかも満面の笑みで……」

「あんな風に笑うアツシユさん、初めて見たです」

ネプテユーンが走り出す。

柵に腹を押し付け、両手を口の横に持つていく。

大きく息を吸い、一言。

「アツシユうー!! まつたねー!!」

自分の小さな体をよく見えるように、飛び跳ねながら手を振った。

かけがえのない大切な人が見えなくなろうとも。

「ね、ネプテユーンさん! 大変です!」

「あれ? どつたのいーすん?」

息を切らしながらイストワールが広場に飛び込んできた。

大きな翼を広げ、グライダーのように空を滑る。
その眼下には、世界が広がる。

「……………」

『言った通りでしょ？』

「……………そうだな」

人がいて、街があり、国となり、世界がある。

「……………良い、世界だ」

『……………それじゃ』

「ああ……」

『次は何処に行こうか』

……旅はまだ、始まったばかりだ。

これは、かつて『剣の英雄』が、ただの不幸な男だった時の物語。
その後、彼は女神たちと再会を果たすが、それはまた別のお話。

おしまい。